ないろ

nameless

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なないろ

【Ｎコード】
Ｎ３０８２Ｓ

【作者名】
ｎａｍｅｌｅｓｓ

【あらすじ】
都会から少し離れた場所にある町、樹山町。
周囲を山に囲まれ、穏やかな時間の流れるその町では、神隠しと噂される失踪事件が発生していた。
知り合いがその神隠しにあってしまった高校生、白埼洸は、友人とともにその行方を探すのだが・・・。

prologue

夜。

深夜に足が届きそうな時間。
人々は既に夢の中で、町全体が眠ったように、静寂に包まれている。
静かに眠る町を、夜は真っ暗な闇で包みこむ。
町を覆う闇はまるで何か、異形の生物ように町を這いずり回っている。

そんな闇の中、茶織咲（さおりさき）は帰り道を急いでいた。
少し茶色がかったセミロングの髪からのぞく、大人しめだが整った顔立ちの少女。
その顔は今、おびえた表情を浮かべていた。

「…うう、暗いなあ…。」

町の中心部から離れたその道は街灯も少なく、殆ど真っ暗だ。
既に皆眠っているのだろう。
周囲の家の明かりもなく、咲は暗い道の中を恐る恐る駆けていた。

「はぁ…。お父さんまだ帰ってなければいいけど…。」

いつもなら、もうお風呂に入って、ぼんやりとテレビでも眺めている頃だろう。
それが今は、こんな場所を走っている。

これも全部、みんなの所為だと咲は友人たちを恨んだ。
咲は今日、学校帰りに友達と町の中心部で遊んでいた。
遊ぶといっても、いつものメンバーで何となく町をぶらつくだけ。
それの何が楽しいのかと以前知り合いに言われたことがあったが、
それは咲自身もよくわかっていない。
よくはわからないけれど、何となく楽しいのだ。
咲自身、別にそれで構わないと思っていた。

そうして、気がつけば２０時頃になった。
少し離れた場所から学校へと通っていた咲には、もう帰らないといけない時間だ。

だが、思えばそこからがいけなかった。
普段から咲だけが早く帰ることに不満を持っていたらしい友人が、
１日位大丈夫だと言って咲を帰さなかったのだ。

もちろん最初は断って帰ろうとした。
だが友人たちはここぞとばかりに押してくる。
結局、殆ど連行されるように咲は近くのファミレスへと連れて行かれた。

ファミレスに入ってしばらくは、他愛もないいつもの会話が続いていた。
これなら隙を見て逃げ出せる、と咲は少し安心したのを覚えている。
その油断が、命取りとなった。

彼女たちの話は、途中から変化していった。
おかしいなと思いつつもそのまま会話をつづけていると、いつの間

にか咲についての話題になっていたのだ。
最近、咲に告白してきた男子との話。

こうなってしまっては、もう逃げだせない。
なんにもなかった、などといっても友人たちは信じてくれないのだ。

仕方なくその時の出来事を説明しているうちに、今度は何故か咲への説教が始まった。
やれ消極的だ、だのいい加減耳にタコができるような話を散々聞かされ、うんざりしていると気がついたら時計が２２時を示していた。

咲の家に門限はない。
元よりそんな遅くに帰ったこと自体がなかったため、門限を設ける必要もなかった。

咲自身、自分だけ早く帰ることに少し不満がなかったとは言えない。
高校生になって半年を過ぎた咲にしてみれば、２２時はまだまだ夜遅いとはいえない時間なのだ。

自宅までは急げば１時間かからずに帰ることができる。
今から帰ったとして、２３時くらい。
これくらいなら親も大目に見てくれるだろう。
そんな風に考えていたのだが――。

「全く…なんで１時間もずれてるのよっ！！」

不思議なことに、咲の腕時計は１時間も遅れていたのだ。
更に運の悪いことに、携帯電話も充電が切れていた。
こうなってしまっては家に連絡して予防線も張ることもできなくなってしまった。

「みんなも気づいてたんなら教えてくれればよかったのに…。」

とはいっても、誰も時計がずれてるとは思ってもいない。
本人が忘れていたのだから、当然だ。
それにしても、話し込んでいたら3時間も経っていたとは咲自身も流石に驚いた。

「おかげで帰ったら説教だよ…。」

とは言いつつも、まだ希望はあった。
いつも仕事で帰りが遅い父親より先に帰ることができれば、何とかごまかせる。
咲は母親と仲が良く、話せば分かってくれると考えていた。

だからこそ、咲は急がねばならなかった。
自宅での僅かな自由を守るために。

走っているうちに、大分目が闇に慣れてくる。
今までぼんやりとしか見えなかった周囲の風景が、鮮明に浮き上がってきた。

（何だ、もうこの道か…）

よく見れば、見覚えのある道。
どうやら家のそばまで戻ってこられたらしい。

ここまで来たなら、もう大丈夫だろう。
走り続けて荒れた息を整えるため、咲は立ち止まった。

「…はぁ…はぁっ…ふぅ、疲れた。」

息が収まるのを待って、咲はゆっくりと歩き出す。
これで間に合わなかったら、その時はその時だ。
息を吐き出すと、咲は顔を上げた。

途端に、冷え切った夜気が頬を包んだ。
走り続きで火照った体が冷気と混ざり合い心地よく感じた。

のんびり歩きながら、咲はゆっくりと夜の町を見回す。

いつもの明るさやにぎやかさは一切消え、町は静まり返っている。
それは、部屋の中に一人でいる時に感じる、あの耳がつんとする静けさとも、違う。

風の音、遠くを車が通る音。
いっぱい音は聞こえるはずなのに。
それを、町全体が吸い込んでしまったような。
家が、地面が、電柱が。
この町が眠っているような、そんな静けさ。

普段と異なる姿を見せる町。
見上げた夜空はきれいで、町の黒がそれを映えさせている。

「…ふーん。」

夜は怖いものだ、と何となく昔から抱いていたイメージとは違う。
この夜は、何となく奇麗に感じられた。
これなら夜遅くなるのも悪くないかもしれない。

（…って、こんなぼんやりしてる場合じゃ、ないよね）

いつの間にか、息切れは治っている。
これなら家までは持つだろう。
まだ父親が帰ってきてないことを祈って、咲は再び駆けだそうとした。

その時。

『――。』
「…え？」

何か聞こえた気がして、咲は振り返る。
立ち止まって、ゆっくりと辺りを見渡す。

そこにあるのは何でもない、ただの道。
何も、誰もいない。
いるのは、咲一人だけだ。

「…あれ？」

（誰かいたと思ったんだけど…）

もう一度、辺りを見回してみるけれど。
やはりそこには何もいない。
気のせいだったのだろうか。

（…変なの）

やはり、ただの気のせいだろう。
そう思って、咲はそのまま振り返り、歩きだそうとした。
しかし。

『――――。』

また、音が聞こえた気がして、振り返る。

（…誰か、いるのかな）

まさか、ストーカーだろうか。
そう考えて、咲はすぐに首をふる。

（まさか、ね）

自分なんかに、ストーカーがつくはずもない。
これまでも、そんな気配は一度だってなかったのだ。
ストーカーの類ではないだろう。

それに、先程から聞こえるこの音は、足音とか息遣いとかとは違うもののように聞こえる。
するっと、身体の中に入ってくるような不思議な音。

誰かが耳元で話しかけているような、そんな感覚に近い。

咲はふと、自分の耳元に小さな妖精がいる様を思い浮かべた。
小さく忙しなく動く小さな光。
透明な羽の生えた、緑の髪の女の子。

「…ふふっ。」

そんなことを考えていると、自然と笑みが浮かんでいた。

（さ、早く帰ろう）

きっと、妖精も早く帰れと言っているだろう。
そう思って、再び歩き出そうとする。

「きゃ…っ！？」

不意に、咲は転んでしまった。

「…もう、なんなの…？」

何かに躓いたのだろうか。
足を引っ掛けるようなものは、この道にはなかったはずなのだけれど。
呻きつつも、咲は起き上がろうとする。
だが――。

（あれ、足が…）

持ち上げようとしても、足は上がりはしなかった。
まるで足が縫いつけられたように、動かそうとしてもぴくりとも動かなかったのだ。

「うん…っ！！」

思い切り、蹴るようにして動かしてみる。
それでも、足は微動だにしない。

「嘘…、何なの、これ…。」

痛みはあるが、普通に転んだ時とほとんど変わらない。
骨が折れたわけではないはずだ。
ならば、どうして。

足が動かないというならば、神経だろうか。
だが、転んだだけで足が動かなくなるとは考えられなかった。

『――――。』

「……！？」

その時、また、音が響いた。
今度はさっきより、はっきりと聞こえた気がした。
それでも、何の気配も感じない。

咲にはもうこの音が妖精の声などと思うことはできなかった。

（何、これ…！？）

じわりと咲の中で恐怖が生まれ始めた。

動かない足。
聞こえてくる、声。

気がつけば、足は氷のように冷たくて。
それは、まるで誰かに掴まれているようだった。

「……っ！！！？」

この時。
咲は、はっきりと理解した。

これは、違う。
これは妖精やストーカーなどではない。
もっと別の、異質の何かだ、と。

（…早く、帰らないと）

もう咲の頭から、門限などということは消え去っていた。

（早く、帰らないと…！！）

咲の頭は、その言葉で一杯であった。

だが、足は動かない。

どれだけ引いても、押しても、ぴくりともしない。

咲はただ、腕をもがくように動かすことしかできなかった。

『――――。』

その時。
耳元で、また、あの音が囁いた。
「ひっ…！！？」
背筋を撫でられるような感覚。
（…今…）
いる。
誰かがいま、咲の後ろにいる。
いつの間にか、咲の心は恐怖で満たされていた。
腕が、足が震える。
「……はっ…、はっ…！！」
すっかり消えていた心音が頭を内側から殴りつける。
『――――。』
そんな咲を包み込むように、音はそっと囁いてくる。
すっ、と身体中をこするような感覚。
それが、とてもおぞましくて。
気がつくと咲は、後ろへと振り返ってしまっていた。
「あ…。」

（駄目…！！）

回る視界。

振り向いてはいけない。
そう、思っていたのに。

けれど、動いた視界は止められなくて。
暗い道から壁へと移って、視界は、背後の道へと至る。

咄嗟に閉じようとした反射も間に合わず。
咲の視界は、その先を映してしまった。

「――――っ！！！」

咲の背筋が、凍った。
暗い道。
その先に、何かがいる。
そう思って、開かれた視界。

「……あれ？」

だが。
そこには何もなかった。
ただ、暗い道が続いているだけ。

「何も、ない？」

（何だ…）

ため息が洩れ、全身の力が抜けた。
ひどい気だるさを体中で感じる。

「あ、足、動く…。」

うまく力の入らない身体を何とか立たせて、咲は再び息をついた。

（やっぱり、気のせい…？）

きっと、疲れていたのだろう。
思えばここまでずっと走ってきたのだ。

普段碌に運動をしていない咲の足が悲鳴を上げたっておかしくはない。

（うん、きっとそうだ）

咲は無理やり、そう思いこんだ。

休んで戻っていた筈の息は、再び上がっていた。
それに全身は汗にまみれて、気持ちが悪い。

早く帰ってシャワーを浴びよう。
そしてテレビでも見て、寝てしまおう。

だから、早く家に帰ろう。

そう思うのだけれど。

「……。」

何故だろう。
彼女の視線は、ただ一点、道の先へと向けられたまま、止まっていた。
何の変哲もない道のはずなのに。
ただの暗い道。
そこにあるのは、闇だけだ。

まるで、異形の生物のような。

（あ、れ？なんだろ、今の・・・・。）

無意識に、足が後ずさる。
それに気がついて。
再度、辺りを見直す。

「……。」

しばらく待って、何もないことを確認する。
いつの間にか、足の重みも、消えていた。

「何にもないよね…。考えすぎだ、きっと。」
呟いて、咲は1歩1歩、しっかりと歩き出す。
「…お化けがいた、なんて…。」

その瞬間。
闇が歓喜するかのように、蠢いた。

『――ミツケタ。』

ぞわりと、冷たい何かが身体を駆け巡る。

「……え？」

声が聞こえた。
はっきりと。

もう一度、今度はさっとあたりを見回す。
そこにあるのは、いつもとは違う、けれども変わることのない町並みがあるはずだ。
だが――。

『――ネエ、イッショニアソボウ・・・・？』

いる。

何かはわからないが、存在してはならない何かが今、この場所に存在している。

『――キコエテルンデショ、ネェ…。』

だめだ。ここにいてはいけない。

身体全体が警告を鳴らしている。早くここから逃げろ、と。

だが意識と違って身体はピクリともしてくれない。

（なんで・・・なんで動かないのよ！！！！？）

必死に暴れようとするが、体は変わらず微動だにしない。

『――アハハハハ！！！ムダダヨ！！モウ、キミハボクノモノダ！！！』

いつの間にか、闇が目の前まで迫っていた。

さっきまで見えていた筈の道は、もう見えない。

「いや・・・・・・。いや・・・・・・！！」

少女の目の前で、闇がその深さを増していく。

『――・・・・サテ、ソロソロイコウカ・・・・・』

闇が、ゆっくりとその顎を開く。

「あ・・・・・。」

ガコン、と音が鳴った。

『――チャント、ボクヲミツケテネ。サキ…。』

その声の意味を理解する前に。

世界は闇に満たされた。

第一話

始まりは、３日前。
白埼洸（しらさきこう）は、自室のベッドで目を覚ました。

「…朝、か。」

呟きながら、起き上がる。
眠気は感じなかった。

ベッドの横にある時計を見ると、時刻は６時。
昨日眠ったのが２３時頃。
一瞬考えて、よく眠れたのだろうと頷いた。

「……ふぁあ…。」

ベッドを下りて、窓を開けた。
少し肌寒い風。
うららかな朝日が、部屋に射しこんでくる。

「うん、今日もいい天気だ。」

朝日を浴びて、軽く伸びをする。
体はすでに起き始めていた。

「さ、今日もがんばりますか。」

洸は寝巻きを着替えると、部屋を出た。
一階に降りて、リビングに入る。
朝早くの居間には誰もおらず、淀みのない空気は、すっきりとしていて気持ちが良かった。
彼はそのままキッチンへと入ると、朝食の準備を始めた。

＊＊＊

しばらくすると、リビングには香ばしい朝食の匂いが漂い始める。
その匂いに誘われたのか、扉が開いて、一人の女性が入ってきた。

「おはーよぅ…。」

腰まで届くぼさぼさの黒い髪。
両目の下にはくっきりと隈ができており、足取りは今にも倒れそうだ。
彼女は何とかテーブルにまで辿り着くと、力尽きたように突っ伏した。
洸はそんな彼女を見ると、ため息をついた。

「…姉さん、また徹夜？いい加減にしないと体壊すよ。」

姉と呼ばれた女性が、洸に向って片手だけあげる。

「あー、仕方ないでしょぉ…。締切さっきまでだったんだから…。」

腹の底から絞り出したような声で、女性は呻いた。
「なら、もっと早く終わらせればいいでしょ。いつもぎりぎりにやるのが悪い。」
しかし、朝が締切なんてことがあり得るのだろうか。
少し考えて、まあこの人ならと洸は一人うなずいた。
「うるっさいわねえ。インスピレーションが降りてくるのには時間がかかるのよ、時間が！！」
突然起き上がると、彼女は叫んだ。
まだ仕事の興奮が収まっていないらしい。
とはいっても、流石に疲れきっているのか。
すぐにまた、テーブルへと崩れ落ちた。
余程ギリギリな締め切りだったのだろう。
「はいはい。いつも通りで何よりだよ。」
そう言って、洸はカップを彼女の横に置く。
「はい、コーヒー。さっさと起きなよ。」
「あーい、あんがと…。」
相変わらず片腕だけ動く姉の下を離れ、洸は朝食の準備を進めた。
しばらくして、朝食が出来上がる。
トーストにハムエッグにサラダ。
さっと作れる割には美味しいメニューだ。

二人分を食卓に並べて、洸も席に着いた。
まだ倒れている姉を起こすと、２人は両手を合わせて向かい合った。

「いただきます…。」
「はい、召し上がれ。」

いつもの言葉を交わして、朝食が始まる。

白埼洸は、姉の美音（みね）と２人で暮らす、１７歳の高校２年生。
幼いころに父親をなくし、以来母親が女で一人で彼らを育てていた。
だがその母親も昨年に倒れてしまった。
幸い命に別状はなかったが、しばらくは入院を余儀なくされた。

それからは、洸たちは２人で助け合って暮らしている、

現在は美音が働き、家計を支えてくれている。
そんな美音に代わって、洸は家事を担当している。

始めの頃は２人とも慣れていないことにばたばたとした毎日であった。
食事は駄目にするわ、美音はベッドから離れないわと、戦争でもしているような心持であった。
だが、それも１年も経てば落ち着いてくる。

こんなゆっくりとした朝を迎えられるとは、当時の洸たちは想像だにしていなかっただろう。

「最近仕事忙しそうだね。大丈夫？」

サラダを食べながら、洸が尋ねる。

「うん、問題ないよ。」

ようやく目が覚めてきたらしい美音が、笑顔で答える。
しっかりとしていれば、美音はさっぱりとした美人である。
とはいっても、家ではそのような印象は一切受けないのだが。

（まあ、これじゃあな…）

ばさついた髪を無造作にまとめ、トーストに齧り付く姉を見て、洸は思った。

「天香さん優しいし、給金もおまけしてくれるし。」

洸のそんな思いを知らずに、美音は既に2枚目のトーストに手を出していた。
仕事を始めてから、彼女は信じられないくらい食事量が増えた。
それほど、体力の必要な仕事なのだろう。

「これで締め切りをもっとゆるくしてくれれば最高なのに！！」
「だからそれは姉さんのせいでしょ…。」

あきれながら、最後の一口を放り込む。
家事をする者にとって、朝は時間があまりないのだ。
洸は立ち上がると、食器を台所へと運んだ。

「食べたら食器入れといてね。」
「ふぁーい。」

洸は美音を居間に残し、家の掃除に取り掛かった。

＊＊＊

しばらくして。
掃除を終えた洸が居間に戻ると、美音がソファに横たわっていた。
確か今日は休みだったな、と思いだしながら、美音の顔を覗き込む。
今にも落ちそうな、外にはとても出せない表情をしている。
よほど疲れているのだろう。
それを見て、洸は苦笑いを浮かべる。

「姉さん、寝るなら部屋戻りなよ。」
「んー。」

声をかけて部屋へと戻ると、洸は学生服に着替えた。
荷物を取って居間へ戻ると、美音の姿は消えていた。

寝に戻ったのだろうと当たりをつけ、1階にある彼女の部屋に向かう。
ノックすると、まだ起きていたらしく、相変わらずの顔の美音が出てきた。
これから彼女は、至福の時である睡眠を楽しむのだろう。

「じゃあ行ってくるね。」
「おう、行ってらっしゃい。」

日課の挨拶をかわして、洸は学校へと向かった。

第二話

木の葉が鮮やかな紅葉を見せ始める、秋の中頃。

学生服に身を包んだ集団にまぎれ、洸は学校へと向かっていた。

本州の中央北部に位置する町、樹山町。
人口は１万人程の小さなその町が、洸が暮らしている場所だ。
周囲を山に囲まれ、都会に近い位置にありながら風景豊かな町並みを持っている。

町は６つのブロックに分けられていて、方角によって分類されている。
洸の家があるのは、南地区。
南地区は山や森に囲まれた樹山町の玄関口とも言える場所で、都市部に仕事のあるものの多くはここに居を構えている。

だが、南地区は外に出る分には便利なのだが、町の施設を利用するには少し面倒な位置にある。
洸の通う樹山高校は西地区にあり、徒歩だと４０～５０分ほどかかる。
そのため自転車で通うものが多いのだが、洸はなるべく歩くようにしている。
理由は特になく、強いて言えば歩くのが好きだからといったところか。

とはいっても、通い始めて１年を過ぎた通学路。

通る景色も、人々も、見飽きてきてしまう。

いい加減自転車通学に変えようかと思っているのだが、今の生活リズムに馴染んでしまっているため、何となく変え辛くなっている。

肌寒い秋風が通り抜ける。

まだ秋とは言っても、樹山町は山からの吹き下ろしによって、都心の冬並の気候になる。
冬には氷点下を下回るため、地元民でない人々には堪えるだろう。
最近は都市開発やらなんとやらで、結構な数の人がこの町にやってきている。
洸たちからすれば何でわざわざこんな寒い所に、と思ってしまうのだが、向こうにもいろいろ事情があるのだろう。

樹山町唯一の高校にも、移住してきた人たちが増えてきている。
洸が見た限りでも、マフラーなどをしている生徒がちらほら見受けられた。

今からそれで、大丈夫だろうか。
見るたびに洸は思うのだが、結局は人事。
すぐに忘れて、視線をそらす。

ふと、彼らの中に、洸は知った顔を見つける。
周囲より頭一つ抜けた、洸と同じ黒い学生服に身を包んでいる男。
のんびりと歩いているその男に近づくと、洸は横に並んだ。

「浩太。」

「ん？」

名前を呼ばれて、その少年が振り向く。
少し焼けた肌に、整った顔立ちをしている。
彼は洸を見ると、少し驚いた表情を浮かべた。

「あれ、洸じゃないか。早いな。」
「…俺はいつもこの時間。お前が早いんだろうが。」

少し不満げに、洸が言い返す。

「あれ、そうだったか。」

頭を掻きながらぼんやりと呟くこの少年は、名を添島浩太（そえじまこうた）という。
洸の高校からの友人で、今はクラスメイトだ。

平均的な洸と違い、身長が高い。
聞けば、１８０を超えるらしい。
余計な脂肪もなく、かといって細いというわけでもない。
そのすらっとした体格は何かの運動をしているように思えるが、実際は美術部員である。
もちろん見た目通り運動は得意なのだが、本人はのんびりと絵を描いている方が性に合っているようだ。

そんなわけで、彼は普段美術室で絵を描いている。
洸も、何度かその光景を見たことがあるのだが、彼が美術室に籠って絵を描いている光景は、どこかちぐはぐで可笑しい。
それは、自他共に認められていた。

「洸は普段こんな時間に来てるのか。よく毎朝起きれるな。」

「別に、早く寝れば早く起きる。それだけだよ。」
「ふーん…。」
普段は寝坊、遅刻の常習者であるはずの彼が、この時間に登校している。
それを見れただけで、洸は今日学校に来た甲斐があったと思えた。

「しっかし、都会人は寒さに弱いな。もうマフラーなんて付けて。」
洸と同じことを彼も思っていたらしい。
彼もまた、樹山の冬の恐ろしさをよく知っているのだ。

「仕方ないだろ。向こうはここより暖かいんだし。」
「これなら真冬にはどうなっちまうんだろうな。厚着し過ぎて苦しくなったりしてな。」
「それは…嫌だな。」

二人並んで、のんびり学校を目指す。

もう学校は近い。
始業までまだ30分近くあるため、まだまだ余裕はある。
もっとも浩太は足が長い分、洸は少し歩く速度を速めなければならなかったが。

「……。」
「……。」

それきり、会話が途切れてしまった。

無言のまま、２人は歩く。
普段は浩太が話し役、洸が聞き役になるのだが、肝心の浩太が先程から何も話さないのだ。
別に、話さなければいけないと焦るような間柄ではない。
だが、先程から、洸はイライラしていた。

「……。」

何となく、浩太が何か話したいことがあるような、そんな雰囲気を出しているのだ。
それでいて、向こうからは話さない。
タイミングを窺っているのか、洸に聞いてほしいのか。

（いつもは勝手にしゃべってるくせに…）

どちらにせよ、調子が狂う。

（…ああ、くそっ）

痺れを切らして、洸の方から口を開いた。

「それで、どうしたんだ。」

ちらと覗いた相手の横顔は、気だるそうにしている。
その顔が歪んだのを、洸は見た。

（何だ…？）

その違和感を考えている間に、表情はいつもの彼のものに戻ってしまっていた。

「…ん？おれか？」

数拍送れて、浩太が反応する。

「ああ。」

他に誰がいる、と思うが我慢する。

「話があるなら聞くぞ。」

「……。」

だが彼はそれに答えず、しばらく洸の顔を見つめてきた。

上から覗く、浩太の目。

そこから不思議な威圧感を感じて、洸の身体がびくりと跳ね上がる。

「———っ！！」

はっとして振り向くと、浩太のにやけた顔がそこにあった。

「…なんだよ。」

「いや、相変わらず優しいなーと思って。」

ひらひらと手を振りながら、浩太は惚ける。

それを見て、洸はため息をついた。

「気持ち悪いぞ。」

「そんなこと言って、満更でもない癖に。」

「…はいはい。」

（優しい、って目つきじゃないだろ…）

やはり、何かありそうだ。
そう思った洸は、浩太の言葉を待った。
すると。

「なあ洸。お前、茶織咲って覚えてるか？」
「ん？」
「いや、だから茶織だよ。茶織咲。知ってるか？」
「あ、ああ。」

まさか、直ぐに教えてくれるとは思っておらず、驚いた。
慌てて、言われた名前を思い出す。
茶織、さおり――ああ。

少ししてから、洸が顔をあげる。

「中学の時の同級生にいたな。そんな名前の娘。」

高校と同じ西地区に、町唯一の中学校、樹山中学校がある。
少し前まで洸たちが通っていた学校で、茶織という少女も洸たちと同じ年に卒業し、現在は外の高校に通っていたはずだ。

「おお、よくできました。褒めてやる。」

浩太は無表情のまま、洸の頭を撫でまわしてくる。
それを苛立たしげに振り払って、洸は浩太へと向き直る。

「それで？その彼女がどうした。」
「ああ…。」

わざわざ名前を出すくらいだ。
その少女についての話だろうことは、容易に想像できた。

（あれ、そういえば…）

中学の頃、浩太とその茶織という少女が一緒にいる光景を、洸は何度か見た記憶があった。
仲が良かったのだろうか。
もしかしたら、そういう関係だったのかもしれない。
なんだ、そういう話題か、と洸は納得した。

それならば、浩太がおかしいのも納得が――。

「行方不明らしい。」
「…へえ。」

他人事のように、浩太は言った。

行方不明。
そうか、だから浩太は今日こんなにも早く――。

「…って、何！？」

少し遅れて、洸はようやく彼の言葉をのみこんだ。

茶織咲が行方不明になった。
そう、浩太は言っているのだ。

「だから、行方不明なんだよ。あいつ。」

「…なんでお前がそれを？」

尋ねると、浩太は面倒そうに頭を掻いた。

「いや、あいつの親とうちの親が知り合いでな。それで。」

行方を捜すために、周囲の知り合いに連絡をとるのは当り前のことなのだろう。

ここは、小さな町だ。

噂なんてあっという間に広がるし、行方不明ならばむしろその方が好都合のような気もする。

だがそんな気配が今まで全くなかったことに、洸は疑問を抱いた。

「いつからだ？」

「3日ほど前かな。うちに連絡がきたのが昨日。」

今日は月曜日。

休日ならば、姿が見えなくても怪しまれることはなく、噂が立つこともなかっただろう。

むしろ、広がるとすればこれからだ。

ふと、浩太が大きなあくびをした。

見ると、目の下に大きな隈ができていた。

「眠そうだな。昨日は徹夜か？」

「ああ、仕上げたい作品があってな。」

などといいつつ、その茶織という少女を探していたのだろう。

そういう男だ、と洸は思った。

まあ、言いたくないのなら聞く必要もない。

「そうか。それで――。」

何で洸にそんな話を、と続けようとしていた時。
ふと、浩太の体が車道へと流れた。

「おいっ！？」

慌てて腕を掴み、止める。
その直後。
洸たちのすぐ横を、高速の車体が通り抜けた。
押し出された空気が流れ、身体にぶつかる。

一歩間違えていたら、今頃洸たちは肉塊になっていたかもしれない。

一瞬で、汗が噴き出した。

「ん？…ああ、悪い。」

浩太がぼんやりと振り返った。

先程出会った時より、その顔には疲労がたまっていた。
本当に一晩中走り回ったのではないだろうか。
そう思える表情をしていた。

「お前、今日は学校休め。危なっかしい。」

洸の言葉に、浩太は笑う。

「平気だよ。ただの寝不足だ。どうせ授業中は寝てるしな。」
「なら、なんで学校来るんだよ…。」
浩太を歩道側に押し込むと、洸はそのまま浩太を引っ張りながら歩きだす。
ぼんやりとそれを眺めていた浩太が、ふにゃりと笑う。
「もう、強引なんだから。」
「…頼むから、せめて黙ってろ…。」
さっさと教室に連れていって寝かそう。
そう決めた洸は、周囲を気にしつつ歩く速度を上げた。
「それにしても、流石『気抜けの白埼』。思わず気が抜けちまった。」
浩太のその言葉に、今度は洸が顔をしかめた。
「あれは周りが勝手に言ってるだけだ。それに、お前のそれはただの寝不足なんだろ。」
眠くても口がよく回る、と苦笑いを浮かべた。
これなら聞いても大丈夫だろうと、洸は口を開いた。
「……んで、なんでそんなこと聞くんだ？」
そうして、洸は本題に入る。
わざわざ自分に言うくらいだから、何かあるのだろう。
「ああ。」

案の定、浩太が口を開いた。

「洸。お前、今日の放課後暇か？」

「今日か？…ああ、特に用事はなかったはずだ。」

言われて、洸は今日の予定を思い出す。

今日は美音も家にいるだろうし、遅くなったとしても問題はないだろう。

「そうか。なら、少し付き合ってくれ。」

「ん、わかった。」

そこまでいったところで、二人は学校に到着した。

それきり黙ってしまった浩太とともに、洸はクラスへと向かった。

（結局説明はなし、か…）

浩太が何を考えているのかはわからない。

だが、彼のことだ。

洸に危険なことをさせるといったことはないだろう。

そう考え、とりあえずは納得することにした。

行方不明だという少女、茶織咲。

今はまだ、これがすべての始まりだとは、思ってもいなかった。

第三話

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

その音を聞き、洸は顔を上げる。
周囲の生徒たちも顔を上げては、前方の壁に掛けられた時計に目を向けている。

「――――。」

だが、授業の終了を告げる声は聞こえない。

教壇の上では、年老いた数学教師が何やらしゃべり続けている。

いつも遅刻してくるそ数学教師は、その分の時間を取り戻そうと、休み時間に食い込んでまで授業を行う。
なら早く来ればいいのに、と皆が思っているであろうことを思いながら、洸は窓の外の景色を眺めていた。

「……。」

いつも通りの退屈な授業。

そろそろ定年が近づいているその教師の話は、学習ではなく子守唄だ。

聞いていれば寝るのは必至。
それだけならばいいのだが、その教師は寝た生徒を吊るし上げにすることを誇りに持っているのだ。

（…まあ、例外はいるんだけどな）

教室の端で眠り続けているであろう男を、洸は思い浮かべる。
彼に関しては、流石の数学教師も諦めているらしい。
もうほとんど無視に近い態度を、最近ではとるようになっていた。

だが、他の生徒たちはそんな風にはいかない。
だから、この時間は皆暇潰しに忙しい。
洸もその一人であったのだが、対策として用意していた文庫本は先ほど読み終わってしまった。
普段なかなか読まない推理小説ものだったのだが、予想以上に面白く、のめり込んでしまった。
ゆっくり読んで、残りは家で読もうと考えていたのだが、面白かったのでそれはよしとした。

周辺のクラスからは、授業を終えた生徒たちの賑やかな声が聞こえてくる。
今日はもうこれで授業が終わる。
もう少ししたらホームルームをしに担任がやってくるから、それまでの辛抱だろう。

やることが無くなってしまった洸は、ぼんやりと思索に耽る。
真っ先に頭に浮かんだのは、今朝のこと。

（…行方不明って、言ってたよな）

洸の中学の時の同級生である少女、茶織咲。
浩太は、彼女が行方不明になったという。

行方不明。
言葉にすれば、それは随分とあっさりとしたものだ。

だが、実際にはそうはいかない。

人が一人消えた。
それは、途轍もなく、異常な出来事のはずだ。

けれど、洸の周囲には何も変化はない。
この授業はいつも通りに退屈で、寝るか無視かを貫いている皆も変わらない。
ただ違ったのは、それを洸に告げた男だけ。

その男は、学校に着いてからずっと眠っているように思えた。
少なくとも、洸は一度も起きているところを目撃していない。
あれだけ眠っていられるのは彼特有の能力なのか、それだけ疲れているのか。

彼は今朝、洸の放課後の予定を聞いてきた。
何か頼みたいことがあったのだろうか。
先ほどのことを考えると、それが何なのか、どうしても気になってくる。

（探すのを手伝え、か…？）

そう考えて、洸は直ぐにそれを否定した。
ああ見えて、浩太はなかなか責任感が強い。
一度やると決めたことは、意地でもやり通そうとする性質がある。
しかも、一人で。

彼は、極力他人の力を借りようとしない。
それは、決して他者を嫌っているからではない。
自分の都合で周りを巻き込むことを、彼は嫌っているのだ。
そんな彼が、洸に助けを求めてきた。
それは、つまりそれだけ状況が悪いと考えていいのだろう。

（厄介なことにならないといいが…）

そう考えて、洸はふと前に視線を戻した。
教卓の向こうでは、教師がまだ話を続けていた。

「――――。」

意識を向けた途端、耳に言葉が流れ込んでくる。
そのゆっくりとした子守唄に合わせて、睡魔が一斉に押し寄せてくる。

後少しで授業は終わるというのに、瞼はどんどんと重くなっていった。
洸は何とか起きようと試みたけれど、それでも睡魔には勝てず、深い眠りに落ちていった。

＊＊＊

何もない、暗い闇。
その中を浮かんでる。
音はない。
光もない。
ただ、何かの上を漂っている。
そんな感覚。

指の先に、光が見える。
触れようとしてみる。
けれど、届かない。

『――――。』

ふと、何かが聞こえた気がした。
何だろう。

それがだれの声かはわからない。
ただ、とても懐かしい。

『――い…。』

まだ、声は聞こえる。
なぜだろう。
その声に、呼ばれている気がして――。

＊＊＊

「――おい。」

声に呼ばれて、目を覚ます。

「……あれ…。」

寝ぼけた声を出して、洸は起き上がる。
教室にはもう人は居らず、沈みかけの夕焼けが窓から差し込んでいた。

時刻は４時手前。
ホームルームはとっくに終わっている時間だ。
どうやら寝過ごしてしまっていたらしいと気がついた。

（なんだ、今の夢…）

夢の内容は、何となく覚えていた。
だがその夢自体が良くわからない。
何か、懐かしい感じのする夢だった。
夢の中で、何かを言われていた気がしたのだが。
思い出そうとするが、その時にはもう夢の内容をほとんど忘れてしまっていた。

「ようやく起きたか。」

声がして、振り返る。
誰もいないと思っていた教室に、浩太が一人座っていた。
丁度、洸の席の斜め後ろの席。

そこは、彼の席ではないはずだ。
そもそも、なぜ彼がここに――。

「…ああ。」

そこで、洸は今朝のことを思い出した。
そういえば、約束をしていた。
洸が起きるのを待っていてくれたのだろう。
夕陽を浴びながら静かに本を読む彼の姿は、確かに様になっていた。

「悪い、待たせたな。」

「いや、そんな急ぐわけでもないから平気。」
「…そうか。」
教科書を鞄に詰め込んで、立ち上がる。
既に立ち上がっていた浩太が、入口で振り返る。
「じゃ、行くぞ。」
「ああ。」
浩太に連れられ、洸は学校を出た。

第四話

学校を出て、２人は帰り道を進んでいく。

「ふわぁ…。眠い。」

大きく欠伸をしながら、洸は言った。
まだ寝起きの状態である洸。
頭がぼんやりとして、うまく回らなかった。

隣を歩く浩太は、流石に一日中寝ていただけあって元気そうだ。
彼は隣で欠伸する洸を見ると、口を開いた。

「お前さっきまで寝てただろ。あれだけ眠って手まだ眠いなんて…。贅沢言うな！！」

「…いや、お前は授業全部寝てただろう…。」

軽口を叩きあいながら、洸たちは進んでいく。

陽はもうだいぶ傾いてきていて、既にかなり冷えてきている。
吸いこんだ大気もとても冷たくて、洸は一気に目が覚めた。

おかげで、思考もクリアになってきた。

（…さて）

結局、洸は何をすればいいのかまだ分かっていない。

浩太は相変わらず、黙ったまま。

だが、寝起きの彼はいつもこんな感じである。
今も、大して違和感は感じない。
もしかして今朝のやり取りは冗談か何かだったのだろうか、と洸が疑い始めた頃。
浩太が口を開いた。

「今日、店行くのか？」
「いや、今週は特に行く予定はないよ。しばらく店も暇になるみたいだし。」
「そうか…。」

それきり、再び黙ってしまう。
どうも煮え切らない。

この浩太には、洸は違和感を覚える。
普段は人の事情も知らずにずかずかと入り込んでくるというのに。

（仕方ない、か）

今回は、洸が浩太の中に入り込まないといけないらしい。
小さく、浩太に聞こえないくらいに息をついて、洸は切り出した。

「それで、これからどこ行く気なんだ？」

いくらなんでも、これは教えてもらわなければならない。
流石に、洸も何も言わない浩太に着いていくつもりはなかった。

「……ああ。」

洸のその気配を察してか、浩太は小さく息をつくと、意を決したように話し始めた。

「行くのは、図書館だ。」

「図書館？…なんでまた。」

「調べたいことがあるんだ。でも、一人だと時間がかかりそうだったんで、手伝ってもらおうと思ってな。」

道の向う。

遠くを見るように、浩太は言った。

「なるほど。」

その言葉に、洸は頷いた。

やはり、茶織咲を探せなどといった話ではないようだ。

「…でも、何を調べるんだ？」

だが、手伝うということは浩太自身もその調べごとをするということになる。

昨日一晩中彼女を探していた筈の浩太が、それを放っておいて調べることとは一体何なのか。

「……。」

今朝のことからすれば、おそらくは行方不明の少女のことなのだろう。

だが、図書館で行方不明の少女の何を調べるというのだろうか。

洸の疑問に、浩太が口を開いた。
「…樹山の、神隠し。」
「神隠し…？」
思わぬ言葉に、洸は驚いた。
「神隠しって…あの都市伝説か。」
樹山の神隠し。
それは、都市伝説のように人々の間に広がっていた一つの噂話。
ある日突然、人が煙のように消滅してしまうのだ。
そこには何の証拠も残らず、誰も、何も見てはいないという。
消えたものは決して帰ってくることはなく、その異様さは、神隠しとしか言えないそうであったという。
行方不明だという少女に、神隠し。
それは、つまり――。
「実際に何人か失踪してるって話だったが…。まさかそれに？」
「そう彼女の家族は言ってる。」
浩太は洸を一切見ずに、そういった。
その表情に、笑みはなかった。
「何だそれ…。神隠しなんて、信じるか？まだ誘拐とか家出の方が納得できるぞ！？」

「んなもん、俺だってわからん。」
声を強めた洸に、浩太はあくまで冷静に言った。
「もちろん警察には言ったらしい。だが、いくら調べても何の痕跡も見つからなかったそうだ。それに――。」
「…それに？」
「その警察も、昨日急に捜査をやめたんだと。…いや、正確にはまだ続いてはいるんだが、あれはやってないのと同じだろう…。」
少し語気を強め、浩太が呟く。
たった3日、捜査しただけで引き揚げてしまった警察。
人が一人消えたというのに、そんなことがあり得るのだろうか。
浩太曰く、そこ――彼女が消えたと思われる場所には、彼女の鞄が落ちていたという。
彼女がいつも学校に持ち歩くもので、中身も、おそらくはそのまま残っていた。
そして、ただそれだけだった。
そこには鞄があるだけだった。
彼女がその日一緒に過ごしていたという友人の話から、消えた時間は深夜に近い時間帯だったという。
既に暗く、人の目もない時間帯だ。
人一人消えたとしても、神隠しなどとは思わないはずなのだが。
「…抉れてたんだと。」
「え…？」
「鞄が置いてあった場所のすぐそばが、球形に抉られて、消えていたらしい。…そこだけ、消滅したみたいに。」

「……。」

一般的に、神隠しとは何故だか人だけが消えるものだと、洸は思っていた。
だが、それだけならば誘拐や失踪とどこが違うというのか。
そう、思っていた。

けれど、今回は少し異なるらしい。
浩太の話を聞く限りでは、茶織という少女は、彼女の立つ場所ごと『喰われた』のだ。

なるほど、確かにこれならば警察や彼女の家族の反応も、納得できる気がした。
だが――。

「…それ、本当に神隠しなのか？話に聞いていたのとは、随分違う気がするんだが。」

地面が抉れていることは、何かがあったという十分な証拠になる。
神隠しだというのならばその地面の傷さえ残らないはずだろう。

「そうなんだよ。俺が聞いた話でも、地面がえぐれてるなんて、そんな部分はなかった。…だから、調べてみようと思ったんだ。」

樹山の神隠しとは何なのか。
少女の失踪とはどう関りがあるのか。
調べれば、何かわかるかもしれないのだ。

「…なるほど。そういうことか。」

洸は、ようやく浩太の意図を理解した。

おそらく、この調べ物が終わった後はまた茶織咲の捜索に出かけるのだろう。

学校で眠り、夜は町中を探しまわる。

そんな生活をする合間に、図書館での調べごとは、恐ろしく時間がかかる筈だ。

だから洸を呼んだのだろう。

普段人に頼らないはずの浩太からの、この頼み。

これは、浩太なりのＳＯＳなのだ。

（…不器用なやつだ）

洸は、苦笑いを浮かべた。

「そういうことなら、さっさと行かないとな。図書館、閉まるの早いだろ。」

そう言って、洸は歩みを速める。

「…悪いな。」

「気にすんな。」

町唯一の図書館は、中央地区の南にある。

ここからなら、２０分もかからずに着けるだろう。

洸たちは、図書館への道を急いで進んだ。

＊＊＊

話しながら歩いているうちに、洸たちは樹山中学の前まで来ていた。
高校へと続く坂道の、ちょうど麓に位置する洸たちの母校では、部活動に励む生徒たちの元気な声が聞こえてきていた。

「おお、やってるやってる。寒いのによくやるよなー。」

呑気な声で、浩太がいった。
これまで部活動と言えば美術であった彼にとって、この寒さの中で鍛錬に励む者たちの気がしれないのだろう。

（…まあ、俺もわからないんだけど）

ぼんやりと考えながら、洸たちはその光景を眺めていた。

「…おれ達も頑張らないとな。」

小さな声が聞こえてきた。
それは、彼なりの決意の表れだったのだろう。
自分もできる限りその想いに応えようと、洸はそう思った。

「ああ、そうだ――？」

言いかけて、洸は全身が脈打つのを感じた。
何かに見られたような、そんな感覚。

（…何だ？）

思わず立ち止まって辺りを見回す。

「…？どうした？」

少し先で、浩太が不思議そうな顔で尋ねてくる。

「いや…。」

何でもない。

そう言いかけて、洸の視線が、一点で止まる。

それは、目の前に佇む中学校。

そこが、どうしても気になる。

ふ、と洸の右手がそちらの方へと上げられる。

そのことに、洸は気付いていない。

――呼んでる？

校庭に、光が浮かんでいる。そんな気がした。

洸が、右足を踏み出した、その瞬間―。

「おい。」

「――っ！？」

ぽんと肩をたたかれ、洸は無言で飛び上がる。

慌てて振り返ると、浩太の無機質な表情が出迎えた。

「何、ぼーっとしてるんだよ。」

「…ああ、悪い。」

「いくら気抜けの白埼だからって、自分の気抜いてどうすんだよ。」

「だからそれは――。」
「よし、じゃあ行くぞ。図書館。」
「…話聞けよ、おい。」

元気よくそういうと、浩太は歩いていってしまった。
追いかけようとしてふと、振り返ってみたけれど、そこにはただの学校が広がるだけであった。
何だったのだろう、今のは。

確かに、誰かに呼ばれた気がした。
それに、あの光は夢で見たものに、似ている気がした。

（まだ、寝ぼけてるのかな）

先程の話もあるし、きっとまだ頭が混乱しているのだろう。
そう思い込み、洸は先行く浩太に追いつくために、足を速めた。

第五話

それから、図書館の閉館時間近くまで2人は本の山と格闘した。
昔の新聞を引っ張り出しては似たような事件がないかを探し、樹山町の歴史、民間伝承などが書かれた本を見つけては神隠しについての記述を探した。

だが、いくら探しても人と一緒に地面まで消失したなんて事件は起きてはいなかったし、神隠しについてはあくまで都市伝説の様な、噂話程度の内容しか載ってはいなかった。

元々町民用の娯楽のための施設だ。
本はあっても数冊、それも、事実なのか創作なのか判断がつかない情報ばかりであった。

結局、2人は大した情報は手に入れることができなかった。

「…まあ、まだ始めたばかりだ。」

そう言って、浩太は笑っていたが、その笑みはどこかぎこちなかった。

調査の最中に聞いたのだが、浩太と茶織咲は所謂幼馴染の関係にあるらしかった。

物心ついたころから一緒にいる、かけがえのない存在。
そんな人物が突然消えてしまい、さらにその原因が神隠しなどという信じられないものだなんて言われたのだ。
藁にでも縋りたい気分で、彼は今日ここに来たのかもしれない。
浩太の笑みの奥にある焦りを感じながら、洸はできる限りの手伝いをしよう、と心に決めた。

とはいっても、洸にもやらねばならないことがある。
急がなければ。
そろそろ腹を空かせた美音が怒りだす頃だろう。
図書館で浩太と別れると、洸は同じく中央地区南部にあるスーパーマーケットへと走り出した。

＊＊＊

買い物を終え、洸は自宅へと戻った。
「ただいまー。」
鍵を開けて中に入るが、家の中は静まり返っていた。
呼びかけてみても、何の反応もない。
「あれ…まだ眠ってるのか？」

見れば、仕事用の靴が一つ消えていた。
どうやら美音はまだ仕事らしい。
今日の朝は、特にそんなことを言ってはいなかったはずだが。

「…まあ、いいか。」

どうせ天香からの呼び出しでもされたのだろう。
仕事中なら、なおさらおいしいものを作ってやろう。
笑みを浮かべると、洸は居間へと入っていった。

＊＊＊

「ただいまー！！」

料理を始めてしばらくすると、玄関から美音の元気な声が聞こえてきた。
帰ってきた、と洸が手を止めたのも一瞬、どたどたと廊下を走る音が聞こえた。

「洸ー！！帰ったぞー！！！！」

豪快に扉を開けて、美音が飛び込んできた。
長い髪を一つに纏め、タイトめなスーツに身を包んでいる。
別段スーツを着用しなければならない仕事でもないのだが、本人は気合が入るから、と好んで着ていた。

「…わかったから、もう少し静かにね。」

具材を刻みながら、洸が言う。

「何よー、せっかく美人な姉が帰ってきたって言うのに…。」

対する美音は、これ見よがしに目を潤ませ、しなを作る。
それに見向きもせずに、洸は言った。

「姉が美人でも弟には関係ないの。さあ、もうすぐ料理できるから着替えてきて。」

はーい、と美音はとぼとぼと部屋を出ていく。
その後ろ姿を見て、洸はほほ笑んだ。

いつもの日々、いつもの時間。
洸は、この時間が大好きであった。

（…大切な人、か）

この空間から、もし美音が消えてしまったとしたら。
そう考えて、洸は胸がギュッと締め付けられるのを感じた。

（きっと、学校どころじゃなくなるな…）

だから、しっかりと学校に来ている浩太のことを、洸は純粋に凄いと思えた。
まあ、来ても寝ているだけではあるのだが。

ふと顔を上げて、窓の向こうを見る。
彼は今頃、町中を走りまわっているのだろうか。

邪魔をするつもりは、勿論ない。
だが、このまま続けさせたら、彼は間違いなく倒れてしまうだろう。
そうなる前に、洸たちは何らかの手がかりを見つけねばならない。

（何か、考えておかないとな）

最悪、彼を無理やり休ませなければならなくなるだろう。
彼は嫌がるだろうが、仕方がない。

もしもの時は、友である自分が動かなければ。
そう決めて。
洸は、料理へと意識を戻した。

＊＊＊

それから、着替えを済ませた美音と食事をとる。

「いただきます。」
「はい、めしあがれ。」

いつもの挨拶を交わして、食べ始める。
仕事が忙しかったのか、美音は一心不乱に食べ続けた。

「今日の仕事、どうだった？」

隙を見て、こちらはゆっくりと食べる洸が尋ねる。

「うん、昼間に急に呼び出されてねー。」

美音はどうやったらそんなことができるのか、食べ続けながら口を開いた。

彼女は今、母の古い知り合いである天香という人のところで働いている。
フリーのライターである彼女の助手として、取材の手伝いをしたり、記事を纏めたりしているらしい。
彼女の事務所は町の中央地区にあって、洸も時々顔を出している。
確か、前回行ったのは一週間前だったはずだ。

「急に呼び出すなんて、天香さんにしては珍しいよね。」

気合、迫力ともに満点の笑みを持つ彼女の姿を思い出し、洸は身震いした。

「そうね。それだけやりづらい相手らしいんだけど。」

食べ終えた食器を置くと、美音は麦茶を飲みほした。
洸の優に5倍はある速度で完食。
化け物か、この人は。

「じゃあ、これから忙しくなる？」
「…そうね、多分。」

食器洗うわね。
そう言って、美音は台所に向かった。

「そっか。」

仕事の関係上、美音に休みは少ない。
こうしてのんびりできるのは、締切直後くらいのものだ。

「今も、銅前製薬を追ってるの？」

洸が以前事務所を訪れた時に天香が狙っていたのが、銅前製薬という会社の上層部のメンバーであった。
詳しい事情は洸は知らないが、認可されていない薬物の使用をしていたとか、そんな内容だったはずだ。

「ううん、そこはもう終わったの。私が朝書いてた記事がそれ。」
「ああ、そうなのか。」

記事になったということは、何らかの確証が得られたのだろう。

「じゃあ、今は別のところか。」
「そう。…でも、今回はちょっと難しいかも。」

食器を洗いながら、美音が呟いた。
先程までとは違う、少し遠くを見る目をしている。

「…？もっと大きなとこ狙ってるってこと？」
「そりゃ、かなりでかいわよ。なにしろ金城グループだもん。」

金城グループとは、世界でもトップクラスの経営者である金城勇一郎が一代で築き上げた企業グループ。
医療、工学、サービスなど幅広い分野にまで手を出していて、この国の半分以上はこの男によって支配されているという噂も上がる程。
今現在この樹山町を開発しているのも、この金城グループの傘下の企業らしい。

「そりゃまたでっかいとこを狙ったね。」
呟く洸の声には、現実感がなかった。
誰もが知っている大企業を、知り合いであり、家族である人間が調べている。
なんとも不思議な気分だった。
「でも、天香さんらしくないよね。それ。」
「そうなのよ！！」
いつの間にか食器を洗い終えていたらしい美音が、洸に顔を寄せてきた。
これまで彼女は、特に大きな仕事をせず、どちらかと言えば、目立たないようにしてきていたのだが。
「最近、天香さんの様子が変なのよね。妙に焦ってるって言うか…。」
おかしい、と腕を組む美音。
働いた後なのに元気だな、と洸は見て呆れていた。
だが、その時美音の口から思いもよらぬ言葉が出てきた。
「これも、あの神隠しが起こってからなのよね。」
「…え？」
神隠し。今そういったのか。
「美音姉、今なんて…？」
「ん？…だから、神隠しよ、神隠し。最近町で起こってる失踪事件

が、神隠しなんじゃないかって、騒がれてるの。」
「……。」
まさか、美音からそんな言葉が出るとは思わず、洸は驚いた。
確かに浩太がそういったことを聞いてはいたが、洸も半信半疑だったのだ。
それが今、姉である美音から同じことが告げられた。
半分足す半分で、一になる。
これで、洸はもう信じるしかなくなった。
「その話を聞いてから、天香さんいろんな所に連絡とって、急にそこを調べだすって言いだして…。下っ端のあたしは大変ですよう…。」
「そう、か…。」
ただ、これはチャンスでもある。
天香に変化が起こり、美音がそれを知っているということは、おそらく天香は、この事件について詳しく知っているだろう。

「ねえ、美音姉。明日って、天香さん事務所いるかな。」
「え？…うん、多分いると思うよ。でも、どうしたの？」
「ちょっと、聞きたいことがあって。ありがとうね。」
彼女から詳しく聞ければ、神隠しのこと何かわかるかもしれない。
わからなくても、きっと取っ掛かりくらいはわかるはずだ。
洸は明日、天香の下を訪ねることに、決めた。

第六話

南地区から中央地区、そして北地区までと延びる町の中心となる道。地理的関係だけでなく、活気という意味でも町の中心であるその通りからは少し外れた場所に、喫茶店クインテットはあった。

茶色を基調とした店の外観に、店の前にはランプの描かれた看板が置かれている。

こじんまりとした落ち着いた外観、と言えば聞こえはいいのだろう。だがその中身は喫茶店とはまるでかけ離れたものであることを、洸はよく知っていた。

「……。」

ぼんやりと、店の外装を見上げている。

天香は今、ここにいるらしい。

先程美音から連絡が入り、天香がそこに洸を連れてこさせるようにとの通達があったことを教えてくれた。

昨日、唐突に訪問を決めたというのに、天香は自ら時間を作ってくれたのだ。

仕事の合間を狙って訪ね、いくつか聞くつもりだったのだが、向こうからやってきてくれるのならば好都合である。

ともかく、これで洸の目的は果たせることになる。

だが、洸は店の中に入れずにいた。

わざわざ向こうからやってくるということは、つまり、それだけのことだということだ。

美音曰く忙しいはずの天香が、洸を待ってこの店にいる。

それが何よりの証拠であった。

これは、気を引き締めて行かないといけないかもしれない、と洸は美音からの連絡を見て、そう思った。

（長くなるだろうな…）

念のため美音からのメールをもう一度確認しながら、洸は思った。

学校終わりに来いということだったので、浩太の手伝いには遅れるか、もしかしたら行けないことになる。

そのことを、今日はしっかりと遅刻してきた浩太に説明した。

「いいんじゃないか。」

作業2日目にしていきなり休むと言い出した洸を、浩太は笑って許した。

「元々おれが無理言ってやってもらったわけだし、あの人の話なら何か手掛かりになるかもしれないしな。」

天香のことは、浩太もよく知っている。

というよりも、彼女は町の有名人なのだ。

どちらかと言えば、悪い方の。

そうして浩太の許しを得て、洸はここにやってきていた。
今頃、彼は一人で本の山と格闘しているだろう。

「…はぁ、行くか。」

どの道、入らなければ終わらない。
大きくため息をついて諦めを吐き出すと、洸は店の中へと入った。

＊＊＊

カラン、と扉の鈴が鳴った。
外観と同じく、茶を基調とした内装。
入って目の前にはカウンターがあり、5人分の椅子が置かれている。
扉の右側は少し手前に突き出た構造になっていて、テーブルが2つ。
左奥に進めばさらにテーブルがあるのだが、ここからは陰になってよく見えない。

落ち着いた雰囲気のある店、が店主のコンセプトらしい。
とりあえず、見える範囲に客はいなかった。

「いらっしゃい…って、なんだ。洸か。」

カウンターから、声が聞こえる。
男が一人、カウンターの中に立っていた。
長身に短く刈りあげられた黒髪。
そこから覗く、少し幼く見える顔に笑みを浮かべて、彼は洸に言った。

「何だ、じゃないでしょ。客に向かって。」
「はは、悪い悪い。」
人懐っこい笑みを浮かべて、男は言った。
この男が、この店の店主である笹西遼次（ささにしりょうじ）である。
彼もまた洸たちの母の友人で、洸も美音も、度々お世話になっている。
洸は時々、小遣い稼ぎとしてこの店でアルバイトとして働かせてもらっているから、尚更だ。
「しっかし、相変わらず人いませんねここ。」
店内を見渡しながら、洸がいった。
「暇だねー。あまりに暇すぎて、やることなくなっちゃったよ。ははは。」
「…笑ってていいんですか、それ。」
明るいというか、呑気な性格の持ち主で、常にのんびりとしたオーラを辺りに振りまいている。
この店に来る人はそんな彼の人柄に惹かれているらしい。
「うちは常連さんがいっぱいいるから、それでいいんだ。いっぱい頼んでくれるしね。」
「まあ、そうですけどね…。」
不思議なことに、この店には結構な数の常連たちがいる。
というより、常連しか来ない。
そのほとんどが中央の通りなどに店を構える人たちなのだが、彼ら

もまた『落ちついた』という言葉とはかけ離れた人たちだ。
（本当、なんでこの店は大丈夫なんだろう）
バイトに来るたびに、洸はそう思っていた。
「まあ、今はそんなことより。」
相変わらずの笑みのまま、彼は店の奥を指差した。
「来てるよ。お客さん。」
「…はい。」
応えて、洸は覚悟を決めた。
絶対、何か情報を得て帰ってやる。
そう思い、言われた方角へと顔をのぞかせる。
だが。
「あれ、いない…？」
店の左奥に置かれたいくつかのテーブル。
その内の一つに、女性物と思われるコートと鞄が置かれてはいるのだが、肝心の天香の姿が見当たらない。
どこへ行ったのか。
辺りを見渡していた洸の視線が、止まる。
「あ。」
「まあ、あれは客じゃなくてただ飯喰らいだけどな！！」

遼次が軽口をたたいた直後。

ズドン、と物凄い音が響いた。

一瞬にして遼次の身体が吹き飛び、カウンターへと直撃した。

「…く、おぉ……。」

思いっきり腹を打ち、呻く遼次。

その背後に、一人の女性が立っていた。

「誰がただ飯喰らいだ！！誰が！！」

灰色のスーツに身を包み、サングラスをかけている。

首の周りで切りそろえられた黒髪は艶やかで、よく似合っていた。

「天香さん。」

天香と呼ばれた女性が、気づいて洸の方へと振り向いた。

「よ、元気か、洸。」

そう言って、サングラスを外すと、少し切れ長の、理知的な瞳が現れた。

彼女が母の旧知の友人で、由良木天香（ゆらきあまか）という。

先述の通りのフリーライターで、優しく豪快な頼れる姉のような人だ。

時折とても怖いが、基本的にはいい人だ。

倒れた遼次を見ながら、洸は頷いた。

「おかげさまで、何とかなってます。」
「そう、それはなにより。」
彼女の手には湯気の立つカップがあった。
おそらく店の裏でコーヒーでも淹れていたのだろう。
ここは天香と遼次が2人で経営している店なのだ。
「ほら、いつまで倒れてんの。邪魔邪魔。」
「……ありがとうございます…。」
…力関係は、対等ではないらしいが。
天香は一旦裏へ引き返すと、もう一杯のカップを持って戻ってきた。
それを受け取り、2人は天香の元いた席に着いた。

「この前やってた仕事、もう終わったんですね。」
何から話していいのか分からず、洸はそう切り出した。
「ん?…ああ、銅前のことね。楽な仕事だったわー。あんな杜撰な管理でよく今までもってたもんだわ。」
笑みを浮かべながら、天香がいう。
「姉さんの記事を使ったって聞きましたけど…。」
「ああ。あいつ、あれでなかなかいい記事書くんだよ。結構助かってる。」
「へー…。」

洸もたまに美音の記事を読ませてもらうことがあるのだが、それで文章の良し悪しがどうなのかはわからなかった。
姉が天香の助けになっている。
それを聞いて、洸は少し誇らしげに思った。

「ああ、そうだそうだ。」

ふと、天香が声を上げた。

「あんたたまには恵奈の見舞いにも行ってあげなさいよ。あいつ、心配してたわよ？」

恵那とは天香たちの友人であり、洸たちの母親でもある、白埼恵奈（しらさきえな）のこと。
今は中央地区北部の病院に入院している。
学校や家でのことを話し、世話をするために、洸は休みの日になると彼女の見舞いに行っている。
丁度、一昨日に行ったばかりだ。

「見舞いなら、毎週行ってますよ。」
「あら、そう？…でも、なるべく顔、だしなさいよ。」
「はい、もちろん。」

母親のようなことをいう天香に、洸は思わず笑ってしまった。
天香は、恵奈に対して異常に過保護なのだ。

「さて、それじゃあそろそろ本題に入りましょうか。」

カップに入ったコーヒーを一気に飲み干すと、彼女は洸を見た。
じっと見つめる瞳が、洸を見据える。

洸の身体に、一気に緊張が走った。

「で？何が聞きたいの？」

４０歳にしては若々しい顔が、ほほ笑んだ。

第七話

「なーるほーどねぇ…。」

話を聞き終えた天香が、煙を吐き出した。
洸の話を聞いている間に、灰皿が煙草で埋め尽くされている。
それほどの煙草を吸ってはいるが、彼女はヘビースモーカーではない。
むしろ、普段はあまり吸わない方なのだ。
それだけ、イラついているということだろう。

「それで、あなたがその子の手伝いをしていると…。」
「はい。」

洸の返答に、天香は肘をつき、睨んだ。
粘りつくような視線が厳しくあてられる。
ただ、ここで怯えるわけにはいかない。
そうしたら、彼女は何も話さないだろう。

怯むことなく、洸は彼女の顔を見つめ返した。

沈黙のまま、数秒。

その異様な威圧感に、洸も、遼次も息を呑んでいた。

重く、鋭い静寂。
先に沈黙を破ったのは、天香だった。

「…あんた、相変わらずなのね。」
腹の底から響いてくるような呟き。
天香は煙を吐き出すと、洸を睨みつけた。
「そうかな。」
洸自身、心当たりがあるのだろう。
苦笑いを浮かべて、応える。
「そうよ。…どうしようもない、お人好し。」
「…そうかな。」
あまり、自覚はないのだが。
「それで、心配したり、傷ついたりする人がいること、あんたはわかってる？」
「…はい。」
（…怒ってる、よな）
そういえば、以前にもこんなことがあった。
洸が何かに巻き込まれて、美音や恵那が心配して。
そして、天香に叱られた。
昔から、洸たちを叱るのは、決まって天香だった。
「……ふふっ。」

不意に、天香が笑った。

「天香さん…？」

「似てきたわね。優さんに。」

「父さんに？」

洸が幼いころに死んだという、父親、白埼優（しらさきゆう）。

「…そうなのかな。」

写真ですらほとんど見たことのない洸には、似てると言われてもよくわからない。

「そうやって笑うところとか、そっくりよ。」

そう言って、天香は笑みを浮かべた。

「…うん、まあ良しとしましょう。あんたももう成長したし、自分の行動の責任くらい、持てるでしょ。」

言いながら、鞄から一冊の手帳を取り出した。

元のサイズの数倍ほどに膨れ上がったそれは、天香が仕事の時にメモをとるものだ。

そこにはこの前の製薬会社の調査や、多くの過去の仕事の記録が書かれている。

おそらく、今彼女が調べているという、神隠しについても書かれているはずだ。

それを取り出したということは――。

「教えてくれるんですか！？」
思わず身を乗り出した洸に、天香は笑った。
「要するに、神隠しの詳細が分かればいいのよね。…それくらいなら、問題ないでしょう。」
「え…？」
「ううん、何でもないわ。」
言葉を遮って、天香は手帳を開いた。
分厚い、幾重ものページをめくって、ある場所で手を止める。
そこで、彼女は洸を見た。
本当にいいのだな、とその目が問うてくる。
その目をしっかりと見つめ返しながら、洸ははっきりと頷いた。
それを確認して、小さく息をつくと、天香は口を開いた。

「樹山の神隠し。それは遥か昔、ここら辺りがまだ、山と森に閉ざされていた頃から語り継がれてきたっていう、古い伝承だったわ…。」

＊＊＊

当時、人々は森をわずかに切り開いた場所に暮らしていた。
彼らは山には神様が住んでいると信じており、自分たちが生きていける最低限の量しか山の恵みに手を出すことはなかった。
もし無闇やたらに手を出せば、神の祟りが下ると彼らの間では信じられていた。
それが、樹山の神隠し。

その禁を犯し、山を荒らしたものは山に喰われ、二度と戻ってくることはなかったという――。

＊＊＊

そこまでを話すと、天香は顔をあげ、洸を見た。

「これが、昔の神隠しの大体の概要ね。」

黙ってそれを聞いていた洸は、頷く。
天香がかなり要約して話してくれたために、大分わかりやすかった。
だが、それでもいくつか疑問は浮かぶ。

「山に喰われるって、どういうことなんだろう。」
「…そうね。昔は、山という場所はもっと危険なところだったってことだと思うわ。」

人が通って安全な場所はほんのわずかだけ。
それ以上を欲張って奥に進めば、森の猛獣たちの餌食になってしまう。

そう考えてしまえば、神隠しでも何でもない。
でも、当時の人々からすれば、それは間違いなく神の仕業だったのだろう。

山は昔、神の世界に繋がっていると考えられていたらしい。
人は、天まで届きそうな程高く、人を飲み込む山を恐れ、崇めていたのだ。

「…それじゃあ、次は今起きている失踪事件の概要を教えるわ。ちなみに、他言無用よ。その友達にもね。」
「わかってる。」

天香の強い視線に、洸は頷いた。
洸の返答を確かめると、天香は手帳の別のページを開いた。

「今起きている神隠し。その一番最初って言われてる事件が起きたのは大体1年くらい前……。」

今から1年ほど前、当時樹山町に在住していた人々１０名近くが突然謎の失踪を遂げた。
失踪したと目される場所で見つかったのは、彼らの鞄などの持ち物だけ。
それ以外の証拠は、何一つ残されたはいなかった。

被害者の家族等への身代金の要求もなく、血痕、死体の発見も一切なかったことから、不可解な事件とされていた。
何よりも、目撃証言が一切なかったことが何よりも異常だった。
彼らが失踪したとされている時間はバラバラで、深夜から、昼間に消える者たちもいた。

だというのに、この状態。
人々が怖がり、不審がるのも当然と言えた。
そんな時、この噂が流れ始めた。
初めは誰かが面白がって言っただけなのかもしれない。
だが、噂は瞬く間に広まっていってしまった。
それ以来、樹山町で起きる失踪事件は、神隠しだと騒がれるようになった。
「失踪なんて、そんな頻繁に起こるものじゃない。なのに、集団失踪が起きて、その上何の証拠も残ってないんだから、そんな風に騒がれるのも当然ちゃあ当然なのかもしれないけど…。」
「……。」
2つの神隠し。
時代が異なれば、神隠しもその姿を変えるということなのだろうか。
だが、それを聞いた洸の頭には、一つの考えがどうしようもなく浮かび上がってきた。
「…それって…。」
呟いて、天香を見る。
「…まあ、別物でしょうね。どう考えても。」
彼女は新たに点けた煙草の煙とともに、言葉を吐き出す。
「これは、神隠しでも、何でもない。別の何か。」

「……。」

つまり、神隠しをいくら調べたとしても、茶織咲へは至れない。
そして、現状、今の神隠しについても何もわかってはいない。

「…ざっとまあ、こんなところかしら。」

息をつくと、天香は言った。

「で、目当ての情報はあった？」
「…いや、全く。」

両手を上げて、洸は言った。
本当に、これはお手上げと言っていいだろう。

（浩太、これはどうしようもないぞ…）

今頃図書館で本の山と格闘しているだろう友人を思い浮かべる。
これを知ったら、彼はどんな顔をするだろう。

もしかしたら、話さない方がいいのかも知れない。
まだやることがあるから、浩太は動けている。
そんな気がするのだ。

しかし…、とそう思って洸は目の前の天香を見た。

「天香さんでも、わからないことあるんだね。」
「当たり前でしょ。ああ…！！ほんと、いらいらする。」

ドン、と机を叩く。

本当にいらついているようだ。
そういえば、彼女はなぜこんなにも焦っているのだろうか。
美音が言うには、彼女も何か関わりがあるようなのだが。

「まあ、いいわ。」

煙草を揉み消し、天香は立ち上がった。
まだ仕事が残っているのだろう。
忙しそうだ。

「じゃあ、私はそろそろ行くわね。」
「あ、天香さん。」
「んー？」

サングラスをかけた、天香が振り向いた。

「ありがとう。わざわざ…。」
「…ふふっ。」

また笑った。
サングラスで表情は見えないけれど。
ぽん、と天香の手が頭に乗る。

「んなもん、気にしない気にしない。あんたの両親には、世話になってるんだから。」
「…はい。」

そう言うと、天香は鞄を手に、歩きだした。

「遼次、あんたも寝てないで準備しろ！！」
「…はい…。」

どん、とカウンターを蹴飛ばされて、遼次が呻く。
そういえば、先程と体勢が変わっていない。
まさか、ずっとあそこで倒れていたのだろうか。

「…あ、そうそう。」

入口の前まで来て、ふと、天香が声を上げた。
振り向くと、洸の方を覗いてくる。

「あんた、最近変な声、聞いたりしない？」
「声…？」

その瞬間、あの夢がフラッシュバックする。
吹き抜ける風。
聞こえてきた声。
――声？
そうだ、声だ。
でも、それは夢。

夢の声をいったとしても、意味はないのだろう。
だから、洸は言った。

「いいや、聞いてないけど。」
「…そう。ならいいわ。」

じっ、と睨んだ後、天香は今度こそ背中を見せた。

「じゃあ、またね。ちゃんと見舞い行くのよ？」
そう言って、天香は店を出ていった。

「……。」

何だったんだろう、今のは。
一人残された洸は思う。

（声を聞くなんて、俺はエスパーか…？）

もしそんな声を聞いたら、真っ先に誰かに相談するだろう。
そう考え、洸は笑った。

「…図書館行くか。」

まだ浩太に話すかどうかは決めていない。
だがここにいても仕方がない。
もうじき常連方がやってきて、騒がしくなるだろうし。

道すがら考えよう。
そう思い、洸は入口へと向かった。

ふと、カウンターのところで足を止める。
まだ、遼次は立ち上がれずにいるらしい。

（鈍い音、したもんな…）

まあ、この人にそんな心配はいらないだろう。

恵那曰く、昔からこんな風だったようであるし。

「遼次さんも寝てないで、準備してくださいよ。」

「…うぅ……。」

カランとなるドアを開け、洸は外へと出た。

第八話

日が赤く染まり、傾き始めた頃、洸は図書館へと着いた。

「……。」

中に入ろうとして、足が止まる。

結局、洸は先程聞いた話を浩太に話さないことに決めた。
例え調査が無意味なことでも、そうすることで彼の気持ちが少しでも紛れるだろうから。

（いいんだよな、これで…）

本当は、まだ迷っていた。
浩太に話して、別の手がかりを探すという考えもある。
何より、彼に黙っているということ自体、洸には辛いことだ。

だが、それを話したとして何になるだろう。
元より、答えがあるなんて思っていない。

いくら煙のように消えたとしても、地面までもが抉れていたとしても。

『神隠し』なんて、誰も信じてはいない。

ただ、自分たちを納得させるだけの、偽りなのだ。
それを壊す必要などないし、そんな資格が自分にあるとは、洸は思っていなかった。

「…よし、行くか。」

頭を振って意識を切り替えると、洸は入口を通り抜けた。
既に浩太に話すシナリオは用意してあった。
後は、うまく話すだけ。

そう意気込んで、昨日2人で本と格闘したテーブルへと向かう。
だが――。

「あれ…？」

そこに、浩太はいなかった。
他の客がいるわけでもなく、ただ空席があるだけ。
調べるなら、ここが位置的に一番楽なはずなのだが。

（他の場所にいるのか…？）

そう思い、とにかく図書館の中を回ってみた。

＊＊＊

「…居ない、か。」

だが、結局浩太は見つからなかった。
図書館中を見て回り、職員にも聞いてみたが、見当たらない。
「まだ来てないのか、それとも…。」
元々、洸は今日来れないと伝えてある。
だから浩太も来なかったと考えれば、筋は通る。
だが、作業を始めて昨日の今日。
よほどのことがない限り、彼が休むとも思えない。
「まあ、考えても仕方ないか。」
きっと、何か別の用事でも出来たのだろう。
そう無理やり納得させて、洸は図書館を出ようとした。

「…あ、そうだ。」
と、途中で足を止める。
ついでに、天香が言っていた過去の事件について調べてみようと思ったのだ。
昨日とは違い、1年前周辺の記事を探せばいいからすぐに見つけられるだろう。
もしかしたら、何かしら手がかりが見つかるかもしれない。
そう思って、洸は昔の新聞を引っ張り出していたのだが。
「あれ…？」

いくら探しても、神隠しと呼ばれるような失踪事件の記事は一つも見つからなかった。
天香のあの言い様では、かなり騒がれたような印象を受けたのだが。

（そういえば、去年そんな話聞いたことなかったよな）

それほど騒がれたのなら、洸の耳に入っていたとしてもおかしくないはずだ。
なのに、洸は失踪事件など茶織咲のことで初めて耳にした。

（公表されなかった、ってことなのか？）

様々な理由から、世間に知られることのない事件があることは、洸もよく知っている。
これも、その一つだというのだろうか。

（いや、でもこれは…）

１０数人が消えているというのだ。
例え公表されなかったとしても、人づてに伝わるに違いない。
それも、都市伝説のような噂ではなく、もっと恐ろしいものとして。
だというのに、記事はなく、話にも聞いたことがない。

（…どういうことなんだ？）

洸には、わけがわからなかった。
まさか、天香が嘘を言っていたというのだろうか。
でも、そうだとしても、なぜわざわざ嘘をつく必要があるのだろう

か。

（神隠し、か）

これは、もしかしたら洸の予想していた以上に複雑なことなのかもしれない。

閉館を知らせるチャイムの音を聞きながら、洸はそう思った。

第九話

風だ。
風が吹いてくる。

いつの間にか、洸は外にいた。
というよりも、外になっていた。

窓も床も全部朽ち果てて、空が見えている。
周囲には、同じように朽ち果てた町並み。

空には月も日もない。
薄暗く、立っているのは洸たった一人。

まるで、洸だけを置いて何百年も経ってしまったかのような風景。

風が通り抜ける。
肌を撫でるような、生ぬるくて、柔らかい風。

『――――。』

「ん……？」

何か、声が聞こえた気がした。

振り向くけれど、そこにあるのはただの廃墟だ。
でも、何故だろう。
とても懐かしい匂いがする。

『――――ち…。』
また、声だ。

どこかで聞いた声。
あの声を聞いたのは、いつだったか。

『こっちへ…。』

声が、呼んでいる。
また。
また？

風が流れる。

声は、どうやら風の来る方から聞こえてくるらしい。

風の方へと進めばいいのだろうか。
洸は、そちらの方へと、踏み出した――。

「おっきろーーー！！！！！」

「！！！？？」

響く声。
視界を埋め尽くす黒い影。

意識を起こした直後の光景に、洸は横へと飛び跳ねた。
途端に襲う、浮遊感。
そして、衝撃。

ベッドから飛び降りた洸は、床へと墜落した。

「……っ！！」

痛みが、肩と首を襲う。
最悪の目覚めだ。
だが洸の意識はそちらよりも、先ほどの夢へと向いていた。

（…今のは？）

今度ははっきりと覚えている。
廃墟のような町。
吹き抜ける風。
聞こえてきた、声。

「もう！！なんで避けるのよ！！」

ベッドに突っ伏していた美音が、跳ね起きた。

「いや、条件反射ってやつで…ってか姉さん、よくそんな堂々と弟

の部屋に入れるね…。」

そもそも、何でこんな早くに美音が起きているのだろう。
まだ少しぼんやりとした洸の視界の中で、美音が身体をくねらせる。

「だって、仕方がないじゃない。こんな時間だしー。」

そう言って、美音は机に置かれていた時計を持ち、突き出した。

「ほら。」
「ん…？」

それを覗き込む。

アナログなその時計の、３本の針。
チクチクと動く秒針を除いた２本は、１２と８を指していた。

「今、何時でしょう。」
「…８時だね。」

「今日は、何曜日？」
「えっと…水曜日。」

「最初にチャイムが鳴るのは、いつでしょう。」
「それは３０ふ…って、あ。」

そこで、洸は美音がもう起きていることの意味に気がついた。

「やっべ…！！学校！！」
「制服、朝食、用意完了してます♪」

嫌な笑みを浮かべて、美音が言った。

「畜生っ、なんで起きた後の準備は完璧なんだよ！！」

「いやー、寝顔があまりにかわいくて、つい…。」

「頬を赤らめるな、気持ち悪い！！」

急いで制服に着替えると、洸は居間に駆け込む。

朝食を詰め込み、身だしなみを簡単に整えると、洸は鞄を持って駆けだした。

「行ってきます！！」

「はい、行ってらっしゃーい。」

いつにもまして楽しそうな美音に見送られ、洸は学校へと向かった。

遅刻しまい、と学校へと駆ける洸。

その脳裏から、先ほどの夢のことは奇麗さっぱり消え失せていた。

第十話

ほとんど飛び込むようにして、洸は教室へとたどり着いた。
その瞬間、授業開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

「…はっ、……はっ、…はぁっ…！！！！」

何とか、間にあった。
机に突っ伏して、荒くなった息を整える。

（…流石に、あの坂はきつかった…！！）

樹山高校は、学校に至るまでに長い坂を登らなければならない。
洸が自転車登校を躊躇う一番の理由が、それである。
歩いてでもきつい坂を、自転車を押しながら登りたいとは思っていなかった。

だが今日は、その坂を駆けあがってこなければならなかった。
まさしく心臓破りの坂。

少し遅れて教師が教室に入ってきても、洸はしばらく机から顔を上げることができなかった。

＊＊＊

しばらくして、洸はようやく落ち着いた。
いつの間にか授業が始まっていたらしく、皆静かに黒板へと視線を向けている。

「――――――。」

教師ののんびりとした声が聞こえてくる。

「……。」

響いてくるのは、教師の声に、板書の音。

（…しまった、もう授業内容わかんないかも…）

半ば諦めた心持で、洸はぼんやりと黒板に書かれた内容を眺めていた。

（…あれ？）

ふと気がついて、洸は教室を見回す。
いつもと変わらない教室。
皆、それぞれに過ごしている。
勉強に励む者。
別のことに忙しい者。
そして、眠る者――。

と、そこで洸の視線が止まる。

1時間目から眠りにふける、強者たち。
そんな彼らの中でも最たるものであった男の姿が、見えなかった。

（浩太、来てないのか）

昨日、浩太は図書館には来ていなかった。
あの時は何か用事でも出来たのだろうと思っていたのだが、どうやら違うらしい。
昨日学校で分かれたときには、特にこれといった異変は感じなかったのだが。

（…いや、まさかな…）

頭の隅にもたげた不安を、洸は必死に押し殺した。

＊＊＊

再び、チャイムが鳴り響く。

午前中の授業が終わり、昼休みに入る。
クラスが急に賑わいだし、生徒たちは席を立つと机をくっつけ合う。
楽しそうにはしゃぐ同級生の声を聞きながら、洸は美音の用意した弁当を取り出した。
普段浩太と一緒に食事をとる洸は、一人で食事をとることになる。
仕方なく、窓の外を眺めながら、昼御飯を食べることにした。

「あれ、白埼君。今日は夫は一緒じゃないのね。」

「…誰が妻だ、誰が。」

からかってくるクラスメイトをあしらいながら、洸は窓の外を眺める。

洸のクラスは学校の外側――丁度裏の山が見渡せる場所に位置している。

緑の木々に交じって、覗く紅葉。

名所などとは比べ物にはならないが、眺める分には十分奇麗な景色といえる。

それをのんびりと眺めながら食事を取っていると、クラスメイト達の話声が聞こえてきた。

「――――。」

「――――。」

「――――。」

自分たちが何も話していない時程、周囲の声は耳に入る。

とはいっても、大抵は昨日見たテレビの話だったり、授業に対する不満だったり。

自分も同じようなものなのだが、なぜ皆こうも似たような話をしてしまうのだろうか。

それだけ、皆同じで、つまらないものなのだろう。

自分だけは特別でいたい。

そう願う者は、きっと星の数ほど。

だが、それはきっとこんな形ではない。
洸も浩太も、そして、茶織咲も。
誰一人として、こんな特別なんて望んではいない。

（早く、見つけてやらないとな…）

自分ひとりが、浮き上がってしまったような、そんな不思議な感覚を抱きながら、洸は黙々と食事を続けた。

「――ねえ、聞いた？」

ふと、声が聞こえてくる。
女子生徒たちの会話。
少し声を抑えるようにして、笑みを含ませた言葉を交わしている。

「――昨日の、あれ。」
「――ああ、あれね。」

それが、やけに耳に入ってきた。

「――でも、本当なの？」
「――警察署で火事って…。」

気になる言葉が聞こえてきて、洸はふと視線を向ける。
（…火事？）

警察署は中央地区南部にある。
もし火事が起きたのなら、洸の家からでも煙やサイレンの音ぐらいは確認できていたかもしれない。
おそらく、夜に起きたのだろう。

洸は自分が眠っている間にそんなことが起きたのか、とぼんやりと思っていた。

その言葉を、聴くまでは。

「――囚人の一人が、行方不明らしいよ。」

「えっ…！？」

思わず、声が漏れた。
周囲からの視線が集まる。

「あ、いや……何でもないです。」

呟いて、視線を追い払う。

（…しまった）

驚きすぎて、つい声が出てしまった。
気を取り直して、食事を続ける。

「――けが人とかも出たらしいけど、一人だけ、見つからないんだって。」
「――逃げちゃったってこと？」

途端に、教室の端からきゃあきゃあと声が上がる。
彼女たちは警察から逃げ出したかもしれないという犯人への恐怖に怯えているのだろう。

だが、洸は違った。

彼もまた、震えてはいた。
彼女たちとは、違う意味で。

（そうか、火事があるのか…！！）

ぞくりとする感覚。

火事で消えたという人間。
それは、死体がわからないほどに燃えただけかもしれない。
だが、そうでないとしたら。

火事で消えようが、山で遭難しようが、結果的に見れば、それは失踪となんら変わりない。
人が一人、消えたのだ。

もし、もし洸の考えが当たっているとするならば。

起きているのかもしれない。
天香の言っていた、樹山の神隠しが。

まだそう決め付けるには早いかも知れない。
洸が聞いただけでもまだ2人だけ。
しかも、それらが正しいともわかってはいないのだ。

だが、どうしようもなく頭はその可能性ばかり上げてくる。
洸が知らないだけで、消えている人間はいるのではないか、と。

そこまで考えて、洸は、昨日から見ていない友人の姿を思い浮かべる。

（…まさか）

神隠しが起きているとして、それが何をトリガーに起こっているかなど、わかりはしない。
ただ、もし起きているならば。
浩太は、『惹かれやすい』存在であるような気がするのだ。

（…駄目だ。やっぱり気になる）

まさかとは思うが、確かめる必要はあるだろう。

授業をサボることになるが、もう構いはしなかった。
洸は鞄を手に取ると、教室の外へと駆け出した。

第十一話

樹山高校のある西地区は、町の北西に位置する山の一部分に含まれている。
南北に延びるこの地区は、北に向かっていくにつれ、高度があがっていく。

丁度西地区の最北端に建つ樹山高校は、町でも一番高い場所でもあった。
高校自体は山の少し奥に入ったところにあるのだが、少し坂を下ると視界が開け、町を一望することができる。

近頃ようやく開発という変化が訪れてきたこの町は、自然と建造物の交わった、不思議な景色が広がっている。
もう少しで都会へと変化する町並み。

そこへと転がり落ちるように、洸は駆けていた。

少し傾いた、緩やかなS字のカーブを描いて、坂は町に降りていく。
目の前には、広がる町並み。
人の姿は、小さくしか映らない。

ここから浩太を探せたならば、どんなに楽だろうか。
ぼんやりとそう考える呑気な思考を振り払い、洸はひたすらに考える。

浩太がいそうな場所はどこか、を。

（いや、違うか…？）

ふと、疑問が浮かぶ。

洸が今心配しているのは浩太がどこにいるのかではないはずだ。

どこにいるのか、ではなく、『どこか』にいるのか。

それを、確かめなければならないのだ。

そうならば、行くべき場所はただ一つ。

浩太の家だ。

彼の家は、西地区と南地区の中間付近にある。

幼馴染という、茶織咲の家も、その傍にあるはずだ。

（お前まで消えるんじゃないぞ、浩太）

走りながら、洸は友人の笑みを思い出す。

悲しくて、疲れて、それでも希望を信じて浮かべていた、くにゃりとした、あの笑顔。

（お前まで消えたら、誰が彼女のことを悲しんでやるんだ…！！）

そう、心の中で叫び、洸は勝手に回る足の速度を、さらに速めた。

＊＊＊

全速力で駆け抜けて、洸は浩太の家に辿り着いた。

２階建の一軒家。
以前、何度か遊びに来たことがある。
そんな場所に、こんな気持ちでやってくることになるとは考えてもいなかった。

荒れた息を整えて、洸はインターホンを鳴らした。
ピンポーンと鳴り響くその音が、今はやけに間延びして聞こえた。
（頼む、居てくれよ…！！）
洸の想いが届いたのか、すぐ横でガチャリと音が鳴る。
家の中へと、インターホンがつながったのだろう。
すぐ後に、向こうの音と思われる、ノイズが聞こえてきた。
「――！！こう…！！」
すぐさま反応して、洸は声を上げようとした。
しかし――。
『――はい、どちら様ですか？』
女性――おそらく浩太の母の声が聞こえてきた。
た…、と言いかけて、洸は慌てて口をつむいだ。
（って、そりゃそうだよな）
共働きでもない限り、母親が家にいるだろうことはすぐにわかる。

それを忘れるほど、洸は気が動転していたということなのだろう。

「あ、あの、浩太君の友達の白埼ですが…。」

気を取り直して、言った。

何度か来たことがあり、母親にも会ったことはある。

覚えていてくれるといいのだが、と洸は返答を待った。

『白埼君？あらあら…うちの浩太が、いつもお世話になってますー。』

どうやら、覚えてくれていたらしい。

そのことへの安堵とともに、洸は別の安心も感じていた。

浩太の母親はなかなか、というかかなりのんびりとした人だ。

以前来た時と変わらない。

それは、浩太が無事であるという何よりの証拠と言えた。

とりあえず、彼が失踪したわけではなさそうだった。

「いえ、こちらこそ…。」

安堵の息を吐いて、洸は応えた。

どうやら悪く考えすぎていたらしい。

そう、洸が思いかけた時――。

『…白埼君が来たってことは、あの子、やっぱり学校には行っていないのね。』

不意に、彼女が言った。

「え…？」

やはり体調でも崩したのだろうと考え始めていた脳が、急停止する。

『あ、ごめんなさい。いつまでもこれ越しじゃ申し訳ないわよね。今そちらに行くから、少し待っていてね。』

「え、あの…。」

そういうと、インターホンが切れた。

（やっぱり？…どういうことだ？）

浩太は消えていない。

それは何より安心することとして、考えてもいいだろう。

だが、彼女の言い方からすると、浩太は家にはいないようだ。

図書館にでも行っているのだろうか。

そんなことを考えていると、入口から音がした。

一人の女性が出てきた。

先程聞いた声によく似合う、少しふっくらとした身体。

黒く、長い髪を一つにまとめ、片側に垂らしている。

その人は、洸が以前見た浩太の母親そのままであった。

「ごめんなさいね、白埼君。わざわざ来てもらっちゃって。」

ゆっくりとした足取りで洸の前までやってくると、彼女はほほ笑んだ。

高校生を息子に持つ女性としては、大分若く見える。

「いえ、大丈夫です。それより、浩太がどうしたんですか？」
洸の言葉に、彼女は困ったような表情を見せた。
ちらりと洸を見て、それからしばらく逡巡した後、意を決したように口を開いた。
「…実は、今朝あの子と喧嘩しちゃってね――。」
そういうと、彼女は洸に、今朝の出来事を話してくれた。
浩太はやはり、図書館で調査を終えた後も一人茶織の行方を探していたようだ。
学校に行ったっきり、浩太は夜遅くまで家には帰ってこなかった。
場合によっては、深夜になっても家に帰らないこともあったため、両親がともに心配していたらしい。
とはいっても、家事や仕事に忙しい２人は深夜まで彼を待っているわけにもいかない。
浩太は起きるのが遅く、起きて１０分もせずに家を飛び出すことが多かった。
そんな状態ではまともに話すこともできなかったそうだ。
だから彼女は、今日の朝、学校に行こうとする彼を無理やり止め、話をした。
始めは、彼も大人しく話を聞いていたらしい。
ただある時、彼は急に怒りだしてしまった。
彼女の制止も聞かずに、彼はそのまま家を飛び出していってしまったのだそうだ。

「――私も、わけがわからなくて。とにかく、あの子は学校に行った、って考えていたのだけれど…。」

そう言うと、彼女は洸を見た。

「白埼君が来たってことは、あの子、学校には行ってなかったのね…。」

「…はい。」

彼女の言葉に洸は頷く。

この時、洸は少し違和感を覚えていた。

浩太のことを洸に語るこの女性。

その雰囲気が、どうにもおかしく感じた。

幼馴染というくらいだから、無論彼女も茶織の家との繋がりはあるはず。

というより、浩太自身が言っていたではないか。

茶織の親と浩太の親が知り合い同士だと。

ならば、彼女は知っているはずだ。

茶織咲に起きた出来事も、それによって浩太が負った傷のことも。

「全く、学校もサボって、何してるのかしらあの子は。」

だというのに、浩太がいなくなったことを話すこの女性はまるで息子が反抗期になった、とでも話しているかのような調子ではないか。

洸に気を使っているとも考えることはできた。
だが、それにしても彼女の仕草はあまりに自然だった。

だからなのか。

「毎日のように夜遊びして。帰ってきたらしっかり叱ってやらなきゃ…。」

「……え？」

洸は彼女が何を言ったのか、一瞬、理解することができなかった。

「今、何て言いました…？」
「え？何って？」

驚愕に顔が引きつる。
見開いた目で、洸は彼女を見つめた。
彼女は、本当に何を聞かれたのか分からないように曖昧な笑みを浮かべている。

「浩太が…あいつがなんで1日中外にいるのか！！知ってるでしょう！？」

思わず叫んでしまう。

「え？何？どうしてそんなに怒ってるの…？」
「いいから！！答えてください！！」
息子の友達に急に怒鳴られて、彼女は怯え始める。
その反応があまりにも通常で、洸の不安はますます広がっていく。
（まさか…まさか…！！）
洸から少し離れるようにして、彼女は呟いた。
「…何してるかなんて、知らないわ。どうせ、どっかで遊んでるんでしょう…？」
それが決定的だった。
その瞬間、洸は全身の力が抜けたように項垂れた。
「白埼君？」
「……。」
洸の急激な変化に彼女はますます混乱しているようだった。
だが、今の洸に彼女を気遣う気持ちは起こらなかった。
「そうですか、ありがとうございます…。」
全身を脱力感が包んでいる。
そのまま立ち去ろうとして、不意に洸は振り返った。
「あ、あの。茶織咲って…。」
「…？」
「いや、何でもありません。急に押しかけて、すいませんでした…。

」

そう言うと、洸は再び駆けだした。

少しでも、その場所に居たくはなかった。

行く先も決めないまま、洸は町の中へと消えていった。

＊＊＊

「なんだったのかしら、急に…。」

一人残された浩太の母親は、洸の走って行った方を見て、呟く。

「…さおり、さき…？」

その脳裏に、先ほど彼が残していった言葉が浮かぶ。

「…誰、それ。」

そう呟くと、彼女は家の中へと引き返してしまった。

第十二話

洸は、ようやく今何が起きているのかを理解し始めていた。

樹山の神隠し。
十数人に及ぶ集団失踪だというのに、話にも聞いたことがなかったという不思議な事件。

そりゃあ、話に聞かないはずである。
失踪者の周囲が、その人物への記憶を失っているのだから。

失踪した人物がいたとしても、その人が存在しなければ事件にはならない。
いない人間を探す者なんていない。

だが、記憶からは消えたとしても、その人物がいたという証拠は残る。
それに気がついたとき、初めて人がいなくなっていたことに気がつく。
その結果が、謎の連続失踪であり、神隠しなのだろう。

もちろん違和感はまだ残っている。
誰も知らない人間が消えるということがどういうことなのか、洸にはわからないし、結局はその不気味な失踪自体の話も聞いたことがない。

記憶がなくなるなんて現象も、出来れば信じたくはなかった。
だがこれで、茶織咲の両親や警察の不可解な行動の説明がつくことになる。
両親は失踪した娘のことを忘れ、警察も存在しない人間をまともに探すことだってない。

日常はそのまま続いていくのだ。
ただ、一人の人間が消えたまま。

おそらく、浩太はこのことに今朝気がついたのだろう。
彼の母親の言動から、茶織咲が既に忘れられてしまったことを、知ったのだろう。

そして、思い至ってしまったのだ。
自分が『まだ』なだけであることに。

（…辛いよな）

大切だった人が消えて、その上記憶、思い出まで奪われてしまう。
自分の中身が丸ごとくり貫かれてしまうような、そんな感覚。

（俺のとは少し違うけど、よくわかるよ、その気持ち）

『その時』の気持ちを思い出して、洸は俯く。
身体の中を、ぐちゃぐちゃにかき回してやりたくなるような衝動が駆け巡る。
腕を、足を、頭を、振りまわしたくて。

でもそれを無理やり押さえこんで、洸は立ち止まる。
「…はっ、……はっ、…はぁっ…！！！！」
荒れた息。
弾む身体。
頭の中は真夏のようで、心の中は凍りつく。
もう自分が何を考えているのか、洸はわからなくなっていた。
（…落ちつけ）
大きく息をついて、気持ちを落ち着かせる。
今は、自分のことで困惑しているときではない。
そう自分を叱咤して、洸は顔を上げた。

ともかく、これで浩太が学校に来なくなった原因はわかった。
後は――。
「…探さないとな。」
少なくとも今朝までは、浩太は存在していた。
なら、まだ生きているはずだ。
茶織にしろ囚人にしろ、どちらも夜に消失は起きている。
今はまだ昼間。
経験的にいえば、まだ消えることはないはずだ。

それに、例え消えていないとしても心配なことはある。

（いや、まさかな…）

浩太に限ってそれはないだろう。
そう信じたかった。

「うし、行くか。」

洸は今、浩太の家から東に走ったところにいる。
中央地区と西地区の境目付近だろう。

学校にも家にもいなかった。
そうなると、図書館だろうか。

などと、洸が考えていたとき。

「すいません。」
「え…？」

不意に、声が聞こえてきた。
若い男の声で、すぐ真後ろから。

周りに人はいない。
一瞬して、自分に声を掛けたのだと気付いた洸が振り向いた。

その途端、洸は固まった。

「……。」

洸に声をかけてきた人物。
それは腰まで届くかという鮮やかな金の髪を持つ、真白の肌を持つ男だった。
緑色の瞳に、透き通る美貌。
その姿は、物語の中から現れた様な、そんなことを思わせた。

「あの。」

どうやら呆けていたらしい。
少し困ったような顔で、その男性は尋ねてきた。

「あ、はい。なんですか？」

気を取り直して、その男性に向き直る。
長袖のシャツにダウンを羽織り、ジーンズを履いている。
なんてことはない、当たり前の格好。

（考えすぎだな…）
頭を振って、洸は姿勢を正した。

外国人だろうか。
だが、それにしてはあまりにも流暢な日本語。
声を掛けられた時、洸はそれが外国人のものだとは思いもしなかった。

しかし、何の用だろう。
樹山町には外国人は殆ど住んでいないし、わざわざ見に来るようなものもないはずなのだが。
そう思っていると、彼が口を開いた。

「緑川病院は、どこにありますか？」
やはり一切の淀みなく、彼は言った。
どうやら道に迷ったらしい。
幸運にも、洸はその病院をよく知っていた。
緑川病院は、洸たちの母親である恵那が入院している場所なのだ。
「ああ、それなら――。」
緑川病院は、北地区の南、ちょうど中央地区との境付近にある。
町の中心を走る道。
それを北上していけば、病院に辿りつける。
「ああなるほど。そう行けばよかったのですね。」
説明すると、彼は満面の笑みを浮かべて、礼を言った。
「ありがとうございます。」
そう言って、彼は右手を差し出してきた。
外国の人はそういう挨拶をするのだったか、と洸は慌ててその手を握り返した。
その瞬間。
「――――？」
その時、洸は足元からぐらつくような感覚を覚えた。

（何だ…？）

体の内側が膨れるような浮遊感。

視界が揺らぎ、自分が今立っているのかがわからなくなる。

感覚だけが傾き、それに追従するように身体が傾くのを感じた。

（倒れる…！！）

そう思い、洸は体を支えようと腕を動かそうとした。

だが――。

「あれ…？」

その瞬間には、感覚は元に戻っていた。

姿勢も先ほどと変わらない。

体は傾いていないし、足元もそのままだ。

「？どうしました？」

「あ、いえ、何でもないです。」

（今のは…？）

呆然としたまま、洸は周囲を眺めた。

何も変わってはいない。

外国人の彼は、うれしそうに洸の手を何度も振ると、手を離した。

「本当にありがとうございます。おかげで、助かりました。」

よほど迷っていたのだろう。
そう思えるほど、彼は喜んでくれた。
「あははは…。」
それほど喜ばれると、洸も悪い気はしなかった。
何より、今のやり取りのおかげで大分落ち着くことも出来た。
ともかく、まずは図書館に行ってみよう。
そこにいなかったら、それから考えればいい。
洸はそう思った。

「――よい日々を。」
「――――！？」
ふと、男の声が聞こえた。
まるで耳元で囁かれた声に、洸は飛び跳ねた。
驚いて辺りを見回す。
けれど、そこにもう彼の姿はなかった。
「……。」
不思議な人だ。
外国人とは、皆ああいうものなのだろうか。
ぼんやりとそんなことを考えながら、洸は図書館へと足を向けた。

第十三話

学校、自宅、図書館。
そのどこを探しても、浩太は見つからなかった。
そこにいた人たちに聞いてみたが、何の手がかりもなく、相変わらず携帯電話にも何の反応もない。
浩太の行方は、分からなくなっていた。

それでも、洸はがむしゃらに駆けた。
まだ、洸は彼のことを忘れてはいない。
洸が今なぜ走っているのかを覚えている限り、この行為に意味はあるのだ。

人の存在は、こうも弱いものなのか。
道を進みながら、洸は思った。

見ていない、会っていない人物が、今存在しているのかどうか。
大抵の人は、よっぽどの期間でも離れていない限り、人は存在している、生きていると答えるだろう。

だが、たった一つ神隠しという現象が追加されるだけで、その人物がいるのかどうかはわからなくなってしまう。

例え今彼からメールが来たとしても、その次の瞬間には存在するか

がわからない。
たった今目の前に人がいても、消えてしまえば、なぜ自分はここにいるのかと首を傾げることになる。
浩太は今いるのかいないのか。
そんなことでさえ、洸には分らないのだ。

（いや…まだだ）

直ぐに悪い方へと流れる思考を、洸は頭を振って振り払う。
後一つだけ、洸には心当たりがあった。
浩太がぼんやりと考え事をする時に向かう場所。

（もう、あそこしかない…）

心にあるのは不安だけ。
それでも、洸はその場所へと足を向けた。

＊＊＊

中央地区南部。
図書館から少し東に進んだ先に、中央公園という場所がある。
そこは、町が住人の交流や、憩いの場としての機能を持たせるために作られた、いわゆる自然公園である。
樹山の自然を再現したという景観だけでなく、野球ができるくらいの広場に、公園の周囲には遊歩道が巡らされている。

春には花見客が集まるほど桜の木が並び、夏には緑豊かな自然が生い茂る。
それでいて、利用客は多すぎず少なすぎず、本物の自然の中に迷い込んだような、不思議な静けさを保っている。
ゆったりとした時間を過ごすには、とても相応しい場所といえるだろう。
風景のよさは、絵に残すのにも十分といえる、

だからなのだろうか、浩太はよく、この公園に来ていた。

公園の奥、周囲より少し盛り上がった場所には、骨組だけの屋根と、ベンチがいくつか置かれている。
そこからの眺めはなかなかのもので、広場や林が一望できる。
洸にとっても、公園の中ではお気に入りの場所であった。

だから、この公園のことを思い浮かべた時、洸はまずここに足を向けていた。
そして――。

「…よう。」
「…ああ。」

浩太は、そこにいた。
ベンチに腰かけて、彼はぼんやりと向こうを見ている。
その横顔からは、何も感じられない。

しばらく待ってみたが、それ以上の反応はなかった。
仕方なく、彼の横に洸も腰を下ろした。

「……。」

「……。」

無言のまま、２人は公園を眺める。

吹き抜ける風に木々はざわめき、子供たちは呑気に遊びまわっている。

２人の心境とは対照的に、公園の景色は、穏やかそのものだった。

「……学校、まだ終わってないはずだよな。」

浩太が口を開いた。

彼の声は、意外にも落ち着いていた。

「ああ。」

「サボったのか。」

「ああ。」

「そうか。」

「……。」

途切れ途切れの、言葉の応酬。

これだけを見れば、浩太は大丈夫そうには見える。

だが――。

「…昨日、どうだった。」

「昔の神隠しについて教えてもらったよ。今のとは、まるで別物だった。」

「そうか。」

そう言って、また浩太は口を閉ざす。

「……。」

（…言うべきなのか？）

浩太を見つけられて、良かったとは思う。
だが今の彼は、色んなものをその内に溜めこんでしまっている様に見える。

それはそうだろう。
辛くないはずがないんだ。

なのに、彼の横顔はその様子を微塵も感じさせない。

（…このままじゃ、駄目だよな）

このまま放っておいたら、浩太は耐えきれず、破裂してしまうかもしれない。
そう思い、洸は意を決して、口を開いた。

「…昨日、予想以上に早く終わってな。お前を手伝おうと、図書館に行った。」
「……。」
「そしたら、お前はいなかった。」

浩太の表情が、ぴくりと動いた。
慎重にそれを見つめながら、洸は言葉を続ける。

「今日は、学校にも来なかった。…正直、お前が消えちまったんじ

ゃないかって、思った。」
「……。」
「探すのはいい。けど、心配させるようなことするんじゃねえよ。」
「…消えた方が、よかったかもな…。」
不意に、浩太は言った。
その表情には、かすかな笑みが浮かんでいた。
「そしたら、あいつと同じ所に行けたかも知れない。」
「……。」
浩太が、洸を見た。
その目は、揺れていた。
「もう、知ってるんだろ…？」
「…ああ。」
神隠しの副作用。
消えた者の記憶は、消去されてしまうということ。
浩太が気づき、洸も先程、それに気がついた。
「おかしいもんだよな。神隠しなんてものが、実際にあるなんてさ。」
「……。」
「これじゃあ、まるで漫画の世界じゃないか。」
「…浩太…。」
浩太の顔に笑みが浮かぶ。

「…ほんと、漫画の世界だったらどんなに良かったか。」

その時、洸は、彼の声が震えていることに気がついた。
震えはどんどんと大きくなって、気がつけば、彼の身体も震えていった。

「…びっくりしたよ。母親に真顔で、茶織咲って誰だなんて言われた時は。あんなに娘みたいに可愛がってたのにさ。」

驚いて。
怒って。
飛び出して。

「少ししたらさ、あ、おれもなのかって気がついた。もう少ししたら、おれもあいつのこと、忘れちまうんだなって。」

言葉の端はしに、嗚咽が混じっていく。

「…あいつ、幼馴染で、いつも一緒で。俺の絵が好きだって言ってくれて。…たまに、俺のまねして絵を描くんだ。でも、あいつは絵がへたくそでさ。仕方ないから今度、俺が絵を描きに行く時、連れて行って教えてやる約束してたんだ。」

それでも、顔には笑顔が浮かんでいる。

「あいつ、喜んでたよ。楽しそうに笑ってた。」

止まらない言葉。
震える身体。

溢れていく涙に、思い出。
それは、楽しいものだったのだろう。
何より大切なものだったのだろう。
だが、それもあと僅かだけ。
その全ては、もう直ぐ消えてしまうのだ。
「でも…消えた。」
不意に、言葉が止まった。
その時は、周囲の音がやけに耳に入ってきた。
風にざわめく木々。
楽しそうに走り回る子供の声。
いろいろな音が、耳に入り込んでくる。
でも、その全てが、なんだかフィルタを通したみたいに厚ぼったくて。
全てが、別世界のように感じられた。
画面の向こうにある世界。
音は聞こえる。
映像は見れる。
でも、そこに触れることはできなくて。
こちらには、何もない。
取り残されたのは、２人だけ。

ただ、眺めることしかできないのだ。
電源を消される、その時まで。

「…嫌だなぁ。」
「……。」

嗚咽にまみれながら、言葉が漏れる。

「おれ、あいつのこと、忘れたくないなぁ……っ！！」

自分の膝に突っ伏して、彼はただ叫んだ。
自身のその言葉を引き金にするように、浩太は泣いた。

「っ…あああぁあああああ！！！！！！」

呻いて、喚いて、ただ、ひたすらに泣いた。
自分がどこにいるのか。
そして洸が隣にいることも、忘れて。

「……。」

そんな人の姿を、洸は初めて見た。

これがいつもは自分を引っ張り、連れまわしているはずの友人の姿なのだろうか。

なんて弱く、なんて脆い姿。
触れれば崩れてしまうそうで。
このまま、消えていってしまいそうで。

それでも、洸はただ見ていることしかできなかった。

（…何だよ、これ）

これが、神隠し？
1年も前から、こんなことが続いていたというのだろうか。

だとしたら、狂っている。

（ふざけるなよ…）

こんな簡単に、人の想いは消えていいものじゃない。
神隠しとか、そんな言葉で覆い隠していいものじゃないはずだ。

だというのに、現にそれは起こっている。
もうじき、洸も浩太も、忘れてしまうのだ。

あの悲しみも、この怒りも、全て。

（そんなこと、絶対にさせない…！！）

そう思った時、洸は立ち上がっていた。

「探そう。」
「え…？」

洸の言葉に、浩太の顔が上がる。
涙にまみれたその表情は、まるで子供のようで。
守らなきゃいけないと、そう思えた。

「探しに行こう、浩太。」
「でも…。」
「ここで泣いてたって、彼女は帰ってこない。そうだろ？なら、最後まで足掻かないと。」
「……。」

だが、浩太は再び俯いてしまう。
突っ伏して、また、身体を震わせる。

「……。」
「浩太…！！」

肩を掴み、身体を揺さぶる。
浩太が諦めたら、駄目になる。
そんな気がした。

「お前のほかに、誰が彼女をみつけてやれるんだ！！」

叫んだ洸の言葉に、不意に、彼の震えが止まった。
ゆっくりと顔をあげると、彼は洸を見た。

その表情に、生気が戻っていっていた。
ゆっくりとだが、笑みが浮かんできていた。

「…ああ。そうだな。そうだよな…！！」

自身の頬を張ると、浩太は立ち上がった。
顔を拭って、洸を見た。

「目、覚めたよ。ありがとな。」

「ああ。」

見つけよう、必ず。
洸は、小さく呟いた。

「うし、行くか！！」
「おう！！」

叫んで、２人は町へと駆けだした。

（…忘れさせない）

駆けながら、洸は心の中で叫んだ。

（絶対に忘れさせないからな、浩太！！）

自身の中に浮かんだ、ある決心とともに。

第十四話

それから、２人は町中を巡り続けた。

中央から西へ。

北へと移って、北西へと回る。

２手に分かれては合流し、東と中央を巡る。

北、北西、東、中央、西、南。

６つの地区の全てを洸たちは回れるだけまわった。

洸も浩太も、必死になって町を駆けた。

このまま探したって、彼女が見つかるとは思えない。

でも、まだ記憶は失っていない。

なら、最後まで足掻こうじゃないか。

せめて忘れるその時まで。

ただ――。

（まだだ…）

洸は、まだ諦めてはいなかった。
一つ、洸の中で浮かんでいた可能性。

自分の中でも、あり得ないと捨てていた選択肢。
それを実行する決意を、洸は浩太から貰った。

＊＊＊

そして、夜。

洸は浩太と別れ、東地区を回っていた。

東地区は、工場やら倉庫が集中して建っている地区である。
古くからある工房に、最近は大きな工場もいくつかできているらしい。

灰色の建造物が犇めいている。
高校生である洸には全く縁のない場所。
普段は全く近づかない場所だ。

地区の奥には、廃墟となっている工場もある。
人を隠すには、絶好の場所ともいえるだろう。

だが、いくらなんでも工場の中に押し入るわけにもいかない。

周囲を念入りに調べた後、洸は地区が俯瞰できる場所へと戻った。

時刻は、２３時を過ぎたところ。

流石にこの時間では、工場も暗い。

秋は日の入りも早く、既に夜も深まった頃。

星明かりの下、浮かびあがる工場の影は、不思議な威圧感を放っている。

「……。」

洸は、ぼんやりとそれを眺めている。

（そろそろ、かな…）

時間を確かめようとして開いた携帯電話。

まるでそのタイミングを狙ったように、それが鳴りだした。

「うわっ…！？」

静かな夜気に、突然鳴った音。

驚いて、思わず携帯を落としてしまった。

慌てて拾い、開く。

画面には、大きく添島浩太と表示されていた。

「…浩太？」

洸は通話ボタンを押すと、電話を耳に当てた。
「――もしもし。」
『もしもし、洸か。』
「ああ、どうした？」
スピーカーから、浩太の声が聞こえてくる。
彼は今、西地区にいるはずだ。
彼はすでに、大分落ち着いているようだった。
もちろん、諦めてはいないだろう。
言葉の端はしから伝わる熱意は、まだ衰えてはいなかった。
『そろそろ日付も変わる。洸、お前はもう帰れ。』
不意に、彼はそう言った。
「え？でも――。」
『あんまり美音さんを心配させるな。…大丈夫。俺は平気だ。』
電話の向こうで、浩太が笑った。
その声は、いつもと変わらないように聞こえた。
『また明日、よろしくな。』
「…わかった。無理はすんなよ。」
息をついて、洸は言った。
まあ、洸としてもその方が都合が良かった。

『おう。』

そう言って、浩太は電話を切った。

暗くなった画面を、洸は眺めた。

先程の友人の姿を、洸はそこに映し出していた。

まだ心配ではある。

だが、あの浩太なら大丈夫だろう。

そう思えた。

「……さて。」

電話を閉じて、洸は呟いた。

そろそろ大丈夫だろう。

そう思い、洸はある場所へと足を向けた。

＊＊＊

「…ここか。」

呟いて、洸はその場所に辿り着いた。

真っ暗な場所。
周囲の家々は明りを消し、ある筈の街灯は沈黙したまま。
星明かりに照らされ、ようやく前が見えるほどのその場所。
洸はそこに屈むと、地面に触れた。
「…確かに、抉れてる。」
半球状に抉れ、消失した道路。
浩太の話通りであった。

洸が向かった場所。
そこは、茶織咲が消えたという道だった。
（ここで、彼女は消えたのか…）
奇妙にさらさらとした消失面。
一切の歪みなく半球に抉られたそれは、明らかに人間業では有り得なかった。
だが、今更こんな所を調べても意味はないだろう。
警察や浩太が、とっくに調べているだろうから。
そんな場所に、何故洸が来たのか。

それは、洸の中に浮かんだある考えを実行するため。

（…うまく、いくだろうか）

神隠しになった人物を探す方法は、ただ一つ。

自分も、神隠しにあうしかない。

そうすれば、少なくとも茶織咲の行方が分かるはずだ。

だが、そんな簡単に神隠しにあうわけはない。

１０数人が消えていると言っても、その条件でさえ分からないのだ。

望んだからと言って、神隠しにあうとは考えにくい。

だが――。

天香の言っていた言葉を思い出す。

彼女は、記憶のことについては何も言っていなかった。

知らなかったのだろうか。

否、それはないだろう。

彼女のことだ。

それくらい当然突き止めていたはずだ。

それを、洸には黙っていた。

もし洸がそれを知ったら、どうなるだろうか。

当然、調べに飛び出すにきまってる。

それを彼女は止めたかった…？
洸がこのことに足を突っ込むことを？

そして、あの言葉。

『あんた、最近変な声、聞いたりしない――？』

声。
そうだ、声だ。

洸はそれを、何度か聞いている。
どれも夢のことだと気にしないでいたのだが。
彼女は、そのことを言っていたのではないか。

それは、つまり。
彼女は恐れていたのではないか。
洸が、神隠しにあうことを。

惹かれていたのは、浩太ではなく、洸。
天香は、それを感じ取っていたのではないか。

「……。」

天香は、やはり何かを知っている。
だが、いくら聞いても彼女は答えてくれないだろう。

なら、確かめるしかない。
自分が神隠しにあうのかどうかを。

そう思い、洸はこの場所にやってきた。
ここに来れば、何か起こるのではないか。
そう期待して。

だが――。

「……。」

「……。」

「……。」

（…あれ？）

いくら待っても、何も起きなかった。

肝心の声も、何も聞こえない。

（…やっぱり、気のせいだったのか？）

元々、半信半疑ではあった。
だだ、もう可能性としてはそれしか残っていなかったのだ。

その可能性が、間違いっていた。
それは、洸にできることがなくなったことを示していた。

このまま、記憶が無くなるのを待つしかないのだろうか。
それは、避けたい事態。
しかし、最後の可能性がなくなってしまった今、洸にはどうすることもできなかった。

（どうしよう…）
このまま待っているべきだろうか。
それとも、今日はもう諦めて帰るべきなのか。
洸は、悩んだ。
その時、ふっと足もとが揺らいだ。
「おっと…。」
流石に眠気が強まってきていた。
これ以上無理に調査を続けても、無駄足になるだけだろう。
（仕方ない、また明日にするか…）
そう思い、洸は家路につくことにした。

――この時。
樹山町は０：００を過ぎ、新たな１日へと日付を変えた。

洸が茶織咲の話を聞いてから、ちょうど3日。

洸の運命の歯車が、音をたてて回り始めたのだった。

第十五話

夜に沈んだ町は、とても静かであった。

「……。」

その中を、洸はゆっくりと歩いていく。
カラカラと鳴る自転車を引き連れて。

時折吹き抜ける風の音以外、音を出すのは洸一人だけ。
足音、吐息の音まで遙か遠くに響いているよう。

遙か遠く。
その言葉に、洸はふと空を見た。

今日は、星がよく見える。

樹山は、都会に比べて地上の明かりが少ない。
最近の開発で中央地区を中心に増えてきてはいるが、西や北地区には、まだ大した変化はない。

それに、張りつめて透き通った夜気。

これで星が見えないはずはない。

透き通った夜空に、洸は馴染みの星を見つける。
夜空に浮かぶ、４つの星。
遙か昔、人はそこに天駆ける馬を見た。
今の洸に、その姿は見えないけれど。
でも、それならば。
その翼ならば、届くのかもしれない。
神の向こう側へ――。

「なんてな。」

一人呟いて、洸は笑った。
星を見ていると、どうしても不思議な事を考えてしまう。

ただ、その不思議の真っ只中にいる洸には、ふさわしくも思えた。

（失踪、か）

今思えば、懐かしい響き。
不思議な縁だ。
まさか、２度もこんな出来事に遭遇するとは思ってもいなかった。

「しかし…寒いな。」

ふと吹いた風に、洸は寒気を覚えた。

冷え切った夜風は骨の奥まで冷やしてくる。
それに、今日はやけに風が強く吹く。

日が沈んでからは、特に強まっていった気がする。

一度、煽られて自転車ごと転倒しそうになった程だ。
このままいけば、身体が凍えてしまう。
さっさと帰ろう。
そう思い、洸は自転車を漕ぎだした。

＊＊＊

日を跨いだ町は暗く、ほとんど先が見えない状態だ。
自転車のライトで何となくの方向はわかるが、それでも速度は遅くなってしまう。

「…お。」

目の前に、街灯が見えてきた。
ようやく明るい通りに出れたのだろう。
これで安心できる。
そう思ったのだが。

「あれ…？」

街灯は不自然に点滅し、辺りを照らしては消えている。
壊れかかっているのだろうか。
見れば、道の先にも街灯らしき灯りは見当たらなかった。

「…歩くか。」

溜息をついて、呟いた。
このまま走っていたら、転んでしまう。
そう考えて、洸は自転車を止めた。

その瞬間。

「――っ！？」

不意に、その点滅が急激に繰り返された。
それはフラッシュのように、洸の目を一瞬くらませた。

――その時。

風が吹きぬけた。

「―！！？うわっ…！？」

叩きつけられるような、豪風。
全身に強い衝撃が走り、自転車の前輪が浮き上がる。

「おわっ…！！？」

ぞくりとする浮遊感。
身体が、持ち上がる。
ひっくり返る――！！

咄嗟に自転車を降りようとする。
だが。

再び風が吹く。

「――！！？」

浮き上がった身体に、叩きつけられる風。
鈍器にでも殴られたように、洸は後方へと吹き飛んだ。

転がり、倒れる。
それでも、風は止まない。

（何だ、これは…！？）

叫びは、しかしどこにも響かない。
目もあけられないの風の中、洸は何とか這いずりまわる。
確か、近くに電柱があったはず。
手探りでそれを見つけだすと、腕を回してしがみついた。

壁のような風が吹き抜ける。

風が、洸を引きはがそうとしているかのように吹きつける。
それでもしがみついて、洸は耐えた。

だが、風は一向に止まない。

これは、何なのだ。
洸の脳内で次々に声が上がる。
こんな強い風が、普通に起こるはずはない。

あるとしたら、台風だろうか。
だが、洸は先程まで広がっていた星空を知っている。
そこに、雲は一筋でさえなかった。

だとしたら、何だというのか。
洸の疑問に答えてくれるものは、何もいない。

ふと、少しだけ風が緩んだのを感じた。

（よし、これなら…）

顔に吹き付ける圧力が緩み、洸は目を開いた。
そして――。

「……は？」

絶句。

ありえない。
当然の回答が頭に浮かぶ。
だが、ならこれはなんだ。

洸の目が、もう一度周囲を捉えた。
洸が今いる路地は、両サイドを住宅に囲まれている。
そこには庭があるのだろう。
いくつかの木がそびえているのが見える。
洸が見ているのはその木々。

それらは、この風の中、一切微動だにしていなかった。

風はまだ、吹き続けている。
洸も力を抜けば今にも吹き飛ばされてしまうだろう。
なのに、木々は揺れても、さざめいてもいない。

そして、洸は気付く。
思えば、聞こえるはずの風の音、空気が通り部ける音が聞こえていない。
こんなに、風が吹いているのに――？

「なんだ、これ…？」

呟いた声の大きさに、洸は身体を震わす。
それまで必死につかんでいた力を、その時、洸は緩めてしまった。

その瞬間を待っていたように、突風が吹き荒れた。

「……っ！！？」
（しまっ――！？）

咄嗟に腕の力を強めても、もう遅い。
一瞬の浮遊感の後、しがみついていた筈の電柱は、遥か彼方の景色

となった。

「うあああああああ！！？」

凄まじいスピードで、洸は天高く吹き飛ばされる。
ジェットコースターにでも乗っているように、一瞬に。

先程の場所は最早点となり、夜の街が広がっている。

そして、不意に上昇は止まった。

昇り、止まった。
なら、次に来るものは決まってる。

襲ってくるだろう風圧と浮遊感へ、洸はぎゅっと身体を縮込めた。
だが――。

「…あれ？」

何も起きない。

ゆっくりと、洸は目をあけた。
そこには、先ほどと変わらぬ光景。
眼下に広がる町並み。

ということは。

「俺、浮いてる…？」

夢でも見ているのだろうか。
そうであって欲しい、と洸は思った。
樹山の遙か上空に浮かんでいるなどという状況を、洸は認めたくはなかった。

『――――ぃ……。』
「…ん？」
何か、声が聞こえる。
『――――ぃ……。』
まただ。
今までと全く同じ声。
思い返せば、ここ数日同じようなことが連続して起こっていた。
不思議な夢。
謎の声。
声とともに、吹く風。
（…まさか）
地表から、風が吹き付ける。
それとともに、聞きなれた声が響く。
『――こっちへ…。』
自らを呼ぶ声。

洸は、この声をよく知っていた。

（まさか、これが…？）

これが、神隠しなのだろうか。
洸がイメージしていたものとは、随分違う。
だが、他には考えられなかった。

洸は自らの読み通り、呼ばれたのだ。
神隠しに。

『――こっちへ…。』

ふと、町から何かが噴き上がった。
絵具で塗りつぶしたような黒色のそれは、瞬く間に町中に充ち溢れ、
空をも覆い尽くした。

世界が闇に染まる。
その中を、洸は浮かんでる。

それは、いつか見た夢での景色。
あれは、このことを指していたのだろうか。

（この先に、茶織が…）

この向こうに、何が待っているかはわからない。
もしかしたら何もなく、ただ冷たい無が待っているだけかもしれない。

だが、それでもいい。

洸はそう決めたのだ。

（いいぜ…）

ふと、身体が闇の奥の方へと引っ張られる。
そっちに来い、ということなのだろう。

「それだけ呼ぶんなら――行ってやるよ！！」

叫んで、洸は流れていく力に、身を任せた。

押し寄せる闇。
高鳴る胸。
身体の中で脈動する血液が、冷え切っていた洸の身体を熱くする。

大丈夫。
必ず、茶織咲を連れて帰る。
今なお彼女を探しているだろう友に、洸は誓った。

「――――。」

ふと、声が聞こえる。
今更、何だろう。

身体を押す力が増している中、洸は耳を澄ませた。

「こっちへ…。」

先程と変わらぬ言葉。

だが、何かが違う。

そう、洸が感じた、その時――。

「来ちゃ、だめ…！！」

「――え？」

驚いたのも一瞬。

直後、何かに引っ張られるような力を感じると、洸は闇に包まれた町へと、堕ちていった。

第十六話

「――――――――っ！！？」

闇の中を、一気に堕ちていく。
先ほどの風など、比ではない。
速度はどんどん増していき、このまま燃え尽きてしまうのではないかと思ってしまう。

幾重もの闇を貫いて、洸はその先に飛び出した。

途端に視界が開ける。

そこに広がっているのは、先ほどと変わらない、町並みであった。

町の中心から広がる光。
それはクモの巣のように、町に張り巡らされていた。

（ん…？）

ふと、洸は気がつく。

おかしい。
洸は今、神隠しにあったのではなかったか。

（何で、町が見えるんだ…？）

そんな洸の疑問も一瞬。
どんどん地面は近づいていく。

落ちていく速度はどんどんと上がっていっている。
このままでは、死ぬだろう。
だが、どうすることもできない。
諦めかけていた洸の目に、幾つかの光の筋が見えた。

「……？」

あれは何だろうか。
そう思ったのもつかの間。
地面が、目の前まで迫っていた。

ぶつかる――。

そう思い、洸は身体をギュッと縮込ませた。

地鳴りのような音が響いた。
揺れる視界。
一瞬の衝撃の後、視界が灰色に染まった。

「……あれ？」
呟きが、身体に響く。
喋れる。
「……あれ？」
聞こえる。
動く。
触れる。
咄嗟に起き上がり、身体を調べる。
五体満足。異常なし。
不思議なことに、あれほどの高さから落ちたというのに、洸は傷ひとつ負っていない。
それどころか、何の痛みも感じていなかった。
「何にもなし、か。」
呟いて、周囲を見渡す。
視界を覆う灰色は、どうやら土煙のようだ。
一応、落下した事実はあるらしい。
土煙を抜け、辺りを見回す。
よく見れば、先ほど洸が吹き飛ばされていた場所だ。
もちろん、風は吹いていない。
そこは静かな、夜の町が広がっているばかりであった。

「……。」

何も変わっていない。
洸が立っている場所は、先ほど洸が吹き飛ばされたはずの場所そのままだった。

（どういうことだ？）

神隠しに合わなかったと言うのだろうか。
今のは、ただの夢だと。

突然の風に煽られて、洸は自転車から転げ落ちた。
頭を強く打った洸は、そのまま気絶し、今の夢を見た。

確かに、そう考えることもできるかもしれない。

だが、洸は今空の中にいて、そこから落ちてきたのだ。

土煙だって、まだ晴れていない。

あれが夢のはずはない。
あの声も、あの闇も、すべて実際に聞き、見たものだ。

もう一度、洸はゆっくりと辺りを見渡した。

「……。」

道、電柱、家、木――。
先ほどと変わらない風景。
その中に、洸は違和感を見つける。

「自転車がない…。」

そこには、あるはずの自転車がなかった。
洸が吹き飛ばされ、離れてしまってはいたが、位置的には見える場所にあったはずだ。
もしここが先程と変わらぬ樹山町ならば、見えるはず。

その自転車が見えない。
それが意味することは、つまり。

洸はもういるということだ。
神隠しの向こう側に。

ここに、茶織咲はいる。
変わらぬ景色に若干の疑問を残しつつも、洸はその予感を確かに抱いた。

そして、その予感は当たっているのだろう。
『その場所』は、洸の残った疑問に、しっかりと答えてくれた。

＊＊＊

（しかし――。）

洸は、先ほどのことを思い出す。
空から闇へと落ちる直前、聞こえてきた言葉。

『来ちゃ、だめ…！！』

散々呼んできたのは、そっちではないか。

思わず、悪態をついてしまう。

だが、あの時の声は、どうも今までとは違う気がした。

声を聞く度に感じていた懐かしさが、あの声には感じなかったのだ。

もしかしたら、あれだけは違う者の声だったのかもしれない。

でも、だとしたら何故。

そんなことを考えていた、その時。

「……？」

ふと、洸は物音を聞き取った。

規則的なリズムを刻むその音は、足音のように聞こえた。

「……。」

それは、後ろから近づいてくる。

音はどんどんと大きくなり、やがてすぐ近くまでやってきた。

神隠しの先に、人がいる。

きっと、それが浮かぶべき最初の疑問だろう。

だが、そんなことは洸の頭には欠片も存在しなかった。

静かに、洸は右足を後ろに下げていく。
殆ど無意識の行動。

腰が僅かに落ち、短く息を吐いていく。

足音はもうすぐそこにある。

鼓動が早まっていく。
身体が、汗を噴き出していく。

洸は、ただ恐怖していた。
やってくる足音に。

何を恐れることがある。
ただの足音じゃないか。
そう、頭の中で声が上がる。

だが、洸の動きは止まらない。
それもそのはず。

何故なら。
ずしゃり、と音を立てて歩く『何か』を、洸は知らなかったからだ。

ふと、洸は荒い息遣いを聞いた。
馬が出すようなその息遣いを、すぐ耳元で。

「――！！！？」

直後、洸は全速力で走り出した。

何故そんなことをしたのか、自分にも分らない。
ただ、身体が動いた。

しかし、すぐにそれが幸運だったことを知る。

（追ってきてる…！？）

すぐ後ろに、あの音が聞こえてくる。
速い。
このままでは、追いつかれてしまうだろう。

何が追ってきているのか。
何で、自分が狙われているのか。

もう思考もぐちゃぐちゃで、訳がわからない。

ただ逃げなければ。
その想いで一杯だった。

横道が見えては飛び込み、洸はなるべく細い道を選んで走った。
それでも、音は着いてくる。

「……っ！！」

逃げ切れない。

まだ体力には余裕はあった。
だが、もう心が持たなかった。
恐怖と好奇心に耐えきれなくなり、洸は背後を振り返った。
そして、再びの絶句。
「な…っ！！」
振り返った洸の目が、大きく見開かれる。
驚愕に目を見開く洸。
その先には、全長3メートルはあろうかという、真っ白な『人』がいた。

第十七話

どれくらい、走ったのだろう。

「はぁ…っ、はぁ……っ。」

洸はひざから崩れ落ち、道端の壁に背を預けた。

あれからずっと、洸はあの『人』から逃げ回っていた。

人間、意外と死ぬ気になれば何でもできるものである。

限界だと思っていた体で、洸は何とかあれを引き離すことに成功した。

（何なんだ、あれは！！）

暴走する思考を押さえつけ、洸は息を吐き出す。

真っ白な身体。

先ほどのあれは、人の形をしていた。

否、正確には少し違ってはいた。

トカゲを人型にしたような、そんな外見。

目はなく、のっぺらとした顔にあったのは、大きく割れた口だけ。

どう見ても人間ではない。

なら、あれは何なのだろう。

何故、洸を襲ってきたのだろう。

疑問はいくらでも湧きあがってくる。
だが、今はそんなのんびりしているわけにもいかない。

息を整え、立ち上がる。
ともかく、今は移動しなければ。
あれが、まだ近くにいるかもしれない。

周囲を見渡す。

見たところ、あの白い怪物はいないようだ。

体力も僅かに回復していた。
これなら、まだ少しは走れるだろう。

――ふと、声が聞こえる。

「……？」

立ち止まって、耳をすませる。
声は、町の南側から聞こえてきた。
あの時と同じ声。
だが、少し雰囲気が異なっていた。

『――――。』

何を言っているのかはわからない。
ただ、何を伝えたいのかは何となくわかった。

「来いってことか…？」

今までとは違って、洸は、声がどこから聞こえてくるのかを感じることができた。

今洸のいる西地区から、さらに南。

おそらくは、南地区の中央部、樹山駅の方角だろう。

そちらの方から、声は響いてきている。

声の方角へと、洸は視線を向けた。

「……。」

この状況だ。

何もないとは思えない。

だが、このままここにいるわけにもいかないし、どこかに隠れるわけにもいかなかった。

あの白い怪物から逃げ回っている間、洸は気づいたことがある。

それは、この町には『誰一人として人間がいない』ことだった。

家々には鍵がかかっておらず、中には誰もいなかった。

時折明りのついた家も見つけたことはあったが、そこも無人であった。

誰もいない町。

そして、あの怪物。

ここが洸の知る樹山町ではないことは、既に十分理解できていた。

だが、ならばなぜここがこんなにも樹山にそっくりなのか。
その理由は、わからない。
ただ一つわかること。
それは、こんな場所に茶織咲がいるかもしれないということだ。
彼女もまた、あの怪物に襲われているとしたら。
焦る気持ちを、洸は何とか抑えた。
聞こえてくる声。
もしこれがこの世界での生存者たちの声だとしたら。
そこに茶織がいる可能性を、洸は信じたかった。
「よし、行くか。」
ともかく、まずはその場所に辿り着かなければならない。
そう洸が思った、その直後。
轟音とともに、洸のすぐ後ろの壁が吹き飛んだ。
「んな…。」
驚き、硬直する洸。
そんな彼に向かって、立ち上る土煙を突き破り、白いものが飛び掛ってくる。
「…っ！！？」
咄嗟に身体を捻る。
だが、僅かに遅かった。

肩口にそれが衝突し、洸は反対側の壁へと吹き飛ばされた。
「が…っ！？」
背中を強い衝撃が襲う。
一瞬、白んだ視界。
その中で、蠢くものを洸は視認する。
（止まったら、死ぬ…！！）
咄嗟に、目的の方向へと駆け出す。
背後で破壊音が響くが、見向きもしない。
油断した。
頭を振り、視界を整えた洸は、心の中で舌打ちをする。
まさかコンクリートの壁をぶち抜いてやってくるとは。
それだけの力があることは、見た目から理解できるというのに。
洸の頭は、まだこれまでの常識から離れてくれなかった。
あんなものが存在し、それが襲いかかってくるという事実。
それを、まだ物語でも見ているような感覚でしか捉えられないのだ。
「くそ…。」
だが、ともかく、距離は稼いだ。
疲労し始めていた体に鞭打って、洸は目的の場所へと駆け出した。

＊＊＊

それから数分。
引き離しては休んでを繰り返しながら、洸は目的の駅へとたどり着いた。

南地区は、横に伸びたV字状に広がっている。
広げたといっても、どちらかといえば平坦に近いのだが。
樹山駅は、その中心部に位置しており、そこには東西南北すべての道が集っている。

白い怪物を引き離しながら進むには、ちょうどいい場所といえるだろう。
その中でも洸は比較的入り組んだ路地の近くで立ち止まると、息を整え、改めて耳を澄ました。

『――――。』

先ほどより、鮮明に聞こえる。
位置は、更に南。
洸の目が、駅の向こうに聳える、大きな建物を捉える。
昔から町にある、デパート。
声は、そこから聞こえてきていた。

「よし…！！」

軽く跳ねてから、洸は駆け出した。

デパートにいるだろう、この声の主。

その人に会えば、この場所の、神隠しのすべてがわかるだろう。
何故だか、そんな気がした。

第十八話

階段は、とても長く感じられた。

「はぁ…っ、はぁ……っ。」

既に息は上がっていたが、洸は駆け上った。
まだ油断はできない。
あの化け物なら、数階の高さは楽に越えられるかもしれない。
そう考えると、なるべく早く上りきってしまいたかった。

（急げ…）

振るえる足を引きずって。
洸は、上へと進んでいった。

＊＊＊

ようやく階段を昇り切った頃には、息も絶え絶え。
洸は肺が破裂するのでは、と思ったほどだ。

「……はぁ…っ、……はぁ……っ。」

よろめきながら、ドアの前にへたり込む。
ここならば、少しは休めるだろう。
落ち着き、息を整える。

デパートの中は、他の家屋と同様に、誰一人として見つからなかった。
薄暗い、無人のフロアが広がっているだけ。
だが、声はやはりここから聞こえてきていた。

そうなれば、後は一つだけ。
デパートの一番上のフロア――屋上だ。
そうして、洸は屋上へ通じるドアの前に辿りついたのだった。

『――――。』

「…ああ、今、行くって……。」

何とか力を入れて、立ち上がる。
振り返り、ドアに耳を当てる。
あの足音も、息遣いも聞こえない。
少なくとも、屋上にあの怪物がいるわけではなさそうだ。

安心して、洸はドアを開いた。
だが――。

ほんの隙間、ドアが開けた途端に、何かに弾かれたようにドアがひとりでに開かれた。
驚き呆然とする洸に、強い風が吹き抜けた。

「うわっ…！！」

がら空きの、疲れ切った身体に叩きつけられる圧力。
何とか踏みとどまる洸だが。

その表情は、硬直した。
一瞬、風のことさえ忘れるほどに。
その先には異常が存在していた。

（何だよ、これは！！）

開かぬ口で、洸は叫んだ。

洸の視界の先、十数メートル四方の空間の中心部に、小さな竜巻が起こっていた。
一体どのような原理なのか、それは風を巻き上げているのではなく、吐き出していた。

力を抜けば、一気に飛ばされてしまう。
それほどの風だ。

風は、洸を階下へと吹き飛ばそうとしている。
ドアノブにしがみつき、洸はその場にこらえた。

どうやら、ここに待っていたのは生存者などではないらしい。
目の前に広がる景色を見て、洸はため息をついた。

やはり、これは罠だったのだろうか。
否、そうとしか思えない。

あの怪物がいないのは不思議だが。
誰もいないのがその何よりの証明であった。

ふと、洸の手に、震えるほどの力が込められる。

「もう……いい加減にしろよ…。」
風に負けじと、洸は足を踏み出した。
「風とか声とか、もう、沢山だ…。」
一歩、また一歩と洸は竜巻に近づいていく。
そのすぐ手前、洸の胸の前のあたりに変化が起こった。
竜巻の起こっている、すぐ前。
幾重もの光がはしると、光の円が現れた。
それは、俗に魔方陣と呼ばれるものに、よく似ていた。
だが、洸はそれには気付かない。
「何が来るな、だ。呼んだのはそっちだろうが…。」
その周囲には無数の文字が現れて、消えていっている。
見たこともない文字。

ふと、風が凪いだ。
一気に抵抗のなくなった洸は、勢いあまって、竜巻へと倒れ込んだ。
「―っと!?」
その手が、魔法陣へと触れた。

瞬間、それが輝いた。

『Ｎｏ．６　ｅｎｔｒｙ』

洸の目の前に、文字が現れた。
今度は、はっきりと読み取ることができた。

「エントリー…？何だ一体――」

続けて、新たな文字が浮かび上がる。

『Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｓｅｖｅｎｔｈ』

瞬間、光が四方へと飛散した。
一瞬の間、視界が真っ白に染まった。
まるで空へ雷が落ちたように。

「――――！！？」

眩い光に目を伏せた洸。
その耳に、獣のような唸り声が響いた。
直後、背後のドアが吹き飛んだ。
ドアは破られるとそのまま、風に煽られて遥か下へと堕ちていった。

「…おいおい。」

振り返った洸の前に、あの白い人が現れる。
目などないのに、その顔は確実に洸に向けられている。
後ろは竜巻、左右は断崖。
もう、逃げ場などなかった。
それでも、ゆっくりと後ずさる洸。
だが、すぐに風に押し返される。
それを見て、『彼』の顎が、嬉しそうに開かれた。
「……。」
わずかに、足が震える。
汗が頬を伝い、地面へと落ちた。
彼の体が、動く。
視界から、白が消えた。
「――っ！？」
反応が遅れた。
まずい。
右に転がろうと動く。
だめだ、遅い。
自分の動きが、止まっているように思えた。
地面が遙かに遠い。
その隙間に、白は洸を喰らおうとその手を伸ばして――。

弾かれた。

「…え？」

呟き、洸は地面に落ちた。

咄嗟に起き上がり、洸はそれを見る。

洸の目の前に、別の竜巻が現れ、怪物を包み込んでいた。

竜巻は周囲の空気を残らず巻き上げ、天高くその穂先を突き刺している。

風が洸を守ったというのだろうか。

ふわり、と洸の背後から風が吹く。

『――無事ですか。』

その風に乗って、洸の耳に声が届いた。

少女のような、明るく、透き通った声。

『相手はウロ一体です。落ち着いていれば問題なく倒せます。』

後ろからだ。

そう思った時には、洸はもう振り向いていた。

あれ程吹き荒れていた竜巻は、もう跡形もなく消えていた。

視界には、町の夜景が一杯に広がっている。

先程空から見た町並みは、やはりどこか違和感がした。

ふと、洸の視線が一点にとまる。
洸のすぐ目の前。
先程竜巻が起きていた中心部にあたる場所に、何かがあったのだ。

『私を抜いてください、マスター。』

夜の町に溶け込むような漆黒。
それは、俗に日本刀と呼ばれているものであった。

第十九話

「…もう、わけわからん…。」

目の前の光景に、洸は何とかそれだけを呟いた。

周囲には吹き荒れる風。
背後には『ウロ』という怪物。
そして目の前には抜き身の日本刀。

巨人は今にも自分を殺そうとしているし、刀は自分を使って巨人を倒せと『言って』いる。

まるで漫画の世界だ。

神隠しされた向こうは誰もいない世界で。
剣を、武器をもってモンスターと戦え？

（ああ、もう…）

洸は、頭を抱えたい衝動に駆られた。

『何をしているのですか。』

そんな洸を余所に、刀は言葉を続ける。

『もう戦いは始まっています。残念ですが、呆けている時間はありません。』

機械のような声、冷たい口調。
『早く私を取ってください。今の私では空(ウロ)を抑えられるのにも限度があります。』
戦いとは何なのか。
そもそも、なぜ剣がしゃべっているのか。
聞きたいこと、考えてたいことは山のようにあった。
だが、そんなことを考えている暇はないらしい。
「――――！！！！！」
背後から、咆哮が響いた。
硬直する身体。
ゆっくりと、振り返る。
いつの間にか、風の壁が消えていた。
もう、怪物を邪魔するものはない。
怪物は、障害が消えたのを悟ると、洸へと照準を定めた。
『マスター。』
「……。」
刀が、洸を呼ぶ。
それほど危険な状況らしい。
それは、嫌というほど理解できた。

だが、洸の腕はそれをとることを躊躇っていた。
これを取ってしまったら、何かとんでもないことが起こるような、
そんな気がするのだ。

「……。」

とはいっても、そんなことをしている暇などないのだろうが。

『マスター！！』
「ああ、もう、わかったよ！！とりゃいいんだろ、とれば！！」

洸の左手が、刀をつかんだ。
ほんの少しの手ごたえで、刀が抜ける。
軽い。
そう思ったのも、一瞬。

握った左手を通じて、熱が洸の身体を駆け抜けた。

「――――っ！？」

熱い。
そう思った時には、熱は消えていた。

（何だ、今の…？）

そう思ったのも、束の間。

視界から、再び白が消えた。

「――――！！！！」

轟く咆哮。
風のような威圧感が全身を襲う。

迫りくる巨体。
あんなものに、一本の刀で立ち向かえるとは到底思えない。
だが、今度は逃げない。

（…ああ、もうどうでもいい…！！）

もうどうにでもなれ。
そんな思考が、洸の体を支配していた。

（これを…）

かちゃり、と刀が鳴る。
もう、これが何なのかは、関係がない。

（振り抜く――！！！！）

手に力を込め、洸は左腕を、振り抜いた。

空気の切れる音がする。

弧を描き、剣が振り上がる。
その剣先に巻かれるように、風が起こった。

ごお、と音が鳴る。
風の余波が、洸の真横を流れていった。

「……っ！！」

瞑りたくなる目を、洸は必死で開いた。
目を逸らしてはならない。
その声が、身体の中で叫んでいた。

気がついた時には、空の腕が顔の真横にあった。
風を受け、逸れたのだ。

だが、洸はそれを見てはいない。

目の前には、がら空きの胴体。

全身に、力が籠った。

『今です。』
「あああああああああ！！！！！！」

声が聞こえるのと同時に、洸は剣を振りぬいた。
柔らかい感触。
洸の眼前で、白が両断された。

「――――！！」

奇妙な咆哮をあげ、両断されていく白。
それを通り抜ける、左手に握られた黒。

その光景を、洸はスローモーションで見ていた。

開かれていく視界。

洸はその先に広がる、星空を見た。

『――いけない！！強すぎます！！』

「え…？」

呟いた、直後。

風が爆発した。

「うわっ！？」

風を受け、洸は一気に後方へと吹き飛ばされた。

神隠しにあった時の、あの豪風を超える圧力。

洸の身体は、やすやすと跳ねあがる。

ふと、洸は気がつく。
今洸がいたのは、デパートの屋上だったはず。
なら、次に来るのは。
「また…落ちるのかよーーーー！！！！！」
叫び、洸は吹き飛んでいく。
『空（ウロ）、撃破確認。お疲れ様です。』
叫ぶ洸を無視するように、声は話しかけてくる。
直後、背後で風が起こった。

今度は背中に衝撃を受け、洸の身体は停止する。
屋上の端で、洸は止まった。
「…はぁ…っ…は…っ…。」
一日中走り続けて、疲れ果てた身体。
そこに何度も衝撃を与えられて、無事でいるはずもない。
洸は膝から崩れ落ちると、地面へと倒れた。
流石に疲れた。
洸の意識は、うっすらと途切れていった。
『これからよろしくお願いします、マスター。』

「……。」

これからとは何だろう。
相変わらず疑問は山積み。
だが、今の洸は押し寄せる睡魔には勝てなかった。

（何なんだ、これ…）

もう何度目かになる言葉を頭の中で呟いて、洸は眠りへと落ちていった。

第二十話

固い感触を受けて、洸は目が覚めた。

「……。」

一体どれだけ寝ていたのだろうと考えている眼前には、まだ星空が浮かんでいる。
ならば、そんなに寝てはいないのだろう。

身体は酷く重い。
長い夢を見ていたような気分だった。

頭に鮮明に浮かぶいくつかの出来事。
それらがすべて夢で、もう直ぐ美音が起こしにやってきてくれる。
そんなことを、洸はぼんやりと考えていたのだが。

『おはようございます。マスター。』

頭のすぐ横で、声がする。
左の手でまさぐると、固い感触にぶつかる。
持ち上げると、それはやはり刀であった。

「……はぁ。」

やはり、夢ではない。
この刀も、あの巨人も、現実のことなのだ。

『マスター？』

現実ならば、受け入れなければならない。
未だ困惑する頭を押さえながら、洸は起き上がった。

「…おはよう。」

とりあえず、そう言ってみた。

『はい。おはようございます。』

律儀にも、挨拶を返してくれる。

「……。」
『…マスター？』

ぼんやりと刀を眺めてみる。

「ねえ。」
『はい。』

ふと、洸の頭に疑問が浮かんだ。

「１３足す４８は？」
『６１です。それが、どうしましたか？』
「いや…。」

やはり、洸の言葉を理解している。
そう考えていいだろう。

「ごめん、なんでもない。」
『了解しました。』

信じられないが、この刀は意思を持っている。
どうやったらそんなことが出来るのかは知らない。
だが、この不思議な場所にあの怪物。
そして先ほどの光景を見せられたら、信じるしかなかった。

（…うん、まあ、いい）

自分は、望んでここに来たのだ。
どんな場所だろうと、順応してやる。
まだ重たいままの体を、洸は起き上がらせた。

洸の予想が正しければ、茶織咲は間違いなくここにいる。

本当は今すぐにでも探しに駆け出したい。
だが、それでは駄目だ。
このままいったとしても、洸はきっと何も出来ない。

まずは、知らねばならない。
この場所のこと。
あの怪物のこと。

そして、それらへの唯一の手掛かりは、今洸の腕に握られている。

「……。」

洸は、左手の刀を持ち上げた。
柄から刃先まで真っ黒。
鍔はなく、代わりなのかはわからないが、刃と柄の境目の部分には緑の石が嵌め込まれている。
なんとなく、洸はその石に向かって話しかけた。
「君、名前は？」
『魔導器名は菫（すみれ）を与えられています。』
「じゃあ、菫。」
一呼吸を置いて、洸は菫を見つめた。
「ここは、一体どこなんだ。なぜ俺はここにいる？」
『……。』
僅かな間。
さっきまでの即答とは違う、開いた時間。
『一つ目の問いの回答ですが、ここは、ｓｅｖｅｎｔｈと呼ばれている場所です。』
「セブンス…？」
聞いたこともない場所だ。
『そして２つ目の問いの回答ですが、それは、あなたがここへ呼ばれたからです。』
機械的な声が、冷酷に続ける。

「……。」

なぜだろうか。
彼女の声には、不思議な威圧感を覚える。
まるで、目の前に顔があるような、そんな感覚。

顔も、目さえも見てはいないのに、洸の視線は緑の石へと吸い込まれてしまう。

「…呼ばれた？」

何とか、それだけを呟いた。

『はい。』

続く言葉。
それを待って、洸は息を呑む。

『ここ、ｓｅｖｅｎｔｈで戦う、プレイヤーとして――。』

菫が言葉をつづけた、その時。

遥か向こうの空で、光があがった。
一瞬空が白むほどの光に、洸は咄嗟に視線を向けた。
そこには、闇夜を貫くように上る、光の柱が生まれていた。

「あれは…。」
呟いて、洸は先ほどの光景を思い出す。
自分があの光の円に触れたときに起きた、あの雷光を。
『どうやら、また新しいプレイヤーが生まれたようです。』
洸の思考を知ってかしらずか、菫が言った。
「新しい、プレイヤー…？」
プレイヤー、そして戦う。
そこから連想することは、一つしかなかった。
『はい。あなたには、これから戦ってもらいます。』
そんな洸の気持ちを読み取るかのように、菫は言葉を続ける。
『存在と、命を賭けて。』
「……。」
そのたった一言で、洸はここで何が行われようとしているのかを理解した。
命をかけた戦い。
それを、洸を含めた『プレイヤー』で行う。
洸と咲は、そのプレイヤーとして選ばれたということになる。
『後１時間程で、ｓｅｖｅｎｔｈが開かれてから１週間が経過しま

す。そうしたら、戦いは開始されます。』

デパートの屋上を、風が吹き抜ける。
それは、菫が起こしたものなのか、自然に起きたものなのか。

『ですので、疑問があるのでしたら今のうちに解消しておいたほうがいいかと思います。』

（…そうか）

彼女――と言っていいのかはわからないが、の言っていることが正しいのならば、ここは間もなく戦場になるのだろう。
そうなれば、ますます茶織を探すのは困難になる。

（探すなら、今のうちってわけか）

「なあ、菫。」
『はい。』
「あんた、人って探せる？」

ふと思いついて、たずねる。
それくらい出来るのではないか、と期待したのだが。

『索敵ですか？範囲は狭いですが、可能です。』

果たしてその期待通りだったらしい。
どうやらまだ運は残っているようだ。
そう、洸は思えた。

「よし。じゃあ人間を見つけたら教えてくれ。俺と同い年の女の子

だ。」

これで、洸の目的は定まった。
その戦いとやらが始まる前に、なんとしても咲を見つけねばならないだろう。
残された時間は、あと1時間だけ。

それまでに咲を見つけなければ、何が起こるかわかったものではない。

『かしこまりました。それと、マスター。』

逸る気持ちを抑えつつ、洸は階段へのドアへと足を向けた。
だが――。

『階段を降りる必要はありません。』
「え…？」

今にも階段へと駆けだそうとする洸を、菫が制した。

「いや、階段を使わないと降りれないでしょ。」
『いいえ。問題ありません。』

自信に満ちた声で、菫は言う。
なぜ、と洸が口を開く前に、洸の体が僅かに動く。

『私に任せてください。』

風が強くなってきていた。

「…え？ちょっと？」

これは、まさか。
嫌な予感が洸を包んだ。

洸の左手で、緑が輝いた。

『さあ、行きますよ。』

直後吹いた風に押され、洸は夜の町へと、落ちていった。

第二十一話

「――――っ！！？」

声にならない悲鳴を、洸は上げていた。

死ぬ。
死ぬって。
死ぬってば。

デパートは６階建て。
落ちたら、間違いなく死ぬだろう。

だが、洸には何も出来ない。

もがこうとも、風は掴めない。
叫ぼうとも、声は風にまぎれて響かない。

洸にできることは、自分をこの状況に陥れた刀を恨むことだけであった。

『マスター、先ほどの、空と戦った時のことを覚えていますね。』

叩きつけられる空気の中、その刀に宿る意識、菫は相変わらずの声で話しかけてくる。
機械だからこその冷静さと言えばそれまでだが、納得いかない洸である。

そんな洸の気持など知らず、菫は続ける。

『あなたはあの時、私を使って風を起こしました。』

先程の光景を、洸は思い出した。
振り上げた刀から発せられた風。
それが、あの白い人――菫が空といったあの怪物の腕を逸らし、空を切り裂いた。
そして、その直後に起こった、風の爆発。

『それが、私とあなたが持つ能力です。』

ふと、ふわりと何かが体を包み込む感覚。
途端に、身体を襲っていた圧力が消え去った。
何かに押し上げられるように、洸の落下速度がゆっくりになっていた。

「…風を起こす、能力。」

ようやく口を開いた洸が、呟く。
その左手で、刀に埋め込まれた宝玉が緑に輝いた。

直後、ぐんと体が押される。

「うぉ…！？」

吹き飛ぶように、前方へと弾かれる。
速い。

『正解です。マスター。』

洸は風に押されたまま、デパート前の道路が近づいてくる。
『私は、魔導器、風刀菫。魔を導き、あなたの中に眠る風を起こすのが私の役目です。』
魔を導く器。
風を起こす、刀。
『気にせず走ってください。風はあなたを遠くまで運んでみせます。』
「…っサンキュー！！」
迫った地面を思い切り踏みしめ、洸は降り立った。
思わず躓きそうになるのを堪え、洸はそのまま駆けだした。
ぐん、と周囲の景色が流れていく。
これが風を纏うということなのか。
身体が、とても軽かった。
月の表面を歩くときは、こんな感覚なのだろうか。
一歩で数mはねるようにして、洸は走る。
洸がここにやってきたとき、空から落ちてきたあの時。
洸は、自分が消えたはずの場所にいた。
なら、茶織の場合もそうなのではないか。
そう考えた。

だとすれば、目指す場所は決まっている。
茶織咲が消えた、あの路地。
そこへ向かえば、彼女に会えるのではないか。
洸は、今なお彼女のことを探しているであろう親友の姿を思い浮かべた。
「生きててくれよ…。」
風を纏い、洸はまだ見ぬ少女を探して西地区へと駆けていった。
＊＊＊
一方、樹山町――否、ｓｅｖｅｎｔｈは中央地区。
町の中心部といえる高いビル群の上に、一人の男が立っていた。
夜の町にあって、強く輝く赤い髪を持つ、長身の男。
片足をビルの淵にかけ、彼は町を見下ろしていた。
「おーおー、相変わらず何もいねーな。」
町に似合わない陽気な声で、男は話す。
「もちっと空がいてくれたら、とっととレベルアップできんのにな。」

ぶん、と右手に携えたものを振り下ろし、男は言う。
『何度も言ったはずだ、マスター。』
ふと、どこからか声が響く。
『そもそもまだｓｅｖｅｎｔｈは始まってもいないのだ。少し待てば、嫌でも出てくる。』
「はいはい、わかってるわかってる。」
そう言って、男は淵に立つ。
ふと、男の北東方向で光が上がった。
「お。」
銀に輝くその光の柱は、しばらくすると、消えていった。
「あっちは…北東地区か？これで何人目だ？」
『８人目だ。』
低い声は淡々と告げる。
「増えたなー。ま、その方が楽しめるからいいけどな。」
『…マスター。』
声が重く響いた。
「はいはい。わかってるよ…ったく。」
面倒そうに、頭を掻くと、男は淵から降りた。

「でも、散歩するぐらいは…いいよな？」

にやり、とその顔がゆがむ。

『…好きにしろ。』

重い呟きのあと、男の手で、何かが赤く輝いた。

男の周りが突然明かりに包まれる。

赤々と燃えあがるそれは、炎。

炎に照らされて、男の手にしたものがはっきりと映る。

それは、槍。

２メートルはあろうかという長身の男の身の丈ほどもある、槍だ。

「んじゃ、遠慮なく。」

男がそれを頭上で振りまわす。

炎の鱗粉をまき散らし、男は楽しげな笑い声を上げた。

「行くぜ、桐（きり。）」

『…程々に、な。』

呟き、槍を肩にあて止める。

槍を肩に据え、不敵に笑うと、男は夜の町へと飛び出していった。

第二十二話

開け放たれた扉。
風に揺れるカーテン。
荒らされた部屋。
そんな光景が、洸の前に広がっていた。

「……。」

茶織咲が消えた場所。
そこに、彼女はいなかった。

彼女が消えたのはもうだいぶ前になる。
今もなお彼女がその場所にいるとは、洸も思ってはいなかった。

ここ、ｓｅｖｅｎｔｈに来た以上、彼女もまた出会ったはずだ。
空（うろ）という異形の化け物に。

一般的な女性である咲が空と遭遇した場合、どうなるか。
逃げ切れるだろうか。
それとも…。

（…くそっ）

彼女が『そう』なってしまう可能性は、高いだろう。
だが、洸としてはどうあったとしても、彼女が生きていると信じて動くしかない。
さもなければ、すべての意味がなくなってしまうのだ。

彼女が空から生き残った場合、行くとするならどこか。
考えた末に行きついたのが、ここだった。

茶織咲の住む、否、住んでいた家。
そこに、洸は乗り込んだ。

家の中には、誰もいなかった。
彼女の家族はもちろん、彼女自身も。

だが、彼女が一度もここに来なかったとは考えられない。
そして来たならば、何か痕跡が残っているはずだ。
それが彼女の行く先の手がかりになるかもしれない。
そう思い、洸は咲の部屋へと足を踏み入れた。

そして、その光景を目にしたのだった。

「……。」

しばらくの間、洸は何も言えずに佇んでいた。
無残にも荒れた部屋。
そこに残された、明らかに人のものではない爪痕。

彼女は、ここで空に襲われたのだろう。
誰もいない町。
一人取り残されて、怪物に襲われて。
ただ彷徨って、そうして、辿り着いた我が家。
変わりのない場所。
ただ違うのは、自分の家族が誰もいないというだけ。

そこで、彼女はようやく自分が独りであることに気がつく。
ただ独りという絶望。
理解できたはずなのに。
それでも、絶望は止まらなくて。
泣いたのではないだろうか。
叫んだのではないだろうか。

そこを、彼女は襲われたのだ。
正直、ここに血痕が残っていないことが不思議な程だった。

『マスター。』
「…どうした。」
『この周辺には人はいません。移動した方がいいかと。』
「……。」

菫は、あくまで機械的にしゃべる。
必要なことだけを伝え、教えてくれる。
でも、今はその言葉が、ひどく冷酷なものに聞こえてならなかった。

「ああ、そうだな。」

呟いて、洸はもう一度部屋を見渡した。
今は、少しでも彼女の行く先への情報を手に入れなければならないのだ。
部屋に、戦闘の形跡はない。
なら、彼女は逃げたのだろうか。
それとも、この爪痕は空ではなく、彼女がつけたものなのか。
この世界にいる以上、彼女もまたプレイヤー候補として呼ばれた存在だ。
洸はＮＯ．６――つまり、彼より先に魔導器を手にした人間が、５人いることになる。
その一人が咲でないと、誰が言えるだろう。
『おおよそ、持っていると考えられます。』
洸の問いに、菫は淡々と答える。
彼女のその曖昧な答えに、洸は困惑を浮かべた。
「おおよそ？」
『マスター同様、召喚されたプレイヤーと魔導器は離れている場合が殆どです。そして、全てのプレイヤーのいる地区には空が（うろ）があらかじめ配置されています。』
洸がこのｓｅｖｅｎｔｈという場所に落とされて、すぐに空に遭遇した理由はこれだったのだろう。
『魔導機を使える適性があったとしても、戦闘の能力が皆無では意味がありません。』

武器を持てるとしても、使えなければ意味がない。
武器を使えたとしても、弱ければつまらない。

『襲い掛かってくる空から生き残ることができたものが、魔導器を手にします。』
「……生き残れなかったら？」
『死にます。』

あっさりと告げる菫。
予想していたとはいえ、それは洸の内側へと深くえぐり込んでくる。

『ここは現実で、マスターは生身の人間です。殺されれば当然、死に至ります。』

死んだらまたスタート地点からやり直し、にはならない。
それが現実であり、死だ。

冷たい認識が、洸の頭を殴りつけてくる。
けれど、頭の中は熱いまま。

「勝手に呼んどいて、適性がなかったら死ねって言うのか…。」

何とか、それだけを呟いた。

『はい。』
「……。」

無意識のうちに、腕に力がこもる。
ぶつけようのない怒りが、身体の中で跳ねまわっていた。

（大丈夫、落ちつけ…）

心の中で、何度も呟く。
怒る時ではない。
今は、咲を見つけることが先決なのだ。

『急ぐのではないのですか、マスター。』
「ああ、わかってる！！」

菫の言うスタートまで、おおよそあと４０分。
急がなければならない。

だが、洸の頭にはある考えが浮かんでいた。
冷たい認識が結ぶ、その先。
それが頭の中を支配して、洸は碌に考えることができなくなっていた。

――もし、咲が既に魔導器を手にしていたら。
プレイヤーとなっていたら。

存在と命。
それを賭けて、洸は咲と戦わなければならなくなるかもしれない。

自分を殺すか、彼女を殺すか。
それとも、別の道を探すのか。
その時、自分は選べるだろうか。

どろりとした思いが、洸の中に流れ込んできていた。

＊＊＊

茶織の家を出て、道へと戻る。
これで、もう洸に彼女の行き先の手がかりはなくなってしまった。
後はもう虱潰しに探すしかないだろう。
そう思っていた、その時。

空が、赤色に輝いた。
また、新しいプレイヤーが生まれたのだろうか。
洸の頭にそんな考えがぼんやりと浮かぼうとしていた、刹那。

轟音が響いた。

「――――なっ！？」

音が鳴り、地面が揺れる。

直後、再び空が光った。
だが、光の柱は見えない。

「今のは！？」

叫んで、洸は菫を見る。
先程までと何も変わらない口調で、菫は答えた。

『魔法反応確認。魔導器による戦闘です。――かなり強力な。』

「……！？まだ、戦いってのは始まってないんだろ！？」
『はい。魔導器の発動光も見られないため、おそらく、プレイヤーが待ち切れずに戦闘を始めたのかと思われます。』
「……っ。」

（待ちきれない？戦いが…？）

洸には信じられない言葉だった。
だが、起きているものは仕様がない。

ふと、洸はもう一つの神隠しを思い出していた。
警察署から消えたという、一人の人間。

そうだ。
ここには、犯罪者だって来ているのだ。
そう考えると、目の前の出来事が、当然のことに思えてきた。

再び、轟音が響く。
同じ方向から、光が上がった。

「…場所は？」
『近くです。中央地区西側。』

菫はあくまでも冷静に言葉をつづけた。

爆発の音、揺れ。
そのどちらもが、戦闘地点がここから近いことを示している。

そして、それは、茶織咲が消えた場所からも近いことを示していた。

（まさか…！！）

咄嗟に強い不安を感じる。
それに突き動かされるように、洸は次の目的地を決めていた。

「行くぞ、菫！！」
『了承です、マスター。』

周囲の大気を揺らすほど地面を踏みしめ、洸は爆発の方向へと駆けだした。

第二十三話

町が燃えていた。

溢れるほどの熱気に包まれ、町は赤い炎の海と化していた。

その中で蠢く影が２つ。

１つは悠々と炎の海の中を進んでいく、この炎の中にあって、鮮やかな赤い髪を持つ男。

火を纏う槍を抱え、彼は赤に染まった町を歩いていた。

その顔は、破れそうなほどの笑みに包まれている。

そして、もう１つ。

町中にあふれる炎に煽られ、右へ左へ逃げ惑うその影は、もはや原型を残さないほどボロボロの、少女。

炎が見えているのかいないのか、焦点の定まっていない目で、彼女は歩いていた。

＊＊＊

「…熱い。暑い。あつい。熱い！！！！」

ガラガラの声で、叫ぶ。
喉は、とうに乾ききっていた。

気がついたらこんな場所にいた。
誰もいない。何もない。
唯一目の前に現れたのは、夢のような白い『何か』。
必死に逃げて、隠れて。
ようやく人に会えたと思ったら、槍を振り上げ、火を纏う、狂人。

何なのだ、ここは。
叫ぼうとして、熱の塊を吸い込む。
咳きこんで、さらに喉が焼かれる。

だめだ、もう声も出せない。
涙は、とうに枯れていた。

あと、自分には何ができるだろう。

「…おいおい、これが俺と同じプレイヤーか？弱すぎるだろ…。」

荒い声。無造作な足音。
あいつが来た、と思うけれど、もう何もする気が起きない。

「ああ、そうか。ひょっとして俺が強すぎるのか。いやぁ…まいったな～。」

楽しそうに笑ってる。

『…お楽しみのところ悪いが、よく見てみろ。彼女は、魔導器を持っていない。』

別の声がする。
さっきから、ときどき聞こえてた声だ。
でも、姿は見えない。
どこにいるんだろう。

町が燃えていく。
ああ、みんながいなくてよかった。
燃えちゃったら、可哀そうだもんね。

「ああ！！？…んだよ、こいつじゃねえのか。…くそっ。」

今度は怒ってる。
忙しい人だ。

…あ、よく見たら、星がきれいだ。
昔、私の家族と、浩太君の家族で行ったキャンプ場。
あそこで見た空と、おんなじだ。

『だが、彼女でも足しにはなる。…どうした。やらないのか？マスター。』
「うるせぇ！！」

あの時、浩太君が教えてくれた星。
あれ、何ていったっけ…。

『お前がやらないなら、私がやろう。ライバルは少ない方がいいの

だろう。』
「あ、おい！！」
また、行けたらいいなぁ。
また、星の話、聞きたいなぁ。

また、浩太君に会いたいなぁ。

「…じにだく…ないなぁ…。」

ぐにゃりと、視界がゆがむ。
あれ、どうしたんだろう。
涙は枯れたはずなのに。

――真っ赤な視界。
熱いはずの身体は、もう何も感じてはいなかった。
でも、何故だろう。

「…っ！？何だ、てめえは！！」
「…うるせえ。」

また、別の声が聞こえてくる。

――その時だけ、涼しくなったような、そんな気がした。

「お前じゃない、誰かだよ…！！！！」

なんだか、とっても怒ってる、その声。

それが、なぜだかとっても気になって。
とっくに乾いてる目を、何とか開けた。

赤だらけの世界。
その中で、緑に輝く背中がはっきりと見えた。

第二十四話

刀を握る手に、力がみなぎる。
ああ、これが怒りか、と洸の頭の中で誰かが言った。
その光景が見えた瞬間、菫が強く輝いたのを感じた。
直後、洸は飛び上っていた。

どうやったのか、よくわからない。
ただ、気がつけばそこにいて、迫りくる火球を両断していたのだ。
大人の胴体ほどはあるだろう、炎の塊。
そんなもの、自然に発生するわけがない。
いや、そもそもこの場所で、火事自体起きているわけがないのだ。
なら、答えは一つ。

真っ二つに断たれた火の合間から、洸は男を見据えた。
全身を黒に包み、頭部だけが異常に赤い。
洸をはるかに超える身長に、少し細めの体格。
その姿は、炎に照らされ、さらに大きなものに感じられた。
だが、何よりも目がひかれるのは彼の腕。

そこには、彼の背丈ほどもあるだろう槍が握られていた。

炎を纏う、赤い槍の男。
こいつが、２人目のプレイヤーなのだろう。

「……。」

じっと彼は洸を見ていた。
顔、胴、と彼の目線が移っていく。

そして、その眼が洸の左腕を捉えた。

「…剣。」
「……。」

ぼそり、と呟く。
洸は、何が来てもいいように、刀を身体の前に構えた。

「……。」
「……。」
「……。」
「……。」

無言のまま、対峙する2人。
その2人を囲むように、炎はバチバチと音をたてていた。

「……はっ」
突然、彼が口を開いた。
「はははははははははははははっ！！！！」
そこから溢れてきたのは、笑い声。
乾いても、怯えてもいない。
ただ、楽しい。
ただ、悦んでいる。
そんな笑い声。
天を仰ぐように、彼は笑い続けていた。

「……っ！？」
その姿は、あまりにも異様だった。
何が楽しいのか。
何が嬉しいのか。

目の前にいるこの男は、たった今人を殺そうとしていたというのに。
（何で、笑ってるんだよ、こいつは…！！！！）
刀を握る両手に痛みが走る。
それでも、握る力を弱めることは出来そうもなかった。
「そうか、そうか、そうか、そうか！！！！」
ぐりん、と顔を向け、男は嗤う。
「お前がプレイヤーか！！お前が、俺の戦う相手か！！！！」
男の声に合わせ、彼の周囲の炎が舞いあがる。
渦のように、蛇のように、炎は槍の穂先へと集まっていく。
集まった火は、すぐに大きな塊へと形を変えていく。
（あれが、あの槍の能力…）
炎を生み出し、操る力。
ぴったりな能力だ、と思える。
あの力で、彼は町を焼き、彼女に襲いかかったのだろう。
洸は、背後にいる筈の少女の姿を思い浮かべる。
彼女が茶織咲なのか、洸には判別がつかない。
元々彼女の姿をあまり知らないというのもあった。
だがその一番の理由は、少女の今の姿にあった。
跳んできた時に見た、姿。

ボロボロな衣服。
煤け、やつれた姿。
ちらと見えた腕は、異常に細かったように思える。

その両腕には、何も見えなかった。
魔導器について、洸はまだ詳しく知らない。
だが、あれは流石の洸でも理解できる。

彼女は、プレイヤーではない。

おそらく、召還はされたがまだ魔導器に辿りついていない者なのだろう。

洸や彼とは違い、彼女はまだ自分たちがなぜここにいるのかさえ知らないはずだ。
だというのに。

魔導器を実際に手にした洸だから、理解できる。
これがあれば、人など簡単に殺せてしまう。

だが、彼女はまだ生きている。
それが意味することは、つまり――。

「いいね、女で遊ぶのにも飽きてきた所だ。こんなもんじゃないだろ！！この世界も、こいつらも！！」

そう言って、彼は槍を空へと突き出す。
先程よりも一回り大きくなった火球が、空中で静止する。

熱気が洸を襲う。
だが、身に纏う風のおかげか、動けなくなるほどではなかった。
彼は、いたぶっていたのだ。
その炎で、熱で、少女を。
その上で、彼は笑っているのだ。
「…許さない。お前だけは、絶対…！！」
刀を持ち上げ、力を込める。
近づき、振りぬく。
それだけで、あの男を両断できる。
だが、と洸の中で声が上がる。
見る限り、相手は魔導器の能力を使いこなせている。
対する洸は、菫の力の使い方をろくに知らないのだ。
いくら初弾を防げたからといって、このまま戦って、勝ち目があるとは到底思えない。
でも、それでも。
洸は、この男を倒さなければならなかった。
（うん、いける）
相手はまだ、洸の、否、菫の能力を知らない。
その隙をつけば、倒せるはず。

洸の視線は、男の隙だらけの胴体に注がれる。
あそこに、刀を打ち込めば、勝てる。
打ち込めば、倒せる。
打ち込めば――。

（…打ち込んだら…？）

どうなるか。
その先を、洸が考えようとして――。
その顔には、微かな笑みが浮かんでいた。

『取り込み中申し訳ありません、マスター。』
「！！！？」

ふと、菫の声が響く。
思わぬ声に、洸は身体を跳ね上げた。

「…何だ。」

答えつつも、視線は外さない。
洸はただ、男を見ていた。
だが、その顔から笑みは消えていた。

『もし後ろの少女がお探しの人なら、急いでください。死にかけています。』

「な…っ！？」

咄嗟に振り返る。

そこには、息も絶え絶えな、今にも死にそうな少女が倒れている。

先程見た時には、まだ意識が残っているように見えたのだが。

急がなければ、助からないかもしれない。

「……！！」

この少女が、茶織咲かはわからない。

だが、どちらにせよ。

「怒ってる暇じゃ、ないってか…。」

洸が呟いた、直後。

『――！！マスター、後ろ！！』

「――え」

閃光。

爆音。

そして、衝撃。

「…ぅくっ！？」

背中に熱がはしる。

振り向いた隙に炎を飛ばされたのだ。

「無視…してんじゃねえよ！！！！」

声が響いてくる。

洸の背後で、炎の壁が上がる。

目の奥が、押し上げられるような感覚。

直後、萎むように一気に意識が引っ込んでいく。

意識が遠のき、足がふらつく。

だが、倒れるわけにはいかない。

「――――！！！！」

洸は、刀に力を込めた。

菫が、緑に輝いた。

＊＊＊

爆炎とともに上がった煙幕が晴れたとき、そこには誰もいなくなっていた。

少女も、少年も。

そこにいるのは、男ただ一人だけであった。

「くそっ…。何なんだあいつは。」

手にした槍を担ぎ、男は悪態をついた。

『殺さずに済んでよかったな。マスター。』
「…うるせぇ。」

呟きつつも、男は今のことを思い返す。
突然現れた、邪魔をした少年。
彼は男の放った火球を、切り裂いた。

その手には、漆黒の刀が握られていた。
あれは、間違いなく魔導器。

つまり、あれを持っていた少年は、男と同類の存在と言えた。

「しかし、あれがもう1人のプレイヤーか。なんか、弱そうな奴だったなー。」
『確かに、肉体的には一般的だっだであろうな。だが、それを余りある程の殺気の持ち主だった。』
「…ああ。ありゃ、ただのガキじゃなさそうだ。…ははっ。」

何かを思い出したように、男が笑った。
その脳裏には、先ほどの少年の姿があった。

（ありゃあ、ひょっとしたら…）

『あの少年が気に入ったか、マスター。』
「ああ。決めたぜ。」

男の周囲で、炎粉が舞いあがる。
橙に煌くそれらは、男を、闇夜を染め上げる。

「最初の標的は、あのガキだ。」
『…了承した。』
男の声に、重い声が応える。
男の肩にある槍が、赤く輝いた。

『では、そろそろ戻ってもらおうか。』
「はいはい。」
ぶん、と槍を振り下ろす。
途端に、周囲の炎が一部かき消えた。
「…おい、なんで消えないんだ？」
『消せるのは、私が生み出した炎だけだ。燃え移った火はただの火だ。』
「へえ…、そういうもんなのか。」
呟き、笑う。
「じゃあ、帰りますかね。」
先程までの苛立ちはどこへやら。
はじめと同じような笑みを残して、男は炎の中に消えていった。

第二十五話

少女を抱えたまま、洸は町中を疾走した。
腕の中の少女は軽く、碌に呼吸さえしていない。
火で肺か喉でもやられたのだろうか。
だとしたら、洸にはどうしようもできないかもしれない。
だが、このまま捨て置くわけにはいかない。
まずは水、後は安全な場所と食料だろうか。
洸が思いつくことはそれくらいだった。
「なあ、菫。水と食料、どこにある！？」
自分でも混乱しているのはわかっていたが、どうしようもない。
何より、彼女を助けたかった。
洸の左手の剣、菫が緑に輝き、彼女の声が響いてくる。
『基本的に、町に食料は存在しません。』
「なっ…！？」
平然と告げる菫。
突然の言葉に、洸は思わず左手の方を振り向く。。
「しないって…。じゃあどうやって生かすつもりだったんだよ、お前らは！？」

咄嗟に怒鳴ってしまう。
『落ち着いてください、マスター。』
「……っ。」
菫は冷静だ。
それもそう。
彼女には、そもそも慌てるという感情などないのだ。
「ああ、悪い…。」
呟いて、洸は自分を落ち着かせる。
菫に怒鳴ったって、仕方がない。
「それで、どうすればいい？」
思考を切り替える。
『デパートに戻ってください。』
「デパート…？それって俺たちが会った？」
『はい。そこがあなたの一時的な拠点になります。』
また、わからない言葉が出てくる。
拠点。
これも、この戦いに必要なものなのだろう。
「その拠点には水があるのか？」
『飲食物は、最低限用意されています。』

親切なのか不親切なのか、いまいちよくわからない。
だが、今はその言葉を信じるしかなかった。

「…よし、とりあえずデパートに戻る。」
「了承です。」

疑問を浮かべつつ、デパートを目指す。
あと数分。
それまで生きているといいのだが。

風を纏って、洸は来た道を引き返していった。

＊＊＊

「何とか、落ち着いたな…。」

デパートの中、洸は呟いた。

目の前には、すやすやと眠る少女。
その表情は、先ほどとは違い、穏やかであった。

少女は、茶織咲であるように思えた。
中学時代とはかなり印象は変わっていたが、面影は十分にある。

その姿に、外傷は何もない。
まだ眠っているから何も食べさせてはいないが、水は少しづつだが飲ませた。

これで、もう大丈夫だろう。
生きていてよかった。
安堵のため息を、洸は吐き出した。

（しかし…）

そう呟いて、洸は先ほど起きたことを思い出した。
なぜ、少女の傷が完治したのか。
その、不思議な出来事を。

＊＊＊

――その、少し前。

洸は、デパートに戻ってきていた。

菫の言った通り、デパートには飲食糧が2日分ほど貯蔵されていた。
更に、食糧以外のものなら、大抵は残っていることもわかった。
少女が眠っているベッドも、そういったものの一つ。

その点では、デパートに家具販売フロアがあったのは、幸運と言えた。

だが、少女の容態は予断を許さない状態。

火傷に打撲。

所々の皮膚は裂け、服も身体も煤と血に塗れてしまっていた。
正直、生きているのかと一瞬疑ってしまった程。
ｓｅｖｅｎｔｈには、プレイヤーしか人間がいない。
それはつまり、怪我も病気も一切治せないということを意味している。

このまま黙って見ているしかないのだろうか。
苦しそうに呻く少女の傍に立ちつくしていた洸。
『……。』
そんな彼に、菫が諦めたように呟いた。
『…マスター。食糧と一緒に置かれていた袋を覚えていますか。』
「袋…？」

言われて、洸は思い出す。
菫が置かれていた屋上の真下の階。
何故か、そこだけは他のフロアとは異なり、何もなくがらんとしている。
そこに、食糧は置かれていた。
所謂携帯食料と呼ばれているものに、ペットボトルの水。
そして、その奥に隠れるように小さな袋が置かれていたのだ。

その中に入っていたのは、小さなガラス球。
それも、ただのガラス球ではなかった。
内部は青く輝き、表面には何かの文様が浮かび上がっている。

それは、菫と出会った時に見たあの魔方陣のものに似ていた。

『それを、彼女に接触させてください。』

菫の言葉に困惑しつつも、洸は従った。
青い球を、少女の腹部にそっと置いた。

「…って、あれ？」

置いたと思った球は、彼女の僅かに上のところで静止した。
浮き上がる、青い球。
その瞬間、その内の光が強く輝いた。

「うわっ！？」

青い光は一気に広がると、巨大な球を作り出し、その中に少女を包み込んだ。
その表面にはやはりあの文様が浮かび上がっていた。

「……。」

光は、すぐに収まった。
突然のことに呆然とする洸。
その先には、傷の完治している少女が眠っていたのだった。

＊＊＊

何となく、風にあたりたくなって、洸は再び屋上に上がった。
先程、菫と出会った時とは違って、風は穏やかに流れている。
目の前には闇に沈んだ町並み。

（そういえば、こうやって町を眺めるのは初めてか…）

町は眠ったように暗く、静かだ。
とはいっても、そこにあるのは洸の知る町と何も変わっていない。
これだけ見れば、ここが異世界だなんてとてもじゃないが思えなかった。

何となく、視線は北西へと――先程洸がいた場所へと流れる。
よく見れば、まだ黒煙が立ち上っている。
どうやら、火はまだ治まっていないようだ。

火。
それを見ただけで、洸は先程のことを思い返し、拳を強く握った。
火を起こす不思議な武器。
そして、男が言った言葉。

「…さっきの男が他のプレイヤーなんだな。」
『はい。その通りです。』
認めたくはなかったが、そう考えるより他にない。
「……あいつみたいな奴と、戦わないといけないのか。」

ため息をつきながら、洸は言った。
『みたいな奴、が何を指しているのかはわかりませんが、戦うという点ではそうです。』
菫の口調に変わりはない。
『ｓｅｖｅｎｔｈは、あなた方適合者による、我々魔導器を用いた戦いです。あなたとあの少女、そしてあの男はその一人として選ばれ、ここに召喚されました。』
魔導器の戦い。
それは、ただ武器を振りまわすだけではないらしい。
菫の風。
あの槍の炎。
――魔法。
そうとしか言えない、不思議な力。
あれが、この戦いの肝なのだろう。
「……。」
おそらく、先ほど少女を治療したあの球も、魔法によるものなのだろう。
治療魔法。
魔法としてはよく知られているものといえる。
（本当に、ゲームの中にいるみたいだ…）

そんな考えが浮かんでくる。
だが、実際はそんな呑気なことを言っていられる場合ではない。
あんなものがあるということは、この戦いは傷を負うことが前提とされているということだ。
そんな戦いに、洸はこれから挑もうとしている。
「……はぁ。」
洸は、大きく息を吐き出した。
別に、恐怖はなかった。
今はただ、そんな戦いに彼女を参加させずに済んだ事を、良しと思えたから。

「なあ、菫。」
『はい、マスター。』
「さっきは、ありがとな。」
『いえ。』
正直、菫がいなければ彼女を救うことはできなかっただろう。
彼女の存在は、おそらく戦いにおいては邪魔になるであろう。
守るものが一つ増えるだけで、素人の洸には厳しいはずだ。
だというのに、菫は彼女を助ける手助けをしてくれた。
案外、いい奴なのかも知れない。
無機質に光る刀を見て、洸はそう思った。

「…これで、俺の用は済んだ。」
後は、この世界から帰るだけ。
「後は、菫に付き合うよ。」
『…マスター。』
とはいっても、どうすれば帰れるのかなど見当もつかないのだが。
（…まあ、なるようになるか）
行方不明になっていた咲を見つけることが出来たんだ。
この場所だって、どうだってなる。
洸がそう考えていると…。
『―――さい…。』
菫が何かを呟いた。
「え？」
彼女にしては珍しい、微かな声。
何を言っていたのか聞き取れなかった。
「菫、今何て…？」
洸が呟いた、その時。

空が強く輝いた。

第二十六話

「何だ…！？」

青白く輝く光。
町を覆っていた闇を引き裂いて、それは町を強く照らしていた。

「光ってる…。また、新しいプレイヤーが生まれたのか？」

空が光る理由を、洸はそれしか知らない。
洸がこのデパートに戻っている途中も、また一人、新しいプレイヤーが生まれていた。

見えたのは、緑の光。
先程のものとも違う光の色。
どうやらプレイヤー、あるいは魔導器によって、光の色が変わるらしい。

（いや、でも、これは…）

プレイヤーが生まれる時、空が輝くのは一瞬だけ。
そして、その後に光の柱が現れていた。

だが、これは違う。

一瞬など、とうに過ぎている。
だというのに、光は未だおさまってはいない。
否、それよりも。
異様な出来事が、洸の目の前で起きようとしていた。

「これは、これが…魔法？」

空全体に、あの文様が浮かび上がっているのだ。
町を覆うように広がる、巨大な魔法陣。
その中心には、真白に輝く球体。

太陽が堕ちてきたかの様に、町は明るく照らされている。

異様。
そうとしか、言い表せない光景。
この場所にきて、それも見慣れてしまったと思っていた洸だったが、
どうやらそれもまだまだなようだ。
目の前の光景に、洸はただ呆然とするしかできなかった。

『――時間です。』

ふと、菫が声を上げた。

「時間…？」

呟いて、先程彼女が言っていたことを思い出す。
洸は、ポケットから携帯電話を取り出した。

そういえば、ここにきて初めて携帯電話を見た。
表示は、圏外になっている。
まあ、当然だろう。

その中でも、洸は時間の表示を見た。
時刻は、午前４時頃。

「…って、４時！？」

その表示に、洸は驚く。
まだ１時かそこらかと思っていた。

だが、よく考えればそれも当然だろう。
洸がこの世界にやってきたのは、零時を少しすぎた位。
それから走り回って、眠って、それからまた走り回ったのだ。

それくらい時間が過ぎていても不思議はなかった。

否、問題なのはそこではない。
菫が言った、時間という言葉。
それが何を意味するのか、洸はよく知っていたはずだ。

それは――。

『ｓｅｖｅｎｔｈが開かれてから、一週間が経過しました。』
「……。」

そうだ。
たった今、この世界は開かれて１週間の時が過ぎた。

そうしたら、何が起こる…？
洸の目は、いつの間にか、左手の刀に向いていた。
柄には、緑に光る石が一つ。
その内に眠る彼女は、静かに口を開いた。

『――――。』

彼女のその呟きが、耳を、皮膚を通して洸の中へと染み渡っていく。
それが洸の全体へと広がり、洸がその意味をようやく飲み込んだ、
その、瞬間。

『――皆様。いかがお過ごしかな。』

空から声が響いてきた。
撃ち抜かれたように、その声は頭の中へと飛び込んでくる。

咄嗟に、洸は空へと振り返る。
だが、そこには誰にもいない。
『さて、突然で申し訳ないが…。』
どうやら、声はあの球体から聞こえてくるらしい。
男の声。
それも、若くはない男の。

理解できたのは、それだけだった。
洸が次に脳を働かせるその前に、声は続く言葉を、告げた。
『ｓｅｖｅｎｔｈを――戦いを、始めよう。』
それは、菫が告げたものと、同じ言葉だった。

第二十七話

戦いを始めよう。
空から響いてくる声は、確かにそう言った。

それは、始まりを告げる言葉。
記憶を消す神隠し。
ｓｅｖｅｎｔｈという、誰もいない世界。
空と呼ばれた白い化け物。
そして、魔導器と名乗る喋る刀。

訳も分からず押しつけられた戦いの権利に、洸と咲は選ばれて。
これから、その戦いに身を投じることになるのだ。

そこで、洸たちは全ての答えを得るのだろう。
これは、その始まりなのだ。

不思議な高鳴りを、洸は覚えていた。
たった今、彼は自分の運命の始まりに立っているのだから。

空に浮かんだ太陽のような球体に、それを囲むように広がる巨大な魔法陣。
その先にいるであろう声の主は、果たして洸たちに何をもたらすのか。

『まずは、君たちに礼が言いたい。』

声の主は、出し抜けにそう言った。

『ありがとう。君たちがいてくれたおかげで、この戦いを開くことができる。』

（…勝手に連れてきておいて、それか）

随分自分勝手なことを言う。

だが、洸には何もできない。

今は、ただ聞くことしかできないのだ。

『さて、君たちの大半はもう理解しているだろうが、残念ながらまだこの事態をよく理解できていない者もいる。そんな君たちのために、少し解説をしよう。』

そんな洸の気持ちを無視して、声は話を続けていく。

『まず、この場所だ。君たちが今いる、その場所。そこは、残念ながら君たちのよく知る樹山町ではない。ここを、私たちはｓｅｖｅｎｔｈと呼んでいる。ほんの少し前まで君たちがいた世界とは、異なる場所。言ってしまえば異世界、ということになる。』

異世界。

それは、もう既にわかっていたこと。

だが、思っているのと実際に告げられるとでは、大分違う。

思い知らされてしまう。

ここは、やはり自分がいた場所ではないのだと。

『とは言っても、ここは君たちが良く知っている異世界とは少し異なっている。厳密にはここは異世界ではないんだ。なぜならここは、私たちが生み出した場所だからだ。』

「……は？」

思わず、洸はそう呟いていた。

（世界を、創る…！？）

途方もない言葉。
理解が追いつかなくなる。
それでも、声は待ってなどくれない。

『そうだ。この世には存在するのだよ。我々が暮らす場所とは異なる世界――異世界というものが。我々はその存在を知り、そしてそこにある文明を知った。…そして我々は生み出したのだ。ここ、ｓｅｖｅｎｔｈを。』

言葉がノイズのように耳を通り過ぎていく。

『現実世界でも、異世界でもない場所。どちらにも属さず、隔離された世界。それがここ、ｓｅｖｅｎｔｈ。人が踏み入れた、七つ目の領域なのだ！！』

熱が入りきった声が、突如叫んだ。

途端に、遙か向こうから空気の、音の波が襲い掛かってくる。

「……っ！！？」

大気を震わすほどの、轟音。

（どんな声だよ…！！）

思わず耳を塞ぎながら、洸は叫んだ。

反響音が、まだそこら中から聞こえてきている。

『…っと、いけない。話が脱線してしまったね。まあともかく、ここが君たちの知らない別の世界であることは、これでわかってもらえたと思う。』

現実世界でもなく、異世界でもないという挟間の世界。

だが、それが何を示すのか、洸には分らない。

今洸たちに必要なのは、ここがどんな場所であるかよりもここで何が何の目的で生み出されたのかということだろう。

これから、ここで何が起こるのか。

その続きを、声は語りだした。

『では、どうしてそんな場所に君たちはいるのか。それが、今回私たちが伝えたい本題だ。先ほども言った通り、君たちにはこれから戦いあってもらう。命と存在を賭けて。』

「命と、存在…。」

そう言えば、菫も同じことを言っていた。

『まず、安心して欲しい。私たちは別に殺し合いをしろ、などとは言ってはいない。私たちとしても、プレイヤーである君たちに死なれてしまうのはとても困ることなんだ。
殺しあう必要はない。君たちは戦いあってくれればいい。』

「……。」

その言葉が偽りであろうことを、洸はすでに理解していた。
なぜなら、洸はすでに知ってしまっているのだ。
これから起こる戦いの一端を。
人など簡単に殺せる力を、自分たちが持ってしまっているということを。

『勝利条件は至って単純。君たちが持つその魔導器を、最大レベルまで開放すればいいだけだ。』

「レベル…？」

『もう皆知っているだろうが、その魔導器には、素晴らしい力が眠っている。そう。誰もが一度は憧れたであろう力、魔法だ。君たちは、その魔導器があれば、魔法を使うことができる。これは、誰にでもできることではない。魔法を使うには、能力、才能が必要になる。君たちは、そのどちらも持っている。だから、君たちはここに呼ばれた。』

選ばれたということは、つまりそう言うこと。
菫を、魔導器を使う適性があったからこそ、洸はこの世界に呼ばれた。

咲も、そして警察署から消えたという人間も、きっと同じ。

（…法則なんて、わかるわけないな、これじゃあ）

神隠しの実態がこんなものであったとは、誰も想像すらできなかったであろう。

『だが、そんな君たちでも、まだほんの僅かな魔法しか使えない。より強く、より大きな魔法を使うには、どんどんと魔法を使用して、魔導器のレベルを上げていかなければならない。…さあ、これでもうわかっただろう。君たちの役目は、ただ一つ。戦って、自分の持つ魔導器のレベルを、最大まで開放することだ。』

「レベルを上げる…？なんだ、それ。」

それでは、まるでゲームではないか。

まさか、そんなことをさせるために、こんな場所を創って、洸たちを呼びだしたというのだろうか。

だとしたら、ふざけているにも程がある。

それでも、洸たちはこの声に従うしか術がないのではあるが。

『戦う相手は、用意してある。もちろん君たちプレイヤーもその内の一つだ。君たちが魔導器を手にする前に、白い人に出会ったと思う。あれは空（うろ）と言って、まあ、いわゆる雑魚キャラだ。彼らと戦うことで、レベルを上げることもできる。』

「…なるほど。」

必ずしも、プレイヤーと戦わなければならない、というわけでもな

いらしい。
それもそうだろう。
人同士で殺し合いなんて、避けれるなら避けるに決まっている。
だが――。

『ただ、それではとても時間がかかってしまうのだが…まあ、詳しい話は自分の魔導器に聞いてみてほしい。魔導器は、君たちの戦いをサポートする役目ももっている。彼らが、君たちをアドバイスしてくれるだろう。』

何かおかしい。
違和感を、洸はこの声に覚えていた。

『2週間。それが、君たちに許された時間だ。それまでに、君たちは自分の魔導器のレベルを上げなければならない。』

この違和感は何だろう。
洸は、必死に耳を澄ませた。

『…もし、その期間内にレベルを上げきることができなかったら。』

声は、言葉を続ける。

『これも、安心して欲しい。別に、敗者には死を、などという無駄なことをするつもりはない。だが、忘れないでほしい。私は、命と存在を賭けて戦ってもらうと言った。…その意味は、わかるかな?』

命と存在。
それを失うということは、つまり死ぬということだろう。

『命とは、そのままの意味だ。魔法の力は、おそらく君たち自身が良く知っているだろうが、一歩間違えれば人を殺すことなど簡単にできてしまう力だ。この戦いに参加する以上、命を失う危険は、常に隣り合わせにあると言っていい。』

命を失うということも、つまりは同じことだ。

…ならば、存在は？

『きっと、その力の程を思い知り、力も怯えて、戦うことを放棄する者が出てくるだろう。生き残ることだけを考えて、戦わない者も、必ず出てくる。

…だが、それでは少し、困るのだ。』

不意に、その声色が変化した。

先程までの明るさは薄れ、重く響く声へと変わる。

『私たちは、一人でも多くの者にレベルを上げてもらいたいのだ。だというのに、戦いを放棄してしまう者がいては、困るんだ。』

それは、まるで人が変わったかのように、唐突であった。

『だから、私たちはもう一つ、君たちに賭けてもらうことにした。

もう一つ。それが、存在だ。』

命と存在。

声も、そして菫も、そう言っていた。

存在を賭ける。

それは、どういう意味なのか。

命と大して変わらないような、そんな気がするのだが。

『存在を賭ける、といわれてもピンと来るものは少ないかもしれない。だから、特別に教えてあげよう。』

そして、洸は思い知る。

自分が、如何なる世界に迷い込んでしまったのかを。

『存在とは、そのまま『存在』だ。君たちが現実世界で存在するのか否か。それを、君たちにはかけてもらう。』

「…え？」

呟きが、耳元で響いた。

（今、何て…）

存在。

その言葉に、洸は先程から記憶を掠める何かを感じていた。

それが何だったのか。

（…神隠し……）

そもそも、なぜ洸はこの場所にいるのだったか。

（茶織が消えて、それから…）

それから、何が起こった？

「……。」

「……。」

「…まさか」

『……。』

いや、まさかそんなはずはない。
そう思いながらも、洸は次の言葉を待っていた。

そして、声は答えを告げる。
とてつもなく、残酷な答えを。

『つまりは、戸籍、記憶、そして関わりと言ったところか。』

そう、記憶だ。
神隠しにあったものは、皆忘れられる。
咲のことも洸のことも、覚えている人間は誰もいない。

存在を賭ける。
その言葉の意味すること。
それは――。

『もうお解りかな。つまりは、この戦いに勝たなければ、君たちは現実世界に戻ったところで存在しない人間となるということだ。』

「……っ！！？」

そうだ。

神隠しを起こしたのがこいつらなら、記憶を消したのも、こいつらになる。
それはつまり、洸たちの存在さえも握られたことに等しいではないか。

負ければほぼ確実に命を落とす戦い。
その戦いに生き残らなければ、元の世界に帰ることはできない。

だが、ただ生き残るだけではだめなのだ。
戦い、勝ち抜かなければ、帰ったところで洸たちは『存在しない人間』でしかない。

この世界が現実世界でも異世界でもない場所で行われる理由。
それは、参加者であるプレイヤーが決して逃げることのないよう、あらかじめ閉ざされた檻なのだ。
逃げることも、泣きわめいて蹲ることもできない。
戦うしかないのだ。
この世界から、文字通り生きて帰るには。

「ふざけんな…！！」

なんて、理不尽。
ただ適性があったというだけで。
それだけの理由で、洸たちはその命と、存在をかけなければならない。

だが、逆らうことは許されない。
どこの世界からも隔離されているといこの場所では、もう戦うしか道はない。

今ここに立っているというだけで、もう選択肢は残されてはいないのだ。
男の言葉は通告でなく、命令。
従うほかに、余地はない。

『これで、君たちが戦わなければならない理由が良くわかったと思う。』

それでも、声は続ける。
おそらく絶望に包まれているであろう小さな人間たちを見下ろしながら。

『だが、私たちも鬼ではない。この戦いに勝利したものには、望むものを与えよう。金でも、地位でも、名誉でも。何でも、君たちが望むものを与えることを、私たちはここに誓おう。』

一端言葉を切って、声は告げる。
その名を。

『金城勇一郎の、名の下に。』
「――――!!」

その名に、洸は覚えがあった。
天香が調べていたという大企業、金城グループ。
そのトップである、男の名前。
それが、金城勇一郎。

何故天香があれほどまでに焦っていたのか。
何故樹山町なんて田舎に開発の手が入っていたのか。

（…まさか、そういうことなのか？）

確かに、その名なら何だってできそうだ。
異世界を生み出すことだって、人の記憶を丸々消してしまうことだって。

（…いや、いくらなんでもそれは…）

信じることはできない。
それでも、認識するしかないのだ。
今洸がいるその場所は、間違いなく現実なのだから。

『それでは、そろそろ始めようか。』

そうして、全てを無視するように声は始まりを告げる。

『では諸君、勝者となって、また会おう。』

その言葉を最後に、声は途絶え、光も消失していった。
目の前には、先程と変わりのない夜空が広がっている。

「……。」

こうして、洸たちの長い戦いは幕をあけた。

嘘のような出来事。

それでも、それは現実で。

緑に輝く刀を携え、洸は変わらぬ夜空を、ただ見つめていた。

第二十八話

空全体を覆う光が消えた時、彼は湧き上がる笑いを堪えられずにいた。

「ははははははは…っ！！」

それほど、たった今目の前で起こったことは愉快だった。

「いいねえ。これほどのもんだったとは、流石に予想外だったぜ…っく、あははははは！！」

異世界、魔法。
大抵の人間なら、そちらに目がいくだろう。

だが、男は違っていた。
彼がこの世界を面白いと思ったのは、この場所で、こんな場所で戦いをするということ。
そして、この戦いが存在を賭けて行われるということだった。

余程、それが気に入ったのだろう。
男はしばらくそのまま笑い転げていた。

『…マスター。』

その様子を、近くの壁に立てかけられていた槍が見ていた。
この槍が、菫と同じ魔導器であり、男の、この戦いにおけるパートナーである。
火を起こす力を持つ槍、炎槍・桐（えんそう きり）。
そして、そのマスターである、赤梁陽（あかはり よう）。
洸たち同様にｓｅｖｅｎｔｈに無理やり召喚され、たった今、その理不尽ともいえる戦いの内容が明かされたのだが。
陽の表情に、絶望という言葉は微かにも存在していないようだった。
「ああ…悪い悪い。つい、笑っちまった。」
桐の赤い輝きを受け、陽はようやく起き上がった。
しかし、未だ笑いは尾を引いているらしく、顔はにやついたままであった。
『…それでは、これからの行動を説明する。いいな？』
「おお！！よろしく頼む。」
からからと笑う陽に、桐は大きく息をつく。
出会った時から、陽はまるで子供のようだった。
桐と出会った時も、この世界に誰もいないと知った時も。
彼は、絶望するどころかはしゃいでいた。
それは、まるで知らないことを知った子供のようで、桐には、異様に映った。
見た目も年齢も、陽はすでに２０をとうに過ぎている。

そのはずなのに、この幼さは何なのだろう。
ほとんど初めて人間と接する桐にとっては、まさしく異様だった。
こんな人間がいるのか、と。

だが、彼のその幼さは戦闘においては非常に役に立った。
初めて空と遭遇した時、彼は一切の躊躇をしなかった。
むしろ、自ら進んで、空を丸焦げにしたのだ。

そして、先程の出来事。
逃げ惑う少女を、彼は実に楽しそうに追い回した。
人をいたぶり、殺すのにさえ、彼は何の躊躇もしなかった。

それを見て、桐は確信した。
彼と、陽とならば勝てる、と。

通常の人間が留まるところで、彼ならば全開で踏み出せる。
それは、戦いにおいてかなり有利な要素として働くだろう。

だが、不安もあった。
先程、陽は少女がプレイヤーでないとわかった途端に、攻撃の意思を無くした。
その理由はわからない。
それが後々に影響しなければいいのだが…。
そう、桐は思った。

『――というわけだ。わかったか。』

大体の説明を終え、桐が言った。

話している最中、桐が驚いたのが、陽の姿であった。
話を聞いている時、そこにあの幼さは存在しなかった。
笑みは一切消え、拳を口に当てたまま、彼はずっと何かを考えているようだった。

「ああ。大体分かった。」

しかし、口を開いた時には、先程の笑みが戻ってきていた。
一瞬で、人格が入れ替わったかのような態度。

もしかしたら、この男はただ幼稚なのではないのではないか。
そう、桐は思った。

『では、どうする？早速拠点形成に入るか？』

拠点とは、プレイヤーの行動の起点となる場所のことである。
魔導器によって拠点として指定された場所。
そこでは休息と飲食料の補給が行える。
入るところを見られない限り、拠点は外部から発見されることはほとんどない。

一応、最初に魔導器がいた建物がそのプレイヤーの仮拠点となっているのだが、そこは１２時間が経過した時点で拠点としての機能を失うようになっている。
一度拠点を失ってしまうと、そのプレイヤーは満足に休息もできないまま戦い続けなければならなくなる。

拠点の形成には時間がかかり、少なくとも３０分は魔導器が扱えない無防備な状態になってしまう。

その時を狙われてしまったら、どんなプレイヤーだろうと一瞬でお終いになる。

そのため、大抵のプレイヤーが開始直後に仮拠点を拠点としてしまうのだが…。

「いや、後回しだ。」

『何…？』

驚きのこもった声で、桐は呟いた。

『では、どうするつもりだ？』

「さっきのあいつを探す。」

『…あの少年か。』

先程の少女をいたぶっていた時に、現れた少年。

彼もまた、魔導器を手にしていた。

陽は、あの少年がいたく気に入ったらしい。

確かに、皆が拠点を形成している間に攻め込むという戦法は有効だ。

事実、一番最初に開かれたｓｅｖｅｎｔｈでは、その戦法をとったプレイヤーが僅か数日で勝利してしまったという。

だが、その戦法は諸刃の剣。

失敗してしまえば、こちらは間違いなく勝機を失うだろう。

最悪、最初に脱落することにもなりかねない。

桐としては、それは何としても避けたい事態であった。

しかし――。

「…安心しろよ。別に全員を襲うなんて言わねーから。」
そんな桐の心境を知っているように、陽は言った。
「俺の狙いは、あのガキだけだ。」
そう言って、彼はまた笑った。
それを見て、桐は先程のことがより強く浮かび上がってきたのを感じた。
『…了承した。だが、いくら一人だけを狙うといっても、この町は広いぞ。一体、どうやって探すつもりだ。』
「それも、ご安心を。ちゃんと目星は付いてるよー。」
『何？』
パン、と手を叩くと、彼は右手の人差し指を、空へと向けた。
「あいつの剣、緑に光ってたよな。桐は赤。ってことは、魔導器によって光の色が違うんだろう。んで、俺がお前を見つけた時、空は赤く光った。…ってことは。」
『緑の光が上がった場所を探せばいい、か。』
「そういうこと。」
『……。』
陽と洸が対峙したのは、ほんの僅かな時間だけだった。
だというのに、彼は洸のことをしっかりと観察していた。
あんなに楽しそうに笑い、暴れていたように見えていたというのに。
子供のように無邪気かと思えば、冷静で、客観的でもある。
不思議な男だ。

桐は、そう思った。

『我らが出会い、あの少年の遭遇するまでに上がった光は、僅かに3つ。その内、緑の光は…ひとつだけだ。』

「その場所は？」

『南地区だ。』

にっ、と陽は笑った。

「じゃあ、決まりだな。」

そういうと、彼は桐を手に取って、軽く振りまわす。

ヒュン、と空気の切れる音を鳴らし、陽は槍を肩で止める。

素人が少し遊んだだけではできない動き。

達人などと比べれば幼稚なものなのだろうが、素人だらけの戦いの中では十分抜きんでているだろう。

「…ああ、そうだ。」

ふと思いついたように、陽は呟いた。

「ここにあるものって、使えるんだったよな？」

『ああ。ｓｅｖｅｎｔｈ内にある物はどのプレイヤーも使えるようになっている。』

魔法の能力によって極端な能力差が起きないように、との配慮らしい。

先程も、陽は建造物や草木を燃やし、その火を広げた。

ある意味、火の力を持つ桐にとってはありがたいルールと言えた。

『それがどうした、マスター。』

そう問いかけた桐に、陽は不敵な笑みを浮かべた。

「のんびり移動するの、面倒だろ？」

そういうと、彼は建物の外に出た。

そこには白と黒を基調にした車やバイクが大量に置かれていた。

『なるほど。』

それを見て、桐も納得したように呟いた。

その声には、笑みが含まれていたのを、彼自身気がついていなかった。

＊＊＊

高い唸りを上げて、バイクは町中を疾走していた。

「ははっ！！こりゃ気持ちいいわ！！」

一切スピードを下げることなく、バイクは駆けていく。

それも当然。

前も、後ろにも走るものなどいないし、遮る信号もないのだ。

今は、町中の道が陽のものと言っても良いほどだろう。

『飛ばし過ぎではないか、マスター。』

桐が言った。

槍は今、バイクの横に引っ掛けられている。

どういうわけか、バイクと風の音に邪魔されることなく、桐の声は陽に直接響いてきた。

陽の声も、桐には同様に聞こえているらしい。

これも、魔法の恩恵ということなのだろうか。

「ゆっくり行って、他の奴に取られるのは嫌だからな！！」

それでも、陽は自然に叫んでいた。

「それに、こっちの方が目立つ！！」

陽は、始めから自分で洸を探す気はなかった。

大体の位置まで近づけば、向こうからやってくるだろう、と考えていた。

先程の、少女を庇って立ちはだかった少年の顔を、陽は思い出す。

その表情には、楽しげな笑みが浮かんでいた。

バイクは、既に南地区へと入っていた。

後は、のんびりとこの周辺を回るだけ。

それだけで、向こうからやってくるはずだ。

しばらく、そのまま陽はバイクを走らせていた。
その時。
『……む？』
不意に、桐が呟いた。
「どうした？」
菫ほどではないが、桐にも周囲の索敵はできる。
動体がいれば、近い範囲でなら探知することが可能なはず。
『今、索敵範囲を何者かが掠ったようだ。』
来たか。
そう思った瞬間に、全身の血が滾った。
スピードなどお構いなしに、陽は桐を手に取った。
だが――。
『――！！何者かが急速接近！！来るぞ！！！！』
桐がそう叫んだ、その瞬間。
陽の目は、確かにそれを捉えていた。
道を駆け抜ける陽たち。
その少し右上に、緑に輝く光が浮かび上がったのを。

刹那。

陽の頬を、風が撫でた。

先程まで叩きつけるような風しかなかったというのに。

そして、まだバイクはスピードを落としてはいない。

「――――っ！！！！？」

その意味を、陽が理解した、

その、直後。

爆発が起こった。

第二十九話

駆け抜けてくる明り。
そこを目がけて、洸は刀を振り抜いた。

刃の先から、薄い風を起こすイメージ。
大気を、闇をすり抜けるその風は、バイクをいとも簡単に切り裂いた。

そして、爆発。

「……。」

目の前では、たった今までバイクであったものが火柱を上げている。

僅か、一瞬の出来事。

あっけない程、思い通りに進んでいた。

『魔法の着弾を確認。』

洸の左手で、菫が言った。
『イメージ、タイミング、共に完璧でした。』
「…ああ。」
応えつつも、洸は視線を外さない。
（さて、どう出る…？）
まだ、炎に動きはない。
だが、あの程度で倒れるとは思えない。
油断も、隙も与えない。
この男は、確実にここで倒す。
そう、洸は心に決めていた。

声による戦いの開始を告げられた後、洸も陽同様に今後の行動についての説明を受けた。
空（うろ）について、食料についてなど、話は中々に量があった。
その中で拠点形成の話を聞いた時。
洸は確信した。
陽は、拠点の形成などしないと。
咲を追い回している時も、洸がプレイヤーだとわかった時も。

彼はあんなにも楽しそうにしていたのだ。
そんな男が、のんびり拠点形成などするわけがない。
更に、彼は戦いの起きる前にあんな行動に出た。

（あんなことを…）

その時のことを思い出して、洸は刀を握り締める。
それは、洸の予想以上に強かったらしい。

『あまり力を入れ過ぎると、振りが鈍くなります。』

不意に、菫が言った。

「……っ！！」

びくりと、身体が震えた。
視線が、思わず菫の方へと流れた。

「……。」

だが、洸は応えなかった。
一瞬顔をしかめただけで、それ以外は何の反応も示そうとはしない。

『…マスター？』
「…了解。」

今度は、それだけを呟いた。
重く、腹の底から引っ張り出したような声。

そして、炎を睨む冷たい瞳。
明らかに先程までの洸とは違っていた。

「……。」

静かに、洸は前を見つめる。

炎は、洸に向って閉じた扇状に広がっている。

広い道。
両脇へと抜けられる時間はなかった。
隠れる場所もない。

そして、間違いなく男は生きている。

なら、いる場所は決まっている。

静かに、洸は息を吐きだした。

感覚を、思考を研ぎ澄ませる。

ゆっくりと、体中に力を満たしていく。
菫を手にした時に感じる、身体の奥で渦巻く力。
それが魔力なのだと、洸はようやく理解した。

渦巻くように、漂うように。
力は奥から身体の隅々まで浸透していく。
その力が、左腕を通して菫へと伝わる。
そして、その中心に収まる緑石へと到達した瞬間。
光は、輝きへと強さを増した。

これで、洸と菫の間に、パスが生まれる。
洸の魔力が、菫へと受け渡されたのだ。
後は、使うだけ。
この戦いにおける中心となる力、魔法を。

（…魔法、か）

先程、バイクを切り裂いた風も、洸が生み出した魔法であった。
初めて、自分の意志で使った魔法。
おそらく、うまくいったのだろう。

魔法とは、イメージである。
そう、菫は洸に言った。
魔法はプレイヤーの魔力を借りる形で、魔導器が発動させる。
その際、どのような魔法を使うのか。

決定権は魔導器にある。

だが、それではまともに戦うことができない。

実際に敵に攻撃をするのはプレイヤーであり、攻撃を受け、避けるのもプレイヤーなのだ。

彼らの行動まで、魔導器は操ることはできない。

魔導器が使用魔法の決定をすること。

それは、一切の意思を捨て、反射さえも制御しなければならないことを意味するのだ。

そんなこと、ただの人間にできるはずもない。

だから、通常、魔導器はその魔法決定権をプレイヤーに譲る。

どのタイミングでどの魔法を使うのか。

全てをプレイヤーが決めることになる。

その方法は、簡単だ。

プレイヤーは、ただ起きて欲しい現象をイメージすればいい。

そのイメージを受け、魔導器は魔法を発動させる。

もちろん、プレイヤーの魔力、魔導器のレベルに応じて使える魔法は限られてくる。

その時は、強い揺らぎをプレイヤーは感じるという。

恐怖と不安が混ざり合ったような、心の動きを、プレイヤーは受ける。

その揺らぎによってプレイヤーの思考は強制的に閉じられ、魔法は

強制的に解除されるのだ。
そして、魔法はそのイメージによって、大きくその威力を変える。
より正確に、より精密にイメージするほど、魔法は力を増していく。
どんなに追い込まれていようとも、どんなに昂っていようとも。
戦いの中で、プレイヤーは静かにイメージすることが要求される。

だからだろう。
洸は、陽を切るという光景を、イメージすることができなかった。
あんなにも怒りを抱いた相手だというのに。
彼の身体が裂け、別れるような光景など、想像できるはずもなかった。

だが、今はそれでよかったのだと思えた。

先程の光景。
１００ｋｍを超える速度で駆けていたバイクが、イメージの通りに真っ二つに裂かれたその様を、洸は確かに見た。

思い描いて、刀を振るだけで、人が殺せる。
魔法とは、そんな力なのだ。

できれば、今すぐに左手の刀を捨ててしまいたかった。
あれは、人に向けていい力ではない。

だが、これから先、その力を何度も使わなければならなくなるだろう。

でなければ、帰ることはできない。
姉の、友の待つ、あの日常へ。

…でも。
洸は、別にそれでも構わなかった。

今、居なくなったとしても。
美音も浩太も、天香も遼次も、誰も、洸のことは覚えていないのだ。

ならば、消えたところで別に構いはしないのではないだろうか。
誰も困らせないのなら。
自分は、案外消えることを選ぶのかもしれない。

そう考える洸が、確かにいた。

――だが。

（…今は、消えるわけにはいかないんだよな）

例え自分がどうであれ、洸は、心に決めたのだ。

茶織咲を、必ず連れて帰ると。

そのためなら、飛びこんでみせる。
死の隣り合わせの、この戦いにも。

その時。
炎の中で、赤い光を揺らめいた。
『動体反応あり。正面です。』
菫の言葉に応えるように、ゆらり、と影が立ちあがる。
途端。
その周囲の炎が、まるで男を避けるように分かれた。
平然と、陽は立っていた。
僅かに煤けているだけで、外傷は見当たらない。
やはり、生きていた。
「…ったく、無茶苦茶やるな、おい。」
相手は火を操るのだ。
爆発で倒せるとは、元より思ってはいない。
「随分な挨拶だな、ガキ。」
炎を纏って、陽は言った。
その声は、揺らめく火の中でもよく聞こえた。
「せっかくのバイクが、台無しだ。」
その顔には、あの笑み。
動揺は見られない。
「…さっきのお返しだ。」

呟いて、洸は刀を構える。
とはいっても、型も剣術も何も知らない。
ただ、掴んだ刀を腰の前に持ってきただけだ。

「へっ、そうかよ。」

それに対し、相手は槍を軽く振りまわす。
そして、既に魔法を幾度か使用している。

体躯に、余裕。
あるいは、全てにおいて勝っているのかもしれない。

「じゃあ…。」

槍が、強く輝く。
男の周囲で燃え上がっていた火が、穂先へと集まっていく。

先程洸を焼いた魔法。
その威力を、洸は身をもって知っている。

だが、それでも。
洸は、この戦いに勝つと決めたのだ。

この男は、その手始め。
負けるわけにはいかなかった。

「今度は、こっちの番だ！！！！」
「あああああ！！！！」

赤い炎塊が、緑の風が、放たれる。

――こうして、ｓｅｖｅｎｔｈ最初の戦いが、幕を切った。

燃え盛る赤。
吹き抜ける白。

誰もいない、忘れられた世界の中。
２つの色が、交わった。

第三十話

眼前に迫る火球。
それを認識した時。
洸は思わず、腕を振るっていた。
一度見た光景。
イメージをするのは、簡単だった。
菫が、強く輝く。
その瞬間、弛んでいた風が、弾かれたように刀へと集った。
風を纏った刀が、炎塊へと飲み込まれる。
感触は何もない。
ただ、目の前で、火は裂け、分かれていった。
腕が上まで跳ね上がったとき、２つの火が洸の脇をすり抜けていた。
（いける――！！）
それを見て、強い思いが洸の中で生まれた。
だが――。
開けた視界。
そこには、もう一つ、火球が迫っていた。

「――――っ！！？」

硬直する身体。

その瞬間。

思考も身体も、停止していた。

慌てて、反応しようとする。

だが、それでも遅かった。

迫る炎。

視界が赤に染まって。

洸は、顔に熱を感じた。

その瞬間。

『――――！！！！！』

菫が、強く輝いた。

「うわっ！？」

途端に、頭が横にぐん、と押される。

視界がぐりんと回った。

突き飛ばされたように、洸の身体が横へと倒れる。

菫の生み出した風が、洸を無理やり倒したのだ。

洸のすぐ脇を、火球が駆け抜ける。
握られたように、洸は脇腹に熱を感じた。
「くぁ…っ！！」
痛みを感じる暇もなく、地面へと倒れる。
（何が――）
いつの間にか荒れている息。
コマ送りのような視界。
頭が、全く追いついて行かない。
『申し訳ありません。緊急時のため、魔法を使用しました。』
菫の声が聞こえてくる。
だが、応えている暇はなかった。
『次弾、来ます。』
その言葉には、何とか反応ができた。
腕で身体を跳ね上げ、そのまま駆けだす。
背後から、赤い光が届いた。
自分は、倒れていたのだ。
そこまで来て、洸はようやく気がついた。

『１０時方向、次弾来ます。』

駆け抜けて、魔法を避ける。

もし菫が風の魔法でなければ、今ので確実にやられていただろう。
だが、そんなことを考える余裕は、洸にはなかった。
思考が全く追いつかない。
光に、音に、熱に、思考に。
頭の中がかき乱されていた。

（ふざけんな…！！）

それでも、言葉だけはやけに湧いてくる。

（こんなんで戦うとか…冗談も休み休み言えよ！！！！）

何となく、戦える気がしていた。
武器を持って、魔法を知って、怒りを抱いて。

そうすれば、戦える。
そんな風に、勝手に納得してしまっていた。

洸は、知らなかった。
『実際』というものが、ここまで違うということを。

『7時方向。次弾来ます。』

（くそ…っ！！）

菫の言葉に身を任せ、洸はひたすら駆け続けた。

＊＊＊

「はははははっ！！！！」

陽は、笑っていた。
とても楽しそうに。

それもそうだろう。
今、彼は求めていた戦いができているのだ。
楽しくないはずがない。

彼は、先ほどの場所から動いてはいなかった。
炎に囲まれ、包まれながら、洸へと火球を放っている。

たった2発。
それだけで、相手は混乱し、乱れた。
まあ、それも仕方がない。
相手は、ほんの少し前までただの学生だったのだ。
それを、突然こんな戦いに参加させられて、順応できる方がおかしい。

だから、桐は驚愕に近い感覚で、2人に関心を覚えた。
索敵の範囲を利用して奇襲を仕掛けた洸と、それをまともに受けてもなお一切心の乱れがない陽の両方に。

だが、洸の方は自分が攻撃をされる側になると困惑しだした。
それが当然の反応。
桐は、少し安心したくらいだ。

とはいえ、まだ油断はできない。
陽たちはまだ、洸たちの魔法について、ほとんど何も知らないのだ。

あのバイクを切り裂いた魔法。
あれを使われる前に、桐としては何としても洸たちを倒してしまいたかった。

＊＊＊

敵の魔法をかわしつつ、洸は何とか気持ちを落ち着かせる。

ようやく、目が慣れてきた。
眠っていたせいで、体力もまだ余裕がある。

だが、それでも相手の攻撃は激しい。
少しでも足を緩めたら、それでお終いだ。

風の魔法。
その特性は、速さにある。

風を纏った術者は、他者よりも速く動くことが可能になる。
それは、戦いにおいてとても有利なことだろう。

敵が槍を一度振るう間、洸は何度も剣を振るえる。
まだレベルは低いし、洸も戦いに慣れてはいないから、実際にはそれほどうまくはいかないかもしれない。
だが、それでも。
接近戦に持ち込めれば、勝機は多いだろう。

それに――。

「おら、ガキ！！さっきの威勢はどうした！！」
「…っく！！」

続いてきていた火球。
その隙を縫って、洸は風を放った。

先程、陽の乗るバイクを切り裂いた風。

洸のこの魔法は、プレイヤーに直接使うことはできない。
使ったら、相手は真っ二つに裂かれてしまうだろう。
本当は傷つける程度の威力を出せるのだろうが、そんな繊細な芸当ができるほど、菫のレベルも、洸のイメージも高くはなかった。

プレイヤーは攻撃できない。
なら、攻める場所はただ一つだ。

走りながらも、できる限りの魔力をつぎ込んだ風。
大気を、炎をすり抜けて、洸の『視た』場所――桐へと、吹き抜けた。

『――なっ！！？』
「うお！？」
途端、光が弾けた。

相手の魔導器。
その核を破壊してしまえば、その時点でそのプレイヤーは敗北が決定する。
そして、破壊した魔導器は、大量の経験値を得ることができるという。

相手を殺さずに勝つには、それが唯一の手段であった。
だが、同時に。
それは、最も難解な方法でもあった。

鋭い、刃の風。
それは、しかし槍を傷つけることはできなかった。

魔導器の要ともいえる核。
武器につけられた剥き出しのそれには、強力な結界が張ってあるのだ。
核を破壊するには、まずその結界を破らなければならない。
そして、その結界を破るには並大抵の威力では、及ばないのだ。

「危ない危ない…。でも、残念でした。威力が、足らねえよ！！！！」

そう言って、陽は再び火球を練る。
陽の言う通り、まだレベル１である菫に、その威力を出すことは難しい。
持てる魔力の大半をつぎ込まなければ、無理であろう。

つまり、チャンスは１度。
その間、魔力の使用は極力抑えなければならない。
そんな器用なことを、まだ戦いを始めたばかりの洸にできるはずもない。

だが――。

魔法を放とうと、陽は槍を空へと掲げている。
その姿。
それは、今の洸から見れば、それは大きな隙でしかなかった。

そして、今はまだ戦いを始めたばかり。
魔力はまだ、十分に残っていた。

（――菫！！！）

目を大きく開き、洸は相手を、その周囲を鮮明にとらえる。
はっきりと、自分の中で数瞬後のことを思い浮かべる。

『了解です、マスター。』

強く、洸は踏み込んだ。
腰を落とし、身体を前に傾ける。
不意に、身体がふっと軽くなる。
それでも、力は緩んでいない。

その、直後。

背中へと何かが触れた瞬間、洸は全力で飛び出した。
途切れる視界。
ただ、光の線だけが目に映る。

ぐん、と近づく景色。
そして、気がついたら火の中にいた。

「――――!!!!?」

目の前には、異変に表情を変える陽。
彼はまだ、洸に気づいてはいなかった。

（今――――!!）

全身に、力をみなぎらせ。
洸は、刀を振り抜いた。

第三十一話

声が、戦いの始まりを告げた後。

菫は、洸にある指示をした。

彼女曰く、声の言った魔導器のレベルを上げる方法――プレイヤーと戦うことと、空(うろ)を倒すこと――の他に、レベルを上げる方法が２つあるという。

１つは、魔導器の破壊。

強固な結界に守られた魔法の発動機を破壊することで、他の方法とは比べ物にならないほどの経験値を得ることができるという。

洸が今狙っているのが、これだ。

だが、それは最も難しい方法でもある。

自身の魔力の大半をつぎ込まなければ不可能なその破壊を、戦闘中に狙うことは、余程のことがない限りは難しいといえる。

だから、殆どのプレイヤーはこれを行うことはないという。

そして、もう１つ。

おそらく、最も簡単で、これまでのｓｅｖｅｎｔｈでも、最も多くの経験値を生み出したというその方法。

それは――。

＊＊＊

「――――！！！」

声にならない叫びを全身で上げながら、洸は刀を振りかぶる。

後ろへと伸びた手。

全身を引き抜くかのような、重み。

それを、思い切り振り絞って。

赤く輝く槍の核へと、振り切った。

放たれる黒緑の刃。

それが深紅の光へと触れる、直前。

青白い、閃光が迸った。

「――――――！！！」

半透明の膜。

核の周りに発生したそれが、核を守る結界だ。

それは風が押し返してくるように、刀が進むのを妨げる。

だが、そんなもの関係ない。

魔力を、力を全開で解き放ち、押し込んでいく。

「――――――！！！」

光が、魔力が明滅し、辺りを激しく照らす。
視界を覆う閃光。
咄嗟に閉じようとする目を、何とか押し開ける。
少しづつ、刀は結界を切り裂いていく。

あと少し。
洸は更なる力を振り絞って、刀に込めた。
だが――。

「――――ふっ・・・・。」

ほんの小さな、声が、洸の耳に届いた。
それを聞いた途端、洸の背筋に寒気がはしる。

そうだ。
いくら洸が速いといったって、ここまできて陽が気付いていないわけがない。
なら、なぜ何もしないのか。

その答えを知りたくて。
洸の視線は、陽の顔へと流れた。
その瞬間。

「あはははははっはははは！！！」
笑っていた。
敵が、すぐ目の前にいるというのに。
もうすぐ自分の魔導器が破壊されるというのに。
彼は、ただ笑っていた。

「良いね…！！最高だ、ガキ！！」
叫びとともに、赤の輝きが強くなる。
途端に、洸たちの周囲が、激しく燃え上がる。
２人を包んで、周囲の景色を隠すほど。

「……っ！！？」

熱が、洸へと襲い掛かった。
じりじりと、腕が、足が、背が焦がされていく。

反射的に、体は熱を避けようと、縮こまろうとする。
だが、今勢いを止めるわけにはいかない。
反射を無理やり我慢して。
洸は刀を押し進めようとする。

「まさか、いきなり飛び込んでくるとは思わなかったぜ。」

だが、これまでの勢いを無くし、刀は動きを止めていく。
周囲は炎の壁。
止まれば、逃げ場はない。

（まずい…！！）

「だが…。」

ゆらり、と視界が揺れた。
それが周囲を包む熱のせいなのか、陽から発せられる魔力のせいなのか。

どちらにしろ。
今、２人が魔導器をぶつけ合うこの場は、陽の場へと変化していた。

「どうして、俺を狙わない？」

不意に、洸は力を感じた。
刀がこちらへと押されていく。

「……っ！？」

まさか。
陽は自ら槍を、結界を刀へと押し付けてきていた。
そんなことをすれば、結界が壊れるのを早めるだけなのに。

だというのに、陽は構わない。
そして、洸を睨む陽の双眸。
それが、おぞましくて。

（何だよこいつ…！！）

寒気とともに、恐怖が洸へと襲い掛かる。

刀を持つ手が僅かにぶれた。
「俺を狙えば、それで終わった。なのにお前は核を狙う。なぜだ？」
力はどんどん増していく。
抑えきれなくて。
近づきたくなくて。
洸はどんどんと押し込まれていく。
押される、その先。
そこには、燃え上がる炎の壁。
「なあ。教えてくれよ。なぜ、俺を殺さない？」
「…っあ！！？」
背が、炎に近づく。
頭が、背が、足が、熱に焦がされる。
今すぐ、横へと逃れたい。
だが、がっちりと結界に埋まった刀は動かない。
「もしかして、知らないのか？プレイヤー殺し（キル）。」
「……。」
プレイヤー殺し。
これが、菫の告げた、もう１つの方法。
魔導器に魔力を供給する、動力源ともいえるプレイヤー。
それを殺すことで、大量の経験値を得る方法。

魔導器と違い、プレイヤーはあくまで人間だ。
魔法の１つでも受ければ、崩壊するであろう脆い体。
もちろん、結界にも守られてはいない。

あるいは、魔法など使わなくても殺すことが出来る。
洸の持つ刀だって、振ればそれだけで人を殺すことは出来るのだ。

得られる経験値は、魔導器の破壊に比べれば、確かに少ない。
だが、効率が違いすぎる。
魔導器破壊の２割もいかないほどの労力で、大量の経験値を得られるのだ。

だからこそ、皆それを狙う。

最も簡単で、最も使われる方法。
それが、プレイヤー殺しなのだ。

それを知っているからこそ。
陽は洸に問うている。
なぜ、自分を殺さなかったのか、と。

本来ならば、それは喜ぶべきことなのだ。
敵が自分を殺さなかった。
それは、生き残れたということなのだから。

だが彼は喜びよりも先に、怒りを抱いている。
それは、この男が異様であることを示していて。
洸は、更なる恐怖を抱く、筈だった。

だが――。

「…うるせえ…。」
「…あ？」
呟きとともに、刀に力が込められていく。
押されていた洸の体が、止まった。
「知ってるよ、そんなこと。」
プレイヤー殺し。
その存在を洸に教えた後。
菫は、洸に告げた。
『プレイヤー殺し、と呼ばれていますが、これはプレイヤーになりうる者なら誰にでも適用されます。』
と。
「俺は、誰も殺さない…。」
それが意味すること。
それは、つまり。
『ではマスター。先程の少女を殺してください。そうすれば、あなたは先程のプレイヤーに勝つことも、この戦いに勝利することも可能になります。』
どうして、菫が明らかに邪魔になるであろう咲を助けることに協力したのか。
洸は、不思議に思っていたのだが。
その意味が、これ。

（ふざけるな…）

戦うことすらできない奴は、死ねというのか。

生き残りたければ殺せ。
弱いものはせめて強者の餌となって死ね。
つまりは、そういうことなのだろう。

例えそうして生き残ったとしても。
もう、まともに生きていくことはできないだろう。

誰も知らないとしても。
その手が死でまみれていることを、自分が何より知っているのだ。

結局、元いた場所に戻ることなどできはしないのだ。
ここに、この戦いに呼ばれた時点で。
帰る場所など既になくなっているのだ。

「俺は、誰も、殺さない！！！！」

だから、洸は決めた。
こんな奴らのルールには絶対に従わない、と。

自分は絶対に、元の場所に帰る。
茶織咲を連れて。

『……。』

再び力を漲らせ、洸は刀を押しこんでいく。

全身から風が溢れだし、周囲の熱をも、押しこんで。
だが――。
「…そうかい。」
陽の槍が、さらに輝きを増した。
2人の頭上。
それまでずっと浮かんでいた火球が、さらにその巨大さを増していく。
（――！！まさか…！！）
ありえない。
そう思った直後には、その考えを改める。
この男なら、間違いなくやる。
それを示すように。
男の顔には笑みが満ちていた。
「じゃあ、やってみな！！」
叫びとともに、火球は2人の下へと放たれた。
「――――っ！！！！！」
『マスター！！！！！！！』
炎が、溢れた。

第三十二話

噴き上がる炎。
周辺が、赤く染められた。
２人のいた場所を丸々包み込んで、炎の柱は燃え上がる。
周囲の建物に届くかという程の炎柱を挟んで、２つの影が飛び出した。

赤と緑に輝く影。
同じ炎に呑まれた筈の２人。
しかし、倒れたのは片方だけ。
それは、緑の光を持つ影。

「あああっぁぁあああああぁあっ！！！？」

絶叫が、響き渡った。

着地とほぼ同時。
崩れ落ちるように洸は倒れた。
右腕に激しい痛みを感じた。
汗が噴き出、震える。
「っつ、ああああああああ！！」

右腕が焼かれた。
見るまでもなく、洸は激痛によってそれを理解していた。

しかし、それでも幸運。
本来ならば、洸はすでに全身を焼かれ、死んでいるところであっただろう。

炎が2人へと激突する直前。
風が、2人の間で爆発したのだ。

おそらくは、菫が起こしたのだろう。
陽もろとも吹き飛ばしてしまったが、今思えばいい判断だったといえる。

同じ風に吹き飛ばされ、おそらくは陽の方が重いはずなのに。
ようやく治まった炎柱の向うに覗く彼は、傷一つ負っていないように見えた。

おそらくだが、彼は自分の魔法では焼かれないのだろう。
洸の知る魔法ではよくあることであった。
菫は、そのことを知っていたはず。
だからこそ、陽を無視して洸を救おうとしたのだ。

それでも、きっと遅かった。
腕一本で済んだのは、本当に幸運だった。

「…っぐ、あ、あああ、あああああ」

だが、それでも。

襲いかかる激痛に洸は耐えきれずにいた。

『――ター！！マスター！！！！！』

菫の声が頭に響いてくる。

（…うるせえ…）

必死な声。

先程、洸に咲を殺せといった者の声とはとても思えなかった。

でも、どうしようもなかった。

腕の内側で、火花が上がっているような感覚。

身体は震え、碌に動くことさえできないのだ。

それは、きっと焼かれただけではないのだろう。

ほんのつい先ほどまで、洸の内側で渦巻いていた筈の魔力。

それが今は何も感じない。

つまり、今洸の魔力は０。

核の破壊に、魔力を使いすぎたのだ。

この震えは、こちらが原因なのだろう。

身体はだるく、痛みがなければすぐに意識を失ってしまう。

（…くそっ）

早く動かなければ、やられてしまう。

そんなことはわかりきっているのに、それでも洸の身体は動かなか

った。

不意に、影が落ちた。

「おい、ガキ。」

上から、声が聞こえてきた。

陽が、あの男がやってきたのだ。

洸の命をとるために。

「……つあっ、く…！！」

限界を超えた痛みに、しかし、洸は刀を強く握る。

痛みのせいでリミッターが外れたのか、異様なほどの力が出せる。

やってくる筈の槍を弾くため、洸は全身に力を込めた。

だが、槍は一向に振り下ろされなかった。

「お前、名前は？」

突然屈みこんだかと思うと、陽は言った。

（…何、言ってんだ、こいつ）

もちろん、洸に応える余裕はなかった。

痛みに叫ぶことはなかったが、それでも、ただ耐えるので一杯一杯だった。

だが、そんなこと陽には関係ないらしい。

「おい。」

右腕を、槍で弾かれる。
強く、ねじ込むように石突きを押しつけてくる。

「あああああああ！！！？」

鈍い痛み。
悲鳴が、身体の内側を殴打する。

「名前だよ。名前。」

しゃがみ込んで、陽が覗きこんでくる。
応えなかったら、腕を切り落とされかねない。
それを悟って。
何とか、洸は声を絞り出した。

「…し、らさき、こう…。」
「しらさき、か。覚えとくぜ。」

そう言って、陽は立ち上がる。
その顔は、笑顔に満ちていた。

「俺は赤梁陽だ。よろしくな、白埼。」

そこまでで、限界だった。
視界が一気にかすんでいく。

（…悪い、浩太。ごめん、美音姉…）

そのまま、洸の意識は闇へと堕ちていった。

＊＊＊

「……あれ？」

何かに呼ばれた気がして、茶織咲は目が覚めた。

「ここは…？」

辺りを見回す。
広い部屋。
物があふれてはいるが、奇麗に置かれている場所。
その場所に、咲は見覚えがあった。

「ここ、デパート？」

何故、こんな場所にいるのだろう。

「……あ。」

少し考えて。
咲は、それを思い出した。

目の奥に焼き付いていた、あの赤。
身を焦がすような、あの熱。

「そうだ、私…。」
震えが込み上げてきた。
熱くて、苦しくて。
もう、死んでしまったのかと思った。
「でも、どうして私、こんな所に」
今思い出しても、不思議だった。
動けなくて、倒れたはずなのに。
まさか、あの男が助けてくれたとは思えない。
「…あれ？」
そこで、咲は思い出す。
あの時。
咲と、男と、あと誰かがいたような気がしたのだけれど。
そう思うと、その時の光景がより鮮明に思い出されてくる。
（うん、確かにあの時、もう1人いた）
最後。
薄れゆく視界の中で、咲は誰かの背中を見たのだ。
緑に光る、背中を。
（あの人が助けてくれたのかな…）
よく見れば、自分はベッドに寝かされている。

枕もとには水と食料も置かれていた。
ここは、つくづく不思議な場所だ。
そう、咲は思った。

ずっと、こんな場所に放っておく癖に。
死にそうになると、こうして救いを差し伸べてくれる。

また、このようなことを経験するとは咲も思っていなかった。

「……。」

でも、生き残ったという喜びは薄かった。
まだ、こんな場所にいなければいけないのか。
その恐怖の方が、きっと大きかった。

「…私、なんでこんな所にいるんだろう。」

一緒に、遊ぼう。
そう、あの声は言っていたのに。

「遊ぼうよ、なら…。」

掠れた声で、呟いた。

その時。

『――――!!!!!』

途端に、耳朶を打つ声が聞こえた。

「ひっ…！？」

びくり、と身体が跳ねた。
慌てて近くの布団を集めて、抱える。

『――――！！！！！』

再び、声が聞こえてくる。
先程と全く変わらない声。

それは、咲には聞き覚えのない声であった。

「……。」

慎重に身構える。
まだ、声は聞こえている。

ただ、それはどうやら近くから聞こえてくる声ではないらしかった。

「え、なに…？」

それに安心したのか。
咲は、声を聞いてみようという気になった。
そのおかげか。
声は、鮮明に聞こえてきていた。

『――ここに！！』

どうやら、その声は咲を呼んでいるらしかった。
咲をこんな世界へと呼んだ声。
この声はその時のものとは違うけれど。
咲にとっては大した違いはないはずだ。

本来なら、こんな声に従う必要など、ない。
けれど、何故だろう。
この声は本当に自分に助けを求めているのだ。
そう思えた。
それほど、切実で、心の奥からひねり出したような声だったのだ。

『ここに！！早く、ここに！！！！』

「――うん。」

頷いて意を決すると、咲はベッドから飛び起きた。
今はこの声に従ってみよう。
そう、咲は思った。

＊＊＊

そして、咲は声に導かれるようにその場所へと向かった。

「…、これって」

そこは、炎に満ちていた。
辺りは炎に包まれて、熱と煙で充満している。

まさか。
この中に人がいるというのか。
だとしたら、急いで助けなければならない。
脳裏でフラッシュする恐怖を押し込めて、咲は声の方へと駆けだした。

そして、その先。
「！！！　いた！！」
倒れている影を見つけ、咲は駆け寄った。
「大丈夫ですか！！？」
屈みこんで、覗いてみる。
「…っ！！？」
途端に、固まる。
右腕。
その人物の右腕が、直視できない程の状態になっていたのだ。
赤と黒と、白が混じったようなそんな状態。
どうやったらこんな風になるのだろう。
『何を呆けているのですか！！！！』
「わっ！！？」

再び、声が響いてくる。

『緑の石に触れてください！！！』

「え、緑…？」

『いいから、早く！！！！！！！』

頭に響くほどの、大声。

思わず顔をしかめてしまった。

だが、今はそれに従うしかないだろう。

腕を見ないように咲は恐る恐る手を伸ばした。

その手が、菫の核に触れた、その時。

青い輝きが、周囲を満たした。

第三十三話

「――――。」

ぼんやりと声が聞こえて、洸は目が覚めた。
寝起きのせいか、意識はまだ定まらない。
全身がだるく、力もうまく入らなかった。

「――から、私にはそのような――。」
「えー？本当かなー。実は――。」

話声が聞こえてくる。
聞き覚えのある声。
片方は、菫だろう。
じゃあ、もう1人は――。

と、そこまで考えたところで、声の一方が洸に気がついた。

「あ、起きたみたいだよ。菫ちゃん。」
『だからその呼び名をやめてください、咲。』

話声が近づいてくる。
そこで、洸は自分がベッドに寝かされているのにようやく気がついた。

（あれ、俺…）

思わず、身じろぎをする。
その瞬間、自分の右腕のことを思い出して、寒気がはしった。
「――――っ！？」
目をぎゅっととじ、身体を縮込ませる。
だが、痛みは襲ってこなかった。
「……？」
不思議に思い、もう一度、慎重に動かしてみる。
やはり、痛みはなかった。
思い切って、腕を引き抜いた。
「……。」
洸は、目を見開いた。
そこには、奇麗な自分の右腕があった。
怪我も、火傷も、何もない。
（腕、治ってる…）
今でも思い出せる、あの痛み。
脳裏には、あの時の腕が焼き付いているというのに。

「大丈夫？」

不意に、視界に顔が現れた。
心配そうに覗きこんでくるその顔は、少女。

それが、咄嗟に誰かわからなくて。
洸は、思い切り見つめてしまった。

「……？」

首を僅かにかしげ、微笑むその表情。
それが、先ほど助けた少女のものであることに気付くのには、更に時間がかかった。

「…ああ、大丈夫だ。」

何とか、それだけ呟いた。
声がかすれている。

「あ、ごめん！！まず水だよね。」

驚いたようにそう言うと、彼女は洸を起こし、ペットボトルの水をゆっくりと飲ませてくれた。
生温かったが、久方ぶりに感じる水は喉の渇きを潤してくれた。

ようやく、洸の意識ははっきりとしてきた。

「ありがとう。」

飲み終え、口元を拭いながら洸は応えた。

「ううん、どういたしまして。」

そう言って、少女は笑った。
やはり、彼女は洸が助けた少女に、間違いなかった。
いつの間に、起きていたのだろう。
そして、なぜ彼女が自分の介抱をしているのだろう。

疑問は、沢山浮かんできていた。
だが、それよりも。

洸は、周囲を見渡した。
ベッド、タンス、机…。
そこは洸の見覚えのある、あのデパートのフロアだった。

（俺、どうやってここに？）

自分は道端で倒れたはずではなかったか。
いや、それ以前に。
自分はなぜ生きているのだ。
そう思う洸の脳裏に、あの炎を纏う男の姿が浮かんだ。

その時。

「…あの。」

不意に、少女が口を開いた。

「…？」

顔をあげ少女の方を見る。
俯いたまま、彼女はしばらく身をくねらせていた。
だが、意を決して顔を上げると、洸を見た。

「その、私こそ、ありがとう。」

視線を僅かに泳がせながら、彼女は言った。
緊張しているのだろうか。
それでも、しっかりと彼女は言葉を続ける。

「助けてくれたんだよね…。」
「…ああ。」

おそらく、菫から聞いたのだろう。
先程の声も、おそらくは2人が話していたもの。

彼女を殺せ、といった菫が教えたのだと思うと、少し不思議だったが。

「怪我は、ないか？」

先程治したところを見ているのに、洸はそう言ってしまっていた。
やはり、見たところ怪我はしていない。

「うん、大丈夫だよ。白埼君は？」
「ああ、俺も何とも…って。」

驚いて、洸は彼女を見る。

「名前、なんで…？」
その驚きようがおかしかったのだろう。
少女は、少し噴き出した。
「そりゃ、わかるよ。同級生だもん。」
その言葉で、洸は彼女が茶織咲であるということに、ようやく確証が持てた。
胸の中の重みが息とともに抜けていったような感覚。
安堵のため息を洸は大きくついた。
「覚えてたのか。」
「？当たり前じゃない。」
「…そうか。」
その同級生の、顔も名前も碌に覚えていなかった洸としては恥ずかしかった。
だが、それよりも咲を無事に見つけられたことの喜びの方が大きかった。
これで、ここに来た目的の大半は果たしたことになる。
しかし、このままのんびりしているわけにもいかない。
「それで、俺は一体…。」
2人で帰るには、まずこの戦いに生き残らなければならないのだ。
そのためには、ゆっくりとしてもいられない。

まずは、自分のいる状況を確認しなければならなかった。

『治癒球（ヒールボール）を使用しました。』

洸の問いに、不意に、菫が応えた。

そういえば、目覚めてからまだ菫の姿を見ていなかった。

「…菫？」

声のした方向へと目を向ける。

そこには巨大な魔法陣と、その中心に突き立てられた菫がいた。

『初戦闘、お疲れ様でした、マスター。』

緑の光を放ちながら、菫は魔法陣をゆっくりと回転させている。

それが、何なのか。

訊ねる前に、洸は思わず呟いていた。

「治癒球を…？」

『はい。』

治癒球。

それは、あくまで生身であるプレイヤーたちがこの戦いを生き抜くための救済措置の一つ。

先程の洸のように、人間はただの一つの魔法でさえも受けてしまえば簡単に破壊されてしまう。

それを防ぐには、魔法を使うなり、回避するなりしなければならないのだが、いつまでもそうしていられるわけもない。

戦いを続けていけばプレイヤーは必ず魔法を受けることになる。
そうすれば、プレイヤーは大抵の場合再起不能になる。

それは、この戦いの主催者側としても好ましくない事態なのだろう。
だからこそ、彼らはプレイヤーに治癒球を与えた。

治癒球は、その中に身体を癒す魔法が封じ込められている。
これにある程度の魔力を流すことで中の魔法が発動される。
封じられた魔法は、その名の通り治癒魔法。
これを発動すると、余程の大けがでない限りプレイヤーの傷は回復される。

つまり、即死でもない限りプレイヤーはどんな攻撃を受けたとしても完治することができるのだ。

この治癒球は、すべてのプレイヤーにそれぞれ４つ支給されている。
洸はすでに咲の治療、自身の治療に使っていたため、残りは２つになっていた。

ちなみに、治癒球はどういう原理だか、核の中にストックすることができる。
そうすることで、戦闘中にも怪我の回復ができるようになるのだ。

「でも、あの時…。」

本来なら、あの時洸も火傷を治すことができた。

だが、あの時洸は、魔力をほぼすべて失ってしまっていたのだ。
魔力がなければ、治癒魔法も使うことはできない。

『はい。確かにマスターの魔力量は、ほぼ0でした。』

なら、なぜ洸の傷は治っているのか。
その答えを、菫はあっさりと告げた。

『ですので、咲にお願いしました。』
「え…？」

咄嗟に、咲の方を見る。
彼女は笑顔のまま、頷いた。

『彼女をあそこまで呼び、核に触れてもらったのです。所有者でなくとも、少量なら魔力を借りることは可能です。その魔力を利用して、治癒球を使用しました。』
「…なるほど。」

それならば、なぜ自分がここにいるのかも納得ができた。

だが、そうなると咲は洸と菫を担いでここまで戻ってきたことになる。
そんな力、ないだろうに。

洸はもう一度咲を見ると、頭を下げた。

「ありがとう。茶織。」
「え、いいよ、別に。私だって助けてもらったんだし、ね？」

お互いさまと笑って言う咲を見て、洸もようやく顔を上げる。

『申し訳ありません。緊急事態だったもので。』

「いいよ。…いや、むしろおかげで助かった。ありがとう。」

『…いえ、当然のことをしたまでです。』

これで、洸がなぜここにいるのかは理解ができた。

だが、もう一つの疑問はどうしても晴れそうにはない。

（何で、あいつは俺を殺さなかった…？）

赤梁陽（あかはりよう）と名乗った、あの男。

彼は、洸にも菫にも手を出さなかった。

だからこそ、洸はここにいて、菫も無傷のままだ。

菫が破壊できないことは、相手が魔法を乱発していたことから何となく理解できる。

だが、洸を殺さなかったことは、どうしても不思議に思えた。

殺すことに躊躇うような男では、ないだろう。

ならば、何か理由があるのだろうか。

洸を生かしておかなければならない理由が。

「…それで、菫のそれは一体何をしてるんだ？」

考えながらも、洸は口を開いた。

先程からずっと気になっていたのだ。
「えっとね、なんか、じんちってのを作ってるんだって。」
「じんち？」
呟く洸に、ため息混じりの菫の声が聞こえてきた。
『…拠点のことです、マスター。』
「ああ、拠点か。」
話に聞いてはいたが、拠点形成にはマスターは必要ないらしい。
現に今、菫が拠点形成をしているのが何よりの証拠だ。
『こちらも、勝手に行ってしまって申し訳ありません。ですが、あのままだとマスターが目覚める前に仮拠点の期限がなくなりそうだったもので。』
「…そんなに、寝てたのか。俺は。」
呟く洸に、咲が天井を見上げる。
しばらく考え込んだ後、口を開いた。
「半日くらいは、寝てたんじゃないかな。心配したんだよ。私も、菫ちゃんも。」
「…菫ちゃん？」
それが何を意味しているのか、一瞬わからなくて、洸は呟いていた。
「うん。あのこ、菫って言うんでしょう？だから、菫ちゃん。」
『私としては、そのような呼称はやめてほしいと言っているんですが…。』

困惑するように、菫が言った。
常に冷静で、冷酷なはずの菫が、困惑している。
それに――。

「菫ちゃん、か。…ははっ。」

思い返して、笑みが浮かんできた。

『笑わないでください、マスター。』
「いや、ごめんごめん。…いいじゃないか、菫ちゃん。可愛くて。」
「でしょう？…ふふ、ははっ。」
『マスター…。』

低い声で、菫が呟く。
だが、洸も咲も、笑いを止めなかった。

殺せと言っていた筈の菫と咲がこうも仲良く話していることが、何よりおかしかった。
本当ならば笑うことではないのかもしれないが、なぜだか、とても可笑しいことのように思えたのだ。

気絶する間際、聞いた菫の声。
洸を呼ぶあの叫び声。

あれはただのＡＩの声には、どうしても聞こえなかった。
今の会話からしても、そうだ。

ＡＩにしては菫は、とても人間臭いのだ。

もしかしたら、菫には感情というものがあるのではないか。
そう思えた。
まあ、魔法の宿る武器なのだ。
感情くらい、あっても不思議ではなかった。

だが、もしも。
もしも、菫に感情があるならば。

いま、咲と楽しそうに会話している彼女は、あの時一体どんな気持ちで咲を殺せと言ったのだろうか。

しばらく、洸と咲は笑っていた。
思えば、ここにきて初めて笑った気がする。

笑うことが、こんなに心救われることだとは思ってもいなかった。

こんな時間が、ずっと続けばいいのに。
だが、その願いは決して叶えられないことを、洸は身に染みて理解していた。

第三十四話

そうして。
ひとしきり笑い終えると、洸は表情を引き締めた。
これで、緩やかな時間はお終い。
生き残るには、のんびりしているわけにはいかないのだ。
「さて。だいぶ元気も戻ってきたし。そろそろ、本題に入ろうか。」
洸のその言葉に、一気に部屋は静かになった。
咲も菫も黙って、洸を見ている。

「菫。茶織に、どこまで説明した？」
『ここが異世界であること、空（うろ）のこと、魔導器のこと。…それだけです。』
洸の問いに、菫が静かに答える。
そこに、先ほどまでの感情はかけらも含まれてはいなかった。

「じゃあ、まだほとんど話してないんだな。」
『はい。』
ふう、と小さく息をつく。
確かに、これは自分の口から言った方がいいのかもしれない。
話しについていけないのか、曖昧な表情を浮かべている咲に向き直る。

「茶織、少しいいか？」
「…うん。」
洸の表情から何か読み取ったのだろう。
咲は真剣な表情になって洸を見返してくる。
「これから、ここで何が起きてるのか、話す。…心して、聞いてほしい。」
2人でここから出るには、確実に咲の助けがいる。
だがそれは、咲にこれまで受けてきた恐怖の、それ以上のものを与えてしまうかもしれない。
「……。」
洸を見て、咲はゆっくりと頷いた。
その手が僅かに震えていることに、洸は先程から気がついていた。
いくら強がっていても、これまでの恐怖が消えることはないだろう。
一人でこの世界にやってきて。
怪物に追われながらも何とか生き延びて、炎に焼かれて。
それでも何とか、救いに出会うことができたのだ。
しかし彼女は今、それ以上の恐怖を知るかもしれない場面にいる。
怖くて当たり前だ。
苦しくて当然だ。
それでも話さなければならない。

これを知ったら、咲は壊れてしまうかもしれない。
それは、ひとえに洸の話にかかってくるのだ。
そう感じた途端、身にのしかかるようなプレッシャーを感じた。
（…落ちつけ）
大丈夫、彼女ならきっともってくれる。
そんなあてのない気持ちを抱きながら、洸は口を開いた。
「まず、俺たちはここ、ｓｅｖｅｎｔｈという異世界にいる。そして、ここから出るには、戦って、生き残らなければならないんだ。」
それから洸は、咲に全てを話した。
これまでのこと。
そして、これからのこと。
菫が拠点を形成し終わった後も、話は続いた。
＊＊＊
「…あー、だるい。」
暗い空の下、呑気な声が響いていた。
地上を濡らす赤光。
その赤に包まれるように立つ男が一人。
自身の身の丈に迫る程の槍を担ぎ、彼は空を見上げている。

ふと、その手の槍が赤く輝く。
『これで、満足か。マスター。』
その光から、重く、低く響く声が漏れてくる。
その声は、疲れているようであった。
「ああ、まあ、これくらいなら充分か。」
『…そうか。』
男の言葉に、声はひどく安心したのだろう。
大きく息をつきながら、呟いた。
『では、いい加減拠点の形成をしてくれるのだな。』
「おう。じゃあ戻るか。…ふわぁ、俺も、そろそろ眠くなってきたしな。」
伸びをすると、男はふらふらと歩きだした。
「しっかし、なんだってこんなだるいんだ？」
『おそらく、魔法の使いすぎだ。』
気だるそうにする男に、声は冷たく言い放つ。
『魔力がなくなると、体内で急速な魔力の補給が起こる。そちらの方に体力がもっていかれて、身体に脱力感が襲うのだろう。』
「…ふーん。」
わかっているのか、いないのか。

男は生返事を返すだけ。

（…まったく）

赤い光を灯す槍。
桐という呼称を与えられた魔導器であるその槍は、自身の所有者を見てため息をつく。

この男、陽は、戦いが始まってからまともな行動を取ってくれない。
拠点形成は何時間経ってもやってくれないし、碌に説明も聞かずに他のプレイヤーを攻めに行く。
そして倒した相手を、殺さずに帰ってくる。
更には――。

「んで、拠点の場所はどうしようか。」

桐の思考を遮るように陽は呟いた。
それに怒りもせずに、桐はすぐに思考を切り替える。

『仮拠点の効果はまだ残っている。通常なら、そこを拠点とするのだが…。』

そこで、桐は言葉を渋った。
その先を引き継ぐように陽が口を開く。

「白崎にばれる可能性がある、か？」
『ああ、その通りだ。』

先程の戦闘相手――しらさきこうと名乗ったあの少年は、陽が乗っていたバイクを見ているかもしれない。

もし見ていたならば、そこから陽の拠点を判別される危険があるのだ。

だが――。

「いいじゃないか、それで。」

『…マスター。』

やはり、この男はそういうのだろう。

何よりも、戦いを望む。

そのためには自分が、他者がどうなろうと構いはしないのだ。

短い付き合いだが、桐にはこの男の思考が少しづつわかってきていた。

「向こうからわざわざ来てくれるんだ。手間が省けていい。」

『だが、それでは寝首をかけ、と言っているようなものだぞ。』

「寝首、ねえ…。」

その言葉に、陽はにやりと笑う。

「それができるなら、俺はとうに死んでるよ。」

『…それは…。』

陽の言うことは、確かに理解できる。

白埼洸は、先ほどの戦いで決定的なチャンスを手にしながら陽を殺せなかったのだ。

更には、自分から他者を殺さないことを宣言している。

それは、もしかしたら嘘であることも考えられる。

だが、陽は彼の言葉を信じているようであった。

むしろ、陽は始めからそれを確信していた節がある。
いくら敵が速かったとはいえ、陽があの攻撃を防げなかったとはどうも思えないのだ。
わざと彼は大きな隙をつくった。
そして、白埼洸を試した。
桐にはそうとしか思えなかった。

陽は、白埼洸を気に入っている。
彼を殺さずにいたのが何よりの証拠だ。

確かに、目を引く少年だと桐も思う。
この状況にあって、人を殺さないことを選ぶのは臆病者くらいのものだろう。
しかし、あの少年は違う。

彼は、何か強い信念を持って他者を殺さないと告げていた。
そして、それでもなお帰ろうとする意志がある。
不可能といえるその２つの両立を、彼は成し遂げようとしている。

それは、確かに心ひかれることだろう。
彼がどんな行く末を送るのか。
見てみたい気持ちは、桐にもあった。

だが、下手な心情は戦いの邪魔でしかない。
油断は、自分を殺す。
相手を少しでも思いやってしまえば、そこを突かれてやられてしまうのだ。

「まあ、ただもう一度あいつと戦ってみたいだけなんだがな。」
だが、そう言って陽は笑う。
赤に染まった、頬をゆがませて。

「それに、俺はもうあいつに負けることはない。…そうだろ？」
『…それは、当然だ。』
「なら、それでいいだろ。…安心しろよ。」

未だ不満そうに呟く桐に、陽は続ける。

「次、戦ってあいつに変化がないようなら、それで終わりだ。」

そう告げた、陽。
その周囲には、赤々と燃え盛る炎があった。

彼を中心に、広がる炎。
その一方の先。
そこには赤と黒にまみれた、一つの影があった。

まるで人のような形をした、その影。
その真横には、銀で編まれた鎖が砕かれ、散らばっていた。

その内の一つ。
鎖の一端がつながれた、腕輪のようなもの。
そこには、火の光を受けて鈍く輝く、緋色の石がはめ込まれていた。

第三十五話

全身に当たる風を感じながら、洸は駆けていた。
相変わらずの暗い空の下。
入り組んだ路地を抜け、洸は南北を貫く大通りへと飛び出した。

『前方、魔力反応あり。…空（うろ）、３体と思われます。』

右手に握られた、菫が告げる。
それに合わせるように、丁度、目の前に白い影が現れた。

「…了解！！」

その言葉に応え、洸は体内で練られた力――魔力を全身へと漲らせた。
開かれた視界に蠢く、白い影。

その影へと導く風を、洸はイメージした。
途端に、菫が輝く。

想像は、洸の魔力に乗って菫へと運ばれる。
そして溢れる緑光を受け、魔力は流れる風へとその姿を変える。

緑光とともに生み出される風。
その風に乗って、洸は影へと肉薄した。

のんびりとした空は、目の前まで接近してようやく洸の存在に気がつく。
僅かに振り上げられる腕。
だが、もう遅い。
洸は、刀を振り抜いた。
「――――！！！！」
柔らかな感触。
それは、水でも切るかのように。
空は、そのまま２つへと裂かれた。
（…一体目！！）
別れた身体。
その合間を突き抜けて、洸は次の空へと迫った。

＊＊＊

あの後。
洸は、咲に事態の説明をした。
咲が消えた時から、天から響いた声が戦いを告げるまで。
説明は長い時間に及んだ。
菫が既に拠点形成を始めていたのは、幸運と言えた。

多少時間がかかったとしても、拠点にいる限り他のプレイヤーや空に見つかることはそうそうない。
安心して、洸は説明を続けることができた。

咲は、根気よく洸の話を聞いてくれた。
浩太が咲を探し続けていたという話を聞いた時。
彼女は素直に喜びを表した。

「そっか、浩太君が…。」

そう呟いた彼女の顔はとても嬉しそうであった。
その表情を見て、やはり2人はただの幼馴染ではないのだろうと洸は思った。

だが、話が声の告げた戦いの代償――命と存在についてに及んだ時。
彼女の表情は一変した。

固まり、引き攣ったような表情。
身体は震え始めていた。

その視線は、揺れていて。
まるで縋るように洸を見つめた。

その目に宿る感情を洸はよく知っていた。
彼女はまだ、信じられないのだろう。
自分が、既に皆から忘れられた存在になっているということに。

その気持ちは、洸にもよくわかっていた。
できれば、洸だってそんなこと信じたくはない。
だが、洸はすでに見てきている。
茶織咲という存在を忘れてしまった人々を。

これは、間違いなく現実なのだ。
そしてこの現実から日常へと帰るためには、戦いへと臨まなければならない。

だが、洸は咲に無理強いする気はなかった。
彼女の助けは必要だが、無理矢理手伝わせたところで無意味だ。
迷っていたら殺される。
それを、先の戦いで洸は感じ取った。
だから、洸が話を終えた時彼女が震えた声で
「…少し、考えてもいい…？」
と告げても、洸は迷うことなく了承した。

＊＊＊

洸は今、空を狩っていた。
それは、咲が考えている間、洸がいれば考えづらいのではと思った

のもある。

だがそれとは別に、洸には空を狩る目的が2つあった。
1つは、陽と戦って実感したこと。
魔導器の破壊を目指すのならば、相手よりレベルが高くなければならないということ。

もう、陽にはあのような隙はできないだろう。
まだ見ぬプレイヤーには通用するかもしれないが、こちらだって相手の魔法がどんなものかなんてわからない。

相手の魔法を避けたり、防いだりするだけで魔力は消費する。
核の破壊に殆どの魔力を使用する現状では、それを目指すことは無理といえるだろう。

それに、洸にはもう治癒球が1つしか残されてはいない。
あと1度。
たった1度しか、洸は『死ねない』。

2度目の死は、即ち終わりを示す。

自らは傷つかず、的確に相手の核だけを破壊する。
そんな芸当、同レベルであった陽相手にさえできなかったのだ。
相手のレベルがもし高かったら、それこそ不可能だ。

だからこそ、洸は誰よりも早くレベルを上げなければならなかった。
そのために、洸は空を倒していた。

そして、もう１つの理由。
それは、このｓｅｖｅｎｔｈで生きるには必要になることなのだが
――。

＊＊＊

１体、２体と切り裂き、洸は最後の空へと跳んだ。
既に２体の仲間を失っていたその空。
流石に、ただでやられてくれはしないらしい。

風のような洸の動きに、その空は反応してみせた。
胴体へと振り抜いた刀へと、空の腕が振り下ろされる。
下方への衝撃にそれた刀が、地面を抉る。

「…っ！？」

振り抜いた腕。
そこに預けた身体が傾く。

勢いにのまれ、身体は制御不能。
暴れた身体は、そのまま宙を流れる。

それを目がけて、空が腕を振るう。
無防備な身体。
防ぐものは何もなかった。

「……っ！！」

だが、洸はイメージを走らせる。
それに合わせるように、菫が輝いた。
途端に巻き上がる、風。
渦を巻くようなその風に乗り、洸の身体が回転する。
風を受け、勢いを増した刀。
それは、伸ばされた白い腕を容赦なく切り裂いた。
「――――！！！！」
呻き、咆哮を上げる空。
こんな生き物に痛覚があるのが不思議な感覚だが、叫ぶのだから仕様がない。
そのまま、洸は着地する。
だが、まだ終わってはいない。
回転で残った勢いを乗せ、洸は再び刀を振り抜いた。
「あああああ！！！！」
咆哮を上げ、風を纏った刃を閃かす。
黒は、あっという間に白を塗りつぶす。
いとも簡単に裂ける身体。
聞こえぬ断末魔を上げて。
空はそのまま消滅していった。

『空、消滅確認。お疲れ様です、マスター。』
「ああ。」

呟いて、洸は刀を振った。
別に血などが付着したわけではないのだが、何となくやってしまう。

「今ので、何体目？」
『7体目になります。』
「…7体か。」

拠点を出てから、３０分は経っただろうか。
まだ咲は迷っているだろうが、あまり長い時間一人にしているわけにもいかない。
それに、そろそろ荷物がいっぱいになる頃だろう。

「それじゃあ、そろそろ戻りますか。」
『了解しました。』

そう言って、洸は来た道を振り返る。

洸が、振り返ったその道。
そこには、先ほどとは違う変化が起きていた。

「何度見ても、変な光景だよな、これ…。」

呟く洸の、その先。

そこには不思議な白い塊が３つ、置かれていた。

『そうでしょうか。それほど不思議でもないと思われますが。』

「…まあ、菫はそうだよな。」

その内の、一番近くにあった塊に洸は近づく。
何の躊躇もなくそれを手に取ると、洸は背負っていたリュックに、それを押しこんだ。
むにゅりとした感触の、円柱状の白い塊。
太さは片手で掴めるくらいだが、長い。
２０ｃｍはあるだろうか。
手をめいっぱい広げて、ちょうどくらいの長さ。

この不思議な物体。
これは、空の残骸である。
空は倒されて消える際、これを残していく。
いうなれば、空たちの核と言うべきものなのだろうか。

見た目にも、感触も、あまり触れたいものではないのだが、この残骸はｓｅｖｅｎｔｈで生きていくためには何よりも必要なものなのだ。
この残骸――菫曰く『白核（はくかく）』というらしいこれこそが空を狩らねばならない第２の理由である。

「しかし、予想以上にでかいなこれ…。リュックには…５つしか入らないか。」

リュックの中は、既に白核で埋め尽くされていた。
下手に押し込んで、潰してしまうわけにはいかない。

（いや、潰れるのかどうかはわからないんだが…）

仕方なく、洸は2つを脇に抱えることにした。
残骸の表面は滑らかで、重ねていると滑ってしまい運びづらい。
だが、菫には鞘がなく常に手に持ってなければならない。

（…まあ、落としたら落としたで構わないか）

そう割り切って、洸は立ち上がった。

「…菫。」
『はい、マスター。』

菫にそう告げて、洸は目を閉じる。
ゆっくりと、イメージを整えていく。

思い起こすのは、自身に纏う風。

自分の身体を覆う、柔らかな緑の光をイメージする。
それは舞うように洸の周囲にあって、洸が身体を動かすたびにそっとその後を押してくれる。
それがこの魔法のイメージだ。

そうして、すっと目をあけた時。
洸は自身を覆う風を感じた。

「…うん。」

上手く出来た。

体は軽く、僅かな動きで跳ね上がる。
まだ、洸はこの状態の体を完全に制御することは出来ないでいた。
だが、それもすぐになれるだろう。
ただ出来れば、それまでにはプレイヤーとは遭遇したくなかった。

「じゃあ、帰ろうか。」
『了解です。』

そう言って、洸は駆けだした。

＊＊＊

拠点となったデパートへと、洸たちは戻ってきた。

この風に包まれている時、洸は普段の倍近い速度で動くことができる。
おかげで、移動時間はかなり短縮できる。
どれだけ早くに、多くの魔法を使用できるのかが鍵になってくるこの戦いでは、これは、他の魔法に比べるとかなり有利であると言っていいだろう。
ただ移動するだけで魔法を使用できる、というのも強みだ。

その代わり、魔力と体力の消耗が激しいのが欠点といえる。
プレイヤーと戦うときのことも考えて、調整していかなければならないだろう。

そんなことを考えながら、洸は自分が既に戦いの中に身を置く者の思考に変わっていることに気がついた。

これまでの生活の中では考えられないこと。
ただ、それを面白いと思う心も洸の中には確かにあった。

「あ、おかえりなさい。」

中へ入ると、咲と遭遇した。
突然入ってきたことに驚いたのも一瞬。
それが洸だとわかると、咲は安堵のため息をついた。

「…何、してるんだ？」

思わずそう尋ねてしまう。
洸自身、咲の出現に驚いていた。
まだ咲は上で悩んでいると思っていたのだ。

「うん、えっとね。とりあえず必要そうなものを集めてるの。」
「…なるほど。」

確かに見てみれば、咲の腕には様々な物が抱えられていた。
それは薬にタオルなど生活必需品といえるようなもの。

（そうか、こういうのも必要なんだ）

そういえば、戦いのことを考えているばかりでそう言ったことは何も考えてはいなかった。
これから2週間ここで暮らすことになるのだ。

必要なものは沢山ある。
洸は、驚愕していた。
それに気付かなかった自分にも、それに気がついた咲にも。
「あのね、白埼君。」
呆然としている洸に、咲が口を開く。
「私は、運動ってあまり得意じゃないし、その、魔法…？を使った戦いなんて、できない。」
言葉を選ぶように、ポツリ、ポツリと咲は話していく。
「…だから、私はせめて食事とか、そういったことで白崎君を手伝っていこうと思うの。…駄目、かな。」
「……。」
洸は、咲の目を見つめた。
視線に驚いて僅かに泳いだけれど、咲もしっかりと視線を合わせてきた。
その目に、諦めの色は見られなかった。
それを見て。
「…いや、それで構わないよ。」
微笑みながら、洸はそう応えた。
「もともと、俺は茶織に戦わせようなんて、考えてない。戦うのは、

俺の役目だ。茶織は、その手助けをしてくれれば十分だよ。」

これで、洸の気持ちは定まった。
洸は戦いに専念できるし、拠点にいる限り咲も安全だと考えて良いだろう。

「…ありがとう。私、頑張るから！！」
「ああ。」

そう言って、咲は階段へと駆けていった。
その後姿に微笑んで、洸も後を追うように歩き出した。

こうして。
現実世界から逸れた、白と茶。
２つの色が、交わった。

第三十六話

デパートの最上階。
食糧や治癒球が置かれていた以外は何もないその場所に、洸たちはいた。

フロアの真ん中には、大きな魔法陣。
そのすぐ横に洸が立っていて、少し離れた場所で、菫を持った咲がその様子を見守っていた。

洸の手には、先ほど空(うろ)を倒して手に入れた白核が一つ握られている。

「じゃあ、いくぞ…。」

小さく息をついて、洸は背後の2人を確認した。

「うん…。」
『どうぞ。』

咲と菫が、少し離れたところから頷いた。
それを見て。
恐る恐る、洸は白核を床へと置いた。

途端に、床に描かれた魔法陣が鈍い輝きを放った。
それに合わせるように、核も仄かな光を発して周囲は小さな光に包まれた。

「おお…！？」

思わず、洸は飛びのいた。
だが、光はすぐに収まった。

代わりに、白核のあった周りを包むように煙が上がっている。
白煙に隠されて、その中は見えない。
その先を見ようとして、洸は屈んで覗きこんだ。

『もう大丈夫です。咲。』
「あ、うん。」

菫をもって、咲が洸の横までやってくる。
2人して屈んで煙が晴れるのを待った。

すぐに煙は無くなって中のものが露わになる。
そして、2人はそれを見た。

「「…おお。」」

途端に、呟きが2人の口から洩れる。
2人の視線の先。
魔法陣の中心に置いたはずの白核。
それが――。

「パンに、なったね。」

食べ物に変化していた。

「まさか本当に変わるとは…。」

２人して、呆然としていた。

これが、空（うろ）を狩るもう一つの理由。

白核は拠点内にある魔法陣に置くことで、何かしらの飲食料に変化するのだ。

菫曰く、ｓｅｖｅｎｔｈで飲食料を確保するには、これしか手段がないのだそうだ。

それは、生き残るためにはどちらにせよ空を狩らなければならないということを意味している。

そして外に出ている限り、プレイヤーとの遭遇の可能性は少なからず存在する。

これならば、どんなに戦いを嫌がっているプレイヤーでも戦わざるを得ない。

それほど、主催者は洸たちを戦わせたいらしい。

ともかく、これで飲食料の問題は解決だ。

戦うことを厭わない洸には先ほどのことも関係ない。

むしろ、積極的に倒していくべきだろう。

白核なら傷む心配もないから、ストックしておくこともできる。

レベルも上げられるし一石二鳥であった。

「この、白いの一つで食べ物一つってことなのかな。」

プニプニと白核をつつきながら、咲が言った。

すかさず、菫が光る。
『そうなります。』
ふーん、と相槌をうちながら、咲はリュックに詰められた白核を覗いていた。
「じゃあ、今白崎君が集めてきてくれたので1日分かな。」
咲の言葉に、菫が点滅する。
『…？2人分として考えると、少ないように思えますが…？』
「ああ。私はそんなに食べないから、いいんだ。」
咲はほほ笑んだ。
『咲は、小食なのですね。』
「うん…へへ。」
そう言って、笑う咲。
明らかに疲れているその表情を見て、洸はため息をついた。
「…違うと思うぞ。」
『…マスター？』
早速できたばかりのパンを掴むと、洸は咲にそれを手渡した。
「これ、食べな。」
「え…。」

一瞬、何を渡されたのか分からなかったのだろう。
ぼんやりとしてそれを見た後、咲は慌ててそれを突き返してくる。

「い、いいよ！！私お腹空いてないし…。」
「…半日何も食わなくて、空いてないわけないだろう。」
『そうなのですか、咲。』
「そ、そんなこと…。」

そこまで言ったところで。

ぐー、と大きな音が鳴った。

「……あ…。」

呟いて。
顔を真っ赤にしたまま、咲は俯いてしまった。

それを見て、洸はため息をつくと同時にほほ笑んだ。
咲が何を考えているのかよくわかったからだ。

もう一度、パンを咲の手の中に戻して、洸は言った。

「家事ってのは、意外と体力勝負なんだよ。だから、しっかり食べないと、倒れちまうぞ。」
「…うん。」
「それに、これから嫌って言うほど空を倒すことになるんだ。そんなペースじゃ、食いきれなくなっちゃうよ。」
「……ありがとう。」
「どういたしまして。」

それから、ゆっくりとであるが咲はパンを食べ始めた。
やはり、余程お腹が減っていたのだろう。
一度食べ始めたら、後は夢中になって食べ続けた。

＊＊＊

そうして、咲が食べ終わったのを見届けると洸は立ち上がった。
「さて、それじゃあもう一回行ってくるかな。」
『了解しました。』

白核を取り出して、再びからになったリュックを背負う。
本当ならもう少し大きなものに変えた方がいいのだろうが、その捜索は咲に任せることにした。
やることが多い方が、咲も集中できていいだろう。

床に刺さっていた菫を引き抜いて、洸は階下へと歩き出そうとした。

「あ…。」

ふと、咲が小さく呟いた。
見れば、何やら戸惑っているような、そんな表情を浮かべている。

「…？どうした？」
「あ、ううん。何でもないの。」
「そうか…。」

また、何か考えているのだろう。
けれど、今回はそれが何なのかは洸には分らなかった。
（まあ、無理に聞く必要はないか）
何か大事なことならば、咲から話してくれるだろう。
洸はそれを待てばいい。
ただ、のんびり待っているような時間はないのだけれど。
「じゃあ、こっちでの準備、よろしくな。」
今、洸は拠点の移動を考えていた。
洸たちの拠点である、デパート。
そこでなら、大抵のものが揃う。
それは、かなりの利点といえる。
最初の仮拠点がデパートだったのは、幸運だったといえるだろう。
だが。
逆に、そう言ったものを求めてプレイヤーがやってくるという可能性は十分考えられた。
そんな場所を拠点にしていたら、何が起こるかわかったもんではない。
菫曰く、拠点を複数形成することはできないらしい。
必要なものをすべて集めたら、拠点の移動を考えなければならない。
それも、できる限り早く。

その旨を伝えると、咲も菫も了承してくれた。
洸が外で空の討伐と新しい拠点の捜索。
咲は拠点で必要なものをまとめておく。
それが、２人がたてた２日目の行動計画。
一人でやるには難しい作業であるが、なるべく早く拠点の移動をしてしまいたかったのと、咲を外に出さないようにと考えるとこれしか考えられなかった。
「うん。任せて。」
ぐっと、拳を握る咲。
その表情からは、少しだけだけれど元気が出てきていた。
それを確かめて。
洸は今度こそ外へと向かった。
階段を下へと向かって、ゆっくりと降りていく。
『マスター。』
その時、不意に菫が口を開いた。
緩やかに、緑の光が明滅している。
『その、一つよろしいでしょうか。』
「どうした？」
そういえば、菫からこうして話しかけられたのは初めてな気がする。
戦闘の時と戦いについての説明以外、碌に話などしていなかったか

ら。
洸は、驚いて菫を見た。
少し躊躇っていた後、菫は呟いた。
『何故咲は、あのような嘘をついていたのですか？』
「……。」
その言葉に、洸は更に驚いた。
それは、この戦いにおいてはおそらく何の関係もない質問だったからだ。
自ら殺せと言ったはずの人物に、菫は興味を抱き始めているのだろうか。
思えば、洸が目覚めて以来。
菫と咲は仲が良いように見えた。
少なくとも、洸よりは2人の方が頻繁に会話しているだろう。
話しているうちに、咲への興味が芽生えてきたのだろう。
やはり、菫はただの機械とは違うようだ。
『…マスター？』
「ああ、悪い悪い。」
小さく息をつくと、洸は口を開いた。
「多分、遠慮してたんだと思う。」
『遠慮、ですか？』
洸の言葉に、菫が瞬いた。

「ああ。」

自分は戦わないから。
ただ守られるだけだから。
そんな自分が、限りある食糧を使うわけにはいかない。

彼女は、そう考えたのだろう。

『そうですか…。』

そう言って、菫はそれきり黙ってしまった。
それを見て洸はほほ笑む。

何にせよ、菫のこの変化は好ましく思うべきだろう。

『ありがとうございます。』

だが、ふと洸は思う。

（…いや、変化してどうするんだ？）

菫とは、2週間の付き合い。
それが終われば自分たちと菫は分かれることになる。

そうなれば、菫に芽生えた変化は邪魔になるのではないか。

たったの2週間。

それが過ぎれば、自分たちはどうなるのか。

菫はどうなるのか。

こんなに近いはずのことなのに。

洸には、その時の光景がなにも浮かび上がっては来なかった。

第三十七話

それから、しばらくが経って。
何体目かの空の身体を、洸は切り裂いた。

「――――！！！！」

もう聞き慣れてしまった断末魔を耳にしながら、洸は刀を振った。
消えていく白い身体。
そこには白核だけが残される。

『空、撃破確認。』

菫の機械のような声が聞こえてくる。
それを聞いて、洸はようやく動きを止めた。

「…よし。」

少し身体を動かして、確認。
身体も魔力も異常は感じない。
疲れも、大しては残ってはいなかった。

（…あれだけ、戦ったってのにな）

それほど、自分が戦いに慣れたのだと洸は思い知らされる。
１０を超える数の空を倒していれば、当然とも言えたが。

洸が再び外に空を狩りに出てから、1時間程が経過した。
倒した空の数は白核の数で言うならば6体といったところか。
途中から先頭に夢中になっていた洸は、数えていなかったのだ。

（まあ、これだけあれば十分だろう）

鞄に詰め込まれた白い塊を見て、洸はそう思った。
先ほどのと合わせれば、1日2日の食料は確保できたはずだ。
拠点移動の前にあまり荷物を増やすわけにも行かない。

とりあえずはこれでいいだろう。
そう、洸は考えた。

「…さて、じゃあ次は拠点探しをしようか。」

鞄を背負うと、洸は言った。

息を吐きながら、目を瞑る。
自身を包む、のイメージ。
左腕に形成されたパスを通って、それは菫へと運ばれる。

『了解しました。……？』

不意に、菫が口を閉じる。
魔法はすぐに起こらず、異変に洸は目を開いた。

「菫、どうした？」
『あ、いえ。……。』
「…？」

その様子に洸は首をかしげる。
どうしたのだろうか。
何かを感じたならば、菫なら言うはずなのだけれど。

（何だ？）

洸もつられて、辺りを見回す。
暗い町並み。
白い怪物も、肌色の人もいない。
今ここに立っているのは、洸だけだ。

『何でもありません、マスター。』
「そうか。」

おそらく、空か何かが索敵範囲を掠めたのだろう。

「じゃあ、行くよ。」
『了解しました。』

今度こそ、洸のイメージは魔法に変換される。
自身を包む風の魔法。

空との戦闘は、もうこの魔法だけで勝てるようになっていた。
柔らかい体を持つ空は魔法を使わなくても倒すことが出来る。
防御も回避もせずに飛び込んでくる空は、より早く動くことのできる洸にはただの的であった。
だから、刀さえ振り切ることが出来ればそれでよく、それ故に洸はこの魔法を使いこなすことが出来てきていた。

始めこそその速度に困惑していたが、今ではもう慣れたもの。
倍以上の速度で近づいてくる周囲の景色に反応するだけの反射神経も身についてきていた。

ただ、それほどに便利な魔法でも欠点はあった。
それは燃費。
数十キロもある洸の身体を運んでいるのだ。
消費する魔力も馬鹿にできない。

既に長時間風を纏っていた洸は、残存魔力が少なくなってきていた。
これ以上は、空が相手でも戦闘するのは避けた方が良さそうである。
なるべく静かに、なるべく早く、新しい拠点を見つけなければならない。

（まずは茶織の家に行って、そこから南下するか）

そんなことを考えていた、その時。

『――――！！！！！』

不意に、菫が光を放った。

「うわっ！？」

刀を持つ左腕が呑まれるほどの強い光。
緑に光るいくつかの線が、菫から放たれた。
あまりにも強い光。
それが目に飛び込んでくる前に、洸は目を遮った。
その光が収まった時、しかし、菫には何の変化も起きてはいなかった。

「……？」

目を守るように差し出していた手を退ける。

「菫、今のは？」

呆然としながら、菫を見た。
しばらくすると菫が口を開いた。

『…おめでとうございます。ただ今、レベルが2に上がりました。』
「！！本当か？」
『はい。』

静かに、だが微かに驚きのこもった声で菫が言った。

（そうか、ようやく…）

陽との戦闘。
１０を超える空の撃破を持って、ようやく１つ。
洸はこの戦いの終わりへと近づいた。

残るは、後８つ。

おそらくは、レベルは上がるにつれて必要な経験値は増えていくのだろう。
だとすれば目標まではまだまだ遠い。
この辺りの空を狩りつくしたとしても、きっと足りはしないだろう。
核を破壊できれば話は変わってくるのだろうが。

（難しいよな…）

そう考えて、洸は首を振った。
少なくとも、これで他のプレイヤーと同等かそれ以上の力を得られたことになるのだ。
まだそこまで深刻に考える必要はないだろう。

もう2日目。
他のプレイヤーも、そろそろ活動を開始しているはずだ。

おそらく最初の1日2日は空を狩ったり、生活に必要なものを集めることに時間を使うのだろう。
大したレベル上げも、出来てはいないはずだ。
陽との戦闘。
拠点がデパートであったこと。

治癒球を既に3つも消費したことは痛かったが、洸にはまだかなりのアドバンテージがあると考えて良いだろう。

今のうちに拠点を移動させ、デパートを狙ってやってくるプレイヤーを襲撃する。
それが、洸の考えていた戦闘の方針であった。
拠点の利点の一つとして、魔導器はその内部構造を詳しく把握することが出来る。
それを利用すれば、罠を張ることも相手を混乱させることも出来るだろう。

誰の拠点でもないデパートにまさか罠があるとは思わないはず。
だからこそ今は、プレイヤーとの遭遇を避け、速やかに新しい拠点

の発見、移動をしなければならなかった。
ただ、咲と荷物と一緒に移動させなければならないから、あまり遠くに移動するわけにも行かない。

近すぎず、移動が難しくない場所。
洸としては南地区の西側。
浩太や茶織の家の近くにしようと考えていた。

理由は単純。
その周辺にはプレイヤーがいないと確信していたからだ。

茶織を探すために、洸は南地区から西地区にかけて走り回った。
その時、菫は他の人間を感知してはいなかった。
魔導器発動時の光もその方角からは見られなかった。

人も、発動した魔導器もいない。
誰かが移動でもしていない限り、その周辺は無人のはずなのだ。

そう考えて。
洸は早速行動に移ろうと、魔法をイメージしようとした。
その時。

『これで、レベル2の空も問題なく倒せるでしょう。』

菫が、呟いた。

「ふーん、そうか。」

なんとなく応えて。
洸は目を閉じた。

「…。」

「……。」

「……？」

そこで、洸は動きを止めた。

「…待て、レベル２？」

思わぬ言葉に、洸は驚く。

振り向いて菫を見た。

『はい。空にも、我々と同じようにレベルが存在します。』

空は、地区単位でひとまとめにされている。

その地区に拠点を置くプレイヤーのレベルの平均値やその他特定の条件が揃うと、それに合わせる形で各段階の空が発生していくらしい。

『レベルは、５段階まで存在します。』

驚く洸を無視して、菫は淡々と続ける。

『これまでマスターが倒してきたのは、第一段階、レベル１（ファースト）の空になります。』

開いた口をそのままにして、洸は菫を見ていた。

「ちょっと、待て待て。じゃあ、何だ。空もまた、魔導器みたいにどんどん強くなっていくって言うのか。」

慌ててそう言った。

『はい。レベル２（セカンド）の空は、肉体強化と群れる習性が付与されています。』

つまり、今度は一対多数の戦闘が起こるということ。
しかもその一体一体は以前よりも強力になって。

「……。」

急なその話に、洸は一瞬我を忘れていた。
これでは呑気に食糧集め、とはいかなくなってしまう。
咲の言っていた通り、本当に食事の制限をかけなくてはいけなくなるかもしれない。
菫はその空にも問題なく勝てるとは言っているが。

だが、今考えるべき問題はそこではない。

「…随分急に、言うんだな。」

何故、それほど大事なことを菫は黙っていたのか。
もし洸が以前にその条件を満たしていたら、死ぬ可能性だってあったというのに。

『申し訳ありません。一度に大量の情報を与えては、マスターが混乱するかと思いまして。』

そのことを告げると、菫はそう答えた。

「…そうか。」

そう言われてしまえば、もうどうしようもない。
洸自身、混乱していたのは事実。

大きく息をついて、洸は思考を切り替える。
この際だ。
洗いざらい話してもらおう。

「ちなみに、第二段階の空が現れる条件は？」
『その地区のプレイヤーのレベルの平均が、２以上になることです。』
「…そうか。」

なら、もう既に出てくる可能性があるということ。
もし南地区にいるプレイヤーが洸だけだったならば、間違いなく現れるだろう。
他にプレイヤーがいて、その者のレベルが2以上であった場合も同様だ。

（レベル上げも、しっかり考えろってか？）

レベル1の空と同じように考えるなら、レベルが2に上がっている洸たちが第二段階の空を恐れる理由はないだろう。
だが、魔導器であるこちらは１０段階にあるのに対し、空は5段階。
同じレベル2だからと言って、油断はできない。

プレイヤー云々以前に、空から生き残らなければならないとは考え

もしなかった。

（しかし…）

治癒球の時、咲の時もそうであったが、菫は情報をギリギリまで隠しておく傾向があるらしい。
レベル2になることは必須事項であったし、最優先目標であったから空のことは知っていても知らなくてもどの道出会うことにはなるのだろう。
だがそう何度も情報を隠されていては、洸は菫を信用できなくなってしまう。
それは、思考で、イメージでつながったパートナーである2人にとっては致命的である筈だ。

洸の思考はイメージとして菫に伝わる。
だが、菫の思考は彼女が言葉にしないかぎり洸に伝わることはないのだ。
今更に、洸は自分たちの関係のもろさを思い知らされる。

「なあ、菫。」

だが、それらはすべて過ぎたこと。
知らないのならば、教えてもらえばいいのだ。
知らないのならば、教えてあげればいいのだ。

『はい。』

菫の想いを、洸の想いを。
そして、2人の関係を。

「これからは、知ってること、なるべく教えてほしい。」
少なくとも、もっと早くにその空のことを知っていれば対策くらいはたてられた筈だ。
何より、菫は咲のことを知っているのだから。
『…わかりました。』
少し間を置いてから、菫はそう答えた。
『では、現時点で私が把握している空の情報を教えます。』
「ああ。」
洸は頷く。
まずはここからだ。
『まず、先ほどお話ししたように、空は5段階まで存在します。今まで倒してきた第一段階。その肉体強化版であり、集団で行動する習性を持つ第二段階。』
集団での戦闘。
プレイヤー同士でそれが起こる前に、空で経験させるといった目的なのだろう。
『ここまでが、いわゆる雑兵としての空です。』
「雑兵…？」
『はい。これより上の段階。第三段階以降の空は、プレイヤーに匹敵するほどの戦闘能力を持ちます。…油断をするしないでなく、ここからは、実力の領域に入ります。』

実力、と聞いて。
洸は癒えたはずの右腕が疼いたのを感じた。
『ですが、それ故に、第三段階以降の空は出現条件も限定されています。余程のことがない限り、出現することはないでしょう。』
「レベルだけじゃないってことか。」
『そうなります。』
洸の言葉に応えて、菫は言葉を続ける。
『まず、第三段階（サード）。これは、身体能力が特別に強化された個体です。個体に応じて、力、速度、硬度等突出した能力が付与されており、相性によっては天敵ともなり得ます。』
セカンドとは違い、個体能力の身を追求した空ということなのだろう。
プレイヤーに匹敵しうる能力を持つ空。
できれば戦いたくはない相手だろう。
『サードの出現条件は、空の撃破数とプレイヤーのレベルが影響します。ですが、詳しい数値は私も知りません。』
「あまり空を倒し過ぎない方がいいってことなのかな。」
『確証がありませんので断言はできませんが、気をつけた方がいいでしょう。』
「そうか。」
（確かに、これは混乱するな）
それを聞きながら。
洸は、先ほど菫が言っていたことを強く思い知っていた。

空の撃破数など、いちいち数えてなんていられない。
レベルだって、自分で制御することは難しいだろう。
だが、やはり知っていることはそれだけで力になる。
忘れないように洸は菫の言葉を頭に叩きこんだ。
『次に、第四段階（フォース）。これは、とにかく大きな身体を持つ空です。巨大で、少なくとも、マスターの拠点であるデパート程の大きさはあると思われます。』
その言葉に、洸は目を見開く。
「デパートって…あれ、６階だぞ！？」
『もしかしたら、それよりも大きいかもしれません。』
「……。」
デパートより大きな空。
考えて、洸は頭を振った。
（そんなのと、戦わなくちゃいけないのか…？）
子供の頃見た、町を踏みつぶす怪獣。
今イメージに浮かんだものは、それそのものであった。
「勘弁してくれよ…。」
思わず、そう呟いていた。
『フォースの出現条件は、一定以上のレベルを持つプレイヤーが４

名以上戦闘に参加することです。』
「乱戦に現れるってことか。」

プレイヤーが４人。
ただでさえ混乱している状況に、その怪獣。
一定というレベルの条件は曖昧で、菫も教えられてはいないらしい。
流石に２で現れることはないだろうが、事前に知っているのといないのでは大きな違いがある。

少なくとも、何も知らない状況で目の前にそんなものが現れるなんて御免であった。
いきなり見上げるほどの空が現れて、対処などできるはずもない。

（その点では、この魔法はかなり優位なんじゃないか…？）

洸を包む風の魔法。
これは、ただ洸の速度を上げるだけではないらしい。
空中での移動、姿勢制御といった、３次元的な動きでの戦闘。
この魔法は、レベルが上がり、魔法の出力等が上昇することによりそれを可能にさせる。
つまり、その気になれば空を飛ぶことができるようになるのだ。

それを知った時は、流石の洸でも興奮を覚えた。
生身のまま自在に空を飛び、戦う自分。
本当に、漫画の中の住人に自分は近づいているのだ。
そう考えると、不思議な感覚であった。

レベルを上げていけば、洸はその領域に達することができる。
後は、イメージを完成させるだけ。
飛び回り、怪獣と戦う自分の姿を。

（できるのか？そんなこと）

不安は、強くあった。
だが、どちらにせよやらなければならない。
咲も菫も守り抜いて。
勝って、生き残らなければならない。

（あいつを、倒せるのか？）

脳裏に浮かぶ、あの笑顔。
炎の槍を持ったあの男。

２度相対し、１度敗れた。
今では洸の狙いも、弱みも知られている。

（今なら…）

洸のレベルは２。
陽のレベルが１のままなら、勝つ見込みがあるのではないだろうか。

だが、今は拠点を移動させねばならない。
でも今このチャンスを逃したら、もうこのような状況は訪れないかもしれない。

（…どうする）

洸は決断できずにいた。

『…マスター。』

不意に、菫が口を開いた。
考え込んでいた洸は、その言葉に一気に我に帰る。
そういえば、菫をほったらかしにしていた。

「あ、ごめん。」

魔法を発動させたまま考え事をしていたから、不審に思ったのだろう。
そう、洸は思っていたのだが。

「どうし…？」

言いかけて。
洸は、顔を上げた。

何だろう。
何か、肌が焼けるような痛みを感じた。

『近くで、魔力反応を感知。』

それは、既に2度も体験した、あの痛み。

『高速でこちらに接近してきています。』

（いや、まさか…）

そう思うけれど。
身体は、首を振ってはくれなかった。

そして、その直後。

目の前の道。
その脇に置かれた自動車が炎を吹き上げて爆発した。

「…おいおい…。」

噂をすればなんとやら。

橙に染まる視界。
赤々と燃える、鉄の塊。

そこから、もう何度も見た赤い光が覗いていた。

『魔法反応感知。』

炎が分かれ、一人の男が現れる。

『炎槍桐のものです。』

菫の声が洸に届くころ。
洸の視界に、あの笑みが映る。

「元気かー？白崎洸ぉ。」
「赤梁、陽…！！」

おそらく、魔力は互角。
勝敗を分けたのは、プレイヤーの覚悟。
洸は相手を殺すことを恐れ、向こうはそれを厭わなかった。
その、差だ。

それに、今は空を何体も倒した後。
前回のように核破壊を狙う魔力は、残っていない。

（どうする…！？）

洸だって、何も考えていないわけではない。
彼なりに、陽と戦うための手段はいくつか考えてはあった。
勝てる見込みはある。
後は、それをやるかどうかを決めるだけ。

（…ん？）

ふと、洸は気付いた。

陽の周囲。
その大気が、不自然に揺らいでいるのに。

（あれは…）

『…マスター。』

まだ、炎は生み出されてはいない。
おそらく、彼の魔力による揺らぎ。
それは、とてつもなく大きくて。

『今すぐ、逃げてください。』

だからだろう。
菫が何を言いたいのか。
洸はすでに理解していた。
『相手の魔導器。そのレベルは…5です。』
菫の言葉が洸の耳に届く前に。
「昨日の続きを、始めようぜ。」
赤い光が、洸の視界で弾けた。

第三十八話

目の前に浮かぶ、小さな赤い球。
周囲には、いくつもの赤い光の筋。
放射するように広がるそれが、まるで吸い込まれるように中心へと移動していく。

視界の中で起こる、その現象。
それが何を起こすのか。
洸はすぐさま理解した。

光の線をその内に取り込むたびに、球は大きさを増していく。
一瞬にして、手のひら大ほどにまで成長したその球。
――直後、それが一気に収縮する。

（やばい…！！）

全身に、寒気が奔る。
我も忘れて。
洸は咄嗟に、横へと飛びのいた。

この時、洸にはまだ身に纏う風の効果が残ったままであった。
一瞬で光から逃れ、道の端まで跳んでいった洸。

咄嗟の反射。
その意味もわからない、その、直後。

爆発が、起こった。

「――――っ！！？」

光と炎熱、圧縮された大気が一斉に押し寄せる。
風を纏って身軽になっていた洸は、いとも簡単に吹き飛ばされた。

浮き上がった身体は、そのまま背後の塀へと叩きつけられる。

「くぁ…！！」

潰れた身体から、息が漏れる。
走る衝撃、ぶれる視界。
全身に、鈍い痛みが走った。

だが、怯む隙はない。
すぐさま、腹部にあの球が現れる。

（くそっ！！）

洸は、菫を塀に突き刺した。

「菫！！」

叫んで。
思考を、叩きつける。

『了解です、マスター。』

菫が、眩く輝いた。

途端に、剣先から風が巻き起こる。
暴発する風。それは、洸の埋まった塀を、幾分か弾きだした。
抑えがなくなり、洸の身体が落下する。
ただ、のんびり落ちている暇はない。

（よし…！！）

身体を回転させ、塀を蹴り飛ばす。
空中へと躍り出ると、向かいの塀へと着地した。
直後、２度目の爆発。

「……っ！！？」

襲い来る余波。
だが、今度は吹き飛ばされはしない。

刀を振って、爆風を切り裂いた。
同時に、イメージを送り込む。

緑の輝きとともに、洸は風を巻き起こす。
周囲を流れる爆風さえも巻きこんで。

洸は、崩れかけた足場を蹴飛ばした。

弾かれる視界。
遠くに見えたどこかの屋根が、一瞬で目の前までやってくる。
それを、何とか踏みしめて。
洸は、移動を開始した。

屋根を伝って、洸は周っていく。
視界の先で、陽はまだ、一歩も動いてはいなかった。

「おお、速い速い。」

それでも、陽は洸の動きをはっきりと捉えたまま。
その姿に焦りという文字は微塵も感じられない。

（どうする…！！）

菫が言うには、陽はすでにレベル５だという。
昨日まで、洸と同じくレベル１であったはずなのに。

だが、今起きた魔法。
あれは、爆発の魔法であった。
既に、陽の魔法はただ炎を起こす段階を超えているらしい。
その結果が、あの爆発。

自身から、魔導器から離れた位置での魔法の発動。
炎を飲み込む、炎熱の暴走。
それをレベル５と言われるならば。
洸は、信じるよりほかはなかった。
レベル２の洸と、レベル５の陽。
どちらが有利かなんて、誰だってわかる。

逃げろ。
菫が告げたその言葉を、洸は全身で感じていた。

だが――。

（逃げるのか、俺は…）

その想いが、洸を引き留めていた。
まだ、怒りはある。
こいつを倒したいと、今にも左腕を振るいそうになる。

『マスター！！何を迷っているのですか！！』

そんな洸の動揺を読み取って、菫が叫ぶ。

「でも…。」
『今ここであのプレイヤーと戦う利点は何もありません。…無駄死にする気ですか！！』
「……っ。」

確かに、菫の言う通りだろう。
勝てるはずもない。
彼の炎を見るたびに、右腕は消えた傷跡が疼く。
怒りと同時に、恐怖も、まだ消えてはいないのだ。

『咲を、帰すのでしょう！？』
「…！！」

菫の叱咤に、洸は我に帰る。

そうだ。
迷う必要など、どこにもない。

（今は、逃げる！！）

今の洸の目的は、拠点の移動だ。
勝てぬ相手と戦う理由はない。

「行くぞ、菫。」
『はい！！』

纏った風を弾けさせ、洸は陽から離れる方へと飛び出した。

＊＊＊

「あら…？」

その洸の行動を見て、陽が呟く。

『どうした。逃げられたぞ、マスター。』

彼の持つ槍が冷やかすように言った。

「何だよ、逃げんのかよ…。」
『仕方あるまい。我はすでにレベル5。相手は、まだレベル2であったようだ。』
「……。」
『まともな者なら、マスターと戦おうとするはずもない。』
「だから、こっちから向かってやったんじゃないか。…ったく。」

そう言って、陽は槍を振りまわした。
赤い光が尾を引いて、円を描いた。

始点と終点。
交わった途端に、そこに輝く文字が現れた。
「逃げきれると、思ってるのかねぇ。」
『全くだ。』
不敵にほほ笑むと、陽はその魔法陣に穂先を突き刺した。
輝く核。
それに合わせて、魔法陣も強く輝いた。
空中に、槍が固定される。
それを確認して、陽は飛び上った。
「行くぜ。」
『了承した。』
短く言葉を交わした。
その、直後。
爆発するように、炎が噴き上がった。
途端に、陽の姿が掻き消えた。
＊＊＊
爆炎を上げて、陽と桐は一直線に突き進む。
未だ明けぬ夜の闇を突き抜けて。
その先を進む、緑の光へと追いついた。

「な…っ！？」

突然の陽の出現に、驚く洸。
無理もない。
速度で圧倒的に勝っていると思っていた相手に追いつかれたのだ。
しかも、その相手は絶対に戦ってはいけないと思っている相手。

それでも、何とか反応して、構えをとる洸。
それを見て、陽が笑った。

「いい反応だ！！だが、それじゃ足りねえよ！！」
叫んで。
陽は、炎を噴き出す槍を振るった。

人一人を軽く吹き飛ばすほどの炎を纏って、槍が襲い掛かってくる。

速度と威力を持った一撃。
それは、先ほどの爆発以上の衝撃を持って、洸を弾き飛ばした。

「……っ！！？」

腕が折れそうな程の衝撃。
身体の前面がひりひりと痛むのを、洸は感じた。

（あんな熱、どうやって戦えって言うんだよ！！）

近づいただけで、洸は皮膚を焼かれた。
もしあのまま吹き飛ばされずにいたら、どうなっていたことか。

遠距離での攻撃は、核の結界と自身の決意に阻害され、近接戦闘は熱によりほぼ不可能。
可能な戦法と言えば高速で接近した上での一撃離脱くらいだろうか。
だがそれも、先ほどの移動を使われれば難しい。

（風で防げるのか…？）

身に纏う風。
それよりも強い風を纏えば、多少は防げるかもしれない。

だが――。

流れる視界の中。
赤い光が円を描いていた。

（くそっ！！）

心の中で舌打ちをした直後。
陽が、目の前に現れる。

（――速いっ）

今度は、目の前。
跳び込んできた勢いをそのままに、陽は槍を振るった。

「おらぁ！！！」
「くっ…！？」

咄嗟に飛びのいた洸。

赤橙の刃が、洸のいた家を破壊した。
だが、この威力。
防ぐ術など、持ってはいなかった。
「お前は！！なんでいちいち俺に襲いかかってくる！！」
家が一軒、崩壊する轟音が響く中、洸は声を張り上げた。
しかし、返ってくる声はなく、ただ炎槍が襲い来るのみ。
洸はそれをひたすらに避け続けた。
炎が振るわれるたび、家が、道が破壊されていく。
逃げることはできない。
だが、勝つこともできない。
どうすればいい。
幾度も襲い来る炎槍を何とかかわしながら、洸はただひたすらに混乱していた。
『マスター。』
「！！菫…。」
不意に、菫が口を開いた。
今まで黙っていた菫。
あまりにも静かであったため、洸はその存在を忘れていたほどだ。
「どうした？」
跳びながら、洸は呟いた。

『相手のあの高速移動ですが、どうやら直進しかできないようです。』
「…そういえば、確かに。」
先程から、洸が攻撃を避ける確率が確実に上がってきている。
それは、何より相手の動きが単調であることの証であった。

相手の移動は、爆炎の噴射による高速移動。
槍の矛先から炎を放出している以上、その制御はプレイヤーである陽の役目。
人一人を吹き飛ばすほどの爆風。
それを、1日も経たずに使いこなすのは流石に不可能であったのだろう。

「これを利用すれば…！！」
『逃げ切れるでしょう。』
「よし！！」

そうと決まれば、話は早い。
出力を上げて、洸は駆けだそうとした。

その時。

「――残念。少し遅かったな。」

声が、響いてきた。

「――――！！？」

『――――！！？』

上。

そう思って見上げた時には、もう遅かった。

脇腹に、鈍い衝撃。

「ぐっ…！？」

ぐらつく視界。

身体は、いとも簡単に浮き上がって。

洸はそのまま、下方へと吹き飛ばされた。

（殴られた！？）

『マスター、着地！！』

思考と叫び。

同時に頭に叩き込まれたそれに反応して、洸は何とかイメージを完成させた。

そして、衝突。

鈍い衝撃音が響き、白煙が舞いあがった。

「痛って…。」

呻きながらも、何とか起き上がろうともがく。

着地の衝撃は、風で何とか逸らすことができた。

だが、殴られた脇腹の痛みは治まらない。

「ははっ、ナイスシュート！！」
聞こえてくる声。
視界の端で、陽が降り立ったのが見える。
逃げなければ。
そう思い、何とか立ちあがろうとする洸であったが。
「悪いけど、もう逃がさねえよ。」
陽の声が聞こえてくる。
それと同時に、洸の周辺で、一斉に赤が上がった。
「……！！」
洸が叩き落とされたのは、道が十字に交わる小さな交差点。
今、その洸を包み込むように、四角の炎のフィールドが出来上がっていた。
「ほら、これで逃げられない。」
そう言って、陽が笑った。
周囲には、分厚い炎の壁。
突き破るには、まだ洸の風では足りない。
なら、上か。
だが、それも一方向では速度で負ける洸では敵わない。
まだ洸も自在には飛べないのだ。

確かに、これでは洸は逃げれない。
（八方ふさがり、か…）
相手を逃がさないために、ここまで大規模な魔法の行使をする。
それは、つまり、余裕の表れ。
２と５の、埋められない溝。
（…ああ、そうか）
ふっ、と洸は力を抜いた。
『…マスター？』
菫が驚いたように呟いた。
だが、それには応えない。
もう逃げられない。
もとより、逃がす気も余地もないのだ。
ならば――。
「もう、逃げに徹するだけ無駄ってことか。」
覚悟を決めよう。
例え、どんなに戦力に差があったとしても。
（俺は、ここで。）

そうしなければ、帰れないのならば。

「お前を倒すよ。…赤梁陽。」

刀を構えて。

洸は静かに、風をイメージした。

『駄目です！！マスター！！』

「そうこなくっちゃ。」

応えて、陽は再び笑う。

彼もまた再び槍を構えた。

炎に包まれた舞台の中。

洸と陽、２度目の戦いが幕をあけた。

第三十九話

一方その頃。
洸たちの拠点であるデパートの、一階。
小さなライトがいくつか灯っているだけの、薄暗いそのフロア。
店員も客も消えた、否、はじめから誰も訪れたことのないその場所は、張りつめた静寂に包まれていた。
ふと、そこに続く階段から、ひょっこりと茶色の影が覗いた。
手摺に僅かに寄り掛かりながら、ふらついた足取りで進むその影。
それは、大きな段ボールをなんとか運んでいる茶織咲であった。
「…よっ、とと…っ。」
視界を塞ぐ程の箱を抱えて、進む咲。
彼女は階段のそばに置かれていた台車まで何とか進むと、既にいくつか置かれていた段ボールの上に、それを落とした。
どすん、という鈍い音があたりに響く。
だが、それを気にするふうでもなく、咲は額に浮いた汗をぬぐった。
「ふう…、これでよし！！」

身体の奥から出てきたような熱い息とともに、咲はそう言った。
少し赤くなって、埃でまみれた手をはたいて。
咲は足元に置かれた荷物へと視線をおろした。

（これだけあれば、十分かな…）
着替えにタオル。
薬に包帯といった救急器具に、調味料や少しの調理器具。
咲が必要と判断したものを、とりあえず片っ端から集めてみたのだが…。

「…多い、かな。」

先程運んできた、大きなテレビでも入ってしまいそうな段ボールに詰め込んでも、５つもの数になっている。

台車があるから、運ぶのには問題ないだろうが、正直、ここまで必要なのかと咲自身が思うほどであった。

（でも、２週間なんだよね）

人２人が２週間暮らす。
それは、どれだけのことなのか。

食事はどれだけ必要なのか。
着替えの管理、ゴミの管理は？

咲はここにきて、普段自分がどれほど生活を親に頼っていたのかを痛感していた。

（…ううん、弱音を言ってちゃ、駄目だよね）

咲は、首を振って自分を正した。
今はくよくよしている場合ではない。
洸と菫が今、戦っているのだ。
それも、おそらくは咲のために。
自分は、洸たちが思い切り戦えるために頑張る。
そう、咲は自分に決めたのだ。
「よし、頑張ろう。」
そう呟いて、咲は立ち上がった。
洸たちが帰ってくるまで、まだ時間があるはず。
それまでに、もう少し探せるものを探してしまおう。
そう考えて、咲は今度は上のフロアに向けて歩きだした。
「……。」
ふと、咲の足が止まる。
視線が、自然とガラスの向こうの町並みに向けられた。
明けない夜に包まれた町。
月はなく、星空に覆われたその空の向こうで、洸たちは今戦っているのだ。
「白崎君たち、遅いなあ…。」
咲がまだ知らない戦い。

右腕を焼かれた洸の姿を思い出しながら。
咲はふと、そう呟いていた。

＊＊＊

咲がガラス越しに見つめていたその先。
そこには暗い町中に、突如現れた炎の塊があった。
炎に覆われた檻の中。
赤と緑の光が交錯していた。

「……っ！！」

「はははははっ！！」

幾重もの、幾度もの閃光が瞬く。

２色の輝きが、うねり、交わり、ぶつかりあっていく。

まるで生き物のように蠢く、赤と緑の輝き。

惹かれ、弾かれあうその光を宿すのは、２つの魔装。

一方は、大気をも焦がす赤き炎槍。
赤に光る炎を纏ったその槍は、大地まで溶かすかという程の熱を帯びて対する光へと襲いかかる。

その赤に対するは、緑に輝く風を纏った風刀。

圧倒的熱量に対するは、圧倒的速度。
振り回される槍の数倍の速度をもって、緑は閃く。
流れる緑。
叩きつけられる赤。
幾重もの閃光を瞬かせた後、２つの光は、ようやく離れた。

「はあ…っ、…っは…っ。」

光の一方。
緑の風刀を手にした洸は、荒れた息で陽を見据える。
その身体は、すでにボロボロ。
上着は焼け焦げ、僅かな布地しかもう残ってはいない。
肌は所々裂け、傷口は焼け焦げている。

（…痛って）

皮膚が突っ張り、体のあちこちが悲鳴を上げている。
視界はぼやけ、力もあまり入らない。
疲れがたまり、魔力は無くなっているという証拠だ。
それでも、洸は刀を握る力を緩めない。

『マスター。治癒球の使用はしないのですか。』

そんな洸を見かねて、菫が呟く。

「…残り一つしかないんだ。今、使うわけにはいかないよ。」

陽に聞こえないように、洸は小さく応える。
これから先、魔法はどんどんとその威力を増していくはずだ。
今ここで、唯一の回復手段である治癒球を使い果たすわけにはいかない。

それに、と洸は陽を見た。

「……。」

槍を構え、にやついている陽。
彼もまた傷だらけの身体で、肩で息をしていた。

（今、ここで使うのは、違うよな…）

不思議なことに、この檻の中に戦いが移ってから、陽は魔法をほとんど使わなくなった。

故に、先ほどからの2人の戦いは魔法による遠距離戦ではなく、武器による近接戦闘。
近接戦闘では、魔法と違ってイメージをせずとも正確に攻撃することができる。
相手を両断することもなく、切りつけることができる。

そうなれば、相手を殺すことなく行動不能にできる。
そして、それこそが今洸に見える、唯一の勝機であった。

筋肉や骨という概念のない空では練習することはできなかったが、どのように振り、どこに当てればどのように切れるのか。
洸はその感覚を理解し始めていた。

後は、それを実行するだけ。
ためらいはあったが、核を破壊するだけの魔力が残っていない今、
洸のとることのできる手段はそれしか残っていなかった。

「――ふぅ…。」

ゆっくりと息を吐いていく。
そこからありったけの熱を吐き出して。
思考を、冷却していく。

必要なものは高速の思考と身体。
自身を覆う竜巻を、洸はイメージした。
もちろん、それを実現するほどのレベルではないけれど。
纏う風が強くなったのを、洸は確かに感じた。

「休憩は済んだか？白崎ぃ。」

茶化したように、陽は言う。
未だ、その炎に衰えはない。

それだけを見れば、陽の魔力が衰えてきたとは思えない。
だというのに、彼は有利なはずの魔法を使わない。

戦いを望む彼の狂気からすれば、わからなくもない。
一方的な殺戮でなく、殺し合いを彼が望むのならば。
今の状況は、確かに彼の望みどおりなのだ。
だが、もしかしたら――。
その先を考えようとして、洸は頭を振った。

まさか、そんなことはありえない。

（こいつは、ただの狂人だ）

「ふざけんな。休憩してたのはそっちだろ。」

それだけを応えて。

２人は、再び光へと戻った。

＊＊＊

突き出される赤。

横から刀を打ち込んで、穂先を脇へと逸らす。

空いた隙。

飛び込んで、緑を振り上げる。

振り回された柄が刀を弾く。

弧を描いた赤が、再び襲いかかる。

風を纏って、跳ぶ。

擦るように赤をかわして。

握られている腕を切り裂く。
それでも赤は止まらずに。
３度目の弧を持って叩きつけられる。
吹きとんで、転がって。
洸は倒れた。
「……ぐっ、が…！！」
フラッシュのような白光が走る。
既に痛みは限界を超えて、身体がどのように動いてるかさえ分からない。
「どうした、白崎洸！！」
耳に、陽の言葉が響いてくる。
「そんなもんかよ、お前の力は！？もっと、もっと、もっと、もっと！！楽しませろよ！！」
「…うるせえ。」
呟きは、掠れるほど小さくて。
まともに声すら出せなくなっていることを思い知る。
「てめえを楽しませるために戦ってるんじゃ、ねえんだよ…！！」
それでも、洸は起き上がる。
最早意地でも何でもない。

立ち上がることさえ、反射に変わる。
「はっ、そりゃあそうだ。」
声とともに突き出される槍。
何とか立ちあがって、それを弾く。
やはり、魔法による追撃はない。
「でも、お前も少しは楽しめよ。この戦いを！！」
「……っ！！うるせえよ…！！」
振り回される槍を、跳んでかわす。
今度は切りつける隙はない。
やはり、この光景は何かがおかしい。
今のだって、魔法を使えば有利になったものを。
（何なんだよ、こいつは…！！）
地面に降りて。
直ぐに、剣を振るった。
「てめえみたいな狂人と、一緒にすんじゃねえ！！」
緑は、しかし赤に阻まれる。
結界が白く輝き、刀を弾く。
開いた身体。
そこに、柄が叩きこまれる。

「…ぐっ！！」

弾けた腕を、強引に引き戻し。
槍と身体の間に、滑り込ませる。

吹き飛ぼうとする身体。
纏う風で押し留めて。

洸は、横へと流れる。

「はっ、狂人ねえ…。」

空いた脇腹。
そこ目がけ、洸は刀を振り下ろす。

だが、それは槍に阻まれる。

「今はもう、てめえもその狂人じゃねえかよ！！」

途端に、振りまわされる。
刀を巻き込んで、動きを奪って。

穂先は、そのまま肩に突き刺さる。

「――――っ！！！！」

最早、痛みは大して感じなかった。
代わりに、鋭い熱が左肩に走る。

『マスター！！』

途端に、堇が輝く。
風が一瞬強さを増し、洸の身体を動かした。
弾かれるように放たれた右足が、陽の脇腹を抉る。
「……っ！！？」
風を纏った、重い一撃。
それは、２ｍもある陽を、軽く吹き飛ばした。
「…はぁっ…！！…ぁ、はっ…！！」
（…まずいな、利き腕が…）
槍が刺さったのは左肩。
もう、満足に刀を振るうことはできない。
それでも、負けるわけにはいかない。
洸は、ぼんやりとした目で、前を見つめた。
「はあ…っ、は、はははっ…っは…っはははは！！」
いつの間にか陽は立っていて。
洸と同じくらい傷だらけの姿で、笑っている。
ともに、満身創痍。
使える身体はあと僅か。

だというのに。

「いいね…。やっぱりお前は最高だよ、白崎洸！！」

何故、陽はあんなにも笑っているのか。

「でも、まだだ…。」

何故、あんなにも楽しそうなのか。

「もっと、もっとだ！！お前はまだ戦える！！そうだろ、白崎洸！！」

どうやったら、あのように狂えるのか。

血だらけで、嗤うその姿。

赤と黒に囲まれて咆哮するその様を見て。

「……！！？」

洸は、初めて陽に恐怖した。

（…何なんだ、こいつ…）

初めて会った時。

陽は、咲を笑いいたぶり、そして、殺そうとした。

「お前の持つ剣は何のためにある！！」

次に出会った時。
陽は洸と戦い、殺さずに帰っていった。
「お前の纏う風は何のためにある！！」
これだけならば。
これだけであったなら、陽は変な奴、で終わることができたのに。
ただ憎いだけの存在でいてくれたのに。
「…何だよ、お前は…。」
目の前で叫ぶその物体。
これは、本当に人なのか？
「お前の本能は、何のためにある！！？」
炎を纏って。
ゆっくりと、『それ』は近づいてくる。
ガチガチと、歯が音を鳴らす。
足が、ゆっくりと下がっていく。
「…何なんだよ…。」
視界は、揺れたまま。
心臓は、とっくに張り裂けて。
「本能のままに動け！！本能のままに貪れ！！それが、俺たちの役割だ！！」

それでも、腕の力は緩まずに。
思考は、冷たいままだった。

「切れ、焼け、裂け、壊せ、殺せ！！！！それを望むのがお前の本能だ！！それが、お前の本性だ！！！！」
「何なんだよ、お前は！！！！！」

イメージを、叩きこむ。
冷静に、冷酷に。

「さらけ出せ、そして、俺に見せてみろ！！！！お前の本性を！！」

咆哮に合わせて、炎が巻き上がる。
赤と緑。
２つの光の塊が、暗い町に浮かびあがる。

「赤梁…陽おおおお！！」
「白埼、洸ーーーー！！！」

『それ』を切り裂く風の刃。
纏った刀を、洸は振るった。

第四十話

燃え立つ恐怖。
溢れる憎悪。

それらは、蛇のように身体にまとわり着いていて。
その全てを振り払うために、洸は左腕を夢中に振るった。

イメージは光に変わり、光は風に変わる。
放たれた風。
風も、夜も切り裂いて。
それは陽目がけて、一気に駆け抜けた。

「……っ！！？」

だがその瞬間、洸は自分のイメージの意味を知る。
自分のイメージの中で切り裂かれた姿でいる、陽を見る。
それが、今自分が望んだ光景なのだと。
それを悟って。

「――駄目だ、菫！！」

咄嗟に、そう叫ぶけれど。
もう、遅かった。

光は既に風に変わり、そこには風の残滓がただあるのみ。

（まずい…！！）

このままでは、とそう思うけれど。
この時、どこか安心している洸も確かにいた。

陽だって、死にたくはないはず。だから、前のように結界で防いでくれると。

相手は、倒さなければならない存在なのに。
否、命をかけて戦っている者だからこそ、そう信じていた。

だが――。

「…はっ。」

ふと垣間見えた陽の顔は、笑っていて。
その顔に宿る狂気は、洸に強い予感をもたらした。

『―まさか…！！』
『やめろ、マスター！！』

そして、その予感はそのまま現実になり。

風は容赦なく陽を切り裂いた。

＊＊＊

そうして、視界は再び赤に染まった。

「――――ぁ…。」

噴き上がる、赤い色。
今までの赤とは違う、濁った色。

ぱしゃり、と音がする。
視界から黒は消えて。
生温い感触が、身体を斜めに走る。

（…なんだ、これ）

頭の中で、誰かが囁く。
目の前に倒れている『これ』はなんだ、と。

「おい…。赤梁…？」

呟きが、頭にやけに響く。
揺れる視界は静まり返って。
その光景を、映えさせた。

「どうした、おい…？」
『…マスター。』

赤が、じわりじわりと近づいてくる。
それは、とても温かかったけれど。
触れたその手は、焼かれない。
赤に触れているはずなのに。

『落ち着いてください、マスター。』

菫の声が、聞こえてくる。

（…落ちつく？）

どうして、菫はそんなこと言うのだろう。
そんなこと、とうに分かっているというのに。

「――ああ、そうか。」

そうだ。
洸は、理解している。

流れている赤は血で。
倒れているのは、赤梁陽だ。

なら、何故陽は倒れている？
そんなこと、決まっている。

「殺したのか、…俺が。」
『マスター…！！』

そうだ。
洸はたった今、自らの魔法で陽を切り裂いたのだ。

それを、確かに認識して。
洸は目を閉じた。

『…？マスター？』

突然のその行動に、戸惑ったように菫が呟く。
だが、洸は応えない。
陽は、死んだ。
洸が、殺した。
それはもう、変わらない事実、
なら、受け入れるしかない。
「……ふぅ…。」
静かに、ゆっくりと息を吐いていく。
荒れ果てた呼吸を無理やりに引き戻す。
「…よし。」
息が整ったのを確かめて。
洸は、ゆっくりと立ち上がった。
その表情には、先ほどまでの恐怖も憎悪も、何も宿ってはいなかった。
『ま、マスター…？』
「…ん？どうした、菫。」
『あ、いえ…その、この後はどうするつもりなのですか？』
洸の表情を知って、菫が呟く。
まるで怯えてでもいるかのように。

だが、対する洸はそんなことにも気付かないようで。
顎に手をあてて、考え込み始めた。
その動作がまた緩慢で、菫の戸惑いをさらに促進させた。

「…そうだな。それを、考えないとな。」
『…マスター…。』

そんな当たり前のことも忘れているらしい。
明らかに、先ほどまでの洸とは様子が違う。

「……うん、そうだよな。」

しばらく考え込んでいた後、洸は顔を上げた。
その表情には、相変わらず何も宿ってはいない。

「決めたよ、菫。」

無理もない。
洸はたった今、自らの手で人を殺したのだ。
一時的な混乱などして当たり前――。

「俺はこれから、他のプレイヤーを殺しに行く。」
『な…。』

無機質なほほ笑みを浮かべて。
洸はそう、応えた。

＊＊＊

町の西にあわられた、炎の檻。
今、その中に立っている者はただ一人。
ただし、他者の血に染まり、自身も傷だらけの身体のままほほ笑み立つ『それ』を人と呼ぶのならば、であるが。

『…何を、言っているのですか、マスター…。』

彼の右手に握られた刀。
その中に宿る意志が、震えた声で自身のマスターに向かって呟く。
その震えは、怒りか恐怖か。

『拠点を移動するのでは、なかったのですか！？…いえ、それよりも。その傷で他のプレイヤーと戦うとでもいうのですか！？』

いつも間にか、呟きは叫びに変わる。
だが、それでも彼に変化はない。
ほほ笑んだまま、彼は口を開いた。

「ああ、もちろん治癒球は使うよ。…赤梁のを、ね。」

相手のプレイヤーの核を破壊した時、もしそのプレイヤーが治癒球を核にセットしていた場合。
その治癒球は核を破壊したプレイヤーに受け継がれる。

それに、受け取る側の拒否権は存在しない。
赤梁の先程の行動を考えると、あるいは治癒球をセットしていないことは十分にあり得る。
だが、陽はすでに誰かの核を破壊している。

その際に治癒球を受け継いだ可能性は、かなり高い。
「核破壊の魔力は…まあ、プレイヤー殺しのレベルアップで何とかなるだろう。それでも足りないなら、流石に少し休むけれど。」
そう言って、彼は刀を持ち上げる。
緩慢な動作。
もう満足に刀を持ち上げることもできなくなっていた。
『私が言いたいのは、そんなことでは…！！』
「…じゃあ、何だ。」
それを見て咄嗟に口を開いた菫であったが、続きは彼に遮られる。
暗い、そこから響いてくるような声。
この時初めて、彼の表情に変化が起きた。
「お前は俺にこのまま茶織の下に戻れって言うのか。…茶織を殺せと言って、赤梁を俺に殺させたお前が。」
『…！！それは…。』
洸の目が、すう、と細められる。
瞳が、色彩を無くしたように暗くなる。
それは、彼の心の内を写し取ったようで。
菫は何も言葉を返すことができなかった。
「……。」
ふと、彼は空を見る。
何もない空。

それを見て、彼の表情が僅かに緩んだ。

「最初にここに来た時。俺は、何でもするつもりだった。茶織を元の世界に帰すためなら、何でもする…って。そう思ってた。」

『……。』

「でも、お前が茶織を殺せと言って、それが、ここでのルールと知って。俺は、誰も殺さずに茶織を連れて帰ることに決めたんだ。」

他者の命を奪い、自らを生かせ。

それは、まさに生きたいと願う本能に従うことそのものなのだ。

だが、洸はそれを否定した。

そんなことで取り返したい場所に、意味はないと。

そこにいる自分は、きっと二度と笑えないと。

「でも、殺してしまった。」

自分が嫌っていた筈の本能に、まんまと従って。

洸は陽の命を奪い、自分の命を生かしたのだ。

『ですが、あの男は故意にマスターの魔法を受けました。それは、ただの自殺です。ですから――。』

「たとえそうだったとしても！！」

菫の言葉に、洸は叫んだ。

碌に入らないはずの力が、右手に込められる。

「…そこに、なんの違いがある…。」

例え自殺だったとしても。

その魔法を撃ったのは、洸なのだ。
『……。』
「俺は、殺したんだよ。あいつを…。」
咲を殺せと言った時の、菫の言葉。
『咲を殺すのと、他の人間を殺すことに、何の違いがあるのか。』
それが今、痛いほど洸の心に突き刺さっていた。
「…もう、俺は迷わない。」
そう呟いて。
顔を下げた洸の瞳には、消えたはずの色彩が戻ってきていた。
「これから、俺は他のプレイヤーを殺しに行く。…そして、今日中にレベルを１０に上げる。」
陽を含め、３，４人倒せば十分だろう。
そう考えて。
「それで、茶織を帰してもらって、それで終わりだ。」
『…マスターは？その時、マスターはどうするのですか。』
菫の言葉に、洸は笑う。
今度は無機質ではない、乾いた笑い。
「さあ、どうしようかな。そこまでは、考えてないや。」
『考えてない…？でも、自分のことなのですよ！？』
「…ああ、そうだな。」
『咲はどうするのですか？それに、あなたにだって家族や友人がい

たのでしょう！？彼らは…。』
「どうせ、皆忘れてるんだ。それに…。」
そう言って、洸は菫を見る。
「それを、お前が言うのかよ。俺を勝手に呼んだ、お前が。」
『――っ！！この…！！いい加減に――』
そう、菫が何かを言いかけた時。
「――っははは、あはははははははははははははははははははははは
ははっ！！！！！！！」
笑い声が、響いた。
途端に、背後で光が溢れる。
「なっ……！！？」
咄嗟に、洸は振り返る。
そこには、陽の身体があったはずなのに。
今、そこは溢れるばかりの炎に囲まれていた。
それは、まるで脈動するように明滅している。
（…今のは、まさか）
声は、確かにその中から聞こえてきていた。
それが意味することは、つまり――。
「そうだ、それでいい！！それがお前の本性だ！！白埼洸！！！！！」

叫び声とともに、煽られるように炎が割れた。
そこには、陽が立っていた。

「……っ！！？」
『……っ！！？』

炎の中に立つ、陽。
その光景に、洸も菫も言葉を失っていた。

「赤梁、陽…。お前、生きてたのか…？」

何とか、それだけを呟いた。

「あ？アホかお前。」

洸の呟きに、陽は笑う。

「俺があの程度で、死ぬわけがないだろう。」
「…いやいや…。」

そう言う陽だが、その身体は血がだらだらと垂れていて、顔も、腕も、胴も、すべて、赤に染まっている。
正直、生きているのが不思議なほどである。
だが――。

『生きていました…！！やはり、マスターは人殺しなどしていないんです！！』
「…菫って、そんなキャラだったっけ？」

そう呟いてはいるけれど、洸自身も安心していたのは事実であった。
だが、これで終わったわけではない。
洸は、陽へと視線を戻した。

周囲の炎に照らされて、陽はその内に立っている。
身体中を染める血液が炎に照らされ、赤黒く、ぬらりと輝く。

陽のその姿を見て、洸は呟く。

「これが…俺の、本性か？」
「ああ、そうだ。」

死にかけの身体で、陽は笑う。
ぎりぎりで繋がっている筈の体で、咆哮を上げる。

「壊したい、燃やしたい、犯したい、殺したい！！！！」

それでも、溢れる炎は止まらない。
まるで流れ出る陽の血液を燃料としているかのように、炎は赤々と燃え続ける。

「誰だってそんな欲求を抱えたまま、窮屈に世界を生きている！！！！」

蛇のように、炎は陽の身体を這いずりまわり。
じりじりと、洸の下へと広がっていく。

「当然だ！！世界は、俺たちに支配された世界ではそんなもの許されるはずがない！！」

吐き出す咆哮は焔に変り、溢れる狂気は熱へと変わる。

「なら、人々はどうすればいい？溢れ出てしまいそうなその欲求を、どう制御すればいい！！？」

なあ白埼、と陽は槍を振るった。

「お前は、なぜテレビや新聞で殺人や傷害の事件を報道するか、考えたことがあるか？何故、マンガや小説なんてものが普及してるか、わかるか！？」

全身で、全霊で、陽は叫ぶ。

命の火を燃やしつくすように、豪快に。

「闘う漫画を見ると、すかっとするだろう！？誰かが死ねば、ドキドキするだろう！！？それは、自分の欲求を満足させているからだ！！！！人間には必要なんだよ！！たった数十分、数時間で世界中を旅して、殺し合いをしてくれるモノが！！！！」

一歩ずつ、陽は近づいてくる。

「だから、皆本を読む！！ドラマを見る！！事件を見る！！」

欲望のままに、本能のままに。

「人は自分の世界の外で起こる事件を見て満足し、その欲求を満たす。それが、この世界のシステムなんだよ！！！！」

炎の中を抜け、陽は洸と対峙する。

両腕を広げ、満面の笑みを浮かべて彼は咆哮を続ける。

「本能に従え！！欲望のまま動け！！！！」

もう懐かしい熱が、洸の皮膚を焼く。

「俺らは物語のような世界の代理人として、選ばれた。だからこそ！！！！」

異様な程の彼の意志が、熱とともに洸の体内へと浸透していく。

「俺たちは戦わなければならないんだよ！！これを見てるやつらの、欲求を満たすために！！！！」

そう言って、陽は槍を掲げる。

肩の前で槍の前半部を掴み、後ろは肩に乗せ、身体を引き絞る。

それは、まるで投擲でもする様。

ふと、桐が赤く輝く。

光は直ぐに槍を覆うと、直後、爆発するようにその輝きを増した。

「――――っ！！？」

まだ、それは炎に変わってはいないのに洸は不思議な圧力を感じる。

『異常な魔力量を感知。…おそらく、敵の最大威力魔法と思われます。』

ｌｖ５の全力。

もう、見るだけでわかる。
あれは、洸を簡単に焼き尽くすだろう。
「さあ、決着をつけようぜ、白埼洸！！」
そう、陽は叫ぶ。
「お前の本能が勝つか、俺の本能が勝つか！！」
溢れる光。
目をも焼きつかそうと強く輝くその光を掲げて。
「お前の本能（イメージ）を、見せてみろ！！！！」
大気を震わすほどの声で、陽は吼えた。

＊＊＊

陽の最大魔法。
今すぐにでも撃てそうなそれを目の前にして。
しかし、洸は停止していた。
「……。」
脊髄に、電撃が走ったような感覚。
痛みも、恐怖も忘れて。

全身が粟立つのを感じた。

『…マスター？』

そのイメージを感じ取ったのか、菫が呟く。

「…ははははっ。」

ふと、洸の口から声が漏れる。
それは、すぐに大きな笑い声に変わった。

「ははははははははははははっ！！！！！」

直立のまま、顔だけは空に向けられて。
狂ったように洸は笑った。

「なるほど。それが俺たちが呼ばれた理由か！！それが、お前が俺を生かした理由か！！」

ずっと、疑問に思っていた。
どうして、こんな戦いをするのか。

この戦いには、理由がすっかり抜け落ちていたのだ。

だがそれも、今となってはよくわかる。
これは、ただの娯楽なのだ。
人間が、魔法という力をもって戦う様を眺める。

成程、それは確かにこれまでにない『刺激的』な娯楽に違いない。

「ありがとう。赤梁陽！！お前のおかげで、決心がついた！！」

この戦いの主催者、あるいはスポンサーには金城勇一郎が関わっているのだ。

世界にある娯楽などとうに楽しみきってしまったような男には、これほど刺激的なものはない。

そんな男の娯楽のために、洸たちは今命をかけて戦っている。

そう言う意味では、確かに陽の言う通りなのだろう。

この世界によばれてしまった時点で、もう終わりなのだ。

欲望の代理人として役目を全うするくらいしか、選択肢はないのだ。

勝てば日常に帰れる。

今となっては真実かどうかも怪しい、その言葉に縋って。

（…でも）

それでも。

「それでも俺は、自分の信じたようにやる！！」

振るえる右腕で、菫を構える。

「この世界にも、てめえのふざけた考えにも動かないし、俺は誰も殺さない。」

（そうだ、簡単なことじゃないか）

洸がいなくなったら、誰が美音のご飯を作る。

誰が、クインテットで働く。
誰が、病院の恵奈の世話をする――！！
「他人の娯楽のために、日常を奪われてたまるかよ！！」
ありったけの魔力を、風に変えて。
洸はそう、叫んだ。
「…はっ、そうかよ！！」
その答えを聞いても、陽の笑顔は変わらない。
「なら、それで構わねえよ！！！！」
そう叫んで。
陽は槍の輝きを、さらに強めた。
槍から溢れ出た魔力の一部が、炎となって空中を走る。
込められた魔力のほんの一端であるはずなのに、それは周囲の大気を焦がした。
「……っ！！」
再び襲ってくる、威圧感。
それでも、今度は怯まなかった。
陽の狙いは、よくわかる。
今度は魔法を止めるために自分を殺せと言っているのだろう。
確かに、今の洸ではあの魔法を止める術を他に知らない。
だが――。

「…菫。」

そう、洸は呟いて。

『了承しました…！！』

そう、菫は応えた。

イメージは魔力に乗って。
魔法へと変えられる。

「行くぜ、白埼洸！！！！！」

叫びとともに。
陽は腕を振るい、槍を投げた。

突き抜ける光。
炎の壁も突き抜けて。
それは、陽の正面を無差別に焼きつくした。

＊＊＊

ｓｅｖｅｎｔｈは、西。
そこには、一面が焼け野原となった地域があった。

そこにあったはずのものは殆どが焼かれ、跡形もなくなっている。
その中でも、一直線に黒煙の走る場所は、地面まで焼かれたように

深くえぐられていた。
ふと、その場所に赤い光が浮かび上がる。
白と黒の混じったような煙から現れたその光は陽とその魔導器、桐であった。
彼らは煙が晴れたのを知ると、辺りを見回し始めた。
「…どうだ？」
陽が呟く。
『…やはり反応はないようだ。』
それに、桐が応える。
「そうか。」
『…まんまと逃げられたな、マスター。』
低い声で、桐は呟いた。
「…悪かったよ。少し、遊びすぎた。」
『少しではないだろう。危うく死ぬところだったではないか。』
「だから、事前に言わなかったのは悪かったって、言ってるだろ？」
『そう言う問題ではない！！』
叫んで、桐は大きく息をついた。
少しでもこの男のことを理解できたと思っていた自分が、恥ずかしく思えた。

『…まあ、ともかくこれで気は済んだのだろう？』
「ああ。もう白埼にはようはねえよ。」
そう応えて。
槍を担ぎなおすと、陽は歩き出した。
『まあ、私としてもあれ程の大魔法を発動できたのだから、収穫がなかったとも言えないしな。』
「…へー？」
桐の言葉に、陽が茶化すように言う。
『と、とにかく！！次からは私の指示に従ってもらうからな！！』
「はいはい、わかってるよ。」
呑気な声でそう言いながら、陽は中央地区への道を進み始めた。
その視線が、ふと南へとずれる。
四方をすべて囲まれていた筈のその檻。
だが、なぜかその部分だけは、火も煙も抉られたように掻き消えていた。
＊＊＊
そうして、誰もいなくなった筈のその戦場。
そこに建てられていた建物の屋根で、微かに動く影があった。
『あれが、他のプレイヤーですか…。』

ふと、その影から声が漏れてくる。
少し高めの、若い声。

『凄まじい戦いでしたね…。ねえ、マスター？』

菫や桐と同じように響いて聞こえるその声だが、しかし魔導器を示す光はどこからも見えなかった。

『…あれ、マスター？』

反応がなく、声の主は困ったように呟く。
すると――。

「…ふっふっふ…。」

影から、くぐもった笑い声が聞こえてきた。

『おーい、マスター？』
「全く、こんな場所で堂々と戦うなんてよっぽどの化け物か馬鹿かと思ってたけど…。まさしく化け物と馬鹿だったわね。」
『はあ、そうですか…？』

呆れるように、片方の声は言うけれど、もう一方の声はそんなこと聞いてはいないらしい。

『それで、我々はどうしましょうか。』
「決まってるでしょう。馬鹿と化け物…どちらを相手にするかなんて。」
『それでは…？』

「ふふ…っ。」

含み笑いをすると、その影は隠れていた屋根の上に立ち上がった。
途端に、火に照らされて、その姿が浮かび上がる。

「私たちの標的は、あの馬鹿…緑の光のプレイヤーよ。」

長い、艶やかな黒い髪。
まだ幼いが、整った顔立ち。
何より特徴的なのは、その身に纏う衣服。

黒に近い色をしたそれは、俗に、制服と呼ばれるものであった。

「あのプレイヤーには悪いけど、私たちの糧となって、死んでもらうわ。」

そう言って突き出したその手。
それには光を貪るような、闇色の光を放つ何かが、握られていた。

第四十一話

魂まで燃やしつくしたような戦いから数時間が経った頃。
洸は、デパートの屋上にいた。

「……。」

せり出した縁に腰かけて、ぼんやりと町を眺めている。
隣には誰もおらず、緑の光もない。

気がついたとき、洸は2階のベッドに寝かされていた。
どうやってここまで帰ってきたのかは覚えていないが、また咲が運んでくれたのだろうと考えていた。

そんな咲たちの姿は、目が覚めてからはまだ見ていない。
しばらく呆けていた後、洸は何となく思い立って屋上までやってきた。

久しぶりの一人きり。
とはいっても、やることは何もない。
菫がいないから、外に出るわけにもいかないし。

（…ああ、駄目だ）

靄がかかったように、思考がまとまらない。
ぼんやりとした頭では、何も考えられなかった。

「……。」

ぷらぷらと足を揺らして、少し冷えた空気をかき混ぜる。

目の前には暗い町並み。

相変わらず、人の気配はどこにもない。

「…ここ、ホントにこのままなんだな。」

そんな景色を眺めながら、ふと、洸は呟いた。

もう1日以上が経つのに、この世界はずっと夜のまま。

陽は昇らず、星も沈まない。

嘘のような景色。

作り物のような、景色。

「見世物、か…。」

頭の中では、洸はまだ炎の中にいた。

焼けるような熱の中で、笑う陽と見つめあっている。

『それがお前の本性だ！！！！』

そう、彼は言う。

視界いっぱいに映る炎。

陽を裂いた風。

溢れだす血。

それを望んだのは洸で。

それが洸の本性だと陽は言う。

（俺は…）

手には、まだ感覚が残ったまま。
音も、匂いも、身体はしっかりと覚えている。
そして何より、既にそれに慣れ始めている自分がいて。
自分が、そう言うものを持つ人間なのだということを洸は思い知らされた。

（…それでも、構わない）

実際にそうなってしまった自分を知って、洸は衝撃を受けた。
だが、それでも自分で決めたのだ。
死なないし、殺さない。
それが例え、治癒球を持つ、殺しても死なない人間だったとしても。

「そう、決めたんだもんな。」

呟いて、洸は再び町に目を向けた。

ふと、背後で音がする。
ドアの開かれる音だろう。
振り返ると、そこには菫を抱えた咲が立っていた。

「白埼君、ここにいたのね。」

微笑んで、咲はそう言った。

「茶織…。」
「あ、そのままで平気だよ？」
立ち上がろうとした洸を制して、咲は洸の横までやって来ると、同じように腰かけた。
「わ、高い…。白埼君、こんな高いところ、よく平気だね。」
ちらと下を眺めた咲が、恐々と呟いた。
その、自然な言葉を聞いて。
何故か、洸は微笑んでいた。
「茶織は高い所、だめなのか？」
「…高所恐怖症って程じゃないんだけどね。ただ、ちょっと苦手。白埼君は？」
「俺は平気かな。これくらいなら…。」
洸は今咲が怖がったこのデパートの屋上から落とされたにも関わらず、平然としていられたのだ。
それに、ここに来た時のあれに比べれば、殆どの高所は大したことがなくなるであろう。
（…あれ？ということは）
ふと疑問に思って、洸は口を開いた。
「そういえば茶織。それなら、ここに来た時は大丈夫だったのか？」
「え…？」
洸の言葉に、咲はきょとんとした表情を浮かべた。

「ここに来た時って？」
「いや、ここに、ｓｅｖｅｎｔｈに来た時だよ。吹き飛ばされて、空から落とされただろ？」
「空から…？」
洸にそう言われて、咲は考え込み始めた。
もしかしたら、あまりにも高くて気絶でもしていたのかもしれない。
などと思っていると――。
「…ううん。私、落とされてないよ？」
顔を上げた咲は、ゆっくりと首を振りながらそう言った。
「え？」
これには、今度は洸がきょとんとする。
（飛ばされてない？なら、どうやって…）
そう考えて、洸は気がつく。
ここは、異世界なのだ。
なんとなく、その入り口は空なのだと考えていたけれど。
魔法があるこの場所では、そんな考えなど無意味なのではないか。
その意味を知って、慌てるように洸は口を開く。
「ちょっと待ってくれ。じゃあ、茶織はどうやってここに来たんだ？」
「う、うん。えっとね――。」

てっきり、洸は全てのプレイヤーが自分と同じようにｓｅｖｅｎｔｈに連れてこられたのだと、そう思っていた。
だが、どうやらそれは違っていたらしい。

そうして、洸は咲がどのようにしてｓｅｖｅｎｔｈにやって来たのかを知った。
自分とは異なる状況、方法。
同じであった点は共に闇に呑まれたこと、そして問答無用で連れてこられたことだけだ。

人、恐らくプレイヤーごとに異なるであろう召喚方法。
咲の話を聞いているうちに、洸はそれに酷似した特徴を持つものを思い浮かべていた。

「…そうか。」

咲の話が終わると、洸が呟いた。
俯いて、自らの両掌を眺めながら。

「魔導器の発動光と、一緒なのか。」
「白埼君…？」
『……。』

風の菫が発動した時は、緑の光。
菫の魔力光と同じ色。
そして洸を召喚した時は風が起こった。

だが、咲の召喚では違った。
咲曰く、身体の動きが止められ、闇に飲まれたのだそうだ。
そうして、気づいたらここにいた。

それはプレイヤーの差というよりは、きっと魔導器による差。
風を持つのは洸ではない。
炎を持つのは、陽ではない。
では、誰が持っているのか。

『……。』

洸の視線は、自然と菫の方へと流れた。
先程から一言も喋らない、緑の光を放つ石へと。

（…やっぱり、そうなのか？）

陽との戦いの中で、洸が言ってしまった言葉。
それは、確かに洸の本心も含まれていた。

菫に対する不信感。
情報を中々話さずにいるだけではない。
全ての魔法を発動させるのはほかならぬ菫なのだ。
あの時、陽を切り裂いた魔法を菫はとめることが出来たはずなのに。
菫はそれをしなかった。

（…でも）

魔法を放った後の菫の声が嘘だったとは、洸には思えなかった。
彼女は、本当に洸を案じて叫んでくれていた。

「――君。」

洸を案じる彼女と、洸を騙している彼女。

どちらが、本物の彼女なのだろう。
（俺は、菫を信じて良いのか…？）
イメージで、心で繋がっているはずなのに、洸は菫のことが何もわからなかった。

「白埼君！！」
「――！？」
すぐ横で、咲に呼ばれて。
洸は弾かれるように横を見た。
そこには、心配そうに洸を見る咲の姿があった。

「大丈夫？ぼーっとしてたけど。」
「あ、ああ。」
どうやら考え込んでいたらしい。
隣に咲がいたことさえ、洸は忘れてしまっていた。

「悪い。それで、何の話だったっけ？」
「……。」
しかし、咲は洸の質問に答えずにじっと洸を見つめてきた。
僅かに覗き込むようにして、じろじろと洸の体を眺めている。

「えっと、茶織…？」
「体、大丈夫なの？」
「へ？」

ずい、と咲が洸に近づいた。
「白埼君の体。本当に、もうなんともないの？」
「…ああ、もちろん。」
腕を回すようにして、無事に動くところを見せる。
事実、もう痛みは残っていなかった。
多少の気だるさは残っていたが、それは戦いとは関係ないものだろう。
「でも、茶織が直してくれたんだろ？」
洸の記憶には、治癒球を使った記憶はない。
だから、てっきり咲が使って治療してくれたのだと思っていたのだが。
「それは、そうなんだけど。」
僅かにうつむいた後、咲は言葉を続ける。
「いくら怪我しても治るって言うのは、自分の目で見てるからわかるの。…でも、やっぱりそれだけで元気になるわけじゃないと思う。」
「……。」
一瞬で傷を治すという魔法を秘めた、治癒球。
その嘘のような力の効力を、洸は身をもって知っている。
たったの一瞬で、あらゆる傷が治ってしまう。
今まで全身を蝕んでいたはずの痛みが、綺麗さっぱり無くなって。

動かなかった身体が、次の瞬間には動くようになる。
洸にとっては、その事実だけがあればよかった。
治癒球を使えば、怪我が治る。
どれだけ傷ついていようとも、次の瞬間には戦える体に戻っている。
言ってしまえば、ゲームのような感覚。
洸には体力という値があって、それがなくならない限りは決して死なないというイメージ。

それは、自分でさえただの道具として考えている証。
どれだけ認めようとも変わらない、洸の本性。

だが、咲は違う。

「怪我が治っても、白埼君がいっぱい、その…戦って、怪我して疲れてたのは残ってるはずだもん。」

咲は、洸とは違う思考をする。
結果をただ受け入れるだけではなく、自分の芯を持っている。
故に、洸がたどり着けない考えを持っている。

それは、戦うものと戦わないものの違いなのかもしれない。
時には自らの体でさえ捨てなければならない。
そんな洸の考えを、咲も戦場に立てば理解できるのかもしれない。

だが――。

「だから、せめて今は、ゆっくり休んで？」
「…茶織。」

そう言って、洸を見つめる咲。
その目を見て、この少女は自分を心配してくれているのだと洸は気がついた。

（…俺に、この目は出来ない）

今の彼女の中には、この場所への恐怖があるはずだ。
洸一人を戦わせている、申し訳なさがあるはずだ。
だが、彼女の瞳からは、そんな感情は何一つ感じなかった。

（でも）

今、彼女はただ純粋に、洸の身を案じているのだ。
打算も、遠慮もない言葉。
それは、静かに、だが確実に洸の中へと浸透していった。

「ありがとう。」

自然と、その言葉を呟いていた。

（必ず、帰して見せる。必ず…）

「うん、どういたしまして！！」

微笑みながらそう応える咲を見ながら。
何度目かになる誓いを、洸は自らの心にたてた。

第四十二話

「さてっと。それじゃあ私は下に戻るね。」

そう言うと、咲は立ち上がった。

「もう休むのか？」

「あ、ううん。まだ休まないよ。…実はまだ荷物纏め終わってないんだ。」

頬を掻きながら、咲が言った。

「白埼君が休んでてね。その間に、終わらせちゃうから。」

「あ、それなら俺も手伝うよ。」

「駄目。白埼君は休んでてって言ったでしょ。」

慌てて立ち上がろうとする洸を、咲は制した。

「…でも。」

咲は洸をベッドまで運んでくれたのだ。

自分の時間を削ってまで。

作業が残っているのも、そのためのはずだ。

だから、せめてその分は手伝おうと思ったのだが。

「いいの。白埼君は白埼君の仕事をする。私は、私の仕事をする。」

微笑みながら、咲は言う。

「それで、これは私の仕事。そう言ったのは、白埼君だよ？」

「それは、そうだけど。」

洸の意見は、すべて拒否されてしまった。

身体に不調はないから問題はない筈なのだが、2度も洸が倒れたのを見ている咲にとってはそうもいかないのだろう。

「それに、まだ白埼君の仕事は残ってるの。」

「え？」

「はい。」

きょとんとする洸に、咲は菫を手渡した。

洸の手に握られる、黒い刀。

突然手渡されたその少し反った刀身を、洸はぼんやりと見つめた。

「…これが、俺の仕事？」

「そうだよ。」

「…何すりゃいいんだ？」

「それは、菫ちゃんに聞いて下さい。」

そう言うと咲は入口の方へと振り返った。

ただ直ぐには歩き出さず、背中を向けたまま、洸へと口を開いた。

「ともかく、白埼君が元気で、よかった。ひどい怪我だったし、ベッドからいなくなってるから、どこ行ったのかって心配したんだよ？」

「…ごめん。」
怪我人が消えていたら、確かに自分もびっくりするだろう。
俯いて、洸は呟いた。
そんな洸を見て、咲は微笑んだ。
「その言葉は、ずっとあなたの横で心配していた菫ちゃんに言ってあげて。本当に、こっちがびっくりするぐらい心配してたんだから。」
『さ、咲…！！』
「じゃあ、2人でゆっくりしててね。」
そういって、咲は下へと降りていった。
「……。」
『……。』
残されたのは、無口な2人。
何を話せばいいのか分からなくて、洸は何も言いだせずにいた。
『…マスター。』
不意に、菫が口を開いた。
少し固い声。
まるで緊張しているかのような声だ。
「どうした？」
応える洸も、気まずそうで。
ふわふわとした、曖昧な雰囲気が2人の間に漂う。

『その…、身体に問題はないのですね？』
「ああ。菫が治癒球を使ってくれたおかげで。」
『そうですか。』
「というか、菫も聞いてただろ、さっきの茶織との会話。」
『あ、はい。それはそうなのですが…。』

菫にしては珍しく、歯切れが悪い。

『その、すみませんでした。最後の、貴重な治癒球を。』
「へ？ああ、構わないよ。…むしろ、助かった。」

そう言って、洸は菫のほうを向くと頭を下げた。

「ありがとう。俺を、引き留めてくれて。あのままだったら、俺は確実に死んでた。」
『マスター…。』
「おかげで、俺は壊れずに済んだ。」
『……。』

洸は、あの時のことをはっきりと覚えている。
自分が何をしようとして。
菫に、何を言われたのかを。

『…頭を、上げてください。』

静かに、菫は言った。

『あの時マスターが正気を保てていられたのは、マスター自身の能力によるものです。私は、何もしていません。』

「でも。」
『それに、今回は相手が悪すぎました。私はまだレベル2。そのような状態で、レベル5のあの男から逃げ切れただけ僥倖であったというものです。』
「……。」

確かに、それはその通りなのかもしれない。
洸は今でも、どうやってあの場所から逃げられたのかよく分かっていなかった。
だが、それでも。
洸があの場所に固執していたのは事実だったから。

「ごめん。」

もう一度洸はそう言った。

『わかりました。』

ため息を吐くような声で、菫はそう応えた。

『そうでも言わないと、マスターは聞かないのですよね。』
「ああ、そうだな。」

そういって、2人は笑った。

静かな屋上。
見上げれば、空が近くにあって。
もう直ぐ、洸はそこへと飛べるのだと、ふと思った。

『…ですが。』

「…？」

不意に、菫がそう呟いて、洸は菫を見た。

『心配したのは、本当です。』

「……。」

『マスターが無事で、本当によかった。』

「…菫。」

その声に、洸は思わず呆けてしまった。

心からの安堵。

そう感じる、声だった。

そこにあるのはただの無機質な剣と石なのに。

洸はそこに、微笑む女性の姿を見た。

『マスター？』

「へ！？…あ、ああ。どうした。」

『マスターこそ、どうしたのですか。』

「いや、ちょっと気がぬけちゃってな。」

『そうなのですか？』

目の前で、女性が首をかしげる。

その幻想を振り払うように、洸は頭を振った。

（何考えてるんだ、俺は）

まさか、機械相手に動揺など、そんなことはありえない。

きっとまだ疲れているのだろうと、そう思い込んだ。

（ともかくこれからのことを考えないと）

混乱を振り切るように、洸は思考を切り替えた。
実際、それはかなり重要な問題だ。

ｌｖ５との戦闘。
得られた経験は大きい。
だが、それ以上に今後の戦いへの懸念が強まっていた。

治癒球を失ったこと。
これは、非常に大きな損失といって良いだろう。

ｌｖ５で、あの威力。
家も、道路も軽々と焼き、溶かすほどの炎をあれほどの規模で発生させられるのだ。
もしｌｖ９にでもなった時には、一体、どれほどの現象を発生させるというのか。

（火ならマグマ…とかか？）

大地から湧き上がり襲い掛かる溶岩をイメージして、洸は震えた。
もしそうならば、もう治癒球も関係なくなってくる気がしてならないが。

少なくとも、陽のような奴を除いて、皆まだレベルはそんなに高くないはず。
もしかしたら、それさえも甘い考えなのかもしれないが、しばらくは治癒球が必要なのは確かだ。

（まずは、治癒球の確保が優先か）

陽との戦闘時に洸自身がそう考えていたように、他のプレイヤーから治癒球を奪う。
それが、戦闘において真っ先にすべきことだろう。

（となると、相手はｌｖ１。それも、まだ戦闘に慣れていない奴がベストか…）

そんなことを考えていると、

『あの、マスター？』
「うん？」
『少し、聞いてもよろしいでしょうか。』
「え？…あ、ああ。」

菫が口を開いた。

何だか、今日の菫はよく喋る。
それだけ打ち解けられてきたということなのか、それとも洸たちと触れ合うことで、感情が豊かになってきたのか。

『マスターは、どうして咲をあそこまでして助けようとするのですか？』

ただ、その不意な問いに、洸は一瞬目を見開いて静止した。

「…どうして、か。」
『はい。咲がマスターの友人の大切な人であることは、既に聞きました。』
「ああ。茶織が消えて、それを探すのを手伝ってた。」
『はい。それはすでに理解しています。私が知りたいのは、なぜあ

なたがそこまでその男の手助けをするのか、ということです。』
「……。」
『ただの友人のために、人は自らの命を賭けれるものなのですか？』
菫の問いに、洸は口を閉じた。
先の笑顔といい、この問いといい、昨日出会った時からは想像もできない変わり様だ。
相変わらず、それが菫にとっていいことなのかはわからないけれど。
洸は、機械のように無機質な菫より、人のような彼女の方がいいと思った。

「人のための命、か。」

そんな菫の問いに、洸は空を見る。

「そんなこと、考えたこともなかったよ。」
『自分の命なのに、ですか？』
「そう。自分の命なのに。」

そう言って、洸は笑う。

「俺が元いた世界では、皆、死ぬことなんて忘れたように生きてるんだ。気がつくのは、ほんの時々。それも、すぐに忘れちゃうけどな。」
『死を忘れる…？それでは、皆死んでしまうのではありませんか？』
「…どうだろう。でも、誰かに襲われて死ぬなんてことは滅多にない。戦争だって、俺の住んでいた場所からは遠くて、なんだかおとぎ話のような感覚になってる。」
『平和なのですね。マスターの住む世界は。』

「平和…なんだろうな。だから、皆自分に命があることを忘れてるんだ。」

張りぼてのような日々。
気がつけば始まっていて、気がつけば終わる一生。

ｓｅｖｅｎｔｈに来て、まだ2日と経っていないというのに、洸はもう何日もここにいたような気がするのだ。
それほどに濃密な時間。
これはもしかしたら、洸の本能が刺激された結果なのかもしれない。

生存への欲求。
闘争への本能。

これまでいた世界では決して使われなかったそれらが、この世界では全てで。
動物であるヒトが本来持つ、本能なのだ。
張りぼての世界では決して満たされない欲求。陽は、それを満たすのが洸たちプレイヤーの役割だと言っていた。
漫画や犯罪などと同じように、と。

「まあ、だからこそ俺はここに来れたんだけど。」
『平和だから、ですか？』
「自分の命のことなんて忘れてるから。」

それは、確かにそうなのだろう。
洸も、この世界に来て、陽と戦って初めてそれに気がついた。
自分がまるで不老不死にでもなっていたような感覚。
命に限りがあるとは知りつつも、頭も心もそれを隠してしまっている。

自分は、たった数分後には消えているのかもしれないのだ。
１０年後の未来なんて、ここでは夢物語に等しいのだ。
『…では、後悔しているのですか？ここに来たことに。』
不意に、重くなった菫の声が問う。
「…菫？」
明らかに、菫の雰囲気が変わった。
洸の視線が、菫へと流れる。
だが、菫は応えない。
「それは、どういうこと？」
『マスターはｓｖｅｎｔｈに来て、自分が命あるものだと思いだしたのでしょう？』
「まあ、そうなるのかな。」
『それは、死への恐怖です。戦いによる死への恐怖。…ここに来なければ思い出すことのなかった感情のはずです。』
「…そうだな。」
『ならば…！！』
そう言ったのと同時に、菫が輝きを僅かに増した。
力強い感覚が、菫を掴んだ手から流れ込んでくる。
（これは…菫の感情？）
何となく、洸はそう思った。

『その恐怖から、逃げたいとは思わないのですか？』
言葉に乗せるように発せられた、菫の中の力強い何か。
それが、洸の体へと伝わってきていた。
『できるならば、今すぐにでもここから帰りたいと、そう思いますか？』
これは、安易には応えてはいけない。
痺れるほどの『それ』が、洸にそう伝えていた。
「……。」
菫のその言葉に、洸はぼんやりと視線を町へと移した。
じっと、何かを見つめるように。
「それは、思わない。」
そうして、口を開く。
「例え帰れる方法がたった今あったとしても、俺は帰らない。」
『それは、何故ですか？』
菫の声は、まだ重く、暗い。
何が菫をこのようにしているのだろうか。
僅かに緊張している自分を、洸は感じた。
「もし帰るとしても、茶織は連れていけないんだろ？」
『はい。』
「なら、駄目だ。」

それでも、はっきりと洸は告げる。
言葉は選んでも、想いは変えない。
そんな風に、はっきりと。

『どうしてですか？ここで、自分の命のことを思い出したのでしょう？なら、今すぐにでもここから逃げ出したいのではないのですか？』

洸のその答えに動揺したのだろう。
菫の声が、いつもの調子に戻ってきていた。

「確かに、そうだ。俺はここにきてようやく、自分が死ぬんだということにはっきりと気がついた。」

呟いて、洸は視線を町に移した。

「まあ、始めの頃は怖いよりも驚きの方が大きかったけどさ。さっきの陽との戦いは、怖かった。」
『……。』
「でも、それでも俺は茶織を連れて帰るよ。そう、あいつに誓ったんだ。」

そう応えつつも、洸はどこか空虚な気持があった。

（俺は、本当に怖かったのか？）

洸が感じていた恐怖は、おそらく死への恐怖ではなかった。
自分を殺すかもしれない陽に、洸は確かに恐怖を抱いた。
だがそれは、陽の、その異様さへの恐怖であったはずだ。

自分は戦闘において、まだ一度も恐怖していないのではないか。
そう思いながら、洸は全身に気だるさを感じていた。

『友人に、ですか。』
「ああ。」

例え先程のことが嘘であったとしても、その誓いだけは変わっていなかった。
咲を連れて帰る。
そのために、洸はここに来たのだ。

『…私には、わかりません。マスターはなぜ、そこまでその友人のために動くのですか？その者も、命を忘れているのでしょう？』
「多分そうだろうな。…でも、そんなこと関係ないんだ。」
『……？』

おそらく、戦いのために生み出された堇にとって、それは何よりも大切な事なのだろう。
弱肉強食の世界に生きる動物たちでも、そのような者は真っ先に切り捨てられるはずだ。

「あいつは、俺を救ってくれた。だから今度は俺があいつを助ける。そう決めたんだ。」
『救った…ですか？』
「ああ。」

だが、洸たち人間は違うのだ。
例え張りぼてのような世界でも、否、だからこそ。
自分の周りの者たちは、なによりも変えがたいものなのだ。

『マスターはただ善意でその友人を手伝っていたというわけではないのですか。』
「…そう言われるとなんだか否定しにくいんだけど、まあ、そうだよ。」

もし洸と浩太が他人で、ただあの時公園で偶然に出会っただけであったなら、洸は今ここにはいないだろう。
そして、洸と浩太がただの友人関係であったとしても、洸はここに来たと言い張る自信はなかった。

洸がここにいるのは、それをするだけの理由が洸にあったからに他ならなかった。

『…そうなのですか。』

洸の言葉を聞いて、菫がそう呟いた。
やはり、洸の話をよく理解できなかったようだ。

無理もない。
菫は洸のいた世界を知らないし、洸も菫の感覚や思考はわからない。
まだ出会って2日だ。
そう簡単に心は通じ合わないのだろう。

『……。』

菫は、そのまま押し黙ってしまった。
まるで何か考え込むように。

（やっぱりあるんだろうな、感情）

たった今までの会話。
それは、まるで隣に人がいるかのような、自然なものだった。

（菫にもあるのかな、恐怖…）

菫たち魔導器にだって、死はある。
魔導器が壊されれば、きっと――。

（…あれ？）

不意に、強い脈動が、洸の中に起こった。
一瞬、視界が白んで、僅かに蹲る。

それが、洸の思考をそれ以上進まないように食い止めた。

（俺、今何考えて…）

何か、考えてはいけないことに思い至ったような気がして。
洸は自分の顔を掴んだ。

『マスター。』
「！？」

そんな時に、菫がまた口を開いた。
不意を衝かれたように、洸は顔を上げた。

「ああ、どうした？」

見れば、また菫の輝きが増してきていた。

何か、結論が出たのだろうか。
洸は、菫に向き直る。

『もしよろしければ、聞かせてもらえませんか？』
「聞かせるって…何を？」
『その、マスターと友人の間に、何が起きたのかをです。』

ゆっくりと、言葉を選ぶように菫は言う。

『マスターがここに来る理由となったそれを、知りたいのです。』
「……。」

菫の願いを聞いて、洸は逡巡する表情を見せた。
話すべきか話さないべきか。

洸と浩太の出会い。
それを説明するには、洸の深い性質まで語らなければならないだろうから。

『…いけませんか？』
「いや…。」

呟いて、洸は入口を振り返った。
咲の荷物整理はもうしばらくかかるだろう。
考え事も、急がなければならないものもない。

「まあ、いいか。」

少し、昔の話をするのもいいだろう。
洸はそう思った。

第四十三話

洸と浩太の出会い。
その話をするためには、それよりも前の話から始めなければならなかった。

「俺さ、小さいころから、変な体質みたいなものを持っていたんだ。」

一度、大きく息を整えてから、洸は話し始めた。

『体質、ですか？』
「ああ。」

頷いて、洸は自分の掌を見た。

「その体質っていうのは、何て言えばいいのか…人の、気を抜いてしまうものなんだ。」
『人の…気ですか。』
「そう。意識っていってもいいかな。」

気とか、意識とか。
起きている間の人を支配しているもの。

「俺に近づいた人は、ふっ、と魂でも抜かれたように意識が遠くなる。大人だろうが子供だろうが構わずにね。」
『…意識。』

少し困惑したように、菫が呟く。
機械の菫にいきなり意識なんて話をしても、厳しかったのかも知れない。

「菫には少し難しいかな。」

そう思って、洸はそう言ったのだが。

『いえ、そんなことはありません。続きを。』
「そうか？でも…。」
『お願いします、マスター。』

はっきりとした声で、菫は言った。
そこからは、はっきりとした彼女の意志が強く伝わってきた。

聞かせてもらえるまで、諦めない、と。

（…菫って、本当にこんな性格だったっけ？）
何て頑固なパートナーなんだ。
洸は、大きく息をついた。

「…わかった。」

淡い緑の光に、洸は頷いた。

白埼洸。
彼はその言葉通りに、不思議な力を持っていた。

近づくだけで、人の意識を刈りとる力。
それも洸の意思に関係なく、無意識に。

洸がはじめてその力に気がついたのは、彼が樹山町唯一の小学校、樹山小学校に転校してきた時。

教師の横で紹介され、教室の奥に置かれた自分の席に向かった彼が振りかえると、クラスにいた子供たちの半分が倒れていた。
それも、洸が横を、前を通った生徒たちだけが。

始めは皆悪ふざけしているのだろうと、教師が笑みを含んだ声で彼らに声をかけた。
だが、いくら待っても誰一人として起き上がらない。流石に不安に思った教師が一人の生徒を見てみると、その生徒はまるで生気を抜かれたかのように緩んだ表情のまま、気絶していたという。
慌てて他の生徒を確認すると、倒れた生徒は皆同じ表情をしたまま、気絶していたのだ。

洸は今でも覚えている。
不安と恐怖に満ちた教室。
どろどろとした声が、耳に塗りつけられる。
皆を抑えようとする担任の教師も、その不安を隠し切れてはおらず、それがまた皆を不安にさせていた。
中には泣き出す者も出始め、騒ぎを聞きつけた他の教師たちがやってきた時はもう殴りつけられるような大量の言葉が部屋中を動き回っていた。

そんな中で、洸はただ一人、静かにその惨状見つめていた。自身に注がれた疑いの視線を感じ取りながら。

『…それで、マスターはその後どうしたのですか？』
変わらぬ声色で、菫が呟いた。
その言葉を聞いて、洸が不思議そうな表情を浮かべた。

「…驚かないんだな。」
『…？驚くとは、何にでしょうか。』
「いや、俺の体質のこと。普通の人間にはありえないものだから。」
『普通の人間には、ないものなのですか？』
「…ああ、そうか。」

そう言えば、菫は人間ではなかった。
人の常識など、知っているはずもない。

『驚いた方が、良かったでしょうか。』
「いや、そんなことないよ。」

困ったように言う菫に、洸は笑った。

「むしろ、理解が早くてありがたい。」

大抵の人は洸のこの話を聞いても信じることはない。
まともに取り合わない人間がほとんどだし、熱心に聞いてくれる人間にも、碌な者はいなかった。
そして、その誰もがその話を信じない。

まあ、それも当然だろう。
例えば霊感がある、という人間を人は容易には信じない。
自分にないもの、常識の外のものを認めないのと同じように。

洸の体質もまた、言葉だけで理解できる者はいなかった。
ただ、洸の体質の場合、理解させるのは簡単だ。
洸が近づき、触れればいい。
そうすればどんな馬鹿でも理解ができる。
気を失うというおまけ付きで。

そうして、皆洸の力を体験し、彼の体質を思い知ってきた。
だが、菫は人でも、生き物でもない。
実際に洸のそれを体験できない彼女がこの話を理解してくれるのかどうか、不安であったのだが。

『それならば、良かったです。』

その心配は必要なかったらしい。
菫は、怒るでも馬鹿にするわけでもなく、洸の話を聞いてくれている。
内心ではどう思っているのかはわからないが、今はそれがありがたいと思えた。

「えっと、さっきの話の後の事だよな。」

それた会話を戻して、洸は話を続ける。

『はい。教室で他の子供たちが倒れて、その後一体どうしたのですか。』
「……。」

子どもたちが倒れて、その後どうなったのか。
そんなこと、決まっている。

「倒れた子供たちは、すぐに病院へ運ばれていったよ。」
『…マスターは？』
「俺も先生に連れられて、病院へ行ったよ。何か異常がないか調べるために。」
『異常は見つかったのですか？』
問う菫に、洸は首を横に振った。
「…何も。やっぱり、これはただの体質なんだ。異常なんて見つかるわけがない。」
だが、その当時洸は自分の体質のことなど知ってはいなかった。本人がわからないのだから、何も知らない教師たちにわかるはずもない。
「ただ、先生たちは俺に十分近づいていたから、理解はしていたと思う。」
その証拠に、次の日洸は恵那とともに小学校へと呼びだされた。2人して並んで、担任の教師の前に座ったのを覚えている。
だが、どんな話をしていたのかは覚えていない。
記憶にあるのは、マスクのように無表情な教師の顔と、悲しそうにほほ笑む恵那の顔。
『…？そう言えば、家族は大丈夫なのですか？』
ふと思いついたように、菫が言った。

『それほどの体質なら、家族といえど影響は出ているはずです。』
「いや、それがそうでもないんだ。」
呟いて、洸は微笑む。
「母親に、姉…家族は、不思議と俺の体質の影響は受けなかったんだ。」
他にも、天香や遼次など、洸に近しい者はあまり影響を受けない傾向にあった。
だからこそ、洸は自身の体質について知ることがなかったともいえる。
だが、恵奈たちは洸の体質について知っていた。その上で、彼女たちは洸を学校に行かせることを選んだのだ。
今思えば、あの家は洸を守る檻のようなものだったのかもしれない。
その檻を抜けて、洸は自分が初めて檻に入れられるべき存在であることに気がついたのだ。
織の外に広がる世界。
そこでは、たとえどんな異形であっても、『人間』である限り決して逃れられない。
そして、にもかかわらず異形を守ることは滅多にないという、茨の檻。
そんな世界の中で、異端である洸もまた、その檻の中にとらわれることになる。
「…結局、義務ってことで学校には通い続けることになったんだ。」

大きく息をつきながら、洸は言う。

『それだけのことがあったのに、ですか？』

「近づきさえしなければ大して問題がないってわかったから、学校側は大丈夫だって判断したみたいなんだ。」

『…なるほど。』

洸の体質が及ぶ範囲は、せいぜい彼の腕の長さより少し広いくらい。気を付けてさえいれば、確かに何とか対処できる問題ではある。

だが。

「でも、実際に体験した連中…特に周りの子供たちの反応は違った。」

『……。』

一度味わった恐怖を、人は簡単に塗り替えることはできない。

「あいつらにとっては、俺は化け物だった。」

その時の彼らの、恐怖に満ちたあの眼。

それは、何よりも深く、洸の心を抉った。

「…まあ、こればかりはしょうがないよな。」

もちろん、そんな洸に近づいてくる子供がいるわけがない。

時折ふざけて洸をからかおうとする子供もいたりはしたが、洸の力を理解した途端に、その無知さはやはり恐怖へと変わった。

「実際、俺が触っただけで気を失う奴だっていたからな。隔離されて当然だったと思うよ。むしろ、あのまま通い続けさせてくれたんだ。感謝もしてる。」

そうして、洸は独りになった。

「…でも、そんなこと当時の俺にわかるはずもない。」

『…マスター。』

「どうして俺だけなんだろう、って一人で怒って、問題ばかり起こしてた。誰も寄せ付けずに、勝手に怒り散らして。…それで、俺が中学に上がる時は、皆もう俺に関わることをやめてた。」

『……。』

「中学の時の記憶は、ほとんどない。ただ静かに、ただひっそりと過ごした。」

ただ、淡々とこなす日々。

朝は早くに起きて、誰もいない道を登校する。

そして学校が終わると、そのまま夕方になるまで自分の席で静かに過ごす。

帰宅部の生徒たちが帰り、部活動にいそしむ生徒たちが時間を忘れてそれらに熱中している時間。

その時になってようやく、洸は誰にも知られずにひっそりと帰っていく。

家に帰れば、恵那が、美音がいる。

遼次や天香のいるクインテットも、洸の大事な居場所の一つであった。

そして、それら以外の場所では洸は心を閉ざし続けた。

「それで、3年が経って。俺は、高校生になった。」
『今から1年半前、ですね。』
「ああ。」

中学も、高校も、共に洸の存在は始めから知られていた。
小学校の時はほとんど全校の生徒が知っていたし、教師たちも連絡が必要だと判断したのだろう。
実際、そのおかげで洸は学校を変えてもさしたる問題なく生活できていた。

「茶織みたいに外の高校に行くっていう方法もあったけど、俺は樹山高校を選んだ。外からこっちに来る物好きなんてそうそういないし、そう考えれば俺のことを知ってるやつが多い方がいいに決まってる。」

（…本当は、高校に行くつもりもなかったけど）

そう言いつつも、洸は別のことを思考する。
義務である教育は、中学校まで。
ならば、無理をして学校に行く必要もないと、そう思っていた。

だが、それを恵奈たちは良しとしなかった。
特に天香は、洸の意見などまるで無視するように、高校進学を決めさせた。

それが原因で、洸はしばらく天香と衝突を繰り返していた。
何故分かってくれないのかと、何度も心の底から叫んだ。
けれど、それでも天香は頑なであった。

「また、静かに過ごそうと思ってた。中学の時と同じように。」

数少ない理解者であった天香たちの裏切り。
それは洸の最後の心の防壁を、いとも簡単に破った。
そして、追い打ちをかけるように倒れた恵奈。
もう、どうでもいい。
そんな感情が、洸の心を支配していた。
そんな時。
「そんな時だった。…あいつが現れたのは。」
洸は、自身の運命を変える人物に出会ったのだ。

＊＊＊

その日、洸は何だか起き上がるのが億劫で、学校を休んだ。
自分がいてもいなくても、大して変わらない。
むしろ気を使わない分皆楽なのではないかと、そう思って。
それがただの逃避であることは、洸もよく分かっている。
例え洸のような事情の持ち主でも、義務である学校を休んでいいわけがない。
ただ、時折、周りのもの全てがどうでもよくなる時がある。
それが今日だったというだけだ。

美音は朝から仕事に出ていて、夜にならないと帰らない。
洸が今日学校を休んだことは、彼女は知らない。

2人の母親である恵那が倒れて、まだ少ししか経っていない。
慌てて働きだした美音に、洸の高校入学。
まだ自分たちですらそれぞれの生活のリズムを理解できていなかった時期。
互いの行動を確認する暇も余裕も、2人にはなかった。

「……。」

ベッドに横たわって、ただぼんやりと天井を見つめる。
頭の中には何にもなくて、自分が生きているのかさえ分からない。

ただ、胸の奥が鈍く痛む。
それは、多分絶望。

本当は、少しの期待があった。
高校ではきっと、と。
何か変わるかもしれないと。

でも、それはただの妄想で。
何も変わらぬ日常が広がっているだけであった。
町の開発の影響か、外から新しく来た人は確かにいた。
けれど、皆洸に出会う前には、洸のことを知っていた。

送られる視線に、聞こえる囁き。
変わらない。
やっぱり、何も変わらない。

「……ッ！！？」

不意に、全身で叫びたい衝動に駆られる。
ベッドを、壁を、そこら中にあるものを殴り、壊してしまいたいと疼く。

暴れたくなる苦悩。
そんな感覚にも、いつの間にか慣れていて。
しばらく放置して、身体を落ち着かせる。
そうすれば、勝手に収まる。

「はあ…。」

空虚な日常。
このまま、死ぬときまでこれが続くのだ。

そう考えると、どうしようもない脱力感が、身体を襲う。

自ら命を断とうと考えた時もあった。
だが、美音と恵那のことを考えるとそれもできなかった。

彼女らと、天香と遼次だけは、洸のこの体質の影響を受けない。
洸に近い人たちだからなのだろうか、よくはわからないのだが。
洸が何とか生きているのは、間違いなく彼らのおかげだっただろう。

彼らとの日常だけが、洸の唯一の楽しみだったから。
それも、恵那が倒れてからは変わってしまったのだが。

「……飯、食うか。」

呟いて、洸は起き上がった。
幸い、食材はまだまだ残っていた。
一人分の量なら、十分にある。

（…そういえば、一人分の料理って、したことないかも）

今までは恵那と美音がいて、今は美音がいる。
昼は弁当だし、夜も朝も美音と一緒に食べていた。
自分のためだけの料理を、洸はしたことがなかった。

『――』

そんな時、来客を告げるチャイムが鳴った。

「……。」

だが、洸は反応しない。
洸は今、学校にいることになっているのだ。
まだ、昼休みの時間。
学校の人間ではありえないし、それ以外なら絶対に出るわけにはいかない。

だから、洸は居留守を決め込んでいたのだが。

『――』
「……？」
『――』

『――』
「おいおい…。」
何度も何度もチャイムは鳴らされた。
家の中に、騒がしい音が鳴り響く。
『――』
『――』
『――』
それでも、音はやまない。
まるで、洸が家にいるのを知っているように感じられた。
「…ああ、もうわかったよ！！出ればいいんだろ！！」
そのあまりの騒がしさに負けて、洸は仕方なく立ち上がった。
玄関に向かい、息を整える。
『――』
まだ、チャイムは鳴っている。
昼真っから他人の家にこんなことをする奴だ。
どんな奴かわからない。
気を引き締めて、洸はドアを開けた。
そして、そこには彼がいた。
「……。」
「……お前。」

見慣れた黒い服。
それもそうだ。
洸自身も着ている、樹山高校の制服だから。

（こいつ…確か同じクラスの）

名前は覚えていないが、小学校からの同級生だったはず。
つまり、『知っている』奴だ。

（まだ、学校、あるよな…？）

昼休みももう終わる頃。
人のことは言えないが、学生がこんなところにいるのはおかしい。
まさか、自分の家に同級生がやってくるなんて思っていなくて。
洸は呆然としてしまった。

「……よう。」

驚く洸を見て、恥ずかしそうに頬を掻いていた男は右手を上げた。

「…！？」

同級生が、自分に声をかけている。
しかもわざわざ自分の家にやってきてまで。
それだけで、洸が硬直するには十分だった。

そんな洸の異変に気付いて、今度は男のほうが驚いた。
彼は洸のほうに近づくと、顔の前で手を振った。

「…おーい。」

「へ！？あ、ああ…悪い。」

ようやく我に返って、洸はいつの間にか目の前にきていた彼に向き直る。
やはり、彼は洸を見ている。
改めて認識して、洸は心臓が強張ったように感じた。

「それで、何の用だ？」

乾いた口からは、固い声しか出ない。
思えば、他人とまともに話すのなんて何年ぶりだろうか。
洸は、自分が思っている以上に緊張しているのだと感じた。

「今日、大事なプリントが配られたから、それを届けにきた。」
「プリント…？」
「ああ。」

対する彼の声も、緊張しているのか、固かった。
まあ、『化け物』の家に来るのだから、当然だ。
チャイムもきっと、せめてもの嫌がらせに違いない。

そう思って、洸は小さくため息をついた。
やはり、そんな簡単に変わりはしないのだ。
だが、それでも、洸は驚いていた。

これまで、洸が休んでも誰かが届けに来てくれたことは殆どなかった。
あったのは、まだ洸の体質が周知の事実になる前。
それも、担任の先生が直接渡しに来たくらいだ。

同級生が家に来るなんて、考えたこともなかった。
だが、それを聞いて安心する洸がいた。
大事なプリントを渡しに来るなら、なるほど、確かに同級生が来ることも考えられる。
流石に、高校の教師がわざわざ直接届けることはないだろう。

（そんなに大事なプリントなのか…？）

そう考えて、洸は首をひねっていた。

（ま、いいか）

それならば、プリントを受け取って終わりだ。
痛みながらも、少し気が楽になったのを、洸は感じた。

「わざわざありがとう。」

そう、笑みを浮かべて。

「じゃあ、悪いけどそのプリント、ポストに入れといてくれ。」

いつものように、そう言った。

「……。」

その瞬間、彼は怒ったような顔をした。
その表情も、いつも通り。

わざわざ届けに来たのに、『化け物』に命令される。
それが、不快だと感じている顔だ。

だからといって、触れるわけにはいかない。
触れたらどうなるかは、彼らはよく知っている。
だから、皆洸の言うとおりにしてくれる。
そして帰って、周りに不満をばら撒く。

その積み重ねが、今の洸なのだ。
そう簡単には変わらない。
そう単純には終われない。

――だが、今日は、彼は違った。

「嫌だ。」
「…へ？」
「嫌だ。」

はっきりと。
洸をにらみつけるように、彼ははっきりとそう言った。

＊＊＊

『…すごいですね。その友人は。』

洸がいったん話を止めた時、菫がそう言った。

「だよね。びっくりしたよ。お互い楽なやり方だったのにさ、まさか断られるとは思いもしなかった。」

一息つきながら、洸は呟く。
洸の言葉に、菫は口調を重くした。
『…楽なやり方、ですか。』
「？どうした？」
僅かに首を傾げる洸。
彼は、自分がどれほど歪んでいるのかには、気づいていないのだろう。
その歪みは、彼自身というよりはその周りがみだしたもので。
それによって、彼はこれまで守られてきたのだから、仕方のないことなのだろうが。
『いえ…それで、その後マスターはどうしたのですか？』
「ああ。」
菫に促され、洸は話を続ける。
「しばらく驚いてたんだけど、ようやくそいつが何言ってるのか理解してさ、言ったんだ。じゃあ、どうするんだ…って。そしたら。」
『そしたら？』
菫の方を振り向いた洸は、突然、その顔を核である緑石へと近づけた。
『…！？ま、マスター？』
「何にも答えずに、いきなり近づいてきた。…こんな風にね。」
そう言って顔を引くと、洸は笑った。

「よかった。菫もちゃんと驚くんだな。」
『全く…何を考えているんですか。』
「ごめんごめん。」
ほほ笑みながら詫びる洸。

『…それで、その後どうしたのですか。』
「びっくりして、慌てて家に引っ込んだんだけど、そいつもそのまま追いかけてきたんだ。怒った顔のままで。」
『それは…不気味ですね。』
「俺も途中から怖くなってさ、玄関に段差があるの忘れて、転んじゃったんだ。起き上がって、振り向いたら、そいつは目の前にいた。」
『…。』

無言のまま自分を見つめる同級生。
その迫力に、流石の洸も恐怖を覚えた。

「もう、訳がわからなくて、何だよ！！って叫んでた。でも、そいつは何も答えずに、俺の前にプリントを突き出したんだ。」

＊＊＊

「取れ。」

相変わらず無愛想な表情のまま、彼はそう言った。

「……は？」

長い時間をかけて、洸はそれだけを呟く。
もう、頭の中は滅茶苦茶で、目の前のことへの処理が追いつかない状態であった。

（何だ、これ？今、何が起きてるんだ？）

とりあえず分るのは、目の前に紙が突き出されているという光景だけ。
それが誰から渡されているもので、誰に向けられているのかもわからない。

それが理解できたのは、その紙が揺れて、向こうに覗く彼の顔が見えたから。
同じクラスの少年。
その目は、まっすぐに自分へと向けられていた。

「取れ。」

開け放たれたままの扉から、ほんのりと暖かい風が流れ込む。
昇っていく日が、眩い日差しをその四角へと送っている。
明りを一つもつけていなかった中を、少しでも照らそうとしてくれている。

彼は日差しの中にいて。
洸は、陰の中にいる。

「…駄目だ。」

俯いて、洸はそう言った。

眩しいと思ったから。
日差しではなく、彼の眼が。

「それは、受け取れない。」

洸は、理解し始めていた。
彼が今何をしようとしているのかを。

少し息切れして、緊張した声。
昼休みという時間。
洸に近づき、まっすぐに見つめてくる、その理由を。

でも、それもただの期待なのかもしれない。
安心して、安堵して。
手を伸ばせば引っ掛かったと笑われてしまうかもしれない。
そんなことも、何度もあった。

だが、今は違った。
洸の心を占めるのは確かに恐怖だが、それは裏切りへの恐怖ではない。

もし、このまま触れて、彼が倒れてしまったら？
必死に伸ばしてくれた手を、洸自ら焼き切ってしまうのか。
それは、自分への恐怖。
未だに底の見えない、悪魔のような体質への強い不安。

もう慣れきってしまったからこそ、これ以上の絶望を拒む自衛。

「ポストに入れるのがいやなら、そこら辺に投げ捨てておいてくれて構わない。…だから、もう帰ってくれ。」

関わるな。
頼むからもう、自分に関わるな、と洸の心がそう言った。
「わざわざ届けに来てくれて、ありがとう。嬉しかった。」
「……。」
だが。
「ほい。」
洸の言葉などまるで無視するように、彼は洸の身体にプリントを押しつけた。
「ば…っ！？」
倒れる。
そう思い、洸は咄嗟に離れようとしたのだが。
「逃げるな！！」
「！！？」
「大丈夫。俺は倒れない。」
そう言って、彼は洸の肩を掴んだ。
がっちりと掴まれて、動けない。
（まずい…！！）
この体質は、一瞬だけ耐えればいいとか、そんな生易しいものではない。

近くにいればるほど、それだけ生気を抜かれてしまうのだ。

「…っ。」

彼の顔が、一瞬緩んだ。
まるで気が抜けたような表情。

「馬鹿野郎…！！さっさと離れろ！！ぶっ倒れるぞ！？」

必死になって叫びながら、何とか離れようともがく。
それでも、彼は離そうとしない。

（やっと…、やっと出会えたのに…！！）

別に、洸は触れあえなくても良かった。
話ができれば、共有できれば、それでよかった。

ただ人として、クラスメイトとして扱ってくれるだけで満足だったのに。

（これじゃあ、また…っ）

もう嫌だ、と洸は心の中で叫んだ。
その叫びに応じて、洸の身体が思考をカットしようとする。
壊れないように。
崩れないように。

そうして、洸の瞳からは生気が消える。
顔はゆっくりと俯いていき、身体からは力が抜けていく。

だが。

「だから…っ！！」

イラついた声がかすかに聞こえたかと思った、直後。

「逃げんなっつってんだろ！！」

鈍い音が全身に響いた。

「〜〜〜っ！！！？」

途端に、頭から鈍い痛みがはしった。
殴られたのだ、思い切り。
その痛みに、洸は意識を引き戻された。

「お前、何す…！！」

「見ろ。」

咄嗟に上げた顔を、彼が抑えた。
固定された視界に映るのは、彼の顔。
また、まっすぐに洸を見ている。

そう、まっすぐに。

「…って、え？」

「言ったろ、大丈夫だって。」

「お前、平気なのか…？」

「ああ。」

彼は今、洸に触れている。
今までなら、もうとっくに気を失っているはずなのに。

「…どうして？」
「んなもん、わかんねーよ。」

そう言って、彼は肩から手をはなすと、立ち上がった。

「でも、触れた。」
「……。」

そうして、倒れたままの洸の手を掴むと、引っ張り起こしてくれた。
確かに触れているのに、彼はやはり平気そうに見えた。

「…ははは っ。」

不思議と、笑いが込み上げてきた。
頭は、まだ痛いまま。
夢では、ないのだ。

「触れるのかよ。近づけるのかよ。」
「ああ、そうだ。…言っとくが、俺には特別な体質なんてないからな。」

その一言が、どれほど安心したか。
触れる。
近づける。
洸は錆びついていた希望が、再び開いた音を聞いた気がした。

「何だよ、それ…。」

そう呟いて、洸は段差に腰かけると、寝転んだ。
歪んだ視界。
そこには、眩い日差しが差し込んでいた。

＊＊＊

「とまあ、こういう訳で、俺はあいつに…浩太に出会ったんだ。」
話を終えた洸が、大きく息をつくように言った。
「それから、一緒に学校行くようになって、学校でも話すようになった。そしたら、周りの奴らも少しづつ俺の変化に気付き始めてさ、いつの間にか、俺は普通の高校生になってたよ。」
『…なるほど。』
長い洸の話を聞き終えて、菫はそう呟いた。
『事情は、よくわかりました。その友人は、マスターの恩人というわけですか。』
「まあ、そういうことだ。」
菫の言葉に、洸は頷く。
『そしてその恩返しのために、マスターはここにやってきた、と。』
「…まあ、そういうことだ。」
（それだけじゃ、ないんだけど）

洸の脳裏に、泣き叫ぶ浩太の姿がフラッシュバックする。
あの浩太を見て、洸はここへ来ることを決めたのだから。

『それが、マスターの命を賭ける理由なのですね。』
「ああ。」

結局、菫がなぜ浩太の話を聞きたがったのかはよくわからない。
ただ、洸はすっきりとした気分を味わっていた。
自分の過去を想いごと誰かにぶち撒ける。
それがこんなに心地いいものなのだと、洸は初めて知った。

そして何より。
洸は改めて、自分の目的を確認できた。

浩太のために咲を連れて帰る。
今度こそぶれないように、洸はその想いを心の中に打ち込んだ。

『…なら。』

ふと、菫が呟いた。
それは、きつく絞り出したような声のように聞こえた。

「菫…？」

弾かれたように、洸は菫を見た。
だが、菫に変化は見られない。

『なら、必ず帰らないといけないですね。』

先程の声はどこへやら。
明るい口調で、菫がそう告げた。

「……。」
『…？マスター？』
「…あ、ああ！！もちろんだよ。」

慌てて、洸もそれに合わせる。

（…今のは、一体…？）

気のせいだったのだろうか。
菫が一瞬、苦しそうにしている様に感じたのだが。

『さあ、今日はもう休みましょう。』

先程までとなんの変りもない声で、菫は続ける。
そこには、やはり何の違和感もない。

（…気のせい、か）

そう、今は思い込むことにした。
洸は自分のことを話し、菫はそれを理解してくれたのだ。
その内、菫から話してくれるだろう。
そう信じて。

「ああ、そうだな。」

そう応えて立ち上がると、洸は入口へと歩き出した。
長いこと話していたせいか、洸はやけに疲労感を感じていた。

明日に備えて、今は早めに休もう。
菫や咲の言葉に従い、洸はそう決めた。

ただその前に、少しだけ咲を手伝おうと考えながら。
ふと、洸は足を止めた。

「なあ、菫。」
『…？』
「色々邪魔入ったけどさ、明日こそ、新しい拠点を見つけような。」
『…はい！！』

菫の言葉に頷いて。
洸は今度こそ、階下へと向かった。

第四十四話

ｓｅｖｅｎｔｈが開かれてから、時計は５度目の回転を始めた。
それぞれのプレイヤーが、自分たちの放たれた『戦場』と持たされた『武器』をようやく理解し始める頃。
空（うろ）や他のプレイヤーが蠢く作り物の都市。
誰もいないけれど、廃墟とも違う灰色の建造物群。

その隙間を縫うように、この世界へと吸い寄せられた不幸な人間たちは戦いを始めるのだ。
せめてもと砥いだ牙をむき出して。
生き残るために。
目の前を横切る獲物を、その牙で食い千切るために。

それが、たとえ強制されたものだったとしても、彼らは牙を振るうよりほかにはない。

それは、本能。
でも、何の本能だろうか。
暴力を振るいたいという欲求？
敵を打ち倒したいという願望？
それも確かにあるだろう。
でも、きっと違う。

生命に、人間に根付く何よりも強い本能はきっと生存本能だ。
生きていたい。
死にたくない。
それだけで、人は何だってできるのだ。
そう、何だって。
だから。
だから、私は――。
＊＊＊
「――ここか。」
目の前にあるそれを見上げて、洸は呟いた。
『はい。』
右手に光る菫が、それに応える。
洸たちの眼前には灰色の建造物。
そこには、吉崎と書かれた木の板が飾られていた。
それは、人の名前に違いない。
人の名前の書かれた表札の飾られた建造物。

つまり、それが示すのは。

『本当にここでよろしいのですか、マスター。』

「ああ。」

洸が新たな拠点として選んだのは、ただの一軒家であった。

西地区と南地区の境界近く。

町を流れる唯一の川を境界としたその辺りは、住宅の密集地となっている。

密集地、というのはまさにそのままの通りの表現であり、ひどく入り組んだ路地は地元民でも迷うものが出てくるほど。

あまりこちらの方に来ることが少なかった洸にとっては、迷路そのものと言えた。

拠点の正確な位置がわからないというのは、プレイヤーにとっては致命傷なのかもしれない。

だが、否、だからこそ、隠れ家としては優秀といえるのではないだろうか。

洸はそう考えていた。

「拠点を隠すって考えなら、普通の家が一番のはずだしな。」

それに、道ならば現在頭にたたきこんでいる。

直ぐにでも覚えられるだろうと考えていた。

『ですが、昨日のようなことが近くで起こった場合は…。』

「…それも、まあ大丈夫だろう。」

菫が危惧しているのは、昨日の陽の魔法のようなケースだろう。

発動地点から一直線上を焼きつくした、彼の魔法。
もしその先に拠点があった場合。
（それは…あまり考えたくないな）
ただ、それは拠点をどこにしたとしても関わってくる問題である。
むしろ標的とされると考えるならば、今の拠点の方が危険性は十分にある。
「ともかく、新しい拠点はここ。決定！！」
『…わかりました。』
そう叫んだ洸に、菫はため息交じりにそう応えた。
昨日を境に、洸と菫の間の心の距離は、確実に縮まったと言っていいだろう。
拠点を探している間も、以前よりは会話が増えてきていた。
とはいっても、この２人が交わす会話と言ったならかなり限られてしまうのだが。
もう一度、自分たちがこれから滞在することになる拠点を見上げると、洸は軽く体を伸ばした。
戦闘の後遺症か、まだ身体に気だるさが残っていた。
「それじゃあ、戻るか。さっさと移動しないとな。」
『はい。』

昨日までに咲が纏めてくれていた荷物は、既にここに運び込んでいた。
段ボール箱5つに詰め込まれた様々な物。
初めてそれを見た時は、咲を守りながらこの荷物を運ぶのは不可能なのではないかと洸は思った。
だが、魔法というものは洸の予想以上に便利なものであった。

呟くと、洸は目を閉じた。
最早手なれた手順を踏んで、洸は風を纏う。

思えば、菫から放たれる風は、洸を軽々と持ち上げてしまうのだ。
衣類などの入った比較的軽い荷物を持ち上げることなど、造作もないことであった。

魔法の練習にもなって一石二鳥ということで、洸は荷物を持ちながら拠点を探していたのであった。

「…よし！！」

軽やかに跳びあがると、塀を伝い、家の屋根へと上がる。
道はもう頭に入った。
後は、急いで移動するだけだ。

辺りを一度大きく見回した後、洸は走りだした。

途端に、風と共に、景色が真横へと流れていく。
たった一歩で、数十メートルを駆ける。
その感覚にも、洸はもうだいぶ慣れてきていた。
レベル2に上がって魔法の出力も増えているらしく、一階程度の高さならば楽に跳躍できるようになっていた。

それ故に、移動もかなり楽になっている。
ただ、そのスピード故に着地地点などを瞬時に決めならなくなったが。

「うわっ…！！」

早速、着地しようとした塀を踏み外しそうになる。
咄嗟についた手で身体を支えるも、身体は流れたまま。

「…っと！！」

空中で回転して、洸は何とか体制を整えた。
そのまま道路へと何とか着地して、転がる様にかけていく。

『大丈夫ですか？マスター。』
「あ、ああ…。」

（あっぶねー…）

風を纏った、高速での移動。
思えばそれは、中々に危険な行為であるのだ。
速度を出した物体…例えば車が壁に衝突したらどうなるか。
しかも、洸は魔法に包まれているとはいえ生身だ。
どうなるのかなんて、目に見えている。

便利であるから、レベル上げになるからと今までやってきてはいたが、これからはそんな安易な考えで動いてはならないだろう。
何しろ今洸は、些細な怪我でさえ負うわけにはいかないのだから。

例えば、ほんの少しの捻挫でさえ、戦闘には致命傷になる。
目の前に刃が迫っていたとしても、傷む腕はのろのろとしか動かない。
痛みを無視することなんて、極限状態にならない限りは不可能だ。
誰か他のプレイヤーから治癒球を奪うまでは、決して危険を冒してはならない。
生き残るためには、これは必ず守らなければならないことなのだろう。
だが。

「……。」

突き抜けていく道の先、周りに比べて高い影が見えてくる。
3階建のアパート。
丁度T字路の交差点部分にあるそこには塀など足場になりそうなものが見当たらない。
もちろん、それを一気に飛び越えるほどの脚力は洸にはない。
このままいけば、間違いなく衝突してしまうだろう。
それでも、洸は止まらない。

（怯んでいちゃ、勝てない…！！）

あの時。
洸が躊躇せずに逃げの一手を選んでいたなら、余計な戦いをせずに済んだかもしれない。
だが、洸はそう思えなかった。
住宅がいくつもひしめく住宅街である西地区。
まっすぐに進むことのできなかったあの状況で、混乱していた洸に

この場所をまともに進むことなどできなかっただろう。
落ち着いている今でさえ、うまく走れないのだから。

洸たちプレイヤーが戦闘を行うのは闘技場でも草原でもなく、町の中。
直角の起伏に溢れたこの場所では、ただ速いだけでは無意味に近いのだということを、洸は知った。

だからこそ、慣れねばならない。
建物や、塀、その他この町を構成している物に。
跳び、時には蹴って突き進む上下の動きに。

洸のイメージは、スーパーボール。
壁に触れては跳ね返り、突き進んでいく挙動。
それを体得するためには、躊躇などしてはいけないのだ。

そして、何より――。

「行くぞ、菫。」
『はい。』

目の前までやってきた建造物。
後数歩で、そこまで至るという時。
洸は思い切り、右側へと跳躍する。

前方右側。
そこには道を挟むようにして並ぶ、壁のような家々。
その壁の内の一つを、洸は思い切り踏みしめた。

同時に、菫が輝く。

這うように上る風が、洸を下から掬いあげる。
その風に乗り、洸は曲げていた膝を、一気に解放した。
弾丸のように、洸の身体は夜空を突き抜けて。
洸はアパートを飛び越えた。

『お見事です、マスター。』

脳の奥に響く菫の声を除いて、洸の耳には自らが切った風の音が満ちている。
肌寒い夜気も、走り火照った体には心地よい。

そして何より。
尋常ではない速度で駆け抜け、普段見上げるしかない建物を飛び越える。
まるで空を駆けている感覚そのものが、何物にも代えがたい快感を、洸に与えていた。

「ああ！！」

風にまぎれないように叫び、応えながら、洸は次の建物へと乗り移った。
ここから先は、もう先程のアパート以上の障害物はない。
デパートまで一直線だ。

『マスター。』
「ん？」

ふと、菫が声を上げる。
もう話しかけても構わないと判断したのだろう。

「どうした、菫。」

実際、洸にも応えるだけの余裕があった。

『昨日の話のことで、少し気になることがあるのですが…聞いてもよろしいですか？』

「…構わないよ。俺に応えられる範囲なら。」

おそらく、洸に気を使ったのだろう。

遠慮した声で、菫は恐る恐る聞いてきた。

昨日の洸と浩太の話は、洸が自ら話すことを選んで菫に教えたのだ。

今更質問されたくらいで気にしたりすることはないのだが。

『ありがとうございます。では…。』

そう言うと、菫は一旦息をついて、

『マスターの体質は、今はもう治ったと考えていいのでしょうか。』

そう告げた。

「…うーん。」

『マスターの話からすると、今はもう他人に対して意識を引き抜くという影響が出なくなったのですよね。…実際、咲には何の影響も出ていなかったですし。』

「本当に？」

『え？』

少し速度を落として、洸は菫の方を見た。

「本当に、茶織には何の変化もなかったの？」
『それは…。』
言葉を詰まらせた菫が黙り込む。
「悪い、意地悪言ったな。」
その様子を見て、洸はほほ笑んだ。
「正確には、俺の体質はまだ消えてないんだ。」
『え？ですが…。』
「ただ、限りなくその影響が小さくなっただけ。」
『小さく…ですか？』
「そ。気は抜くけど、それは少しぼーっとする程度。だから、周囲には『気抜けの白埼』なんて呼ばれてるよ。」
浩太が茶化すように言っていたそのあだ名は、洸の体質のことを指していたのだ。
『気抜けの…。』
「なんだか俺の近くにいると落ち着くとか何だかで、皆の相談を受けたり、ケンカの仲裁に連れてかれるようになってさ。気づいたら、そんなあだ名をつけられてたよ。」
楽しそうに苦笑いする洸のその表情は、彼が救われたことを何よりも示していた。
もう、怖がられることがない。
ただそれだけのことが、本当にうれしいことであった。

『マスターは、愛されているのですね。』
そのことを、菫も感じ取ったのだろう。
ほほ笑むように、そう言った。
「そうだな。ほんと、昔からは考えられないくらい。」
『はい。』
（…そこは、頷いてほしくなかったかな）
心の中でそう呟く洸だが、悪気のない菫にそう突っ込む気にはなれなかった。
「…でも、何でそんなことを聞いたんだ？」
気を取り直して、洸はそう言った。
わざわざ聞いてくるのだから、何か理由があるのだろう。
『その、実は…戦闘に使えないかと思いまして。』
「ああ、なるほど。」
確かに、相手の意識を無理やりに奪ってしまう能力があったならば、戦闘でかなり有利になるだろう。
しかし。
「でも、赤梁にも聞かなかっただろ？なら、他に奴にだって効かないんじゃないか？」
『確かにあのプレイヤーには効きませんでした。ですが、私はあの者は例外と考えています。』
「…？どうして？」

陽に効かなくて他のプレイヤーには効く。
そんなことがあるのだろうか。

『あの者は、異常な魔力量を有しています。常人の中でも秀でた魔力を持つプレイヤーの中でも、特に飛びぬけて。』

「そうなのか？」

魔力と意識の何が関係あるのだろうか。
僅かに過った洸の思考は、しかし直ぐに菫の言葉にかき消される。

『これは推測ですが、おそらく、あの者がこの場所以外でも多くの命を奪ってきたからと考えています。』

「……。」

菫の言葉に、洸は口を紡ぐ。
陽が警察署から消えた人間であることは、彼が白バイと呼ばれるバイクに乗っていたことから、何となく予想していた。
人を殺すような犯罪者。
そう考えれば、彼の異常性もまた理解することができるからだ。

『他者の命を奪うと、その者の魔力の一部を奪うことが可能なのです。』

それは、まるで捕食者が獲物を食らうように。
殺した者の一部を、自らのうちに取り込むのだ。

『もちろんそれは、あくまでストックとしての魔力ではありますが。』

だが、洸が何よりも驚いていたのは、菫がそのことに気がついたことだ。
菫が洸の世界についてどれだけ知っているかは洸は知らない。
ただ、小学校や中学校などを知らない菫が犯罪者という概念を知っていることが、なんだか不思議に思えたのだ。

「…確かに、それならあいつがそうなのも納得ができるか。」

とはいっても、それ以上の思考を洸はしない。
菫は魔導器で、洸のパートナー。
今はそれでいいと、洸は信じることにしたのだから。

「でも、やっぱり駄目だと思う。もう、この体質は大して意味がないんだから。」

だからこそ、洸は正直に事実を告げる。

『体質そのものが弱まってしまっていると、マスターは考えているのですね。』
「ああ。だって、もし俺の体質と魔力が関係してるってんなら、皆が平気なはずがないだろう。」

魔導器を扱える能力――つまり高い魔力をもつ陽たちなら、確かに影響は少なくなるだろう。
だが、浩太たち町の人間は違う。
まさか町の人々全員が適正を持っているわけがない。

「さっきも言ったように、俺の体質はもう、大した力を持ってないんだ。」

それは、洸が自分に言い聞かせるような言葉だったのかもしれない。
もう自分が普通の人間であることを、確かめるように。

『…わかりました。』

そんな洸の表情を読み取ってか、菫はそう言った。

『マスターの体質のことについては、忘れることにします。』
「…ありがとう。」

自分に気を使ってくれている。
昨日までとはだいぶ変わった、自分たちの関係を改めて認識して。
洸は驚くとともに、笑みを浮かべた。

気がつけば、デパートが視界に入ってきていた。

中では、咲が洸たちの帰りを待っているだろう。
後は咲を連れて、新しい拠点へと向かうだけ。

拠点の変更の間は無防備になるだろうが、誰かが襲い掛かってきたら即刻拠点形成を解除して戦うつもりであった。
何よりも優先するべくは、咲の安全。
菫に過去の話をして、洸は改めて自分のここに来た役割を認識したのだった。

「あれ…茶織じゃないか。」
『…え？』

よく見れば、デパートの窓から咲が顔を出していた。

まだ離れていたから表情までは読み取れないが、洸たちのほうを見ているようだった。

『あそこに、咲がいるのですか？マスター。』

「ああ、窓から顔を出して――。」

菫の問いに答えようとした、その時。

「――――！！！！！」

咲の背後から、真黒な何かが爆発するように噴出した。

第四十五話

洸たちの方を向く咲。
その背後から溢れだした、真黒な何か。
それは、バケツからぶちまけられた水のように広がり、そして一気に収束した。
一瞬の合間に、咲の身体は黒へと呑まれていった。

「茶織…！？」
『咲…！！』

気がつけば、洸は腕を伸ばしていた。
目の前で何が起きているのか、理解なんてできるわけもない。
脳の解析が追いつかない、一瞬の出来事。
だが。

「――――！！！！！」

こちらへと手を伸ばしていた咲。
見えないはずのその表情が、洸には苦悶に満ちているように映った。

「……！！！！！」

その瞬間。
洸は、地面を全力で踏み締めた。
爆発する思考。
瞬く間に、それは風へと変わり。
『了承しました、マスター！！』
緑を纏った洸は、弾丸となってデパートへと飛び込んだ。
＊＊＊
塀を足掛かりに、洸はデパートの2階へと突入した。
窓を破ってしまったが、もう直ぐ拠点で無くなるその場所に大した心残りはなかった。
（急げ…）
咲がいたのは3階。
階段を探して、駆け上る。
（急げ…！！）
今はただ、咲の下へ。
その一心で、洸は階段を超え、3階へとたどり着いた。
「茶織！！！！」

叫び、洸は刀を構えた。
空か、あるいはプレイヤーか。
あの黒い何かを発生させた者が、ここにはいる。

そして、そいつは咲を狙っているのだ。
躊躇などしていられない。
洸は全速力のまま、飛びこんだ。

直後。
視界が、黒で埋め尽くされていた。

「――っ！！？」

眉間に、縮こまるような怖気。
全身に突き抜ける寒気を感じ、洸は横へと身体を回転させた。
咄嗟の反射。
弾かれるように動いた無意識の反応は、しかし正しかった。

回り、急激に移った視界の先。
黒い拳大ほどの塊が駆け抜けていった。

（…！？何だ、これ）

視界を埋め尽くしていたように見えたのは、単にそれが目の前まで近づいていたからだろう。
見た目からして、咲を包み込んだものと同じものだ。

『な…っ、魔法！？』

菫が驚きの声を上げる。

『そんな、今まで何の反応もなかったのに…！？』

予想外の事態の発生。
洸が菫の言葉からくみ取れたのは、それだけであった。

だが、今はそれで充分。
敵が襲ってきた。
それさえ分かれば、十分であった。

（黒い、魔法…）

拠点の中にいたはずの咲を襲い、魔法を使う。
それは、つまり相手がプレイヤーであるということ。

プレイヤーが咲を狙う。
その意味することはただ一つ。

「あら、思ってたより早かったのね。」

ふと、声が聞こえた。
咲でも菫でもない、別の声。

それを理解した瞬間。
洸は、声のした方向へと飛び出していた。

「…って、ちょっと、無視！？」

驚く声がした方角。
洸の視界が、黒く輝く光を捉えた。

鈍く、滲むように広がっている光。
菫たちとはだいぶ質の異なる光ではあるが、それは間違いなく魔導器の発動光であった。
やはり、プレイヤー。
洸の腕に、力が籠った。
「全く…！！もうっ！！」
黒い光が、強く瞬く。
その光に呼応するように、声の主の背後からあの黒い塊が沸き上がる。
斜め上、２方向へと飛び出したそれは、抉るように洸へと襲いかかってきた。
「……っ！？」
咄嗟に止まる洸。
その眼前の足元を、黒は抉り取ってしまった。
コンクリートの床が、一瞬のうちに消失する。
風とも火とも違う、黒い魔法。
洸の中で、その魔法に対する警戒度が高まった。
「止まりなさい。」
その声を聞いて、洸はようやく足を止め、声の方を見た。
宙に浮かぶ、２つの黒。
その光に挟まれるようにして、誰かがそこに立っていた。

「……？」

立ち止まった洸は、眉をひそめた。
何者かが目の前にいる。
直ぐ目の前に立っている筈にもかかわらず、洸が理解できたのはそれだけ。
真黒な人影。
否、それを洸の視界が黒と認識しているのかさえもよくわからない。

その影を見つめようとすると、視界が直視することを拒んでしまうのだ。
まるで日の浮かぶ空を見上げた時のような感覚。
いることはわかるのに、相手の姿をまともにとらえることができない。

ただはっきりとわかるのは、その背後に浮かんだ黒い塊とふたつ輝く黒の輝きだけであった。

「お前…！！」

洸の目は、その内の塊の方を捉えていた。
横に伸びた、細長い黒塊。
それは、間違いなく咲であった。

「下手な真似をしたら…わかるわよね？」

静かに、声は告げる。
不敵な笑みを浮かべているであろうその声とともに、その脅しは洸に対し十二分に効果を発揮した。

「くっ…！！」

捕らわれた咲。
姿の見えない敵。
特定不能な魔法。

「人の話はゆっくり聞くものよ…全く。」

理解の追いつかない事態に、洸は混乱の極みにあった。

だが、洸は刀を構える。
静かに、風のイメージを整える。

（助けなきゃ…）

ただ、その思考に頭を満たして。
敵へと迫る瞬間を待つ。

「…何の用だ。」

探るように、洸は言う。

「へえ、わざわざそれを聞く？」

そう言って、影は笑う。

「私たちプレイヤーが出会ったらどうなるかなんて、わかっているでしょう？」
「……。」

「ふふふっ。」

押し黙る洸に、影はほほ笑む。

「悪いけれど、あんたには脱落してもらうことにしたの。」

「何…？」

その言葉に、洸は少なからず驚く。

洸は、相手の目的が咲だと思っていたのだ。

プレイヤーでもない咲は、経験値稼ぎには最良と言ってよい存在だ。

洸のように不殺を誓っている特例でもない限り、標的とするには十分であろう。

（茶織だけじゃなく、俺も狙ってるってことか？）

それは、つまり洸と咲の関係を知っているということ。

咲が洸にとって脅しになるという、価値を知っているということ。

（こいつ、一体…？）

まさか、ずっと見られていたとでもいうのか。

菫によって、周囲は常に探索されている。

加えて、洸も肉眼での確認も怠ってはいない。

見られていたとは、とても考えられなかった。

（いや、でも…）

目の前にいるのは、妙に存在感のない相手。

直視することのできないこのプレイヤーに追跡されていたら。
そう考えると、洸は否定することができなかった。

（菫も、上手く認識できてなかったよな）

非常に隠密性の高い魔法。
しかも、地面を軽々と抉ってしまう程の威力を持っている。

（こんな魔法も、あるってことか…）

影が、黒い光を振るう。
再び沸き上がった黒が、洸に襲いかかってきた。

「……っ。」

突き出されるように放たれたそれらを、屈んで避ける。
その反動で飛び出そうとする洸を、別の黒が妨げた。

ともかく、相手の狙いはわかった。
咲を人質に、洸を殺すつもりなのだろう。
利用できるものは何でも利用する。
それが、この世界でのルールだ。
そうしなければ生き残れない。
それは、わかっているはずなのに。

「自分がやられるのは、むかつくよな…！！」

横へと飛びながら、洸が叫んだ。
そのすぐ後ろから、３本の黒が迫ってきていた。

（遅い…！！）

飛び上り、壁に反射する。
風を纏った洸の速度は、追いすがる黒を突き放し、影へと迫った。

「……。」

それでも、影は動かない。
静かに、黒い輝きが増した。
迫るように追いすがってきていた3本が、獣のように跳び上がる。
放物線を描いたそれらは、頂点を過ぎると同時に急加速し、洸を囲むように飛び込んだ。

（っ、速――！！）

響く轟音。
コンクリートに包まれたデパートのフロアに、土煙が舞いあがった。
3つの黒い牙は、デパートの床を抉りとり、下の階まで貫通させた。
僅かに残っていた床部分…おそらくは洸が立っていたであろうその場所は、下のフロアまで落下していった。

何の加護もない普通の人間が落ちたならば、死ぬこともあり得る高さだ。
牙による攻撃も命中していた洸が、生き残る可能性は低い。

「…あら？もしかして、これで終わり？」

ふと、影が呟いた。
呟きに応える声はなく、土煙にも変化はない。

「何だ。思ってたよりあっけなかったじゃない。」
明るい声で、影は続ける。
だが、影はそこから動くつもりはないらしい。
「それならわざわざこいつを使う必要も――。」
そう、影が呟いた直後。
薄暗く煙たい部屋の中に、緑の光が走った。
「――――っ！！」
咄嗟に、黒い牙が走る。
影の周囲を巻くように突き進んだ牙が、幸運にも放たれた洸の刀を弾いた。
「くそっ…。」
「危ない危ない。」
いつの間にか、洸は影の背後へと移動していた。
しかも、その身に一切の傷はなかった。
「油断も隙もないわね…。ま、それでこそプレイヤーよね。」
対する影にも、動揺は見られない。
「茶織を返してもらうぞ。」
「はん、やってみなさいよ。」

影は、光を増す。
途端に、周囲にあの牙が浮かび上がる。
対する洸も、風を纏う。

巻き上がる風。
揺らめく牙。

輝く光を携えて、２人は静かに対峙した。

『――マスター。』

ふと、新たな声が響いた。
甲高い男の声。
独特の、籠ったようなその声は、魔導器のものであった。

「何よ。」
『戯れも、そろそろにした方がいいですよ。』
「…そうね。」

呟くと、影は光を下した。

「まあ、いいでしょう。それでは、私はこれで。」
「おい、待て！！」

飛び出す洸。
おそらく咲であろう塊へと、一目散に駆けだした。

「嫌よ。」

影が、再び光を振るう。

途端に、影の周りを黒い塊が包みこむ。
「くそ…っ！！」
近づいて、刀を振るう。
だが黒は固く、刃は軽々と弾かれる。
（何なんだよ、この魔法は！？）
洸の風とも、陽の炎とも違う。
ますます、わけがわからなくなる。
だが、今は混乱している場合ではない。
（何か、突き破る方法を考えないと…！！）
「あははは っ！！！無駄よ、無駄！！」
どこからか声が響いてくる。
「それじゃあ、この女は頂いていくわね。」
「待て！！！…くそっ。」
思い切り、風を放つ。
バイクを切り裂いた、刃の風。
それさえも、黒の壁に阻まれる。
「おい菫、何か方法はないか！？」
『……。』
「菫…？」

そう言えば、あの黒いものが魔法と分かってから菫は何も言っていない。
何か引っかかることでもあるのだろうか。

「樹山中学に来なさい。私は、そこにいるわ。」
「は…？」

呟きが聞こえた、その直後。
黒は唐突に霧散した。

「――っ！！」

咄嗟に刀を構える洸。
だが、そこにはもう、誰もいはしなかった。

第四十六話

「……っ、くそっ。」

黒が霧散し、誰もいなくなったフロアに立って、洸は呟いた。
視界に広がるのは、ボロボロになった部屋。
風と牙に抉られ、床は落ち壁は剥げている。

プレイヤーによる、突然の襲撃。
陽ではない、新たなプレイヤーだろう。
存在は理解できるのに、その姿を認識することはできない。
加えて、その魔法は刀も風も易々と弾き、コンクリートを抉る程の破壊力を持っている。
隠密性と威力を併せ持つ魔法の持ち主。
黒い塊を操る魔法を持ったそのプレイヤーは、あろうことか洸の拠点も、咲の存在までも知っていた。
彼女の突然の襲撃によって、洸たちはあろうことか咲を奪われてしまった。

そんな彼女が告げたのは、洸たちに樹山中学までやってくること。
明らかに、罠だろう。
敵の狙いは、洸と菫の破壊。
咲は、そのための脅しとして選ばれてしまったのだ。

まさか、咲が狙われることになるとは。
拠点の中なら安全だと、洸はどこかそう考えていた。
魔導器を持たない咲なら、プレイヤーに見つかることもないだろう

と。
まさか自分たちを監視していたものが存在することなど、想像だにしていなかった。

（…いや、可能性なら確かにあった）

この世界で手にした、魔法と呼ばれる力。
それは、意外にも洸たちの想像の範囲を超えてはいなかった。
魔法と聞いて洸たちがイメージしたものそのままを、魔法は見せてくれた。

考えてみれば、それは当り前のことなのかもしれない。
魔導器は、洸たちのイメージを元に魔法を発動させるのだから。
この世界で見る魔法が、洸たち、人が描いてきた魔法像を超えることはないのだろう。
それこそ、常識を逸するほどの思考を有するものでない限りは。

そして、だからこそ、これから出会うはずのプレイヤーたちの魔法も、洸の想像を超えることはないのだ。
人が魔法に抱く、簡単なイメージ。
空を飛ぶ。
火を起こす。
食べ物を出す。
そして、透明になる。

あの闇の魔法は、透明になるとは異なってはいるが、目の前に現れない限り殆ど認識できないのだから大した違いはない。
もしその可能性に気づいていたなら。
そう考え、洸は拳を肉に食い込むほどに握り締めた。

『落ち着いてください。マスター。』
そんな洸をなだめるように、菫が穏やかな声で言った。
「…菫。」
弾かれるように、しかしゆっくりと洸は顔を上げる。
左手の刀は、緑に揺らめいている。
ぼんやりとその輝きを見つめながら、洸は呟く。
「落ちついてなんていらんないよ。早く、茶織の所に行かないと。」
本当は、今すぐにでも駆けだしたい。
だが、心のどこかでそれを止める自分もいた。
それがまた、洸を苛立たせる。
ああ、自分はこんな時に冷静でいる、と。
やり場のない怒りを自分の中でぶつけ合って、増幅させていく。
『樹山中学校、と言っていましたね。』
そんな洸の心境を知ってか知らずか、菫はのんびりとした声で呟く。
「ああ、そうだ。場所だってわかってるんだ。早く…！！」
『ですから落ち着いてください。何も考えずに行けば、先ほどの二の舞です。』
「……っ。」
菫のその言葉が、洸の胸に突き刺さる。
それを菫に言われたということが、洸の胸の痛みを増幅させる。

『相手の狙いは、マスターです。…マスターが倒されない限り、咲は安全です。』
「どうしてそう言いきれる――！！」

そして、菫の言葉に過剰に反応してしまう。
洸のその叫びは、風に乗って部屋中に響き渡った。
轟音とまではいかなくとも、そこに人がいたならば耳を塞ぎ膝を折っていたであろう程の声量。

それは、無意識の魔法。
部屋を満たすほどの大声。
気づかぬうちにしていた、イメージの発露。
風に乗り、増幅された洸の咆哮が部屋中をかけずり回る。
黒によって蹂躙されたフロアが、声を受けて震える。

『…先程の戦闘の時、相手は咲を使ってマスターを誘導していました。』

それでも、菫は冷静に続ける。
耳を劈く咆哮の中でも、魔導器には関係ないらしい。

「は…？」

呆けたのは、菫に対してかその言葉に対してか。
どちらにせよ、洸の意識は一気に表層へと引き戻された。
故に、嫌でも菫の言葉が洸の意識へと流れ込んでいく。

『マスターは一直線に咲へと向かっていましたから。それを読まれたのでしょう。』

「……。」
『それに、相手はマスターと咲の関係を知っていました。…無駄にマスターを激昂させるようなまねはしないでしょう。』
それが、嫌というほど洸に思い知らせる。
自分では、菫のように現状を冷静に分析することはできない。
洸が冷静だと思っていた部分は、ただ怠惰なだけであった。
もう無理だと諦めているだけだったのだ。

『急いで向かいたいのは、私も同じです。ですが、せめて相手の魔法を理解してからでないと、先ほどの二の舞です。』
それを認識して、洸は再び胸を焦がすほどの苛立ちを覚える。
けれど、今度は先程とは違う怒り。
自分の本性への怒りだ。
口だけで、怠惰で。
そのくせ欲求にだけは正直な、胸糞悪い自らの本質。
それを嫌う『自分』も、結局は同じ自分ではあるのだけれど。
思えるだけまだましなのだと、洸はそう思った。

「…そうだな。悪い。また取り乱した。」
燻っていた熱とともに、肺の空気を吐き出す。
途端に、視界が鮮明になる。
たった今まで、自分は目の前の景色すらまともに見えてはいなかったのだ。
洸は、今までの自分がどれほど馬鹿馬鹿しかったのかを知った。
『私はマスターのサポート役です。マスターの脆い部分は、私が支えます。ですから、もっと私に頼ってください。』

「悪い。…ありがとう。」
『はい。』
心の中の自分を殴り倒して、洸は思考を切り替える。
今は、そんな葛藤さえも時間の無駄なはずだから。

＊＊＊

「…それで、菫はあの魔法について何かわかったのか？」
『はい。僅かに、ですが。』
ようやく落ち着いた洸は、思考を開始する。
一刻も早く、敵の情報を知らなければならなかった。
『その前に、いくつか確認させてください。』
とはいってもわかることは少なく、時間もあまりない。
『マスターは拠点の壁から咲が覗いているのを見つけたのですよね？』
「ん、ああ。その直後、茶織があの黒い塊…相手の魔法に捕まったんだ。」
『…マスターには、あの魔法が黒に見えたのですね？』
「ああ、そうだけど。」
『なるほど。』
色が魔法の判別に必要なのだろうか。
そう言えば、菫の風は緑色で、陽の炎は赤色であった。

確かに、考えてみれば洸のイメージする色にあった光を発していた。
（魔法の色と属性に、関係性があるのか…？）
菫が気にしている以上、考える価値はあるのだろう。
先程のプレイヤーの魔法の色は、黒。
それから連想する魔法の属性と言えば――。
「…闇、か？」
『え？』
「え？」
驚く菫に、洸は驚く。
「あ、悪い。変なこと言ったか？」
『いえ…私も、同じことを考えていたので。』
「じゃあ、あれ、本当に闇属性の魔法なのか？」
『私はそう考えています。…ですが。』
そう言って、菫は言葉を濁す。
「…？どうした？菫。」
『マスターは、闇の魔法と聞いて、どのようなイメージを浮かべますか？』
「イメージ？」
『はい。マスターが持つ、闇に対する印象を教えてほしいのです。』
「あ、ああ…。」
（闇の魔法、か）

菫の言葉に、洸は思考を走らせる。
魔法に対するイメージ。
考えてみれば、それは随分曖昧なものであった。

「…なんて言えばいいんだろう。俺がイメージしてた闇の魔法って、もっとこうドロドロしてるというか…ともかく、さっきのみたいに床を抉ったりとかはしないって思ってたんだ。」

そもそも、洸には闇という属性に関して大したイメージを持ってはいなかった。
洸の中での闇とは、文字通りただの闇だ。
ただ暗いだけの、光がない状態。
そんなものを魔法にして、どうなるというのか。
ましてや地面を抉るなど考えられもしなかった。

『問題はそこなのです。』

洸の疑問に、菫は同意した。

『闇の魔法は、本来魔法や感覚に対して強い影響を及ぼす魔法なのです。』

闇の魔法。
その何よりも強い特徴は、『侵食』である。
それぞれの属性の魔力はそれぞれ異なる性質を持っているのだが、その中でも闇の魔力は最も『重い』魔力とされている。
重厚で、ゆっくりと進んでいく闇の魔力は、その先にある魔力を無視するように突き進んでいく。
魔法は、闇の魔力をはじき返せるだけの硬度を持たない限りは、ことごとく打ち破られてしまうのだ。

それが、魔法に対する侵食。
つまり、闇の魔法は他の属性の魔法の影響をほとんど受けることはない。
それ故に、闇の魔法は相手に対してダイレクトに効果を発揮することができる。

どろりとした魔力が体へと注がれ、体を巡る魔力は、分断されてしまう。
それが、結果的に感覚への浸食を起こすのだ。

何よりも重いという性質。
それが、闇の魔力、そして魔法の最大でありただ一つの特徴であった。

ただ、闇の魔法はそれ故に、物理的破壊力は一切ない。
これまでのｓｅｖｅｎｔｈにおいても、闇の魔導器を持ったプレイヤーはそこが悩みの種であったのだが――。

「…床、ぶち抜いてたよな。」
『…はい。』
「破壊力、あるよな。」
『はい。』

物理的破壊力を持つ、破壊力のないはずの魔法。

「じゃあ、あれは闇の魔法じゃないってことか？」

洸に考えられる可能性としては、それくらいしか考えられなかった。
そもそも、洸自身は魔法関する知識はない。

実際にその身に受けたわけではないから、干渉が起きていたのかどうかもわからない。

『…それは、考えられないんです。マスターも理解していたように、あの魔法は非常に隠密性の高いものでした。そして、私の魔法をいとも簡単に打ち消した。…そのことから考えても、相手の魔法が闇ではないというのはあり得ないんです。』

だが菫はあれを闇の魔法だという。

「…ということは、だ。」

菫が悩んでいる内容は理解できた。

「相手は闇の属性の魔法を使っていながら、同時にありえないはずの物理攻撃もできるってことなのか。」

『はい。そうなります。』

「…ふーむ。」

つまり、相手の魔法は持っている筈の欠点がないということになる。欠点のない魔法。

言葉だけを聞くと、それは無敵のように思えるから不思議である。

だが、洸は菫ほどそのことを不安に思ってはいなかった。

「…でも、ともかくこれで相手の魔法は判別したわけだよな。」

『それは…そうですね。』

「じゃあ、それで良いんじゃないか？」

洸たちがすべきことは、相手の魔法の完全特定ではない。

性質と気をつける点さえわかれば、それでいいのだ。

相手の魔法は、闇の属性のように魔力に干渉する力を持ち、尚且つ物理的破壊力を持っている。
事実を纏めればそう結論付けられ、それでいいのだ。

陽のときだって、相手の魔法の欠点など考えてもいなかった。
まあ、洸はまだ陽に勝ててはいないのであるが、あの戦いの中で洸がその欠点を突くことができるかどうかと聞かれれば、微妙である。

ともかく、今はわからないことに沈みこんでいる余裕はないのだ。
多少冷静さを取り戻していた洸だが、その逸る気持ちは未だ治まってはいなかった。

『…そうですね。申し訳ありません。熱くなってしまいました。』

時間がないことは、菫自身もよく分かっている。
彼女自身も、まだ完璧にはなりきれないのだろう。

「これでお相子様、だな。」
『はい。』

笑顔を浮かべて、洸はそういった。
気を取り直すように何度か瞬くと、菫は言葉を続ける。

『相手の魔法は、非常に感知のし辛いものです。速度も、威力も十分あります。そして何より、強い侵食性を持っています。』
「こっちの魔法は、すべて無効化されるってことだよな？」
『いえ、全てと言うわけではありません。ですが、余程の魔力を込めない限りは通用しないのは確かでしょう。』
「……。」

洸も、風を突き抜けてきたあの黒い牙を見ている。
今日はまだ大して魔力を消費していないから、あれをはじき返せるレベルの魔力を込めることは可能だろう。
だが、それを連発してしまえば、今度は核破壊の魔力がなくなってしまう。
やはり、核破壊は狙うだけで非常に難しい行為なのだ。
だからこそ、相手は自らの領域であろう場所に、洸を誘い出すのだろう。

『気を付けてください、マスター。先程もお伝えしたように、闇の魔法は強い侵食性を持っています。魔法だけでなく、マスターの体に対しても。』

先程よりも数段重い声で、菫は告げる。

『相手の魔法がマスターの体の中に入り込めば、マスターの精神に何か異常が起こるかもしれません。…それどころか、もし私とマスターを繋ぐパスである左腕を攻撃された場合、最悪魔力やイメージの供給が止まってしまう恐れもあります。』
「何…？」

もしそれが事実ならば、洸は一撃でさえ敵の攻撃を受けるわけにはいかなくなる。
一撃を受けたその瞬間、戦闘終了ということになりかねない。

「それ、本当か？」
『はい。ですから、気を付けてくださいね。』
「…随分軽く言うんだな。」
『はい。だって私は、マスターを信じていますから。』

信じている。
随分、軽く言ってくれる。
そう思うけれど、今はそれが少しだけ嬉しく思えた。

「…了解。」

何だか気恥ずかしくて、俯きながら、洸は応える。

「よし、じゃあ行くか。」
『はい。』
「…ありがとな、菫。」
『勝ちましょう。マスター。』
「ああ…！！」

そう応えて。
洸は、樹山中学のある西地区へと向かって飛び出していった。

＊＊＊

その頃。
咲は、樹山中学のある一室にいた。

「……。」

ぼんやりとした表情で、咲は部屋の中を眺めていた。
椅子に座らされ、腕は後ろでしばられている。
気がついた時には、咲はこの部屋にいた。

何故こんな場所にいるのか。
気を失った時の記憶は、曖昧でよく覚えていない。

（私は、確か…）

洸の帰りを待って、最後の確認としてフロアの中を巡っていたはずだ。
上の階から始めて、段々と下に降りていった。
そして、3階に辿り着いたとき。
咲は、何者かに襲われたのだった。

（そうだ。確か黒いものが襲い掛かってきて…それから…）

何とか逃げて、咄嗟に窓の方へと駆けよって。
そこで、咲の記憶は途切れていた。

（縛られてるってことは、私、もしかして攫われた…？）

改めて自分のいる部屋を見渡してみる。

（…あれ？ここって…樹山中？）

そうして、そこが見覚えのある場所であることに気が付く。
かつて自分がいた風景。
暗く、大分雰囲気は変わってしまっているが、1年半前迄、3年間もいた場所だ。
そう簡単に見間違えることはないだろう。

（ここが白埼君の新しい拠点、なわけないもんね…）

やはり、自分はここに攫われたのだ。
それを認識した途端、胸の奥がずきんと痛んだ。

（あれ、私…）

それは、不安からくる動揺。
やはり、咲はまだ一人であった頃の傷は癒えてはいないのだ。
洸と菫。
この場所においては異端ともいえる2人との出会いがあって、咲はこれまで平静を保っていられたのだ。

「…ん？何、目が覚めたの？」

ふと、声がした。
驚いて咲は声のした方を振り向いた。

「……え？」

そして、絶句する。

「…？何よ。私の顔になんかついてるの？」
「あ、いや…。」

驚愕する咲。
その視線の先に座っていたのは、一人の少女。

しかも、その顔は幼く、背も咲よりも小さい。
そして何より。
その少女は、少し前まで咲が毎日のように身につけていたもの――
つまり、樹山中学校の制服を着ていたのであった。

「…ああ、そうか。あんた。今私を見てこんな子供がって思ったでしょう。」

そう言って、少女は笑う。

「え、あ、私…その…。」

確かに、咲はそう思っていた。
けれどそれ以上に、自分よりも年下のはずの彼女が縛られている自分を見ながら笑っている。
そんな今の状況に、恐怖していた。

「別にいいわ。気にしてないもの。」

そう言って立ち上がると、彼女は先の目の前までやってくる。
不意に、その右腕が振られた。
殴られる――。
そう思い、咲は咄嗟に目を閉じた。

だが、やってきたのは不思議な触感。
ふわりとして、かさりとする、明らかに手のひらとは違う感触が伝わってきた。

それに驚いて、咲は目を見開いた。
途端に、視界の左側が黒い光に満たされる。

「これを使うのに年齢なんて関係ない。ここに呼ばれた時点で、私たちは同じプレイヤーなんだから。…あっと、失礼。あなたはプレイヤーではなかったのよね。」

そう言って、彼女は再び嗤う。
その笑みに、咲は寒気が走る。
こんな表情を、ただの中学生がするだろうか。

「どうして、私を攫ったの？」

僅かに乾いた声で、咲は言う。

「…攫われた自覚はあるのに、随分元気ね。」

初めて、彼女の顔から笑みがはがれた。
そこにあったのは、じとり、と睨みつけるような暗い表情。
が、それも一瞬。
彼女の顔は、再び笑顔に包まれる。

「まあ、いいわ。と言うか、そのくらい考えれば得わかると思うんだけど。」
「……。」
「私の狙いは、あなたと一緒にいたプレイヤー。あいつを倒して、私の経験値にするの。」

言葉とともに、咲の頬が撫でられる。
感触は変わらず、視界の光が上下した。

（それって、白埼君たちを…？）

咲が一緒にいたプレイヤーと言うならば、間違いなく洸たちであろう。
それを倒すということは、つまり。

（私は、囮ってこと、なのかな）

また、自分は洸たちに迷惑をかけてしまったのだ。
その思考が、咲を満たした。

「へえ。てっきり殺さないで！！とか何とか騒ぐと思ってたけど。意外と静かなのね。」
「……。」

また、彼女は笑う。
その張り付けたような笑みが、何となく気になって。
気がつけば咲は、口を開いていた。

「…だって、ここはそう言う場所なんでしょう？」

咲の言葉に、華の表情が変化する。

「なら、私だって同じことを考えてたはずだもん。…だから、そんなことは言えない。」
「…へえ？」

（それに、信じてるんだ。白埼君が、勝つって…）

自分と浩太のために戦っていると宣言した洸。
その気持ちを、咲はまだうまく受け止めることはできないでいた。
今この場所で、洸なら必ず助けに来てくれるなどという我儘なことを考えるわけにはいかない。
咲は、常に自分が見捨てられる、という可能性を考えるようにしていた。

洸だって人間で、まだ高校生だ。
物語のヒーローのように、変わることのない精神でいることなど、あり得ないのだ。

それでも、咲は洸に頼らざるを得ない。
だから、咲は祈る。
洸の勝利を。
その無事な帰還を。

（だから、私はそれまでにできることをしよう）

咲はそう考えることにした。
プレイヤー相手に逃げ切れるとは思っていない。
だが、洸が目の前にいる少女と戦闘になった時なら、きっと逃げるチャンスはあるはずだ。
自分が自由になったとわかれば、洸も気兼ねなく戦うことができるはず。

そう考えて、咲は相手にばれないように自分の状況を確認することにした。

腕を縛る紐は固く、解けそうにはない。
だが足は縛られておらず、うまくすれば立つこともできるだろう。
たてさえすれば、逃げることはできる。

（でもこんな状態で逃げても、遅いよね…）

何とか腕さえ解ければ。
そう思い、今度は少し強めに腕に力を込めてみる。

（…っ、痛い…。それに、やっぱり全然固いや…って、あれ？）

ふと、動かしていた右手が、何かに触れる。

（これって、まさか…）

それは、思わぬ可能性。
もう一度、今度ははっきりと触れて確かめる。
指先に、確かな感触。
今それがここにあるというだけで、咲の見る現状は大きく変化する。

（これなら、逃げられるかもしれない）

突如現れた突然の可能性に、咲は相手に悟られぬよう心の中で笑みを浮かべた。

第四十七話

そうして、洸は指定された戦場、樹山中学へとたどり着く。

「…着いたな。」
『はい。』

目の前にそびえる、巨大な建造物。
少し前に浩太と通り過ぎたばかりだというのに、その様相は一変してしまっていた。
否、外観にはおそらく何も変化はない。
ただ、洸の目には黒い何かが沸き上がるように映った。

樹山中学は、デパートとは異なり横に広い建造物である。
２００近い人間が一度に滞在し活動する場所。
僅かに傾いた７の字状の校舎は、両の腕を広げるようにして洸を待ち構えている。

洸が立っているのは、正門の正面。
今のところ相手からの襲撃はなかった。
それどころか、西地区に入って以降は空と遭遇することさえなかった。
遭遇したとしても今の洸なら余裕で振り切れるから、あまり関係はないのだが。

『まだ相手からの攻撃はありませんね。』

「ああ。…でも、どこに潜んでるかはわからないから、気をつけないと。」
『ええ。』

おそらくは、目の前にある門が境界線。
そこから先に踏み込めば、敵の領域になる。

「あの中のどこかに、茶織はいる。」
『はい。』

視界に並ぶ暗い窓を眺めて、洸は呟く。
ここがあのプレイヤーの拠点かどうかは洸には分らないが、拠点でないとしてもわざわざ明りをつけることなどしないはずだ。
探すなら手当たりしだいになるだろう。
そして、おそらくはそれこそが敵の狙った罠。

『何が潜んでいるのか、それは私も解りません。』

菫が、静かに応える。

『魔力では探知しづらい魔法。充分に気を付けてください。』
「ああ、わかってる。…それに、困った時はさっきのあれを使えばいいんだろ？」

そう言って洸は笑う。
ここまで来る途中に、洸は相手の魔法に対する対抗手段を菫から伝授されていた。
魔力消費が著しいらしく、軽々しくは選べない手段ではあるのだが有効なのは間違いないだろう。

「まだうまく感覚を掴めてないけど、まあ何とかなるだろ。」

刀に触れて呟く。
その手段を使うも使わないも、洸次第。
だが選べる手段は一つでも多い方がいい。

『先程のあれですが、使用の際の注意事項は覚えていますか、マスター？』
「ああ。使うなら室内で。それと、使っている間はいつもより速度が下がる…だったよな。」
『はい。その通りです。…それを分かっていただけているのなら、問題はありません。』
「そっか。」

目を閉じて洸は風をイメージする。
身に、刀に風を纏った。

「よし…。行くか。」
『はい！！』

そうして、洸たちは樹山中学へと乗り込んでいった。

＊＊＊

正門を通り校庭に入る。
その瞬間、洸は背筋が浮き上がるような感覚を覚えた。

（…見られてる？）

じっと、覗かれているような感覚。
咄嗟に周囲を見渡すけれど、どこからみられているのかはわからない。

『…何も起こりませんね。』

菫が呟いた。
どうやら菫は今の視線を感じなかったらしい。

「ああ。ここで仕掛けてくるつもりは無いみたいだな。」

だが、何も起こらないのは事実。
とすれば、やはり中にいると考えるべきなのだろう。
相手が仕掛けてこない以上、長居する必要もない。

「…行くぞ。」
『はい。』

正面、校舎が交差する部分にある訪問客用の入口から中へと入る。
入ってすぐ右手には受け付け用の窓口があり、左手には下駄箱と箱に大量に入ったスリッパが置かれている。
案の定、窓口には誰もいない。

「……。」

下駄箱を一瞥する。
今日は、履き替える必要もないだろう。
ほんの少し罪悪感を覚えつつ、洸は廊下に入った。

左右に広がる廊下は長く、暗いせいもあって向こう側まではっきりと見ることができない。

『咲はどちらにいるのでしょうか。』

菫が呟く。

「俺が知ってるだけでも、２０近くは部屋があるからな…。虱潰しに探すとしても、かなり時間がかかると思う。」

覚悟はしていたが、改めてその場所に立つと重厚な実感が押し寄せてくる。
果てしなく感じる暗い廊下。
そこに並ぶ無数の部屋の中から、洸は咲を探し出さなければいけないのだ。

『…では、どうしますか？何か手掛かりがあるわけではありませんよね。』

「そうだな…。」

ここを戦場に指定してきたのは向こう。
ならば、罠は確実にあると思っていいだろう。
だが、今のところはそれもない。
それにこの広さだ。
ただ闇雲に探させるのは、相手としても嫌なはずなのだが。

「仕方ない。虱潰しに行くか。」

『ですね。そうしましょう。』

まあ、気にしても仕方がない。

そう思考を切り替えて、洸はとりあえず一番近くにあった部屋へと向かった。
部屋の前に立ち、息を整える。
そして、扉に手をかけると一気に引き開け――。
「――いっ！？」
思い切り引いた腕が、突っかかった
「…っ！！！？」
指先に激痛が走る。
洸は声も出せずに、その場にうずくまった。
『マスター！？』
「…だ、大丈夫。」
そのまましばらく蹲っていた。
しばらくしてようやく痛みが引いてきたのを感じ、洸は立ち上がった。
改めて、扉に手をかけてひいてみる。
しかし、扉は開かなかった。
『鍵、閉まっているのですね。』
「…ああ、そうみたいだな。」
ｓｅｖｅｎｔｈにおいて、洸が見てきた全ての扉は鍵が開かれていた。
つまり、相手のプレイヤーがわざわざ鍵を閉めたということになる。

これも罠の一環なのだろう。
（となると、空いてる部屋には何かあるってことか？）
洸としては、余計な手間が省けて丁度いいところではあった。
そうと決まればさっさと行動を開始しよう。
そう思い、洸が隣の教室へ向かおうとした、その時。

「――――」

「…？」

ふと、洸が振り返る。

『どうしました？マスター。』
「いや、何か音が聞こえた気が…。」

鈍く響いてきたその音は、まるで何かを落としたような音のようで。
だがそれ以上は何も聞こえはしなかった。

（…気のせい、か？）

ここは敵の罠の中。
僅かな物音にも気をつけなければならないのだ。

『それでは、どちらに行きましょうか。』

菫の言葉に、洸は意識を切り替える。
廊下は、左右に広がっている。
右手側は主に生徒たちの教室が。

左手側には職員室や特別教室がそれぞれある。
どちらに行っても、大量の部屋ばかり。
当てずっぽうに探すにはかなりの手間になるだろう。
「せめて、何か手掛かりがあるといいんだけどな…？」
洸が呟いた、その時。
「――――」
『……？何か、声が…』
洸たちの背後。
左手側の廊下から、音が響いてきた。
『まさか、咲でしょうか？』
「…いや、違う。」
咲かもしれない、と僅かに喜びを見せる菫に対し、洸は呟いた。
響いてくる重低音。
微かに聞こえるズシャリという音。
それが何を意味しているのか、洸はすぐに理解した。
「来るぞ、菫…！！」
そう叫んで、洸が刀を構えた直後。
「――――！！！！！」
咆哮を上げながら、空がドアを突き破って現れた。

「げ…。」
『な…っ、空！？なぜこんな場所に…！？』
現れたのは、白い体躯を持った見慣れた怪物。
ゆっくりとした動作のそれは、何かを確かめるようにじっとその場に立っていた。

「ここ、あいつの拠点じゃないのか！？」
『そうだと思っていたのですが、これは…？』
本来、空が拠点の中に入ってくることはない。
まさか、隠密を得意とするあのプレイヤーが空に見つかるわけでもないだろう。
そうなれば、わざわざ中に入れたということになる。
あの空がドアを破壊して出てきたことからも、空が自ら入ってきたとは考えられない。

（ってことは、これが罠…？）
それにしてはあまりにも単純ではないか。
そう思ったのも一瞬。
荒々しく息をする空が、洸たちに気がついた。
「――――！！！」
咆哮を上げ、空は嬉しそうに顎を開く。
「気づかれた…！！」

洸は空に向け刀を構える。
罠がこれだけとは考えられない。
だが、今はそんなことを考えている暇はなさそうであった。

「ともかく相手はレベル１の空だ。さっさと倒すぞ。」
『はい！！』

そう言って、洸は空目がけて飛び出した。
何度も戦い、切ってきた相手だ。
今更ミスをするはずもない。

そうして近づいた、空の脇。
そこから、黒い光が飛び出してきた。

「――っ！？」

咄嗟に身体を横に曲げ、洸は回避する。
同時に、洸の目がその黒を捉える。

間違いなく、それは先程洸を襲ったもの。
闇属性の空を走る刃。

洸の横を突き抜けて、黒は廊下の先へと消えていった。

「菫！！」
『はい！！大丈夫です。何とか感知できました。』

菫曰く、あの魔法は一度その存在をはっきりと認識してしまえば感知がしやすくなるらしい。
魔法そのものをとらえることは難しくても、魔力の流れなどから推

察はできるそうだ。

これで、相手の奇襲をある程度防ぐことはできる。
後は、洸の役目。

『…！！反転してきます！！マスター！！』
「おう！！」

（まずは、こいつから…！！）

洸の目が空を捉える。
空を囮にした魔法による奇襲。
種が分かれば、それまでだ。

振り上げた刀を間髪入れずに叩きこむ。
僅かに風を纏った刀は、感触すら伝えずに空を両断した。

『来ます！！左！！』

間を待たずに、菫の声が響く。
声に従い、洸は振り向かずに左へと跳ぶ。

すぐ脇を黒が駆け抜ける。
どうやら黒は、洸を追尾してくるようだ。

自動なのか、近くにプレイヤーがいるのか。

（どちらにせよ…！！）

菫曰く、この魔法は射程が長くはないだろうとのこと。

つまり、相手のプレイヤーもここにいる。

（まずは、邪魔なこいつからぶっ壊す！！）

いくら破壊に魔力が多く必要でも、１つ２つこれを破壊するくらいなら大した問題ではない。

このままこれに追われ続けていたら学校の探索もままならないのだ。

魔力を、風を刀に纏わせる。

仄かに輝く風が周囲を緑に照らす。

だが、直後。

「――――？」

洸の眼前では異変が起きた。

洸の横を駆け抜けた黒。

その進む先は、たった今洸が両断した空。

両断から数瞬、未だその躯は消えずに残っていた。

残る白に突き進む黒。

そのまま行けば、２つは当然衝突する――のだが。

直進していた黒が、突如、その軌道を変えた。

それは、まるで空を避けたよう。

（何が…？）

一瞬の疑問がよぎる。

だが、避けた黒は洸の目の前。

疑問の反射を、洸は押し込めた。
洸の手に、じりじりとした震動が伝わる。
重く、長く感じる刀を、洸は振り上げた。

その、瞬間。

『――いけない！！左です、マスター！！！！！』

菫の声が聞こえたと同時。
洸の目が、また不思議なものを捉えた。

もう直ぐ消える筈の空。
支えを失い落下していくだけのその胸がぼこりと膨れ上がるのを。

それに気がついた瞬間、世界はコマ送りのように断片的になる。
膨れ上がる白。
振り下ろされた黒。
輝く緑。
そして、白を突き破り現れた黒。

「……え？」

呟きが、耳に響いた。
そして、コマ送りの最後。
視界を黒が覆いつくした。

『マスター！！右！！！！！』

「！！！！！」

菫の声に、洸は咄嗟に右へと身体を逸らした。
頬を冷たい何かが掠める。

一気に鮮明になる視界。
消え失せていた感覚が一瞬にして戻ってきた。

「あ…俺…？」

呟いた声が耳に響く。
それが、洸の意識を一気に覚醒させた。

空の中に潜んでいた黒。
眼前にまで迫ったそれを、洸は何とか刀で逸らしたのだ。

『マスター大丈夫ですか！？』
「あ、ああ…。」

（…あっぶねー…）

たった今、洸は死にかけた。
人は死に瀕すると走馬燈が見れると言うが、そんなもの見えやしない。
死が間近にあった洸に見えたのは、まさしく無そのものであった。

（…しかし、今のは？）
たった今目の前で繰り広げられた光景。
空の残骸を貫通するはずの黒い魔法が空をよけ、代わりに残骸の中から別の黒が現れた。
それは、つまり空の中に魔法が埋め込まれていたということになる。
（だから避けたのか？同士討を避けるために…）
つまりは、それこそが罠。
空を殺そうと襲いかかった洸を嵌めるための、２重の罠。
『次、来ます！！上！！』
「了解…って上！？」
菫の指示に驚きつつも、洸は跳んだ。
跳ぶといっても、すぐ上は天井だ。
空いた右腕で、洸は何とか衝撃を抑えた。
（なるほど、よく考えてる）
洸の真下では、２つの黒が暴れている。
例えその狙いが外れたとしても、後には洸を追い続ける魔法が２つも残ることになる。
逃げた獲物をさらに追い詰めるように。
掠るようにすれ違った黒が、再び洸目がけて突っ込んでくる。
「くっ…！！」

右腕で天井を弾き、床へと降り立つ。
すぐさま反転し、追いかけてくる黒。

狭い廊下での2対1。
このまま戦っていれば、洸は追い詰められてしまうだろう。

（このままここにいても仕方がない…！！）

洸は振り向くと、右側の廊下へと向かって走り出した。

第四十八話

薄暗い学校の廊下を、洸は駆けていた。

『左…いえ、右斜め上です！！』

「くっ！？」

菫の声に合わせて、洸は壁を、天井を蹴り飛ばしながら進んでいく。
とはいっても、間隔のほとんどない廊下を跳ねまわることなんて洸にできるはずもない。
先程から、洸は殆どボールのように壁にぶつかっては反動で跳ね返っているようなものであった。

当然、そんなことを繰り返していたら洸の体にもダメージが蓄積してくる。
まだ数メートルしか進んでいないというのに、洸の身体は早くも痛みで悲鳴を上げていた。

洸の左下。
先程まで洸がいた場所を、２つの黒が駆け抜ける。
交差した黒はそのまま突き進み、眼前にあった壁へと衝突する。

途端に、轟音が響いた。
壁には穴があき、土ぼこりが舞った。
洸の真下と左下、その両方の壁が消失していた。

やはりあの黒い魔法には物理的破壊力があるらしく、２つの刃の軌跡は跡形もなくえぐり取られてしまっていた。
その度に轟音が響き、土埃が廊下を漂う。
黄土色まみれの廊下には、一瞬の静寂。
視界から消えた黒を好機に、洸は一気に廊下を突き進む。
だが、油断はできない。
否、むしろ気をつけるべきは今。
『来ます――下！！』
「――――っ。」
腰を落とし、獣のように煙を掻きわける。
直後、洸の頭上を黒が突き抜けた。
廊下を横断し、土煙を上げた黒は再び視界から消え失せる。
同時に、洸の視界が再び灰に包まれる。
『次、そのまま跳んでください！！』
「了解っ！！」
視界を犠牲に上がった速度をそのままに、三本の脚で身体を跳ね上げる。
「うお…！？」
強すぎた足の力に、身体がひっくり返る。
慣性と重力に支配された身体は、空中へと投げ出された。
「菫！！」

『はい！！』

左手で輝く緑。
風が洸を押し、回す。

反転した視界が戻り、地面へと滑り降りる。
足の裏が押し出される感覚。
摩擦をほとんど感じずに、速度そのままに洸は駆けだす。

『一つ反転…。追ってきます！！』
「くそ、キリがないな…。」

2つの牙は、まるで疲れを知らずに洸を追跡してくる。
何よりも面倒なのは、あの魔法が壁などの障害物をまるで無視するように突き進むことだ。
ただでさえ暗く見え辛いというのに、視界から消えてしまったら位置の特定は、少なくとも洸には不可能になる。
そうなれば、唯一の便りは菫になる。
だがその菫の捕捉も完璧ではないし、声による誘導も全てに反応できるわけではない。

いくら魔導器の声が直接響いてくるとは言っても、壁の向こうでは机やら壁やらが吹き飛ぶ音が暴れ回っているのだ。
耳を押しつぶすほどの轟音で、時折洸の思考は遮断されてしまう程に。

（…長期戦は不利だな）

それでも洸は思考を続ける。
洸の役目は魔法を避けることでも、学校を破壊して回ることでもな

い。
幸い先程からあの魔法が次々と壁を破壊してくれているおかげで、部屋の中を見ることができている。
それを見る限りは、やはりどの部屋にも咲はいないらしい。
敵も流石に余波の来る場所にはいないのだろう。
（まあ、一緒にいる保証もないんだけど、なっ！！）
背後から駆け抜けてきた牙を横へとかわす。
（…やはり、このまま行くのはまずいかな？）
相手もこれで洸を殺せるとは考えてはいないだろう。
ならばこのままいった先には更なる罠が待っているはず。
あのプレイヤーがいつから洸のことを探っていたのかはわからないが、準備時間はあっても1日といったところだろう。
ただの素人が魔法という未知の力を得て準備した罠。
今のものも魔法にその全てを頼っているという以上、大したものは準備できなかったはず。
1階につき一つ。
もしそう考えるならば――。
『マスター、左上！！』
「…！！」
菫の声に思考を中断し、跳ぶ。
洸の都合など、向こうには関係ないらしい。

（そんなもん考える暇、ないってか）

『…！！マスター！！』

菫の声に、咄嗟に身体を動かす。
だが菫からの指示はなく、魔法も現れなかった。
少し遅れて、洸はそれがただの会話であることに気が付く。

「どうした？菫。」
『前方、行き止まりです。』
「え？…あー、そうか。」

考えても見れば、ここは学校の廊下。
進んでいけば、やがて壁に辿り着くのは当然であった。

それを理解しているのか否か、２つの牙は既に壁から現れ、洸を後ろから追ってきていた。
このままいけば、挟まれてしまう。
そうすれば、もう逃げ場はなくなる。

「やばい、忘れてた…。」

呟きながらも、洸は自身に余裕があるのを感じていた。
何故だろうか。
咲がさらわれ、助けるために洸は今敵の罠の中にいるというのに。
これまでのような危機感が、洸の中では薄れてしまっていた。

『魔法は止まる気配はありません。どうしますか、マスター。』
「…いや、行ける。」

だからだろうか。
今この状況を打破する案も、あっさりと出てきてしまう。
それは直ぐにイメージとなって菫に伝わり、やがて実行に移される。

『了承しました、マスター！！』

そのまま壁に向かって飛びこむと、洸は身体を回転させた。
水泳のターンのように、洸は壁を蹴って飛び出した。

弾丸のような洸の身体は、追ってきていた黒の上を飛び越え、一気に引き離した。
対象を失った魔法は、そのまま目の前の壁へと衝突し、土煙を上げて見えなくなってしまった。

「よし、このまま2階に行くぞ！！」

その光景を振りかえることもなく、洸は再度駆けだした。
魔法は消えたわけではなく、直ぐに戻ってくるだろう。
だから今のうちに、洸は距離を稼いでおきたかった。
2階へあがるための階段は、来た道を戻れば近くにある。

『はい！！』

応える菫の風に乗り、洸は上を目指して突き進んでいった。

＊＊＊

「…へえ？」

そう彼女が呟いた直後。
咲は、その表情から笑みが消え失せたのを見た。

「あ…。」

実のところ、咲も考え事をしていたから何をいったのかあまり覚えてはいなかった。

（変なこと言っちゃったかな…）

そう思う咲であったが、それが事実であろうことは彼女の表情を見ればよくわかった。
咲は今、相手の逆鱗に触れてしまったのだ。

「そう、あなたにはわかるのね…。」

ゆらり、とその顔に笑みが戻ってくる。
けれど、その笑みは先程のものとは明らかに異質で。

「なら、これもわかるのかしら。」

咲は全身に寒気を感じた。

「え…？」

呟いたのも一瞬。
咲は、首筋に何かきりきりとした感覚を覚えた。
何かが突きつけられている。

そう感じたときには咲の視界を黒が覆った。

「あなたは知ってる？」

先程頬に何かが当てられたときと同じ光。
菫の光とは違う、どろりとした光。
けれど、やはりそれは間違いなく、魔導器の輝きであった。

「刃を体に向けられる感覚を。次の瞬間には死ぬかもしれないって感覚を。」
「……っ！！」
「体を裂かれる痛みは知っている？折れて曲がった腕を見たことがある？」

魔導器。
咲の知るそれらは、刀や槍の形をした武器であるのだ。
ならば、今咲の喉下に突きつけられているそれも、そうなのだろう。

（何、この娘…！？）

だが、咲は目の前の少女に恐怖する。
少女の瞳は、まっすぐに咲を見ている。
けれど、視界は定まっているようには見えなかった。

「あ、う……。」
「ねえ、答えなさいよ。ねえ…！！」

じりじりと、彼女は近づいてくる。
それに応じて、首の圧迫感も増していった。

刃物を首に押しつけられたらどうなるか。
そんなもの、決まっている。

（嫌…！！）

必死に足でもがいて、椅子を後ろへと下げていく。
けれど足は久方ぶりに動かすように重く、満足に動いたとしても歩みに勝てるはずもない。
咲の抵抗は空しく、息は掻き消えていく。

「っ…、……っ！！」
「ねえ…！！」

（もう、駄目…）

咲は、目の前が白んできたのを感じた。

『マスター。』
「――――！！」

不意に、別の声が聞こえたかと思うと、途端に少女の動きが止まった。

『それ以上は死んでしまいますよ。』
「……。」

新たなその声に、少女は魔導器を引いた。

「はっ…、はっ、はっ…！！」

ようやく開いた気管に、咲は精一杯息を取り込んだ。
視界が揺れ、ひどく頭痛がした。
意識が体の中に引き絞られる感覚。
このまま気を失ってしまったら、死んでしまうのではないか。
咲は咄嗟にそう感じた。

しかし、咲はそれでも少女を見る。

「はは…っ。」

黒く長い髪を垂らして、少女は笑っている。
その口が、突如大きく開かれた。

「あはははははははは！！！！」
「……っ、…。」

少女は、とても可笑しそうに笑っていた。
目には涙を浮かべ、腹を抱えて。

「なに怖がってるのよ！？これを首に当てられたくらいで…！！」

そういって、彼女は手に持ったものを掲げた。
黒い光を纏ったそれは、間違いなく魔導器なのだが――。

「…え？」

呟き、驚愕する咲。
彼女の手に握られているそれは。

「…扇子？」

普通のものの1．5倍くらいはありそうな長さの扇子であった。
「そうよ。これが私の魔導器。牙扇・紫陽花（がせん・あじさい）。」
「…紫陽花。」
ようやく笑いを堪えたのか、涙を拭いて少女は続けた。
扇子の形をした魔導器。
先程、咲は閉じた扇子を押し付けられていたのだろう。
（あれが、私の首に…？）
確かに、窒息する程に押しつけられたにしては咲の首はつながっている。
「これが私をこの世界に呼びつけた張本人で。」
だが、ならばこの首を伝う感覚は一体何なのだろう。
チリチリとするこの痛みは何なのだろう。
「あなたとあのプレイヤーを殺すものよ。」
そう言って、彼女は再び嗤った。
＊＊＊
階段を上り、洸は2階に辿り着く。

未だに、２つの魔法は洸たちには追い付いては来なかった。

「あの魔法、もう消えたってことはないんだよな。」

『流石にそう都合よくはいかないと思いますが…。』

「まあ、そうだよな。」

２階のつくりは、１階と殆ど変わりない。

変わっているとすれば教室の中身と、後は２つの廊下が交わる場所にある空間位だろう。

洸たちが入った場所の丁度上には、少し広めの空間がある。

周囲より数段窪んでつくられたその広場は、休み時間などには生徒たちの憩いの場のようになっている。

と言ってもあるのは水飲み場くらいで、休み時間くらいにしか生徒は来ないのだが。

１階と同様、教室は全てが暗く、扉も施錠されている。

だから、洸は罠があるならばその広場にあるのではないかと考えていた。

「探知頼むぞ、菫。」

『…はい。』

結論からいえば、そこには確かに罠が用意されていた。

だが、それは洸の想像を遙かに超えるものであった。

＊＊＊

そうして、廊下を駆け抜けて、洸はその広場に辿り着く。
他の場所同様、明かりはなく暗いままであった。
だが、そこは明らかに他とは異質の雰囲気を放っていた。

「……！？」

そこに入り込んだ途端、洸は足を止めた。
決して周囲に漂う違和感に気がついたわけではない。
洸を止めた要因。
それは、薄暗い広場にあってもなおその黒を塗りつけられた、３つの黒い塊であった。

「…これは…。」

驚愕に、洸の声が震えた。
巨大な蓑虫のような、真黒な塊。
洸を軽く超える大きさを持ったそれが、洸を向かえるように3角に配置されぶら下げられていた。

『…魔法、ですね。』

菫が呟くように言った。

「魔法？これが？」
『はい。先ほどのものとは異なりますが、確かに魔法です。』

菫の言葉に、洸はもう一度塊に目を向ける。
ぬめつく様な黒が輝き、脈動しているかのような錯覚を覚える。

「じゃあこれは、あれみたいに襲ってくることはないのか？」
『そこまではわかりません。…ですが、ここでとまっているわけにもいきません。』
「…まあ、そうだな。」

今の所、それらに動きは見られない。
だが、このまま素通りできるはずもない。

何か仕掛けがあるのだろう。

（なら、あの魔法が戻ってくる前がいいか）

そう考えて、

「…よし、行くぞ。」
『はい。』

洸が踏み出したその瞬間。
３つの塊がぼとりと落下した。

「……っ！？」

咄嗟に、洸は飛び退いた。
意外にも、音はそこまで響きはしなかった。
それは、中にあるものが重くはないということ。

（…待て、中だって？）

そうだ。
洸はそれを見たときから、その中に何かがいるであろうことを考え

ていた。
そして、今それらが落ちてきた。
ということは――。

「くるぞ、菫！！」

叫んで、洸は刀を構えた。
その直後。

「――――！！！！！」

聞きなれた咆哮が３つ、広場に響き渡った。

『これは…。』
「また、空？」

まさか、と洸は呟く。
１体の次は３体の空。
それは、余りにも温いのではないかと、洸はそう思った。

（…って、違うだろ）

が、次の瞬間には考えを改める。
準備時間がないと考えたのは、自分自身ではないか。
それに、先程のことを考えれば、おそらくは牙がやってくるであろうことは予測できた。

さっきの２本がやってくれれば、計５本。
それだけで、洸の脅威になりえるだろう。
だが、同じ内容の罠ならやることも一緒だ。

「さっさと片付けるぞ、菫！！」
『はい！！』
そうして、洸が飛び出そうとした、その時。
空の一体が向こうから飛び出してきた。
「…！！何を…。」
驚いたのも一瞬。
向こうから来てくれるなら好都合だと、洸は刀を振るった。
だが。
『――！？マスター避けて！！』
「……っ！？」
放たれた刃は、しかし空を切り裂くことはなかった。
「な、え…？」
その代わりに、鈍い衝撃が洸の右わき腹に走った。
『…っ、左！！』
「――！！」
菫の言葉に、洸は左へと飛びのいた。
直後、３体目の空の腕が、洸のいた場所へと振られた。
そう、『３体目』の空が。

「今のはどういうことだ、おい…！！」

飛び退いた先で、洸が呟く。

「あの空の動き、どう考えても…！？」

今、１体目の空が洸の目の前に現れ、それを切り裂こうと洸は刀を振るった。

驚くべきは、その後。

普段なら切り裂かれるはずの空が、あろうことかその刃を跳んで避けたのだ。

目標を失い、空振った刃。

その先に、残っていた２体の空がいたのだ。

２体の空はそれぞれが腕を振りぬき、２体目が洸のわき腹を、３体目が洸の頭を狙った。

明らかに、これまでの空では考えられない動き。

だが、洸はその動きをする空の存在を知っていた。

「まさか…。」

『そのまさかです。マスター。』

洸の呟きに、菫が答えた。

『あれはｌｖ．２の空です…！！』

菫の声を掻き消すように、３体の空の咆哮が広場に響き渡った。

第四十九話

「ｌｖ．２の空…！？」

呟いて、洸は前を見る。
黒い繭から生まれ落ちるようにして現れた、３体の空。
白く巨大な体躯に、大きく開かれた顎。
その見た目は、今まで洸たちが相手にしてきた空と、何の変わりもない。
しかし、目の前にいるそれらは、明らかにこれまでの空とは異なっていた。

（何だよ、今のは！！）

示し合わせたかのような動き。
それは、所謂連携というものだ。
ｌｖ．２空の唯一にして最大の特徴。
それが、集団での行動、攻撃だ。

洸は、事前にそれを菫から聞いていた。
聞いていたが。

（今のは雑魚のする動きじゃないだろ！？）

鈍い痛みを発し続ける右脇腹を押えながら、洸は心の中で叫んだ。
冗談ではない。
今までの空とは、まるで違うではないか。

（能力に変わりがないだって…？）

ｌｖ．１とｌｖ．２の間の壁。
菫はそれを群れる習性の有無と言った。
だが、実際の違いを目の当たりにした洸には、その言葉を信じることはできなかった。

（違いすぎる…！！たった、それだけでも！！）

刀を握る力が増す。
同時に痛みも増してしまったが、今の洸にそれを気にかけている余裕はなかった。

視界の端で、白が動いた。
咄嗟に目を追わせると、その先にいる空は僅かに１体。

「…くそっ！！」

呟いて、洸はその２体へと驀進する。
後の２体がどこにいようが関係ない。
まずは１体。
そうしなければならないと、洸の全身が告げていた。

しかし――。

『マスター、上！！』
「！！！！」

菫の声に、洸は飛び上る。

直後、洸のいた床から2本の黒い牙が飛び出してきた。

（しまった、もう…！！）

追い付いてきたのか、と洸が思考したその刹那。

『マスター後ろ！！』

「――！！」

菫の声に、洸は自分に落ちた陰に気が付く。
振り返ってみれば、そこには既に腕を振り上げた空が跳んでいた。

「……っ！？」

咄嗟に刀を振るう。
だが振り下ろされた空の腕は、大して力のこもっていない洸の刀を、易々とはじき返した。
反動で、洸は床へと叩きつけられる。

「がっ…！？」

身体の内側で、何かが跳ねあがるような感覚。
そのまま転がり、吹き飛ばされる。
耳やら鼻やらが熱くなり、視界が揺れる。

『マスター！？』

菫の声が響いてくる。
応える間もなく、洸は飛び起きた。

視界の先では、空が2体、洸の左右を挟むようにして立っている。
後ろから聞こえてくる荒い息遣いを合わせれば、洸が今囲まれていることがわかった。
そして、中に浮かぶ先程の魔法。

これで、5対1。
もう空1体を狙い打てる状況はほとんど無くなってしまっただろう。

『…囲まれましたね。』
「…だな。」

そう、互いに呟いて。
洸はほほ笑み、菫は口を閉じた。

余裕はなくとも、やるしかない。
洸たちに残された時間は、もう大してないだろうから。

『――――来ます！！』

菫が叫んだのと同時。
空中に静止した牙たちが、突進を開始した。

『右！！』

声に合わせて、右へと跳ぶ。
視界の端を黒が駆け抜け、粉塵が上がる。

『前！！』

煙を突き抜けて、空の腕が駆け抜ける。

『左！！』

掬いあげるように放たれた腕を、飛びこんでで避ける。
掠れた爪が、頬を僅かに切り裂いた。

『…っ、上！！』

転がりながら、洸は左手で身体を跳ね上げた。
床から、黒が飛び出してくる。

逆さまの状態で、洸は飛び出した黒を見た。
そして、その向こうにいる、飛びあがった白も。

「――――！！」

その瞬間、洸は思考を爆発させた。
殆ど反射的に、洸は刀を振り抜いた。
軌跡の上に乗っかった黒をまるで無視するように、全力で。

途端に、刀から暴風が放たれた。

「うわ…っ！？」

荒れ狂う風は空とともに洸を吹き飛ばし、振り抜いた刀は黒の片割れを弾き飛ばした。
殆ど同時に、３つの轟音が広場に響いた。
洸は入口近くの壁に。
空は進行方向の壁に。
そして、牙は外に面した壁にぶち当たり、外へとつながる大穴をあ

けた。

『マスター、大丈夫ですか！？』

「っ痛…。な、何とか…。」

軋む身体を震わせながら、洸は呟いた。

『いくらなんでも無茶し過ぎです。このままではマスターの身体が持ちません。』

「ああ、確かに…。」

正直、なぜまだ身体が動くのか不思議なほどに、洸の体には痛みが満ちていた。

身にまとう風のおかげか、危機を感じた身体の反応なのか。

だが、そちらにせよ体は動くのだ。

ならば、洸の役割を果たすまで。

「なら、さっさと終わらせないとな。」

そう呟いて、洸は立ち上がる。

逆の方向に吹き飛んでいった空は既に起き上がり、他の空と合流している。

倒れていた洸を狙わず、空との合流を選んだ。

もしかしたら、あの空たちは集団でしか行動が出来ないのかもしれない。

つまり、あの空は3体で一つのlv．2空なのだろう。

そうだというならば、洸にもチャンスはある。

1体か2体。

3体のいずれかを行動不能にするだけで充分そうだ。
が、撃破を許してくれる隙は、ありそうもない。

「……。」

洸の視界が、壁にあいた大穴を捕らえた。
吹き飛んでいった牙が開けた大穴を。

だが、何も手がないわけではなさそうだ。

「…いくぞ、菫。」

そう言って、洸は刀を構えた。

「ここをさっさと突破するぞ！！」
『はい！！』

叫んで、洸たちは飛び出した。

＊＊＊

「…殺す？私と、白埼君を…？」

囁くように、咲は呟いた。
目の前の少女は、確かに今そう告げた。

「ええ、そうよ。」

少女は、咲の驚いた表情に満足がいったのだろう。
楽しそうに嗤うと、言葉を続ける。

「と言うか、さっきあなたがそう言ったんじゃない。自分だって殺すかもしれないって。」
「…違う！！私は、そんなこと…！！」

咄嗟に叫ぶ咲を、少女は楽しそうに眺めている。
それで咲は理解する。
この少女は咲で遊んでいるのだと。

先程のも、咲を怯えさせるための演技で。
今も、彼女の目はじっと咲を捉えているのだ。

（この娘は…）

中学生の少女が、こんな目をして自分を見ている。
首に刃を突きつけ、流れた血を見て笑っているのだ。

（この娘も、独りだったんだ）

風も、太陽もない世界。
聞こえる音は自分の息遣いと、化け物たちが這いまわる音だけ。
出会う誰かは、化け物か人殺しで。
まともに見ることも話すことも儘ならない内に、殺し合いが開始される。

そんな場所で、一体どうやって正気を保てと言うのだろうか。
唯一の会話相手であり、云わば精神を繋ぎとめる楔である魔導器も、機械であり人ではない。

それに気がついてしまえば、唯一の楔も意味を無くす。
洸は、菫を一人のパートナーとして認めているし、それに咲もいる。
2人がこれまで平穏な時を過ごせていたのも、咲がいて、菫がいて、洸がいたからだ。
だが、目の前の少女は、独りだ。

頼みの魔導器も、一言しか言葉を発していない。
彼女にとって、魔導器はただの喋る機械でしかないのだ。
だからこそ、彼女はずっと独りで。
彼女の心は、壊れてしまったのだ。

彼女は恨んでいるのかもしれない。
この世界にいながらそのままでいる洸を、咲を。
だからこそ、咲を攫ったのかもしれない。

（私が…）

今、少女と洸を会わせるわけにはいかない。
今彼らが出会えば、殺し合いが始まってしまうから。

洸は誰も殺さないと言ってはいたけれど、何が起こるかはわからない。
それに、少女は間違いなく洸を殺しにかかるだろう。
治癒球のない今、洸は些細な負傷でも死に至ってしまうのだから。

（私が、この娘を助けないと…！！）

例え、生きて帰れるのが数名だとしても、心だけは救ってあげたい。
そんな気持ちで、咲は一杯になっていた。

冷え切っていた血流が、一斉に熱くなる。
まるでそれが自分の使命であるかというように、全身が滾った。
それは、きっと傲慢であるのだろう。
自分が生き残るために殺さなければならない相手を救おうとするなんて、誰かが見ていたら笑われてしまうかもしれない。
でも、やってみせる。
そう、咲は決意した。

「……。」

少女は突然黙った咲に興味を失ったのか、最初に座っていた椅子に戻っていた。
その表情はころころと変化している。

「ねえ。」

思い切って、咲は少女に声をかけてみた。

「ん？何、どうしたの？」

案外、彼女は気軽に応じてくれた。

「あなたの魔導器…紫陽花っていうのよね。」
「？ええ、そうだけど。」

咲の言葉の意味を計りかねて、少女は首をかしげた。

「彼の…彼女の？魔法って、どんなものなの？」

先程聞こえてきた声が、紫陽花と呼ばれた魔導器のものなのだろう。
甲高い、中性的な声で、男か女かの判断はできなかった。

「…こいつは男性体。彼でいいよ。」
「そ、そう。」
「それで、何？私たちの魔法が知りたいの？」

再びあの笑みを浮かべて、少女は言った。

「ええ。」

その笑顔を真っ向から見返して、咲は頷いた。
何故だか、今は彼女のことを怖いとは感じなくなっていた。

「…ま、いいでしょう。」

ため息とともにそう呟くと、少女は手にした扇子を掲げた。

「これが私の魔導器。牙扇紫陽花。宿っている魔法は、名前の通り。」
「がせん…牙ってこと？」
「そう。」

頷くとともに、扇子に埋め込まれていた玉が黒に輝いた。

「闇属性の牙を生み出す魔法。それがこの魔導器の能力。」
「闇属性…？」

魔導器を持たず、魔法を使ったことのない咲には属性のことなどわかるはずもない。

そもそも、魔法の話など咲にはまるで解らないのだ。
漫画やゲームの世界の話は、咲にはこれまで無縁のものであったから。

「私を攫ったのも、その魔法？」
「ええ、もちろん。」

今はただ、なるべくの会話を。
そう思い、咲は言葉を続けようとする。

「…ねえ、あなた。」

けれど、その前に彼女が口を開いた。

「え、な、何？」

予想外の出来事に、咲は驚く。
が、少女は構わずに言葉を続ける。

「あなた、怖くないの？」
「…え？」
「死ぬことが。」

はっきりと、彼女はそう告げた。

「ここでこんな目にあってるっていうのに、あなたは全く怖がってはいない。…殺されるかもしれないっていうのに。」
「……。」

静かに言葉を続ける少女。

咲は、そこに彼女の怯えを見た気がした。
「ねえ、あなたは死が怖くはないの？」
もう一度そう呟いて、彼女は咲を見つめる。
今度はそこに笑みはなく、彼女の素顔がある。
この答えを間違ってはいけない。
そう、咲は思うのだが。
（死ぬこと…？）
彼女の言葉が、咲の脳裏でぐるぐるとまわっていた。
（死ぬことって、一体…？）
「私は…。」
咲が何かを応えようとしたその時。
轟音とともに、教室が揺れた。

第五十話

突如として起こった震動は、２人がいた教室を僅かに揺らした。

「何…！？」

突然の事態に、咲は驚いた声を上げる。

「地震…！？」

呟いて、咲はすぐに首を振った。
まさか、この世界に地震などと言うものが起こるわけもない。
ならこの揺れは何なのだろう。
咲は、唯一の情報源である少女を見た。

「…ふん。」

少女は音の響いてきた方角を眺めながら、息をついていた。
その顔は、どこか退屈そうであった。

「ようやく、か。」

そう呟くと、少女は窓の方へと向かった。

「…今の音なら、まだ１階かな。」

窓の外を確認しているらしく、咲にも聞こえない位の声で何かを呟いている。
その光景に、咲は首を傾げる。
良くはわからないが、どうやらこの事態が起こることを彼女は知っていたらしい。

「どうやら、あなたのお待ちの王子様がやってきたみたいよ。」

咲を振り返ると、少女は笑顔を浮かべてそう告げた。

「…白埼君たちが？」
「ああ、そう言えばそんな名前だったわね。…茶織咲さん。」
「！！私の名前…どうして？」
「そりゃあ、見ていたもの。」

とんとん、と彼女は自分の目の横を叩いた。
少女は自身の持つ魔法によって、洸の拠点内に侵入していた。
見ていたとは、つまり2人の会話を見て、聞いていたという意味だろう。

だが、咲はそのことを知らない。

（…見ていた？どういうことだろう）

彼女の言葉に首をかしげる咲。
だが、彼女はそう言えばと思いだす。
確か、先ほどまで咲たちがいた拠点と呼ばれていたデパートは、中にいる限りは見つからないという話であったはずだ。
ならば、何故目の前にいる少女はこうして咲を攫うことができたのか。

その意味が、見ているという言葉に込められているのだろうと、そう思った。

（そうだよね。この娘も、魔法を使えるんだ）

魔法がどういったことを可能にするのか、それを咲は知らない。
だが、彼女は現に知らないはずの2人の名前を知っているのだ。

（あれ、名前…？）

ふと思い、咲は顔を上げた。
そこには自慢げな笑みの少女が立っていた。

「…あなたの名前は？」
「は？」

きょとんとした顔で、少女が応えた。

「あなたの名前、教えてほしい。」

そう言えば、咲はまだ彼女の名を知らない。
まあ、誘拐犯と被害者ならば名前を知らなくても当然かもしれない。
でも、それではだめなのだ。
咲の目的である、彼女の心を助けること。
それをするには、まず、彼女のことを知らなくてはいけないから。

「私の名前？…そんなもの、あなたに教える必要なんてないじゃない。」

だが咲の提案に、少女は首を横にふる。

彼女からすれば、これから殺す人間、しかも捉えているはずの人間にそんなことを言われれば断るのは当然と言える。
どうにかして聞き出せないだろうか。
そう考えて、咲はふと閃いた。

「…じゃあ、答えない。」
「は？」

咲の言葉に、少女は更に困惑した表情を浮かべた。
何を言っているのか理解できない。
そんな表情だ。

「さっきのあなたの質問。私は、あなたの名前を聞くまで答えない。」
「はっ、何よそれ。そんなことで…。」
「いいの？」
「…え？」

馬鹿らしい、とそっぽを向く少女に、咲は呟いた。

「私からそれを聞きたかったんじゃないの？」
「……。」

はっきりとそう告げた咲の言葉で、少女の表情が変化した。
先ほどの問いをした時の彼女の表情と同じ。
引き抜かれたような吐息。
あふれ出してしまいそうな表情。

けれど、それも一瞬で。
彼女はすぐに咲を睨んだ。

射抜かれる様なその視線に、咲は一瞬ひるんでしまったけれど、諦めずに彼女の目を見つめ返した。
ここで負けるわけにはいかない。
今の彼女と洸を、会わせる訳にはいかないのだ。

「…わかったわよ。教えればいいんでしょ、名前。」

ため息をつくと、彼女は髪をかき上げた。
どうやら根負けしたらしい。
面倒そうに扇いでいた紫陽花を閉じると、彼女は窓辺に腰を乗せた。

「…黒織茜奈(くらおりせんな)。それが、私の名前よ。」

咲を見つめた目は変わらずに、少女――茜奈は口を開いた。

「黒織、茜奈ちゃん…。」

その響きを確かめるように、咲は呟いた。

「ちゃんづけはやめて。それと、私は名字で呼んで。」
「え、どうして？」

首をかしげる咲に、茜奈はもう一度大きなため息をついた。

「あなた、今の状況を分かってるの？」
「え？」
「…もう、いいわ。それで？」

窓際から離れ、茜奈は咲の目の前にやってくる。

「私は答えた。今度はあなたの番。」
「…私は。」
本当は、咲に彼女の問いに答えるだけの何かがあるわけではない。
ただ、先ほどの彼女の表情を見て、この問いには答えなければと思ったただけで。
「わからない。」
だから、咲は思ったことをそのまま口にすることにした。
自分の中の思考を、そのままに。
「自分が死ぬことなんて、考えたこともなかったから。」
ありのままの自分をぶつければ、彼女も応えてくれるのではないか。
そう、考えて。
「……は？」
だが、返ってきたのは無色の振動。
何も込められていない、空虚な言葉だけ。
弾かれるように、咲は顔を上げて茜奈を見た。
「今、なんて言った？」
そこにあった彼女の表情。
それは、まるで世界全部が夢であったのを知ったような、そんな閉ざされた表情であった。

＊＊＊

茜奈は、目の前の少女をぼんやりと見つめていた。
茶織咲という名の、自分が先程攫ってきた少女。
今、彼女は何と言った？

自分が死ぬことを、考えたことがない…？
そんなこと、あり得ないのだ。

「そんな訳がないだろ…？」
「黒織さん…？」
「自分が死ぬことを考えたことがないだって…？」

（だって、私は、私は――）

初めてそのことを考えたのは、いつのことだったか。
切っ掛けはもう覚えていない。
ただ、自分は死んだらどうなるのだろうと、ふと思ったのだ。

人は、眠るように死ぬと、よく耳にする。
ならば、眠っているのが永遠に続くのだろうか、と考えた。

そう言えば、自分は眠る時どうしているのだろう。
初めてそう考えて、そして気がついた。

眠っている時、そこには何もない。
眠ろうとベッドに入って、気がついたら朝目が覚めている。
その間には、何もないのだ。

人は、眠る時に夢を見る。
夢の中の世界を見て、体験して、気がついたら目が覚めているというのが、きっと大半の目覚めであろう。
だが、時折、目が覚めるその直前に夢にいた記憶が消え失せると気がある。
そうしたら、目覚めた自分が感じるものは何もない。

昨日眠った自分がいて。
たった今起きた自分がいる。

けれど、その間には何もないのだ。
黒でも、闇でもない。
引き込まれるような、破裂するような、無。

ああ、死とはこれが永遠に続くことなのだ。

それに気がついた瞬間。
茜奈の世界は、終わりを告げた。

それ以来、茜奈は全てに虚無感を覚えるようになってしまった。
ああ、これもあれも無意味なのだと。
例え何を頑張ったとしても、すべて無に帰してしまうのだからと。
けれど、それでも自分は生きていて。

生きている限りはその無意味なことを行わなければならないのだ。
茜奈は、所謂優等生と呼ばれている存在であった。
彼女自身、大したことはしていない。
ただ勝手に周りが落ちぶれていっただけ。
そうよばれることに、喜びを感じることはなかった。

でも、その時彼女は初めてそんな自分の立場に感謝した。
優等生である自分には、やるべきことが用意されていた。
親は彼女の成績が上がることだけを期待していたし、学校は模範的な生徒であることを望んだ。
周囲とは適当に相槌を打っているだけで『親友』になれたし、後は少し安全に気を付けていれば何不自由なく一般人でいられた。

ああ、これが大人になることなのだと、そう、気がついた。
だから大人はあんなに単調で、時折子供に帰りたいと嘆くのだ。
何も知られずにいたあの頃を懐かしんで。

後は、ただ生きて、ただ死ぬだけ。
その、はずだった。

「…わからない。」

けれど、世界は茜奈の想像していたものではなかった。
学校からの帰り道。
茜奈の適当な相槌に、親友の少女はとても嬉しそうにはにかんでいた。
川原で見かけた親子連れ。
子供を肩に乗せた父親であろう男は、子供との会話を心から楽しんでいるように笑っていた。

結婚したと言っていた親戚の女性は、とても愛しそうな瞳で、自らのお腹をさすっていた。
茜奈のことが好きだと言ってきた男子。
彼は、彼女の一挙一動にこちらが驚くほどに動揺していた。
そして、彼女を見つめてきたその瞳を、茜奈は今も忘れることができない。

どれもが、茜奈には出来そうもない表情で。
そうして、茜奈は気がついた。

「どうしてみんな、あんな楽しそうに生きていられるの？」

ひょっとしたら、自分はおかしいのだろうか、と。

「どうせ死んでしまうのに。すべて消えてしまうのに。」

おかしいではないか。
人はいつか死ぬ。
いつか、あの無の中に溶け込んでしまうのだ。

皆、それが分かっているはずなのに。
どうして笑っていられるのだ。

怖くはないのか。
死にたくないと泣き叫ばないのか。
茜奈は、もう何も楽しめない。

怒っていても、笑っていても、どこか冷めた目で見つめている自分がいる。
鼻で笑っている自分がいるのだ。

だが、他の皆は違う。

「なんでそれでも、笑っていられるのよ！！！！」

この世界は、死に溢れている。
茜奈がこれまでいた場所よりも、ここは、ずっと死に近いのだ。
だから、茜奈は戦いに参加した。
ここにいる人たちなら、きっと自分の問いの答えをくれると。

だが、目の前にいる少女は何も答えてはくれない。
まあ、それも無理もないのかもしれない。
彼女には魔導器はなく、ただ、守られてきた存在なのだから。

「…ははっ、そうよね。わかるわけないわよね、あなたに。」
「……。」
「ずっと守ってもらって。辛さも痛みも知らないあなたに。死なんてわかるわけがない…！！」

そうだ。

「黒織さん、どこに行くの！？」
「…決まっているでしょう。白埼…あのプレイヤーの所よ。」

彼なら、答えを知っているかもしれない。
あの赤い怪物と戦って、生き残った彼なら。

「待って！！」

もうこの女に用はない。
そう思い歩き出す茜奈を、咲が止める。

「…何？」
「まだ私の答えは終わってない！！せめて、それが終わってから…。」
「何を言うかと思えば…。」
そう呟いて、茜奈は牙扇を咲に突きつける。
先程魔法で切り裂いた傷に、先端を押しつけた。
「……っ！！！？」
「あんたは黙ってなって言ったでしょ。」
咲の表情が、苦しそうに歪んだ。
肉に食い込むように押しこんだのだから、当然だ。
「何もできない、ただ守られてるだけの屑なくせに。偉そうなことを言うな…！！」
咲が目覚めて、茜奈を見た時から、茜奈はずっと見下されているような視線を感じていた。
そして、諭すような口調。
それが、彼女はずっと気に食わなかった。
「せめてそれから動けるようになってから言いなさいよ。駄目人間。」
「……。」
その言葉に、咲の表情が変化した。
「あら、何？怒ったの？…でも今さら遅いわよ。あなたの王子様は、

私が殺すんだから。」

そういって笑う茜奈だが、咲に反応はない。

「…そう。じゃあ私がこれを脱げ出せたら話を聞いてもらえるのね。」

「…は？何を言って――。」

茜奈が応えるその途中。

乾いた破裂音が、響いた。

「……え？」

響いた音。

上がる硝煙。

気がついたとき、茜奈の目の前には咲がいた。

椅子に縛られていた筈の彼女が立った状態で。

その手には、銃が握られていた。

「さあ、これで私の話を聞いてもらうわよ。」

そう言って、咲は笑った。

第五十一話

教室を揺らす轟音が断続的に響いてくる。
震動はまだ微か。
けれど、決して止むことなく、振動は学校を突き上げる。
それは、まるで2人の立つ場所まで迫ってくるような錯覚を覚えさせた。

「…全く、随分物騒な物を持ってるのね。」

そう言って、茜奈は笑う。
その表情に先程までの余裕はない。

「黒織さんのそれほどじゃないよ。…痛かったんだから。」
「……。」

そう言いつつも、咲は銃から手は離さない。
首筋には、赤い筋が幾つか流れ落ちている。

「でも、これで、私の話を聞いてもらえるよね。」

今度は、咲が笑う。
目ははっきりと茜奈を捉えたままで。

「はっ！！まさか、そんなもので私を黙らせられると思ってるの？」

しかし茜奈は、突きつけられた銃口に怯むことなく口を開いた。
魔導器という超常的な兵器を持っている彼女からすれば、銃は大した脅威ではないのかもしれない。
否、それを持つ咲に恐怖を抱いていないのか。

「そもそも魔導器を持たない、プレイヤーじゃないあなたに、撃てるの？」

撃てるわけがない。
そう、茜奈の表情は告げていた。
守られているだけの人間が、引き金を引くことなどできない、と。

だが、茜奈は一つ、勘違いをしていた。

「ほら、撃ってみなさいよ。」

そう言って、茜奈は両腕を開いた。

「無理よね！？何もできない、あなたなんかに――。」

茜奈の言葉を遮るように、乾いた音が響く。

「…え？」

呆けた表情で、茜奈が目を見開く。

「撃てないと、思った？」
「……っ！！」

突如右肩を襲った激痛に、茜奈は膝を折る。

その目はまるで信じられないものを見るように、咲を捉えていた。

「あんた…！！」

茜奈の手が、自らの肩に触れる。
だが、そこに傷はない。
代わりにあるのは左肩を包む強い痺れと痛み。
僅かに左腕を動かそうとするだけで、強い痺れが走る。
そして、肩を強打されたような痛み。

咲は確かに銃を撃った。
だが、茜奈に傷はない。
放たれた弾丸は、茜奈を貫通してはいないのだ。
血が出ていない以上、あれは本物の銃ではない。
だが、決してエアガンなどのおもちゃの類でもない。

茜奈の体を蝕む痛みに痺れは本物であったし、何よりその銃に撃たれて以降、左手の牙扇への魔力供給が停止してしまったのだから。

人間の全身を流れる魔力は、血液と同じように胴体の中心部から全身へと流れていく。
ただ少し異なるのは、魔力は血液とは異なり流れが循環していない。
中心から流れ出た魔力はそのまま外気へと放出され、代わりに外気から吸収された魔力が体内へと還っていく。
それが人の身体における、魔力の流れである。
茜奈は今その内の左肩からの流れを、一切遮断されてしまっている。
本来腕から魔導器に流れるはずの魔力が、それ以前で止められてしまうのだ。
明らかに、対魔導器を想定された兵器。

何故そんなものがここにあって、何故それを咲が持っているのか。
後者については想像する気も起きない茜奈であったが、彼女は咲が持つそれが何かを知っていた。

「なんでそんなものがここにあるのよ！！」

この世界で入手可能なものは、いくらでも利用してかまわない。
それが、この世界でのルールだ。
魔導器たちは、それらの物をアイテムと呼ぶ。

陽が乗っていたバイク然り、洸たちの拠点にあった様々な物資然り。
だが、咲の手に握られた銃はそれらアイテムとは少し異なる。

魔導器たちは、それを『付加装備（アーティファクト）』と呼ぶ、
ｓｅｖｅｎｔｈに見られる様々なものは、その応用の次第によって多様な戦闘手段に変わる。
もちろんナイフや包丁と言った、ありふれた凶器を使えば、空やプレイヤーへの攻撃手段にはなる。
だが、それらは魔法という力の前にはあまりにも頼りない。

そこで登場するのが、アーティファクトだ。
アーティファクトは、魔法の付加された道具のことであり、魔法における戦闘の補助の役割を果たしてくれるものである。
咲の持つ魔導銃は、通常の金属弾頭を持つ弾丸ではなく、所持者の魔力を圧縮固定したものを弾丸として発射する。
弾丸は物理的な破壊力には乏しく、通常弾のように人体を貫通することも難しい。
だがその代わりに着弾した部分には強い痺れを与え、魔力の流れを一時的に抑える効果がある。
それは腕を経由して魔導器を操るプレイヤーたちに対して、かなり

有効な装備と言えるだろう。
威力も十分にあるので、これ単体で十分に戦闘を行えるほどであった。

勿論、ただ殺すことを目的とするのなら、実弾の方が圧倒的に速い。
少なくとも現在、知覚不能な速度での攻撃に反応できるプレイヤーは確認されていないのだから。
ただ咲にとっては、この魔導銃の方が合っていた。
だってこれならば、どう間違っても人を殺すことはないだろうから。

死に到達しない程度の暴力ならば、案外人は簡単に振るうことができる。
それが、棒などの感触が伝わるものでないなら、尚更に。

「……っ！！」

突き付けられた銃口の意味を、茜奈はようやく理解した。
咲は、ただの虚栄として、その銃を向けているのではない。
その腕には、目には、しっかりと意志が宿っている。

次に右肩を撃たれれば、茜奈は魔導器を使うことはできなくなる。
そうなれば、彼女はただの中学生だ。
目の前にいる少女と、何も変わらない、否、それ以下の存在になり下がってしまうのだ。

「そんなもので…！！」

そんなことは、許さない。
右腕を振るい、魔導器を輝かせる。
ただの補助道具に、魔導器が敗れていいはずはない。

想像しろ。
目の前の少女が、牙に切り刻まれる姿を。
それで、それだけで終わるのだ。

（それだけで――）

想像して、腕を振るう。
たった、それだけなのに。
牙扇を包む輝きは急速に失われていった。

「ふざけるな…。」

悔しかった。
優位に立っていた筈の自分が、いつの間にか追い詰められていることが。
何より、自分が馬鹿にしてきた少女が、自分を追い詰めていることが。

「ふざけるな！！」

叫びとともに、茜奈の周囲に魔力が弾ける。
けれど、咲は引き金を引かない。
ただ、じっと茜奈を見つめていた。
「なんで、なんであんたなんかに！！」
そんな目で、見つめるな。

「呑気に生きて！！間抜けに巻き込まれて！！ただ守られてるだけのあんたに！！」

私は、弱くなんてないんだ。
あんたとは、違うんだ。

「独りじゃなくて、痛みも知らない癖に…。ただ傍観しているだけなら、私たちの殺し合いに、口出しなんてするな！！」

黒き牙扇を、茜奈は振り上げた。
牙が空を駆け抜け、咲へと直進する。

だが、咲は動こうとはしなかった。
まだその目は、茜奈をとらえ続けている。

「……っ！！」

咄嗟に、茜奈は右腕を振るった。
直進していた筈の牙が逸れ、後ろの壁に直撃した。

「なんで、避けない…！！」

怒気を孕んだ声で、茜奈が呟く。

「死にたいのか、あんたは！！！！！」

だが、咲は応えない。
頬から血を流し、苦悶の表情を浮かべた咲は、俯いたまま。
銃口は茜奈に向けたまま、顔だけを下に向ける。

明らかな隙。
それが分かっているのに、茜奈は動くことができなかった。
「…なわけ、ない。」
「…？」
ふと、咲は口を開く。
「平気なわけ、ない。」
顔を上げて、彼女が茜奈を見る。
その顔は、どこか虚ろであった。
「ただ見ているだけで、平気なわけない！！」
「！！？」
突如、咲が吼えた。
大切な人の親友が、命を賭けて戦ってくれている。
そんな状況で、ただのんびりとしていられる訳がない。
けれど、魔導器を持たない咲は戦いの邪魔で。
だから、傷ついて帰ってくる洸のために、待っていることしか出来なくて。
守られているだけ――？
「7日前にこの世界に呼ばれてから白埼君たちに会うまで、私はずっと独りだった。」

痛みを知らない――？

「空に殴り飛ばされたことだってある。魔法に焼かれたことだってある。」

どうして、生きていられる――？

「それでも、私には帰らなきゃいけない理由があるんだ！！」

約束したんだ。

絵を教えてくれるって。

「帰って、やらなくちゃいけないことがあるんだ！！！！」

そのためなら、傍観者にだってなってやる。

卑怯者でも、屑でも、構いはしない。

「あなたにだってあるでしょう！？元の世界に戻ってやりたいことが！！」

生きている理由。

笑っていられる理由。

そんなもの、咲は知らない。

けれど、たった一瞬のために、人は生きていけるんだ。

「…やりたいこと？」

咲の言葉を、茜奈は呟く。

（私の、やりたいこと？…それって、何？）

そんなこと、考えたこともなかった。
だって、いつだって茜奈にはやるべきことがあった。
それをやっているだけで、彼女は優等生でいられたのだから。

でも、咲はそれでは駄目だという。
やるべきことではなく、やりたいこと。
そこにある差は、一体何なのだろう。

（私の、やるべきこと…）

それなら、一杯思い浮かぶ。
親に学校での出来事を話して、自分の部屋で勉強して。
また送られてくるだろう友達のメールを返して、ときどき電話をして…。

（…ああ、そうだ。あいつに、テスト勉強を教えてやらなくちゃいけないんだった）

茜奈の脳裏に、一人の少女の顔が浮かぶ。
彼女のことを親友と呼び、ほほ笑んだ少女の顔が。

（全く、いい加減一人で勉強できるようになりなさいよね）

別段苛められていたわけではなかったけれど、物静かでつまらないからと、周囲から浮いていた少女。
初めは、教室で寂しそうにしてたからちょっと声をかけただけ。
それが何となく続いているうちに、彼女はいつも茜奈といるようになった。
ただそれだけの間柄なのに。

どうして私にそんな笑顔を向けるのだろう。
私は、あなたをいじめてた連中と、大して変わりはしないのに。
面倒だからと、あなたをずっと無視してきたのに。
どうして、そんな笑顔を私に向けてくれるのだろう。

（…あいつも、今は私のことを覚えていないのよね）

登校の待ち合わせ。
私が少し遅れるだけで、不安そうにメールしてきて。

（…また、あの時みたいに寂しそうにしてるんだろうな）

おとなしいくせに勉強が出来なくて、いつも私が教える羽目になって。
でも、私が教えたところは、必死になって覚えてくるんだ。

（全く、あいつは…）

「…全く、あいつは、私がいないと駄目なんだから…。」

そう、茜奈は呟いた。
その頬には、涙が溢れていて、表情は今にも崩れてしまうそうであった。

（…良かった、大丈夫そうだ）

茜奈の表情を見て、咲はふと思った。
彼女は無事、答えを見つけられたようだ。

咲に、彼女の問いの答えなどわからない。
そもそも、自分が考えたことがないのだ。
皆がどう考えているかなんて、わかるわけもない。

死は平等だ。
生まれたら、いつか死ぬ。
生まれてから死ぬまでに、この言葉を人は何度聴けばいいのだろう。
そう思うほどに、人はこの言葉を教えられる。

まるで、刷り込むように。
それ以上は決して考えてはならないと、諭すように。

その教えは、正しいのだろう。
生きる意味、死ぬ意味。
それらは、決して答えの出ることはない底なし沼のような問いなのだから。

想像してしまったが最後。
それこそ死ぬまで、人はその思考に引きずられ続けるのだ。
抜け出す方法は、２つ。
思考を受け入れ割り切るか、悩みを自分ごと消し去るか。
咲の目の前にいる少女は、今その狭間にいる。
そして幸か不幸か、彼女はこの世界に選ばれた。

現実世界よりも、ずっと死に近い場所。
目の前で、否、自分自身が殺し合いをするこの世界では、死はより身近なものとして存在する。
彼女はここでならその問いの答えを見つけられるのだと思い込んでいる。
だが、それは違う。

ここにある死は、現実世界のものとは違うのだ。
「ここから帰ったら、その人に相談してみなよ。…きっと、真剣に話を聞いてくれる。」
だからこそ、茜奈は帰らなければならない。
誰かを殺して、変質する前に。
生きて、今の彼女のままで。
「だから――。」
その先を言おうとして、咲は茜奈を見た。
しかし――。
「え…？」
そこに立っている茜奈の目は虚ろで。
先ほどまで光が宿っていたはずの瞳は、虚空を見つめていた。

＊＊＊

いつの間にか、茜奈は黒の中にいた。
「あれ…？」
立っていたはずの床はなく、散乱していた机もない。
目の前に咲はいない。
たった一人で、茜奈は闇の中にいた。

『マスター。』

ふと、声がする。

茜奈の魔導器に宿る意思、紫陽花の声。

『あの者に、騙されてはいけません。』

「…どういうこと？」

不審げな表情を浮かべる茜奈。

当然だ。

突然こんな場所に連れてこられて、そんなことを言われて信じられるはずもない。

『あの者は、マスターを騙そうとしているのです。』

「そんなこと…！！」

『あるわけない、と思いますか？』

「え？」

紫陽花の甲高い声が、茜奈の脳裏に響いてくる。

『マスターは、あの者の何を知っているというのですか。あの者は、マスターの何を知っているというのですか。』

「それは…。」

けれど、咲は茜奈の問いに答えをくれた。

現実世界で生きる理由をくれたんだ。

『それは、マスターが自分自身で気がついたこと。あの者は何もしてはいません。』

「でも…。」
『所詮、言葉はまやかしです。…マスターは、忘れてはいませんか？あの者が、あのプレイヤーの仲間だということを。』
じわり、と紫陽花の言葉が茜奈の中にしみこんでいく。
『あの者は言葉巧みにマスターを混乱させて、時間稼ぎをしているのです。…あのプレイヤーが、ここを見つけるまでの時間を。』
「そんな…。」
そんなわけない、と咄嗟に思いはするけれど、すぐ後にはそうなのかもしれないと茜奈は考え始めていた。
『この世界では、生き残った者が勝者なのです。相手を騙しても、殺しても。その事実は勝者しか知ることは許されない。例えどんなに相手が聖者のように見えても、その内には悪魔が潜んでいるのです。』
「……。」
『最初に言ったはずです。マスターの疑問に答えられるのは、私だけ。』
茜奈が樹山中学校で紫陽花と出会った時。
彼は、唐突にそう告げたのだ。
誰にも話したことのない茜奈の悩みを、彼は知っていたのだ。
『マスターが私をレベル１０に導いてくれるならば、私はあなたに答えを教えましょう。…ですから、このような者の言葉に耳を傾ける必要はありません。』
だからこそ、茜奈はこの戦いに賭けてみる気になれたのだ。

「…そう、だよね。私は、答えを知らなければいけないんだ。」
『さあ、まずは目の前にいる少女からです。』
途端に明るい声で、紫陽花はそう告げた。
『彼女を殺し、次にあのプレイヤーを殺しましょう。そうすれば、あなたに並ぶものはいなくなる…！！』
「…殺す…。でも…。」
呟いて、茜奈は苦悶の表情を浮かべる。
『安心してください。あなたは目を瞑っているだけで良い。あなたが嫌がることは、全て、私が代わりましょう。…さあ、私に身をゆだねてください。マスター。』
茜奈を包んでいた闇が、突然輝きを増した。
果てもないように見えた景色が、一気に茜奈へと迫ってくる。
「あ、あああ…。」
同時に、茜奈は頭の中に何かが流れ込んでくるような感覚を受けた。
視界が何度もフラッシュする。
脳裏に、様々な情景が溢れた。
「あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」
そうして、茜奈の意識は途絶えた。

＊＊＊

「あああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

突如、茜奈が咆哮を上げた。
直後、黒い風のような何かが、茜奈から発せられる。

「黒織さん！！黒織さん！！！！！」

突然の豹変に、咲は声を張り上げる。
しかし、咲の言葉は届かない。

（何が起こったの！？）

風の一部が、咲の腕に触れた。
鋭い痛み。
見れば、腕の一部が裂けていた。

これは、まるで牙の魔法だ。
牙が崩れ、まるで風のようになっているのだろう。
ともかく、このままでは咲の声はいつまでたっても茜奈には届かない。

「こうなったら…っ！！」

銃の照準を、茜奈の右肩に合わせる。

もう片方の魔導器も止めてしまえば、元に戻るかもしれない。
だが。
『させませんよ。』
響いてきた声とともに、漆黒の牙が踊った。
「…っ！？」
真下から現れた牙に、咲は魔導銃を弾かれてしまう。
『あなたはマスターに殺される。そのためだけの存在なんです。…
全く、せっかくいい具合に育ってきていたというのに…。』
聞こえてくる声は、茜奈の魔導器、紫陽花の声。
虚ろな茜奈に、聞こえてくる紫陽花の声。
それが、示すのは――。
「まさか、あなたが…！！」
咲の言葉を遮るように、再び黒い風がはしる。
咄嗟に腕を身体の前で交差させる。
けれど、風は咲を逸れ、すぐ横の床を切り裂いた。
「……っ！？」
『…ちっ、まだ同調がうまくいきませんか。』
僅か一瞬の出来事。
だというのに、床は深々と抉れ、コンクリートが露出している。

「……！！！！」

それだけで、理解できる。
相手は、咲を殺す気だ。

『まあ、いいでしょう。さあ、あのプレイヤーが来るまでに。さっさと終わらせてしまいましょうか…！！』

そう、紫陽花が呟いた、その直後。
轟音が響いたとともに、２人の視界は、同時に遮られた。

「え？」
『なっ…！？』

視界を遮るそれは、教室のドア。
斜めに切り裂かれたそれが、２人の間、黒板に突き刺さっていたのだ。

「みーつけた。」

そして、響いてくる声。
その声の主が誰なのか、その場にいる全員が理解したその時。
緑の光が駆け抜けた。

第五十二話

薄暗い教室に、緑の光が満ちていた。

「白埼君…！！」

「悪い、遅くなった。」

穏やかな声で、洸はそう呟いた。

「無事か、茶織？」

『大丈夫ですか、咲。』

「あ、うん。ありがとう、助けに来てくれて。」

呆けたまま、咲は呟いた。

まだ、心臓は荒い鼓動を続けている。

洸が咲の方を振り向いた。

「あ…！！」

咲は、慌てて近くに落ちていた魔導銃を拾う。

何とか洸にばれないように、と急いだ咲であったが、

「お前、それ…！？」

洸の視線ははっきりと銃に固定されていた。

「なんでそんなもの…。」

「あの、これは――。」
咲が何かを言いかけた直後、２者を隔てていたドアの破片が、吹きとんだ。
「――！！」
刀を掲げて、洸はやってくる弾丸を防いだ。
『おのれ…！！』
甲高い男の声が響いてくる。
脳の奥にまで響いてくるようなそれは、明らかに魔導器の声。
視界には、爛れたように揺らめく黒い光。
洸は、その光に包まれた人物を見た。
「あれがあの魔法のプレイヤー！？」
動かなければならない刹那を、洸は驚愕に費やした。
（あの制服、樹山中だよな）
洸もまた、茜奈が自分よりも年下の少女であることに気が付く。
そんな人物が、たった今まで自分を殺そうとしていた罠を張っていたのだと、そう考えると洸は寒気を覚えた。
（相変わらず、とんでもないご趣味だことで…！！）
『死ね…！！』

声とともに、振りあげられた腕。
菫の言葉が届くよりも早く、洸の身体は動いていた。
「行くぞ！！」
「――ひゃっ！？」
反転。
右手に咲を抱え相手に背を向け、洸は前方へと飛びだした。
途端に、背後から轟音が響く。
黒い牙が洸たちのいた場所を貫いたのだろう。
相変わらずに容赦がないが、流石に洸ももう慣れたもの。
『マスター！！』
「おう！！」
障害物の机を飛び越え、洸は一気に壁へと迫る。
壁にとりつき、洸は茜奈の方を見た。
「……。」
虚ろな瞳がそこにはあった。
人のものとはとても思えない、光の宿っていない瞳を洸は見つめた。
「……。」
見つめて、それだけ。
「――！！」

一瞬の静止もすることはなく、洸は左腕を振り抜いた。
途端に風が巻き起こる。
床から掬いあがるようにして巻き起こった豪風は、洸の眼前、2者の間にあった机を椅子をすべて残らず吹き飛ばした。

『な…っ！！』

壁のような突風とともに、木と金属の塊が茜奈へと押し寄せる。
魔法などとはとても言えない、無機質な弾丸。
だがその矛先が向かうのは生身の人間。
そして恐らくは探知を視界に頼っている彼らにとって、浮き上がる木々は洸たちを隠す絶好の楯となった。

『この！！』

茜奈の身体が腕を振るった。
牙が空を走り、迫りくる弾丸を片端から打ち砕いていく。
だが、彼らが操る牙はたった一本。
弾丸の全てを撃ち落とすには足らない。

茜奈の視界は、黒い影に染まった。

『しまっ…！？』

響く轟音。
土煙と机で、教室は埋め尽くされた。

「…すごい。」

空中。
洸に抱えられたままの咲が呟いた。

これがプレイヤー同士の戦い。
これが、洸の戦い。
間近で、否、抱えられて体感したその戦いは、咲の想像を絶するものであった。

まさに一瞬。
揺すられていて正直訳が解らなかった咲でも理解できる。
たった一瞬での命のやり取りの、その恐ろしさを。

「逃げるぞ！！」
「え！？」

途端に、視界が回った。
ぐいと体が引っ張られる感覚を覚えたかと思うと、直後、咲は空にいた。

「――へ？」

廊下の窓を抜けて飛び出したのだろう。
ようやく定まった視界の下には、懐かしい母校の校庭が見えた。

（…校庭？）

そのことに咲が気づいた直後。
全身を、圧力と浮遊感が襲った。

「えええええええええええええ！？」

咲は今落ちている。
咲が捕えられていたのは、最上階の４階にあった予備の教室。
つまり今、咲は４階の高さから一気に落ちているということだ。

（高いところ苦手って、言ったのにー！！！！）

そんな咲の心の叫びも知らずに、洸はただ前を見つめていた。

早く、早く行かなければ。
今洸はあのプレイヤーと戦うわけにはいかない。
今戦えば、必ず咲を狙われてしまうから。

人質であった咲を救うことはできた。
あのまま教室で戦っていたならば、咲は殺されていただろうから。

洸が真っ先にすべきこと、それは、

（茶織を逃がす…！！）

それだけ。
あのプレイヤーを倒すのは、それからだ。

洸が目指すのは、新たな拠点となる場所。
相手が埋もれている間に、咲を隠そうと考えていた。

だが、洸の眼前、校門の方から黒い光が瞬いた。

「――――！！」

咄嗟に刀を振るう洸。
牙と刀がぶつかり、互いに左右へと弾かれた。

「もう追いつかれたか…！！」

悪態をつく洸だが、その表情には余裕が見られた。
既に身体はぼろぼろ。
体中にばら撒かれた裂傷は酷く痛み、腫れてしまって動きは鈍る。
対する相手は傷一つ負っていない状態で洸を待ち構えていたはずだ。

状況を見れば、洸の不利は明らかだろう。
だが、洸はそうは思ってはいなかった。
否、思っていたという程のはっきりとした自覚はない。

ただ、洸は今までよりも思考がクリアになるのを感じていた。
陽との、あの化け物ともいえる男との数回の戦いを経て、洸は戦いと言うものに慣れてきている。
魔法と言う超常現象を用いた命のやり取りに対する経験を、洸は積み始めているのだ。

だからこそ、洸は相手の動きや魔力の流れを冷静に見ることができた。
相手がどんな習性をもち、洸のどこを狙っているのか。
それを見極めることができれば、戦いはより楽なものに変わることを、洸は知った。

先程の２階での戦いでも、それは通用した。
３体の空と牙。
絶妙なコンビネーションを持ったｌｖ．２空にどこまでも追いかけてくる牙による、洸を囲う檻のような罠にも、しっかりと抜け道は

存在した。
まず、あの牙。
あれはプレイヤーが遠隔で操っているのではなく、一番近くにある魔力を持つ者を自動追尾するものらしかった。
近くにいた空を襲わなかったのは、恐らくその中に牙が埋め込まれていたためだろう。
洸が見た限り、牙は牙同士が衝突しないように回避する機能があり、空にそれを埋め込むことで空を標的にしないように応用したのだ。
故に牙も空も、一番近くにいた洸に襲いかかってきたのだ。

それが分かってしまえば、後は単純。
近くにいる者を襲うなら、洸が離れればいいだけ。
そう考えて、洸は空も牙も纏めて学校の外へと吹き飛ばした。

学校のある西地区には、空はいなかった。
恐らくは牙が外の空に反応しないよう、あらかじめ排除していたのだろう。
だが、樹山中学校は川を境に中央地区に接している。
そちらの方へと吹き飛ばせば、牙たちが何かに反応する可能性は十分にあった。

そして、洸のその見込みは成功であった。
牙は洸を追ってくることはなく、洸は安心して咲を探すことに専念することができた。
そんな時に聞こえてきた、茜奈が壁を破壊する音を追って洸は咲の下に辿り着いたのだが。

『マスター、左！！』
「――くっ！！」

洸がその場所を離れると同時に、校門の方から黒い光が駆け抜ける。
２本の、黒い牙。
もう戻ってきたらしい。
だが、それにしては動きがおかしい。
牙は洸を追撃することなく、空中に停滞し続けていた。

『そこまでです。』

同時に、声が響いてくる。

（まさか！？）

いくらなんでも早すぎる、と洸は驚愕する。
先程まで机に埋まっていた筈の茜奈が、４階からここに来れるはずもない。
そう思い振り返った洸の前には、しかし茜奈がいた。

『まさか、飛ぶことがあなたの専売特許だとは思っていませんよね？』

彼女は、空中にいた。
否、正確には、空中に浮かぶ牙の上に立っていた。

「…いやいや、まさか。」

呆けつつも、洸はそう応えた。

しかし、と洸の視線は茜奈へと注がれる。

相変わらず、彼女の顔に生気はない。

（…どういうことだ？）

先程対峙した時から、洸はその異変に気がついてはいた。
魔導器ばかりが喋り、マスターである彼女は口を開かないどころか虚ろな表情だ。

ただの暗い人物と考えるのは楽であるが、どうも腑に落ちない。
いくらこの場所に絶望していたとしても、命のやり取りをしている今でさえ何の変化がないのは奇妙に思えた。

「…あの、白埼君。」
「ん、どうした？」

不意に、咲が口を開いた。

「助けてもらった私が言うのは、我儘かもしれないんだけど…。」
「…何だ？」
「お願い。あの子を、茜奈ちゃんを助けてあげて…！！」

＊＊＊

「…なるほどね。」

（魔導器がプレイヤーを洗脳…？それって、つまり――）

洸の視線が、菫に流れる。

『……。』

菫は、先ほどから黙ったままだ。
沈黙は、果たして肯定か否定か。

（…いや、今はそんなこと気にしている場合じゃない、か）

咲の話が本当ならば、一刻も早く茜奈を助けなければ危ないかもしれない。
だが、洸はまず咲を逃がすことを考えなければならない。
それが洸の役割だから。
しかし。

「私は、大丈夫だから。…お願い。」
「ここにいたら、死ぬかもしれないんだぞ？」
「…大丈夫。私には、これがあるから。」

そう言って、咲は銃を構えた。

洸には、咲がなぜそんなものを持っているのか分からないし、その能力もまだ知らない。
だが、咲がそうしろと望むのならば、無碍に断ることもできなかった。

（…本当なら、問答無用で連れていった方がいいんだろうな）

余裕があるとはいえ、咲を守りながらあの牙と戦いぬく自身は洸にはなかった。
人質としての価値が薄れた今、相手は咲を問答無用に殺してくるか

もしれないのだ。

（…でも、これでいい！！）

洸の視界は、相手の２対の魔導器に固定される。
守るとか、逃げるとか。
そんな小難しいことをしているより、それはずっと楽だった。

（突っ込んで、ぶっ壊す！！！！）

刀を構え、風を纏い。
洸は茜奈の下へと駆け抜けた。

相手は空中。
未だ飛べない洸にとって、そこは洸の届かない領域。
だが、そこは風の領域でもある。

風の領域ならば、洸の独壇場だ。
洸はイメージとともに、腕を振り抜いた。

途端に、豪風が巻き起こる。

『……っち！！』

豪風に押され、茜奈の身体が弾かれる。
牙から落ちた茜奈は、地面へと落下していく。

だが牙が回転し、茜奈を掬いあげるようにして拾った。

『ははっ、その程度の風大したことはありませんよ。』

余裕のある声で、紫陽花が告げる。
直後、茜奈の腕が振るわれた。

掬いあげるようにして振るわれた牙扇から、新たな牙が放たれる。
既に洸を追っているものを含め、計3本の牙が洸へと襲いかかってきた。
脇腹を、頭を、足を狙ってくる牙を、洸は回転するように跳んでかわした。

『どうやらまだ空を飛ぶことはできないようですね。そんな調子では、我々を倒すことは不可能ですよ？』

続けて、牙が振るわれる。
その全てが、確実に息の根を止めるはずの一撃。
だが洸はその全てを回避した。

『左前方、跳んで下さい！！』
「了解！！」

菫の声による回避も、既に大分習得してきていた。

『やりますね…。ですが、それではいつまでも私を殺すことは出来ませんよ！！』

今のままでは勝てない。
それは、洸も痛いほどよくわかっていた。
だからこそ、洸は待っていた。

必勝のときが訪れる、そのときを。

だが、先に勝利の機会を得たのは、茜奈たちであった。

『私を殺したいなら、あの風を放ってみたらどうですか？あの、炎のプレイヤーを切り裂いた風を！！』

「――！！」

紫陽花の言葉に、洸の脳裏に陽を切り裂いた時の景色がフラッシュバックする。

紫陽花は、茜奈とともに洸たちの戦いを見ていたのだ。

そのときの洸の反応から、彼が人を殺めることを嫌っていることは充分に理解できただろう。

自身のトラウマとも呼べる箇所を突かれ、洸の体は硬直する。

それは、ほんの僅かな静止であっただろう。

だが、相手はそれを見逃さなかった。

（今…！！）

そうして、紫陽花は牙を洸へとけしかける。

『マスター！！』

「白埼君！？」

牙は洸を深々と抉り取った。

＊＊＊

『マスター！！マスター！！！！！』

樹山中学校の校庭に、菫の叫び声が響き渡る。
既に光を失いつつある魔導器の横には、赤にまみれた人影が一つ。
それは、先ほどまで白埼洸であった肉の塊。

「そんな…。」

目の前の光景に、咲はただ呟くことしか出来なかった。
黒い、牙のような魔法。
まるで意思を持っているかのようなそれが、今、洸の体を、

（体を…）

その続きを紡ぐ前に、咲は膝を折った。

『…ははっ、勝った…！！僕は、勝ったんだ…！！』

脳裏に、甲高い声が響いてくる。
紫陽花の声だ。
けれど、そこに先ほどまでの余裕はない。

『そうだ、出来るんだ…！！こんなシステムに頼らなくても、僕だけで！！！！！』

（…どうしよう。私の、所為だ）

自分が、彼女を助けてと言わなければこうはならなかっただろう。

洸が死ぬこともなかったはずだ。

（でも、だからって…）

だからといって、どうすればよかったのか。
そんなことはわかる筈もない。

だから、せめて決着は自分の手で。
そう思い、咲は銃を手に立ち上がった。
せめて、茜奈だけは救ってみせる、と。

『はははははっ…、っと、そういえば、あなたのことを忘れていましたね。』

楽しげな紫陽花の声とともに、咲の前に黒い牙が浮かび止る。

「…っ。」

その決して鋭くはない切っ先に、しかし咲は気圧される。
何か威圧感のようなものを、咲は感じていた。
出来るなら、今すぐにでも逃げ出してしまたい。
泣き叫んで、命乞いをしてしまたい。

それは、はっきりとした死の形として咲の前に漂っていた。

（白埼君は、こんなものと、ずっと…）

震える腕で、咲はしかし銃を構える。
腕か肩に2発。
それで、咲は勝てる。

だが、引き金を引けば自分も殺されるかもしれない。
その恐怖が、咲を動けなくさせていた。
『…どうしました？速く撃てばいいではないですか。…先ほどマスターを撃った様に。』
今対峙しているのは、茜奈ではなく、先ほど咲を殺そうとした紫陽花なのだ。
おそらく、咲を殺すことに何の躊躇も持たないだろう。
（…怖い…怖い！！！！）
それでも、自分は茜奈を救いたい。
そんな刹那の欲求が、咲を突き動かした。
『こないのなら…さっさと死ね！！！！』
「うあああああああああああああああああああああ！！！！！！」
紫陽花の言葉とともに、牙が蠢き、咲は引き金に手をかけた。
乾いた音が、響いた。
「……え？」
呟きが、咲の耳に響いた。
（あれ、私、生きて…）

そう呟く咲は、懐かしい匂いを感じた。

「…おい、そこのお前。」

そうして、声が聞こえてくる。
それは、先ほどまで聞きなれていた筈の、声。

弾かれたように、咲は声の方を見た。
そこには、赤に染まったままで、洸が立っていた。

「白埼君…？」
『マスター！！』
「ああ…。」

ゆらり、と洸の身体がぐらつく。
生きてはいるらしいが、死の間際にいるのは間違いない。

『な、何故…。何故生きている！！』
「それは、こっちの台詞だよ。…なあ、お前。」

刀を地面に突き刺し身体を支えると、洸は茜奈を見た。

「なんで、殺さない？」

だが、血だらけの体でそう呟く洸に、咲はこれまでとは違う異質な何かを感じ取っていた。

第五十三話

たった今、洸は牙に身体を抉られ、倒れた。
少し離れていた咲から見ても、洸の身体が欠けていたのが分かった程に。

誰がどう見たって、それは致命傷だ。
生きている筈がない、傷ではなく死因になる筈のもの。

けれど、洸は今立っている。
全身に血を浴びて、なぜ生きているのかもわからないほどの傷を負いながら、それでも洸は生きて、咲の目の前に立っていた。

『何故だ…、何故、生きている！？』

叫ぶ紫陽花の声が響き渡った。

『確かに、牙はお前を…。』

今の事態を信じられないのは、彼も同じだろう。
洸を殺そうと牙を振るったのは、彼なのだから。

『避けられるはずがない…！！そんなもの…！！』

人間業じゃない。
彼は、そういいたかったのだろう。

「ああ、そうだろうな。」
微かな声で、洸が呟く。
確かに、こんな芸当洸にできるはずもない。
「俺は避けていない。…お前が外したんだ。」
『馬鹿な、そんなこと――』
「てめえじゃねえよ。」
紫陽花の言葉を、洸は遮った。
彼の視線は黒く光る紫陽花ではなく、それを持つ茜奈に注がれた。
虚ろな瞳で空に浮かぶ彼女に。
「なんで、俺を殺さない？」
洸の言葉に、ぴくりと茜奈の身体が跳ねる。
紫陽花が操ったのとは異なる、ただの反射。
だが、だからこそそこには茜奈の本音があるような気がした。
「今の攻撃、確実に俺を殺せただろう。…何故、殺さない？」
呟くとともに、洸は一歩、彼女に近づく。
途端に、彼女の身体が跳ねた。
『何だ、これは…？』
（…やっぱり、完全に意識がなくなったわけじゃなさそうだ）
咲の話だと、茜奈は魔導器紫陽花によって洗脳を受けている。
だが、彼女は先ほどから腕を振るしかせず、その瞳は虚ろだ。

洸の目から、それは洗脳ではなくただ操られているだけに思えた。
その証拠として、彼女は洸に『恐怖』した。
（…死ぬのが怖い、か）
咲から聞いた、茜奈の思い。
もしそれが洸の想像通りならば、彼女の目には洸は死として映っているだろう。
洸にとっての、あのときの陽の様に。
「怖いか？殺すのが。」
「……。」
赤黒い血にまみれ、体は欠けて肉が見えている。
そんな姿で迫ってくる人間が怖いはずがない。
『くそっ、何だこれは…！？』
「怖いか？死ぬのが。」
「……！！」
だからこそ、洸は見ることができるのだ。
茜奈が洗脳されているのか、否かを。
『戯言を！！！！』
洸の口を閉じようと放たれた牙を、しかし洸はかわす。
否、外れたと言った方がいいのかもしれない。
先程から、牙は洸の致命傷を狙うことがなくなった。

それは、殺したくないという茜奈の意思。
例え操られていたとしても魔法を発動させるのは茜奈のイメージ。
茜奈が殺したくないと願えば、それは魔法に現れる。

茜奈はやはり完全に操られてはいない。
そのことが、洸をさらに突き動かした。

『くそっ、あの体のどこから…。』
「てめえに用はねえんだよ！！」
「ぐっ！？」

刃の風を、洸は紫陽花へと放つ。

「俺が用があるのは、お前だ！！黒織茜奈！！！！」

叫び、洸は茜奈を睨む。

「お前は死にたくないんだろう！？ならなんで操られてる！！そんなもん、死んでるのと何一つ変わらない！！！！」
『何を…！！』
「生きたいんなら、死にたくないんなら――。」

大きく息を吸い込み、洸は吼えた。

「その証を見せてみろ、黒織茜奈！！！！」
『黙れ！！！！』

直後、洸の視界を黒が覆った。
先程よりも速く、強く牙が叩きこまれる。

それでも洸は避け続けた。
否、よけられ続けた。

先程よりもずっと、牙の間に『隙間』が生まれていたから。
それでも、猛攻であることには変わりない。
身体はとうに限界を超えている。
躊躇している余裕などなかった。

だが、それでも洸は茜奈を待つ。
操られている時に紫陽花を破壊してしまえば、茜奈にも影響が及ぶかもしれないからだ。
しかし、それ以上に洸は、茜奈の答えが聞きたかった。

こんな馬鹿げた世界で自分の疑問の答えを探そうとした、茜奈の意思を見てみたかった。

そして、それに応えるように。

「……たい。」

茜奈の口がかすかに動いた。

『…何？』
「…いき、たい…。」

まだその目は虚ろなまま。
だが、その頬には2筋の涙が、確かに流れていた。

「わたしは、生きたい…！！」

かすかな声。
それでも、涙を流しながら呟く茜奈の声は、洸にはっきりと届いた。
これでやることは決まった。
後は、決着をつけるだけ。
「…そうか。」
呟いて、
「なら、話が早い。」
洸は嗤った。
＊＊＊
視界はぼやけ、赤に染まっている。
既に痛みは限界を超え、まるで夢の中にでもいる気分であった。
だが、意識ははっきりとしている。
まだ、刀を握れる力がある。
それだけで、今の洸には充分であった。
「…行くぞ。」
洸の思考に、菫が輝く。
『はい、マスター！！』

直後、洸が飛び出した。

『……！！！！』

反射的に振られた腕に合わせて、後ろから3本の牙が追いすがる。
易々と洸へと追いついた牙は、一切の躊躇なく再び洸を蹂躙しようと襲いかかった。

菫の魔法は風だ。
風は洸の体を押し、どこまでも運ぶ。
例えその体が動かなくなったとしても、風さえあれば、洸は永久に戦い続けることが出来るのだ。
それこそ、死ぬまで。

幸い、痛みはとうに限界を超えている。
ストッパーのなくなった今、洸は痛みも死も恐れずに身体を振るうことができた。

上、下、前、横。
ありとあらゆる方向から牙は襲いかかり、すぐに反転を繰り返す。
決して止まることのない牙の連撃は、まるで漆黒の檻のようであった。

洸を包み込んだその檻は、彼を食い殺さんと、その牙を煌かす。
だが、洸はその全てをことごとく回避した。

『何故その身体で動ける！？何故！！』
「うるせえよ…！！」

呟きとともに、洸の腕が弾けるように振られた。
豪風ともいうべきその漆黒の刃が、牙に衝突し、その軌道を僅かにずらす。
本来の軌道を外された牙たちは、術者である紫陽花の意図からも外れ、檻に大きな隙間を生み出した。

そしてそれは、洸と茜奈を一直線に結ぶ道の上にあった。

洸の視線が、紫陽花を捉える。
血だらけ、傷だらけの顔が、嗤った。

「…あああああああああああ！！！！！」

檻を閉じようと、紫陽花は茜奈の腕を振るった。
だが、牙が閉じるよりも早く、洸はそこから飛び出した。

一瞬の後には、洸は茜奈の前にいた。

『な…っ。』
「足んねえよ、こんなんじゃ…！！」

躊躇なく振られた刀。
巻き起こった風が、茜奈を包み込む。

風に押されて、茜奈の身体が再び牙から落下した。

『何度やっても同じだ！！』

離れた茜奈を、牙が回収しようと動く。

「おせえよ！！！！」

しかし、それより速く、洸が腕を振り下ろした。
放たれた風が、茜奈を、洸を地面へと叩き落す。
同時に放たれた風が、茜奈の左腕から魔導器を弾き飛ばした。

『ぐ…っ！！』

叩きつけられた衝撃の中、それでも紫陽花は残った魔導器で牙を放った。

ようやく追いついた3本に、茜奈が乗っていた1本を足して、４本の牙が洸へと放たれる。
けれど、最早それらは何もかも遅かった。

「これで――」

ありったけの魔力を風に変え、収束するように刀に纏う。
濃密な緑の輝きが、洸の視界を覆った。

その柄を腰に押し当て、刃を突き出すと、

「終わりだ！！！！！」

叫びとともに、洸は飛び出した。
突き抜けるその先は、弾かれた漆黒の魔導器。

未だに鈍く輝くその黒をめがけて、洸は全身全霊を込めて、駆け抜けた。

一直線に突き抜けた緑が、黒に触れようとする直前。
核を守ろうと結界が発動する。
宙に浮かびあがった半透明の膜。
それは緑の侵攻を押し止めるように、広がり、地面まで抉ることで空中にとどまった。

『…こんな、こんな…！！！！』

だが、そんなものは関係ない。
押し返そうとする結界の力に、洸は自身を押す風の出力を上げた。

『こんなことがあってたまるか！！こんなことが！！！！』

押される力が増し、牙扇が僅かに浮き上がる。
途端に地面から離れた結界ごと、洸は向うにあった校舎へと激突した。

「…っ、あああ――」

剣に纏わりついた緑の光が、放射するように洸の背後へと流れていく。
それは鋭い鉾となり、推進力ともなった。

『認めない…！！私は絶対、認めないからな！！！！！白埼洸おおおおおおおおお！！！！』

解け、洸の背後へと流れた緑の光。
それは、まるで光で編まれた翼のように、洸の背で広がった。

「あああああああああああああああああああああ！！！！！」
『がああああああああああああああああああああああああ！！！！！』
咆哮とともに、洸は柄に添えていた腕を突き出した。
全身全霊を込めた、最後の一撃。
それは確かな感触を持って、黒い核を、貫いた。

途端に、弾けた結界。
抑止力を失った洸は、そのまま校舎を突き抜けて奥の壁へと衝突した。

直後、そこにいた全ての者の視界を爆発した黒の光が覆った。

それは、魔導器の消滅による光の爆発。
つまり、洸たちの勝利を告げる光であった。

こうして、白埼洸はｓｅｖｅｎｔｈが始まって3日目にして初めて、プレイヤーに勝利した。
誰一人殺すことなく、洸が貫いたやり方によって。

（良かった…これで、あの子も…）

ただ、洸の視界はすでに何も捉えることはなかった。

『マスター！！しっかりしてください、マスター！！！』

（これは、流石にやばいかも…）

そう思った瞬間に、洸の意識は静かに途絶えていった。

第五十四話

真っ白に磨き上げられた廊下を、忙しく人々が行き来している。
追いかけてくる時間と積み上がった仕事に追われて、彼らは忙しなく今を過ぎていく。

そんな彼らの視界を、並ぶ部屋のドアが横切る。
ある者はその一つに立ち止まり、その中に消えていく。
開かれたものも、閉じられたものも。
皆大抵が見るだけで何の部屋だったかが頭をよぎる。

その中の一室。
皆通るたびにああ、と存在を思い出すけれど、通り過ぎればまたすぐに忘れてしまうようなそんな場所。
誰もその部屋が何に使われているのかを知らないのに、何故だかそこに存在している、そんな部屋。

その中に、東田楓(ひがしだ かえで)はいた。

部屋の中は真っ暗で、電灯の一つも付いていない。
ただ部屋中に並べられたモニタの薄暗い光だけが、楓にとっての明かりであった。

別に、明りをつけるなと言われているわけではない。
むしろ、色々なことを考えれば点けるべきなのは楓自身が良く分かっている。
だが今は明りを点ける気にはなれなかったのだ。

この『仕事』を言い付けられてから、一週間以上が経った。
人員はたったの2人。
一日の半分を自分が、もう半分を相方が担当している。

ただ、楓は相方が誰なのかを知らない。
知る必要はないと言われている。
仕事の経過は全てデータとして表示されているから引き継ぎの必要もなく、まあ確かに会って話したいとも思えない。

相方が来る少し前に、彼女は部屋を後にする。
そして彼女が部屋に入ると、そこには誰もいない。
ただ自分の時から少し進んだ仕事が残されているだけだ。

半日この部屋で仕事をこなして、後半日は家で眠る。
まあ、少し労働時間が多いかもしれないが、その辺りは普通の仕事と大して変りない。

普通でないというのなら、その仕事内容だろう。
仕事の概要を説明するならば、監視と言うのが正確だろうか。
部屋の奥に設置された、壁程の広さがあるモニター。
部屋の光源の大半を占めているであろうそのモニターの向こう側を、楓は監視しているのだ。

モニターに表示されているのは、真黒な画像に幾重もの緑の線が描かれたもの。
幾何学的なそれらは、一見すると地図のように見える。
それも、とても見慣れたものに。

その地図の上には、いくつもの明滅する点が表示されている。

それらは時折ゆっくりと、時折とてつもない速度で、地図の上を滑る。
楓の仕事は、その点のうちの一つを監視し、その行動を逐一記録するというもの。

逐一と言っても記録するのは大きな動きがあった時だけ。
楓の担当は午後から明け方まで。
大体は、監視対象となる点に大きな動きはない。

そう、まるで、眠っているとでもいうように。

元来、彼女は我慢強い方だ。
地味な事務作業にも不満なく取り組めてきたし、口も堅い方だと自負している。
能力も他に劣っているとは思っていなかった。
実際、そのおかげもあって今の仕事を任されている。

だが、これは何なんだろう。

表示されているこの地図の場所を、彼女は知っている。
何故ならその場所は、彼女が生まれてからずっと住んでいる場所にそっくりなのだから。

だが、彼女はこんな場所を知らない。
こんな速度で、建物の上を移動する何かを彼女は知らない。
２つの点が交差した後、周囲の建造物が残らず破壊されるような現象なんて、知らないのだ。

家に帰る前に、ふと思い立って地図の示す場所に行ってみたことがある。

そこはいつもの町並みが広がっていて、多くの人々が往来している。
やはり、彼女の住む町に変化はない。
だが、それならばこの地図の示す場所は一体どこなのだろう。
地図の中を行き来し、夜になれば建物の中で眠る、この点は何を示すのだろう。

（私は、一体…）

考えようとした、その時。
ドアの開かれる音がした。

「…っ。」

弾かれるように背筋を伸ばして、彼女は開いたドアを振り返る。
開かれたからドアから、一人の男が入ってきた。

「や、東田君。お疲れさん。」
「お疲れ様です。」

静かな口調で言葉を返す。
ぐだぐだと息巻いていた思考を一瞬で切り捨て、彼女は仕事の思考へと切り替える。

「って暗いなー。目、悪くするよ？」

彼は部屋の暗さに驚きつつも、背後の壁に背を預けた。

「慣れていますので問題ありません。…お嫌でしたらつけますが。」
「ああ、いいよ。このままの方が雰囲気でそうだし。」

「わかりました。」

雰囲気とはどういうことだろう。
そうは思いつつも、楓はモニターへと視線を移す。

この呑気な表情で入ってきた男が、この仕事の依頼主だ。
男の名前を、彼女は知らない。
ただ自分の上司に紹介され、仕事を依頼されただけの間柄だ。

それでもこの仕事をしている間は彼は彼女の上司であるし、見ただけでも少なくとも自分の上司よりも肩書きが上なことはすぐにわかった。

「…それで、どう？経過は。」
「はい。」

手元にあったキーボードで、楓はモニターを操作する。
途端にこれまで映っていた地図が消え、代わりに別の映像に切り替わる。

そこには数名の人間の写真といくつかの情報が表され、その内一人の人物の写真だけが大きく表示されている。
高校生くらいだろう。
まだ幼さの残った顔立ちがそこにはあった。
さらにその横には彼女たちが逐一記録していた『向こう』での出来事が記されている。

「ふーん…。」

男はじっと画面を見つめている。

そこに先程までの軽薄さはない。
ずっと黙っていればいいのにと思うが、ああいう手合いにはもう何も言っても通じないのも知っていた。

「へえ！！彼ようやく1つ目倒したのか。」

表示の一つを見て、彼は手を叩いて喜んだ。
その表示は先程楓自身が打ち込んだものだ。

つい先程、彼女の監視している『点』が対峙していた黒い点を消したのだ。

「いやー、随分時間かかったね。」
「はい。」

そうか、ようやくか、と彼は嬉しそうに呟いている。
そうだ。
何故だか彼は、点が点を消すことをひどく喜ぶのだ。

「これで2人目かー、うん、今回も順調だね。…あ、彼今何してる？」
「現在は戦闘から30分ほど経過していますが、まだ移動する気配は見られません。」
「あれ、そうなの？」

もう一度画面を操作して、今度は別の画面を表示させる。
先程の地図の一部を拡大させたもの。
そこにはターゲットを示す点滅する緑の点と、そのすぐそばに白の点が表示されていた。
身を乗り出して、彼は画面を見つめた。

しばらくすると、彼は大きく手を打った。
「ああ、もしかしてお楽しみの最中かな？」
「は？」
思わず、反応してしまう。
何を言っているんだ、この男は。
「だってさ、考えてもみなよ。思春期真っ盛りの高校生男子！！そんな少年の前に女子高生と女子中学生！！しかも周りどころか町中に人がいないんだよ？なら、することは一つだ。」
「…そう言うものなのでしょうか。」
「そう言うものなの。ましてや今は戦闘の直後。興奮と高揚でおかしくなってるはずだ。多少の理性なんて、吹きとんでるよ。」
何で映像出せないかな、と男は悔しそうに呟いている。
その光景を、楓はぼんやりと眺めていた。
この光景の方が、よっぽどファンタジーではないか。
「…まあ、いいや。ともかくこれでまた状況は進んだ。」
飽きたように呟くと、男は壁から背を離した。
「これから、多分忙しくなるよ。東田ちゃんも、これから頑張ってよ？」
「…はい。」
男の足音がドアのほうへと向かう。
そちらに振り向きもせず、楓は再び画面を見上げた。

「…東田ちゃん。」
「はい？」
突然の言葉に答えようとしたその時。
彼の腕が、肩に回される。
顔が、すぐ横にあった。
「何も考えちゃ駄目。」
耳元で、彼は囁いた。
「君は、とても頭がいい。だから、余計なことを考えようとしちゃうんだ。…でも、考えちゃ駄目。」
その言葉は、するりと頭の奥に響いていく。
「ここは、この町じゃないどこか。この点は、人じゃない何か。それでいいんだ。」
「…はい。」
「俺は君なら大丈夫だと思って君を選んだんだ。その期待、裏切っちゃ駄目だよ？」
「…はい。」
「それでいい。」
楓が頷くのを見て、男は離れた。
「じゃあ、俺は会議があるから。また何かあったら連絡するように。いいね？」
「…はい、わかりました。」

そう言って、男は今度こそ部屋を後にした。
後に残ったのは、楓と機械の低い駆動音だけ。
一人残った彼女は、モニターを見上げる。

緑の線で描かれたどこかの地図。
見慣れたはずのその線の塊には、いくつかの光る点が蠢いている。
その数は、始めの頃より減っていて。
消えるときは、必ず他の点がそばにいる。

拡大された画面の中で、２つの光る点が漂っていた。
確かに、その２つの点は寄り添うようにしたまま、先ほどから動く気配がない。

この点が何を意味しているのか、彼女は知らない。
この場所がどこを示しているのか、彼女はわからない。

そうだ、それでいい。
先ほど表示されていた画像は、もう彼女の中にはない。

何だろう、これは。
呟くように楓は口を動かした。

『だってさ、考えてもみなよ。思春期真っ盛りの高校生男子！！そんな少年の前に女子高生と女子中学生！！しかも周りどころか町中に人がいないんだよ？なら――』
「……！！！！」

押し寄せてくる思考に、彼女は両掌を額に押し当てた。

考えるな。
考えてはいけない。

自分が今、何に加担しているのか。
この先では何が行われているのか。

関係ない。
自分は、何の関係もないのだ。

ただ、自分は仕事をこなせばいい。
そうすれば、こんなことに二度と関わらなくていいほどの大金が手に入る。
あと少し、そう、あと少し――。

掌の底で、眼球を強く押す。
抉るような痛みで、楓は思考を無理やり押しつぶした。

さあ、思考を切り替えよう。
交代まで後もう少し。
そうすれば、家に帰って眠ることが出来る。
眠ってしまえば、全てを忘れられる。
だから、早く――。

そう、自分の中で結論付けようとした時。
手元にあった小さなモニターに、変化が起きた。

「……？」

はじめてみる変化に、楓は首をかしげる。
仕事のために用意されていたこのコンピュータには、必要最低限の

ソフトウェアしか入っていなかったはずだ。
否、そもそも彼女がこれまで日常で使ってきたものとはまるで違うものだったはずだ。
だというのに、そのコンピュータはメールの着信を告げていた。

こんな機能があったのか、と驚きつつも、彼女はふと疑問を持つ。
わざわざこんな場所に居る自分に、誰がメールなどを寄越すのだろうか。

可能性として考えられるのは先ほどの男か、あるいは同じこの部屋で仕事をしている相方か。
だが、考えてみればどちらもおかしい。
男ならば先ほど直接言えばよかっただろうし、相方ならばメモでも残せば済む話だ。
この部屋には一切の私物を持ち込むことは禁じられているし、監視もされているという話だ。
難しいだろうが、メールを送るよりは発見されるリスクは少ないのではないだろうか。

ならば、一体誰が。

本来ならば、男に報告をするべきなのだろう。
だが今は、好奇心が勝っていた。
何よりこのありえない状況に、楓は高揚していた。

高揚で、理性は吹き飛ぶ。
確かに男の言うとおりであった。

震える手で、彼女はそのメールを開いた。
途端にメールの内容が表示される。

メールソフトの起動もない。
不思議だとは思えたが、今の彼女にそれを気にするだけの余裕はなかった。
「ｆｒｏｍ…九十九（つくも）？」
画面には九十九と名乗る人物からのメールが表示されていた。
件名は無く、短い本文が記されているだけ。
「私は、真実を知っている…？」
そこには、短くこう書かれていた。
――現実から目を背けているあなたへ。
私は、あなたが見ようとしない真実を知っている。
あなたがしようとしていることの全てを私は知っている。
たとえ他の誰も黙っていたとしても、私は全てを見ているの。
ねえ、人を見殺して貰うお金は嬉しい？
人の人生を奪って得た時間は楽しい？
もしあなたにほんの僅かでも気に病む心があるのなら、返事を頂戴。
私が、あなたに償いをあげる。
九十九より。
「…何よ、これ。」

全てを読み終えて、楓は呟いた。
何なんだ、このメールは。

よく見れば、本文の下のほうには小さく返信とだけ書かれたボタンが置かれていた。
応じるならば、これを押せということなのだろう。

（馬鹿にしているの…？）

何が知っているだ。
何が見ているだ。
もしそうならば、こいつだって同じではないか。

こいつだってあの少年たちを――。

（…ああ、ああそうだよ！！私はあの子達を見殺しにしているよ！！）

心の中で、楓は叫んだ。
だって、どうしようもないじゃないか。
相手は上司の紹介してきた男だ。
断ったら、最悪首にされていた。

それに、自分はもう知ってしまったのだ。
今更、途中でやめることは不可能なのだ。

この先で何が行われているのかもわかっている。
この先の場所が何を示しているのかも知っている。

だが、だからなんだというのだ。

ただ送られてくる結果を纏めているだけの自分に、何か出来るはずも――。

『私が、あなたに償いをあげる。』

「……。」

（ああ、そういうこと）

だから、償いをしろということなのか。

黙っていてやるから、手を貸せと。

何だ、こいつも男と変わらないではないか。

自分の弱みに付け込んで、利用することしか考えていない。

（…けど、嫌いじゃない）

どうせ利用されるなら、自分にとって都合のいいほうがいいに決まっている。

こうなったら、楓も意地だ。

金も貰って、償いとやらもやってやる。

どうせ、もうこの仕事をするしかないのだ。

やれるだけ、やってやろうじゃないか。

自分は、ただの道具ではない。

そう呟くように口を動かして。

楓は返信を押した。

第五十五話

「ほら、右に逃げたわよ。」
「あ、う、うん！！」

茜奈の声に、咲は慌てて照準を合わせる。
蜃気楼のように揺らいだ視界。
スライドさせた銃口が白い影を捉えた。

「今！！」
「――っ！！」

耳元に響く声に合わせて、咲は引き金を引く。
途端に響く破裂音に眼前の白い影が弾けた。

微かにも残らなかった閃光が空の肩部を吹き飛ばす。
突然の衝撃に弾かれた空が、奥の塀へと倒れ込む。

（次…！！）

銃撃の衝撃を全身で受けながら、咲は間髪を入れずに次弾を放った。
２発、３発と続けて放たれた魔力の弾丸が、空の右足を、後ろの塀を貫き、そして頭部を粉砕させた。
響かぬ断末魔を上げて、空は消滅していった。

「よし、完了。」

「…はあ。」
空が完全に消滅したのを確認して、咲は大きく息をついた。
そんな咲を見て、茜奈が呆れたように呟いた。
「…何疲れた顔してるのよ。まだ3体目じゃない。」
「うう、だって…。」
ぶつぶつと呟きながら、咲はあたりを見渡した。
まだ辺りに空が残っているかもしれないというのに、この少女はどうしてこんなに余裕でいられるのだろう。
茜奈は現われた白核を鞄につめ、咲の下へと戻ってきた。
「大丈夫よ。この近くに他の空はいない。それに、居ても私達には気付かないわよ。言ったでしょ？私のこの魔法は触りでもしない限り空には気付かれないの。」
「それはそうなんだろうけど…。」
そう言って、再び周囲を確認しだす咲。
そんな彼女を見て、茜奈は呆れつつも微かにほほ笑んでいた。
ほんの2時間ほど前、この2人は互いに武器を向け合って睨み合っていたというのに、今は穏やかな空気に包まれている。
「さ、早く終わらせちゃいましょう。…洸も待ってるんだから。」
「…そうだよね。うん、頑張らないと。」
小さく拳を握る咲に、茜奈は手に持った牙扇を輝かせた。
現れた黒い膜が2人をさらに包み込む。
途端に、2人は周囲の景色から消え去った。

何故2人がともに行動しているのか。
何故茜奈は魔法を使うことができるのか。
その理由は、今から1時間ほど前まで遡る。

＊＊＊

洸が紫陽花の片割れを破壊し、黒い光が爆発するように溢れだしたのを咲ははっきりと捉えていた。
洸が勝ったのだ。
咲にとってはほとんど一瞬の出来事であっても、何とかそれだけは理解することができた。

（やったんだ…！！）

見れば、茜奈が倒れていた。
気を失ったのだろう。
それは、しかし茜奈が解放されたことを示していた。

茜奈を殺さずに、魔導器だけを破壊する。
それは間違いなく洸の目指していた勝利に違いなかった。

咲は立ち上がると茜奈の下へと駆け寄った。
いくら解放されたと言っても何か後遺症が起きるかもしれない。

だが倒れた茜奈の表情は柔らかで、可愛らしい寝顔がそこにはあった。
良かった、大丈夫そうだ。

安心して一息ついた咲。
そこに、菫の声が響いてきた。

『マスター！！しっかりしてください、マスター！！！』
「え？」

驚いて、咲は声のした方を見る。
そこには瓦礫にまみれて倒れている洸の姿があった。

「白埼君！！」

慌てて立ち上がると咲は洸の下へと駆けよった。
だがその足はすぐに止まることになる。

「……！！」

『それ』は、もう生きているとは思えない程にひどく損傷していた。
血はすでに赤黒く変色し、肌は青白い。
人と呼んでいいのか躊躇う程にその身体は変質してしまっていた。

（何、これ…）

異様な光景に、咲は硬直する。

これが、先ほどまで自分と一緒にいた人間なのか？
これでは、ただの人形のようではないか。
人の死体なんて咲は見たことがない。
否、そもそも手のひら大を超える生物の死骸を見た記憶が咲の中にはなかった。

だが、それでもそれは異様に思えた。

『……咲…？』

「へ！？」

微かに聞こえてきた声に、咲はようやく我に帰った。

「菫ちゃん？どこ？」

『…ここ、です、咲。』

か細い声は、所々を途切れさせながらも何とか咲の耳に届いた。
声をたどり、咲は瓦礫に埋もれていた魔導器菫を見つける。
埃にまみれた刀は、弱々しく光を放っている。
まるで、今すぐにでも消えてしまいそうな程に。

「大丈夫！？」

『わた、しは平気、です。そ――より、マス――を。』

「う、うん…！！」

ノイズ混じりの菫の声。
明らかに異常だ。
けれど、今は洸の方が遙かに危険な状態にあるのは咲でも理解ができた。

まずは洸の治療。
菫を何とかするのはそれからだ。

「あ、でも治癒球が…。」

これほどの怪我を治すには、それしかない。

だが、洸にはもう治癒球は残っていないのだ。
『そ――なら大丈夫、す。あたら――治癒――――。』
「…菫ちゃん？」
（あたら…？新しい？）
途切れ途切れの彼女の言葉を、頭の中で再構成させる。
新しい治癒球。
それを彼女は手に入れたのだろうか。
『お願――す、さ――――。』
「菫ちゃん！？菫ちゃん！！」
それきり、菫が言葉を発することはなくなった。
輝いていた筈の核は光を失くし、ただの刀となってしまった。
「…どうしよう。」
茜奈の魔導器・紫陽花を破壊して、菫が新しい治癒球を手に入れた。
もしそうならば洸の治療を行えるかもしれない。
だが、今まで洸の治療は全て菫が行っていた。
咲はただ菫が治療を終えるまでただ彼女を手にしているだけでよかったのだ。
今現在、彼女は停止している。
そんな状態で、洸の治療は出来るのだろうか。
（…ううん、やるしかないよね）

意を決して立ち上がると、咲は菫を掴み洸の下へと駆け寄った。
緑の核を洸に近づけ祈るように目を閉じる。

（お願い…！！）

必死の思いで、咲は心の中で叫んだ。
そこに、きっと自分の生還という願いは込められてはいなかった。
ただ純粋に、洸の命を願った咲の想い。

しかし、それは何も起こしはしなかった。

「嘘…。」

青い光は発せられず、洸の身にも何も起こらない。

（どうしよう…。このままじゃ白埼君が…）

何か手はないか。
辺りを見回した咲が、倒れた茜奈を捉えた。
その手には、壊されていないもう片方の牙扇があった。

（そうだ、もしかしたら…）

慌てて立ち上がると、咲は茜奈の下へと駆けた。
未だ、彼女は穏やかな表情で眠り続けている。

「黒織さん！！ねえ、お願い起きて！！」

肩に手をかけ、揺するようにして叫ぶ。
しかし、反応はない。

それでも、咲は諦めずに叫び続けた。

「茜奈ちゃん！！！！」

「……？」

ふと、茜奈の顔に僅かな反応が見られた。

「…あい…？」

口元がかすかに動き、何かを言っている。

どうやら夢を見ているらしい。

だが反応があるならば起きる可能性もある。

「…！！茜奈ちゃん！！」

思い切り、今度は彼女の耳元で咲は叫んだ。

「……っ！？」

次の瞬間、彼女は飛び起きた。

突然の耳鳴りに驚いたのか、耳をふさいで周囲を見回している。

その目が、咲を捉えた。

「あ…。」

途端に、彼女の表情が曇る。

それは失望か困惑か。

どちらにせよ目覚めて嬉しかった訳ではなさそうだ。

「よかった、身体大丈夫？」
「え？あ、う、うん。多分…。」
だが今の咲にそんなことを気にしている余裕はない。
「お願い、来て！！」
「え？ちょ、ちょっと！？」
困惑する茜奈を無視して、咲は彼女を洸の下へと引っ張っていった。
まだ彼女の手には魔導器がある。
もしそこに治癒球があるのなら、あるいは…。
その可能性に賭け、咲は駆けた。

＊＊＊

「…何、これ…。」
洸のその姿を見て、茜奈は固まった。
無理もない。
暗くて見えにくくはあるが、彼の身体は今肉が剥き出しになっている状態なのだ。
並の人間なら固まって当然なのだ。
だが、彼女の場合は少し異なっていた。
「これ、私が…？」
紫陽花に操られている間の記憶は、茜奈にも僅かに残っている。

自らが洸を切り裂いた記憶も茜奈の中には確かにあった。
だがそれは、彼女にとって夢の中の出来事でしかなかった。
けれど、目の前では今洸が倒れている。
その姿は夢の中の自分がしたものと寸分たがわず彼女の前にあった。

（どうしよう、私、この人を…！！）

途端に、何かが体の奥から溢れそうになる。
それは茜奈の身体中を引き絞るようなおぞましい感覚であった。

「茜奈ちゃん！！」
「！！！！」

突然の先の声に、茜奈は飛び上る。
驚いて彼女の方を見ると、まっすぐに自らの目を見つめてくる彼女と目があった。

「お願い、協力して！！」
「え…？」
「あなたなら、白埼君を救えるの！！」
「……？」

そうして、茜奈は自分が操られていたことを知る。
そして、それを洸が救いだしてくれたことも。
やはり彼が死にかけているのは自分のせいなのだと、茜奈は思い知らされた。

「…そう。話はわかったわ。」

自分が咲を攫おうとしなければ。
自分が紫陽花の言葉に騙されなければ。
溢れ出てくる『もしも』に、すべて自分が元凶なのだと思い知らされる。

「……。」

それでも、生きていられたことが嬉しかった。
今ここに自分がいることが認識できて震えていた。

「治癒球なら、ある。」
「本当！？」

だから、茜奈は告げた。

「一階の職員室。そこが私の拠点の中心部よ。…そこの一番奥の金庫に入れてあるわ。番号は――。」
「わかった。じゃあ私取ってくるね！！！！」
「……。」

治癒球を取りに、咲は職員室へと駆けていった。
その後ろ姿をぼんやりと見つめた後、茜奈は視線を洸へと移した。

血だらけの身体。
息をしているのかいないのか、身体はぴくりとも動いてはいない。

「…ねえ、あなたは死ぬの？」

ふと、茜奈は呟いた。

「あいつを守るんじゃなかったの？なのに私なんかに構って、そんな怪我を負って。…ねえ、あなたは満足？」

身体の震えは、声にまで浸透していた。
けれど、その震えは喜びではきっとない。

「…残念だけど、私にはもう治癒球は残ってない。だから、あなたを救えない。」

茜奈が咲に教えたことは嘘。
本当はそこには何もない。
否、無くなってしまった。

1つは、初めて会った空に殺されかけた時に使った。
1つは、紫陽花の魔法の暴発で死にかけた時に使った。
残りの2つは魔導器の中にあって、1つは壊されもう1つもきっと動かない。

だから、茜奈にももう洸を直す手段はなかった。

けれど、それを咲に告げることはできなかった。
自分なら救ってくれる。
彼女の目はそう信じ切っていたのだから。

彼女を向かわせたのは、時間を稼ぐため。
ここから茜奈がいなくなるための時間を。

「…あなたが、悪いんだからね？あの時さっさと逃げないから。私になんてかまうから。…だから死ぬことになったんだからね？」

今頃彼女は必死になって治癒球を探しているだろう。
その姿を想像するだけでももう茜奈は耐えきれなかった。

「私の所為じゃ、ないんだからね？…私の、せいじゃ…」

ふと、茜奈の声に嗚咽が混じる。
震えはいつの間にか足にまで回っていて。
茜奈は膝をついた。

「…ごめんなさい。」

震えた声で、茜奈は呟く。

「ごめんなさい、ごめんなさい…ごめんなさい…っ！！ごめんなさい！！！！！」

泣き、喚き、茜奈のは洸の体に触れた。
熱はすでに失われ始め、茜奈の触れた場所はすでに彼女の手よりも遙かに冷たくなっていた。

「私じゃ、あなたを助けられない！！私じゃ、もうあの人を守れないの！！…あなたじゃなきゃ、守れないのよ…！！」

自分では、何もできない。
ならば逃げるしかないではないか。
この先どうなるかなんてわからない。
それでも、今彼女の表情を見るよりかは、ずっとましな筈だから。

「…ごめんなさい、茶織咲。」

最期にそう呟いて、茜奈は洸を背にして立ちあがった。

（…ごめん、亜依）

最期にもう2度と会えないであろう親友の名を告げて、茜奈は走りだそうとした。

――その時。

「――無様ですね。あなたは、そこで野垂れ死にするつもりですか。」

「…え？」

突然の見知らぬ声に、茜奈は驚き振り返る。

だが、そこには誰もいはしなかった。

（今のは…？）

気のせいなのだろうか。

だがそれにしては鮮明に聞こえた気が――。

「茜奈ちゃん！！！！」

「！！？」

茜奈の横側、おそらく職員室が面しているであろう場所の窓が突然開き咲が顔を出した。

変な声に気を取られている隙に茜奈は逃げるタイミングを失ってしまった。

（しまった…）

やってくるであろう失望の言葉に備え、茜奈は身体をギュッと縮込ませた。
しかし。

「あったよ、治癒球。」
「え…？」

（嘘、そんなはずは…）

だが、咲の手には確かに見慣れた球体が握られている。

「これ、使って！！」

咲は窓から思い切り身を乗り出すと、治癒球を持った手を突き出した。
差し出された腕を見て、茜奈は戸惑う。
自分に、そんな資格などないはずなのに。

「私が…？」
「今から戻ってたら間に合わないもん。…だから、お願い。」

そう告げる咲は、茜奈の目を見つめていた。

「……。」

もしかしたら、咲は茜奈の叫びを聞いていたのかもしれない。
ならば、異常にも気が付いている筈だ。
茜奈が逃げ出そうとしていたことも知っている。

それでも、彼女は茜奈に治癒球を託そうとしている。
それがとても嬉しかった。

「…うん！！」

ほほ笑み、頷くと茜奈は治癒球を受け取った。
そしてそのすぐ後。
洸を包む青い光が広がった。

第五十六話

洸たちの新しい拠点。
２階建の一軒家であるその拠点の一室に洸はいた。

「…よっと。」

掛け声とともに、洸は手に持っていたベッドを引っ張った。
斜めに傾けていたベッドが何とかドアを通り抜け、ドスンと音が響く。

そのまま洸はベッドを引っ張ると、元々置いてあった物の横にくっつける様にして配置した。

「これで良し、と。」

軽く手をはたいて、洸は並べたベッドに腰かけた。

途端に、静寂が辺りを包む。
普段洸たちが使う静寂という言葉とはまるで違う、無音の世界。
この耳を突くような静寂にも大分慣れてきていた。

思えば、洸たちのいた場所は随分音に溢れていた。
人の声。
車の通る音。
時計が刻む音。
大量の機械の駆動音。

普段過ごしていると気がつかない静寂の音。
けれど、こうして何の音もしない世界に来てみるとよくわかった。
自分の歩く音や、呼吸音でさえもここでは大きな音になる。
ましてやベッドの移動など、ここでは見つけてくれと言っているような行動に違いない。
拠点が光だけでなく音も遮断してくれなければ、自殺行為に等しいだろう。

（…本当に遮断してるんだよな？）

何度目かの不安を覚えながら、洸は窓の外を見る。
部屋は暗く、星明かりと消えかかった街灯の光が部屋に差し込むだけ。
そこに、いつも彼の周囲で輝いていた緑の光はなかった。

洸が目覚めてここに移動してから1時間。
まだ菫が目覚める気配はない。

魔導器が目覚めるというのも、不思議な感覚ではあるのだが。
それでも、何故だか拠点の形成は行うことができた。
魔導器としての機能は菫が起きていようがいまいが関係ないのかもしれない。

そう思い、洸は試しに魔法を使おうとしてみたのだが魔法を使うことはできなかった。
やはり魔法は菫が目覚めない限りは使えないらしい。

つまり、菫が目覚めない限り洸は無力。

今も咲たちが白核集めに出ているというのに、洸ができるのはせめて茜奈用の寝床を拵えるくらい。
我ながら情けないと思いつつも、洸は諦めてはいなかった。
まだ自分にもできることはある。
否、やらなければならない。
そう思って。

「さてと、そろそろかな。」

そろそろ2人が帰ってくる時間だろう。
彼女たちが戻ってくる前にもう一つやっておかなければならないことが残っていた。

急がなければ。
そう思い立ち上がろうとした洸であったが。

「……！？」

洸の意志とは裏腹に、足は全く動こうとはしなかった。
空回りした腕と上半身だけが身体を浮かし、支えをなくした洸はそのままベッドへと倒れこんだ。

（また、か）

茜奈の戦いの後に目覚めてから、洸の身体はずっとこの調子であった。
身体に上手く力が入らず、時折満足に動かすことができなくなるのだ。
それは下半身の時もあったし、上半身の時もあった。
特に酷いのが腹部から腰にかけてで、本当に自分の体なのかが時折

わからなくなるほどであった。
それに加えて、酷い倦怠感。
陽との戦闘の後にも似たような症状があったが、今回のものは以前よりも激しいものであった。
まあ確かにあれほどの戦いをした後なのだ。
身体が悲鳴を上げていてもおかしくはない。
治癒球は負傷を直しても疲れを取ってはくれないのかもしれない。
大きく息をつくと、洸はもう一度立ち上がった。
今度は足に力が通り、洸は立ち上がることができた。

「…よし。」

何とか2人が戻ってくる前に終わらせることができた。
残った時間はもう一つの目的に費やそう。

そう思い、洸は一階へと向かった。

新しい拠点の構造は、一階は入口から右手に階段、左手に和室があり、その合間を通る廊下の奥に団らん用の居間とキッチンがつながっている。
二階には子供たち用の部屋が2つに、恐らくは夫婦用であろう寝室が配置されている。

夫婦用の寝室であった場所は魔法陣が敷かれていて、そこにあったであろうものは全て奇麗になくなっていた。
残ったベッドは2つ。
となれば、洸の寝床は必然的に一階になる。

幸い和室は祖父母用だったのだろう。
布団がいくつか残っていたので、寝床には困らなそうであった。

一階へ降りた洸は、その和室へと向かった。
そこには生活の跡が残る雑多なものと一緒に大きな段ボールが置かれていた。
咲が纏め、洸が運んだ大量の荷物は、今はここに置かれている。
洸がここを拠点にすると決めた時に、入口に近かったこの部屋に放置したままだったのだ。

その荷物たちの前に、洸は立った。

「まずはこれからかな…。」

洸のするべきこと。
それは、アーティファクトの捜索であった。

付加装備（アーティファクト）。
菫がその存在を隠し、咲にひっそりと携帯させていたもの。
茜奈も当然のようにその存在を知っていた。

咲曰く、彼女たちが洸にそれを黙っていた理由は『洸ならば止めるであろうから』だそうだ。
自衛のためとはいえ、咲が戦える手段を持つことを反対すると思ってのことだろう。
確かに、あの状態の咲であったら飛び出しかねない。

だが、菫の真意はきっとそうではない。
自分の知っていることを全て話すと言ってくれた彼女は、またも嘘

をついたことになる。
彼女は洸に隠れて、何かを行おうとしている。
咲に武器を持たせ、それを洸に隠す。
もしかしたら、彼女は咲を殺すつもりなのかも知れない。
洸が決して咲を殺すことはないだろうと判断した彼女が、今度は別の手段で咲を殺そうとした？

（…いや、あり得ない）

ならば、なぜ菫はああも必死になって咲を助けようとしたのだ。
まさかあれが演技だったとも思えない。
だとすれば、何故――。

（…って、違う違う）

泥沼に陥りかけた思考を何とか引き揚げた。
今はうじうじと悩んでいる時ではない。
洸のすべきこと、それは戦力となるアーティファクトを手に入れることだ。
咲と茜奈から聞いた話によると、アーティファクトはｓｅｖｅｎｔｈの至る場所に隠されているらしい。
菫が目覚めるまで、洸たちはこの世界で生き延びなければならない。
そのためには咲たちにいつまでも頼っているわけにはいかないのだ。
咲の持つ魔導銃を使うという手もある。
だが、それでは咲の自衛の手段がなくなってしまう。

できるならば新しいアーティファクトを見つけてしまいたかった。
それに、どんなアーティファクトであれ見つければ新たな戦力になる。
どうせ今は何もできないのだ。
時間を持て余すよりは余程ましだろう。

まずは、この和室から。
そしてこの家になければ隣の家、そのまた隣の家と捜索範囲を広げていくつもりであった。

とはいってもアーティファクトがどのようにして置かれているのかなんて洸は知らない。
探すとなれば手当たりしだいになるだろう。
そうなれば騒がしくなり、咲や茜奈に気づかれてしまう。
ばれたところで如何なる訳でもなかったが、何となく恥ずかしいのだ。
できるなら、2人がいない今のうちに捜索を終わらせてしまいたかった。

（…とりあえず、そこら辺をひっくり返してみるか）

こうなったら手当たりしだいだ。
怪しい所を片端から探してみよう。
そう思い洸は部屋の中を見渡した。

「…ん？」

その目が、ふと居間に置かれたテレビに移った。

２階建の一軒家に住んでいたであろうここの住人。
置かれた家具やら小物やらから見て、割と裕福だと言える家庭だったのだろう。
だが、そこに置かれたテレビは箱型の随分古いものであった。
少なくとも、こんな家に住む家庭が通常持っているものとは思えなかった。

（…何だ？）

何だろうか。
何かが洸の中で引っかかっていた。
それが何なのかを考えようとして、洸の足はテレビの方へと近づいていった。

その時、扉の開く音が鳴った。

「…！！」

咄嗟に、洸は物陰に隠れる。
息を殺して、じっと入口に通じる廊下を見つめた。

（…茶織たちか？）

この拠点は入り組んだ住宅地の奥の奥。
似たような物ばかりの住宅群の一つを選んだのだ。
誰かが偶然入ってくるとも思い難い。
だが、もしもという場合もあり得る。

確かめられるまでは動けない。
洸は、じっと息を殺した。

「ただいまー。」

だが直ぐに聞こえてきた咲の声に、洸は警戒を解いた。
流石に移動したばかりの拠点の位置がばれているということはないだろう。
茜奈のようなタイプの魔導器が他にいないならば、であるが。

「おかえり。」

玄関へと向かって、洸は2人を出迎えた。
しかしそこに2人の姿はない。

「あ、白埼君。起きてて大丈夫なの？」
「ああ。おかげさまで。」

誰もいないはずなのに声が聞こえてくる。
しかし洸は驚かず、虚空を見つめた。

次の瞬間、何もないはずの場所から突然2人が現れた。
洸の目の前に、咲と片側だけになった牙扇を手にした茜奈が立っていた。

「…本当に見えなくなるんだな。」

分かっていても未だに不思議な光景だ。

「？何言ってるの？洸だって実際に見たじゃない。」

「いや、そうなんだけど。」
変なの、と呟く茜奈。
その表情も、大分落ち着いてきていた。
２人は疲れたのか、玄関の段差に腰かけた。
どうやら、戦いの後遺症はないらしい。
茜奈の場合、戦いのというよりかは洗脳の後遺症といった方がいいのかもしれないが。
「プレイヤーとの遭遇は？」
「ないと思う。少なくとも私たちは気付かなかった。」
「そうか。」
茜奈への洗脳は、彼女を操っていた魔導器紫陽花を破壊することで消えた。
２個で１対の魔導器である牙扇のうち、洸たちは片方しか破壊しなかった。
それでもその中に眠っていた意志である紫陽花は消滅し、彼女への洗脳も解除された。
魔導器のＡＩである紫陽花が消えた以上、残ったもう片方の魔導器はただの扇子になってしまったのかと思ったのだが、何故だかこちらは魔法の行使が可能であった。
これには洸も茜奈も首を傾げるばかりであったのだが、まあ使えるならばそれでいいかと２人とも無理やり納得した。
元より、理解の範疇を超えているのだ。

だが、紫陽花の本来の能力である『牙』は使えなくなってしまった。
紫陽花が２個１対である理由。
それは、片方で闇を『圧縮』させ、もう片方から射出するためであったらしい。
本来闇属性が持たない物理的破壊力を、通常ではありえない程濃密に圧縮させ牙として成形することで持たせることに成功していたそうだ。

そのため現在は圧縮はできるが射出ができなくなってしまっている。
まあ限界まで圧縮しなければ魔法自体は使えるらしく、姿を隠したり咲や空を包んでいた繭のような魔法は使用可能なのだそうだが。
何故壊れた紫陽花に魔法が使えて、菫が使えないのかはわからないが、それも菫が目覚めるまでは原因不明だ。
これも菫が正直に話せばの話ではあるのだが。

「…菫ちゃんは？」

咲の問いに、洸は首を横にふる。

「…そう。」

呟くと咲は俯いた。

「どうして目覚めないんだろうね。こんなこと、なかったのに。」
「なかったって、まだｓｅｖｅｎｔｈが始まって２日目よ？それに、私たちはこいつら魔導器のことなんて何も知らない。」
「……。」

茜奈の言葉は、確かにその通りだろう。

菫の不可解な行動に、紫陽花による茜奈の洗脳。
それらの行動は武器としての、サポート役としての行動の範疇を超えてしまっている。

「ねえ、こいつらって何なの？」
「……。」

それは、出会った時から洸の中にずっとあった言葉。

「そんなもの、わからん。」

その答えは洸が知りたい程。

「何って…魔導器って武器じゃないの？」

首を傾げた咲が呟く。

「でも、喋るのよ？」
「機械だからじゃなくて？」
「…自由に考えて、自由に喋る機械なんてあるわけないでしょ。」
「そうなの？」
「そうなの！！」

のんびりとした咲に茜奈がいらついた声で答える。
だが、本当に怒っているわけではなさそうだ。

（…良かった。気があったみたいだな）

攫われた相手を助けろと咲が言った時はどうなるかと思ったのだが、助けて良かった。

「いくら魔法とか言われても、信じられないわよ。」
ため息とともに、茜奈が言う。
彼女の場合危うく殺されかけたのだから尚更だろう。
ふと、その顔が突然あげられた。
「というよりも、魔法よ！！魔法！！」
苛立たしげに彼女は叫んだ。
「どうしたの、茜奈ちゃん？」
「そもそもなんで魔法なんてものがあるのよ！！ありえないでしょう！？」
「え、でもさっき使ったじゃない。」
「それは、そうなんだけど…。」

（…魔法ね）

もしかしたら、天香たちは魔法についても知っていたのだろうか。
彼女は神隠しの正体――ｓｅｖｅｎｔｈについても何か知っているようであったから。

（帰ったら調べてみるかな…）

「ともかく、白核も集めてきたことだしご飯にしよう？」
「…だな。」
「…そうね。」

咲にうまく纏められ、２人は言われるがままに二階へと上がっていった。

＊＊＊

新しい拠点の中心となる魔法陣。
そこで飲食料を揃え、３人は先程洸が作業していた部屋へと向かった。

「…それで、これからどうするの？」

白核が変化したパンを頬張りながら、茜奈が言った。

「どうするって？」
「これからの行動のこと。私の魔導器も何とか使えるし、洸の魔導器も拠点が作れるならまだ壊れてはいないんでしょう？」
「…ああ。」

実際のところ、どうなのかはわからない。
菫がどうして眠っているのか。
起きる可能性はあるのか。
だが。

「…菫が動かない今、外に出るわけにもいかない。」

魔導器を使えない洸が外に出たところで、空にさえ勝てる見込みはないだろう。
菫がいなければ、洸がここにいる目的は全て失いかねないのだから。

「少し、待ってみようと思う。菫が起きるかもしれない。」
だが、それでもできることはある。
アーティファクト探しはその一つ。
そして、もう一つ。
「…で、お前はどうするんだ？」
「え？」
洸の言葉に、茜奈が顔を上げた。
「これからも俺たちと一緒にいるのか？」
「…どういうこと？」
茜奈をこれからどうするのか。
それを、はっきりさせねばならなかった。
「まだ動くんだろう、その魔導器。」
「それは…。」
不安に、茜奈の顔が歪む。
それでも、洸は言葉を続ける。
「今の俺達と一緒にいたって、お前にいいことは何もない。茶織も俺も、今のお前にとってはただの足手まといにしかならない。」
「……。」
「それでも、俺たちと一緒にいるのか？」
もしもまだ紫陽花に魔導器としての機能が備わっているのなら彼女

はまだプレイヤー。
彼女にまだ戦う意思があるのなら、その邪魔を洸たちがするわけにはいかない。
今の茜奈ならばもう暴走することもないだろうし、魔導器ももっと上手く扱えるはずだ。

ｌｖ１０になって元の世界に帰る権利はプレイヤーの誰にでもあるのだ。
もし彼女が洸たちに対する償いとして一緒にいるだけであったなら彼女とはここで別れた方がいい。
下手な同情は、互いを殺すことになる。

「…白埼君。」

咲が洸を見る。
縋るような目。
今の彼女に、洸はどう映っているのだろうか。

（…そんな目で見るなよ）

これでは洸が悪者みたいではないか。
大きく息をつくと、洸は顔を上げた。

彼女は震えたまま動こうとはしない。
それは怯えなのだろうか。

（仕方ない、か）

俯く茜奈を見て、洸は口を開く。

「…今の俺には茶織を守れないし、白核を手にすることもできない。
できれば居てくれると助かるんだが。」
「…え？」

驚いた茜奈が顔を上げる。
洸が何を言っているのかを理解するのに、数瞬。
その表情に、笑顔が浮かんだ。

「白埼君…！！」

その横にいる咲も、笑顔で洸を見た。
2人の視線に洸は顔を逸らした。

「いいの？」
「…言ったろ、必要なんだ。」

今の洸たちに、茜奈の視界から隠れる魔法は必要なのだ。
できれば仲間になって欲しいというのは洸の本音であった。
それに、彼女と咲ならばきっといい友達になれるだろうから。

「…ありがとう。」
「…ああ。」

2人の視線がこそばゆくて、洸は視線を逸らし立ち上がった。
逃げるように、洸はドアへと向かう。

「疲れただろ、2人とももう寝ろ。」
「うん、お休み。」
「…お休み。」

２人の声を受けて、洸はドアを閉めた。

「…はあ。」

溜めこんでいた息を吐き出した。
これなら戦っていた方がずっと楽ではないのだろうか。

全く奇妙な事態になったものだ。
治癒球は結局増えず、増えたのは同行人が一人。
菫は眠り、今の洸は雑魚である空以下だ。

こんな事態になるとは、３日前の洸は考えもしなかっただろう。
それでも、洸に後悔はなかったのだが。
少しくらいのため息なら許されるだろう。

「アーティファクト、探すか。」

呟くと、洸は階下へと降りていった。

第五十七話

洸が用意してくれたベッドに咲と茜奈は並ぶように横になった。
しっかりと繋げられたベッドは、2人で眠るにはほんの少しだけ広くて、ほんの少し伸ばせば手が握れるほどに向き合って、2人は眠った。

「…ねえ茜奈ちゃん。」
「何？」

ふと、咲が呟いた。

「茜奈ちゃんて、どこに住んでたの？」
「…西地区の端っこ。樹山中の交差点を西に行ってまっすぐ行った所に私の家があるわ。」

もう、何でそんなことを、などと聞くのはやめることにした。
咲にそんなことを聞くだけ無駄なのだと、茜奈も理解し始めていた。

「そうなんだ。…ねえ、帰ったらいっしょに遊ばない？」
「え？」

驚いて、茜奈は閉じていた目を開く。
そこにはほほ笑んだ咲の表情があった。

「せっかくこうして会えたんだもん。これでお別れなんて、寂しいよ。」

「……。」

呆けた表情のまま、茜奈はその表情を見続けていた。

（…この人は、本当に…）

こんな世界にいながら、彼女は何ら変質していない。
先程２人で白核を探しに言っていた時に聞いた、咲のこれまでのこと。
まさか、咲が茜奈よりも早くこの世界に来ていたとは思ってもいなかった。
それも、洸に出会うまでずっと独りでｓｅｖｅｎｔｈを彷徨っていたなど、今の彼女から想像できるはずもない。

それはまるで学校の帰り道だ。
いつもの授業が終わって、２人連れ立って帰っている時。
そんな一瞬を切りぬいたような姿そのままに、彼女はここにいる。
茜奈のような暴走も、洸のような達観も彼女にはない。
神隠しにあう前も、そしてここから帰った後も、彼女は今の彼女のままであり続けるのだろう。

それが、彼女の強さなのだ。

「それに、あいちゃんにも会いたいしね。」
「な…！？」

突如咲の口から出た親友の名前に茜奈は飛び起きた。

「ちょっと、なんであの子のこと…！！」
「だって寝言で言ってたんだもん。」

「寝言…！？」

言って、茜奈は学校でのことを思い出す。

（あの時か…！！）

そう言えば自分が目覚めた時には傍に咲がいた。
何か聞かれたとするならばその時だろう。

「…はあ。」

変な人だ。本当に。
大きく息をつくと、茜奈は窓の向こうを見た。

「……。」

そう、変なのだ。
咲も洸も菫も。
ほんの少し前に茜奈がであったこの3人は、どれも不思議で仕方がなかった。

「…ねえ、咲？」
「どうしたの？」

まずは、咲。
こんな世界にいても何ら変質することのない不思議な精神の持ち主。

「洸って、戦いの後はいつもああなの？」
「？ああ、って？」

そして洸。

「えっと…だから戦いの後もいつもあんな風に元気なのかってこと。」

彼の異常は、その身体にあった。

「…うん、そうだね。大体あんな感じだと思うよ。それがどうしたの？」

「…ちょっと気になってね。何でもないわ。お休み。」

「うん。お休み。」

茜奈はこれまで2度死にそうな程の大けがの治療を治癒球を用いて行った。

丁度、今日の洸のように。

だが茜奈が初めて治療を行った時、彼女が満足に動けるようになるのには丸1日を費やした。

いくらか身体が慣れたであろう2回目も、半日の時間をかけて茜奈の身体は修復された。

その時の感覚は、まるで自分が鉄になってしまったようで。

引きずるようにして、茜奈はその長い時間を耐えていたというのに。

だというのに、洸は目覚めた直後から平然と活動している。

ありえない。

何度も繰り返し浮かび上がるその言葉を茜奈は飲み込んだ。

彼が異常なのか、自らが異常なのか。

その先を考えないために。

これが、洸の異常。

そして、最後。
菫の異常、それは――。

（…眠れない）

ギュッととじていた目を開き、茜奈は起き上がった。
考え事に熱中している間に目が覚めてしまったらしい。
こうなってしまったら、もうだめだ。
次に身体が睡眠を欲するようになるまで待つしかないだろう。

だが、隣の咲はすでに夢の中。
規則正しい寝息が聞こえてきた。

（…起こすわけにもいかないしね）

本当はこのまま寝転がっているのがいいのだろうが、構わず茜奈は立ち上がると部屋を出た。
頭の中にはいろいろなもやもやが渦巻いていて、このままでは次のチャンスに眠ることも難しいだろう。
まずは、このもやもやを何とかしなければならない。

少し身体を動かしながら考えようと、茜奈は空いた子供部屋へと向かおうとした。

「…ん？」

その時、階下から聞こえてきた物音が耳に入った。
下には洸が眠っているはずなのだが。

（まだ起きてるのかな）

そう言えば先程洸は自分が寝るとは言っていなかった。
ならば、下で何か準備でもしているのだろう。
起きているのならば、丁度いい。
茜奈は小さく息を吐くと、意を決して階段を降りていった。

＊＊＊

アーティファクト探しを始めてから小一時間。
とりあえずと洸の寝床となった和室の捜索から初めて見たのだが。

「…ないな。」

そこら中をひっくり返してみたのだが、それらしきものは見当たらなかった。
まあ、そんなに簡単に見つかるとは思っていない。
さっさと次の場所を探しに行こう。
そう思う洸であるのだが。

（これ、どうやって片付けようか…）

目の前には大量に散らかされた部屋の物の数々。
これを片づけないことには次の捜索に行くこともできない。

（いや、片づける必要はないのか？）

どうせ眠るだけの場所。

探し物がない場所をわざわざ片づける必要もないのだろうか。
だが、なんだか気持が悪い。
普段から家の片づけをしている洸からすれば、足場の殆どのないこの場所が堪らなかった。

「…うん、少しだけ片づけるか。」

ただそこまでしっかりと片づける必要もないだろう。
洸は物を纏めると、押し入れに押し込んだ。

「これでよし、と。」

「…何してるの？」
「――！？」

突然声をかけられ、洸は飛び上る。
驚いて振り向くと、茜奈の姿がそこにあった。

「ど、どうした？」
「少し話したいことがあってね。…今、平気？」

いつの間にか寝間着姿に着替えていた彼女は、制服姿の時よりも幼く見えた。

「ああ、大丈夫だ。」

首を傾げる洸に、茜奈はじっと床を見つめた。
その表情に違和感を覚えて、洸は問うた。

「…どうした？」

洸の問いに、茜奈は黙った。
数瞬、口にしようかしまいかと逡巡した後。
茜奈は口を開いた。

「魔導器について、聞きたいことがあるの。」

＊＊＊

「…で？どうしたんだ。」

部屋に茜奈を入れ、洸は改めてそう聞いた。
大量にあった荷物は全て押し入れに詰め込み、既に敷いてあった布団に茜奈を座らせた。
彼女は膝を抱えながら、窓の下の壁に背を預けていた。

「魔導器の話、だよな。」
「…うん。」

頷いて、茜奈は膝の間に顔を埋める。
先程の俯いた表情と言い、何か抱えているものがあるのだろう。
どんな質問が来てもいいように、洸は彼女に聞こえぬように深呼吸をした。

俯く茜奈。
その状態のまま、彼女は口を開いた。

「さっきの話なんだけど、洸は、魔導器についてどう思っているの

？」
「どう思う、か。」
呟いて、洸は天井を仰ぐ。
まあ、予想できた質問ではある。
先程の会話は咲に打ち切られてしまったから、まだすっきりしていないのだろう。
「洸はさっき、わからないって言ったわよね？」
「ああ。」
「それは本当？」
「……。」
姿とは違ってはっきりとした彼女の言葉が、洸に刺さる。
「…どういうことだ？」
それでも心を落ち着かせて、洸は呟く。
「本当は、わかっているんじゃないの？こいつらが何なのか。」
そう言って、茜奈は一つだけ残った牙扇を取り出した。
未だ鈍い光を放つそれを、茜奈は眺めた。
「私の牙扇は、私を操ってまで咲を…倒そうとして、レベルを上げようとした。」
一瞬口を噤んで、それでも茜奈は言葉を続ける。
「洸の堇だってそう。あなたに情報もほとんど話していない。…あ

なたがアーティファクトも知らないって聞いた時はびっくりしたのよ？」
「…そうだな。」
それが、茜奈が気づいた菫の異常。
本来、知っているだけで武器になる情報を、彼女はほとんど主人である洸に話してはいなかったのだ。
もし陽や茜奈がアーティファクトを持っていたならば、洸は間違いなく死んでいただろう。
まあ、陽は持っていても使ったかはわからないが。
「そして、今は異常もないのに停止している。」
洸たちは、菫のそれを眠るという。
だが茜奈は止まっているという。
「私ね、洸。」
ギュッと自分を掻き抱いて、茜奈は告げる。
「紫陽花と菫。バラバラに見えるけど、どっちもやろうとしてることは同じなんじゃないかって思うの。どっちも、自分で私たちをコントロールしようとしている。紫陽花は直接。洸の菫は情報を使って。」
「……。」
「こいつらって、本当にただの機械なの？」
それは、何度か洸も抱いた疑問。
もし菫が単なる機械なら、洸に情報を離さないという理由が理解できなかった。

多量の情報を話せば洸が混乱するから？
それは、そう『判断』できたからこその言葉。
菫は意志ある機械。
判断できるのは当然だし、実際に判断してきたからこそ咲を生かそうという言葉が生まれたのだから。
だが、紫陽花のそれは異なっていた。
「確かに、紫陽花の最期は、まるで絶望している風だった。」
機械であるはずの魔導器の咆哮。
直ぐ後に気絶したというのに、今でも耳に残っている。
あれは、意志などという言葉では説明のし切れない『感情』であった。
「ただの機械がそんな風に行動できると思う？」
「いや、思わない。」
そうだ。
確かに、自由に話せて思考する機械など存在しないし、将来作られるとも思えない。
ならば、なぜ菫たちは意志を持つ？
紫陽花のあれが感情ならば、菫も感情を持っているのか？
「私はね、こいつらの向こうに人がいるんじゃないかって思えるの。」
「…人が？」
ええ、と茜奈は頷いた。

「魔導器に眠る意志なんてものはなくて、ただモニターの向こうに人がいるだけ。そいつらは私たちを導いて、レベルを１０にまで上げようとしている。…きっと、自分が担当するプレイヤーがレベル１０にまで達したら何かご褒美でも貰えるのでしょうね。」

例えば洸たちに与えられた望む願いを叶える、というように。
魔法なんて簡単な言葉ではなく。

「ｓｅｖｅｎｔｈは異世界なんてものじゃなくて、ただの閉じ込められた街。だから夜空は動かないし、ここにあるものは何だって使える。」

洸たちは異世界にいると声は言った。
しかし、茜奈はそれを否という。

「戦いが始まった時に現れた光だってただのライトと変わらないし、拡声機があれば街中に響く声が出せる。…騙された私たちからすれば、全てが魔法に見える…どう？」

既に顔を上げていた茜奈は、抱えていた膝も崩して、洸に向かって両腕を広げた。
対する洸は、呆けたまま天井を見つめている。

「…いや、どうって言われてもな。」

殆ど吐き出すように、洸は何とかそう応えた。
茜奈の言葉に、洸の頭はぐちゃぐちゃに混乱していた。
それは、洸の中には何一つなかった考えで。
いきなり言われても、頭の中には残ってくれない。

「例えば、例えばだぞ？」
だから、何とか言葉を繋ごうとした。
「もしも黒織のその考えが正しいとしてだ。じゃあ、魔法はどうするんだ？」
「…問題は、そこなのよね。」
そう言って、咲は顎に手をあてる。
実際に洸たちが使い、その身に受けてきた魔法と呼ばれる超常現象。
例え信じられないような出来事でも、体験してしまえばそれが現実になってしまう。
「…立体映像とか？」
「それこそ技術がないだろう。それに、俺が負った怪我はどう説明するんだ。」
「うう…。」
洸の言葉に、茜奈は口を詰まらせる。
しばらく首を左右に振るった後、茜奈は息をついた。
「…そうね。やっぱり今の説明では無理があることは認めるわ。」
お手上げとでもいうように、彼女は両腕を上へと放った。
しかし、次の瞬間には真剣な目で洸を見た。
「でも、私としてはこっちの方がまだ信じられる。」
「……。」
「魔法だとか異世界だとか、私にはやっぱり信じられない。」

例え現実だったとしても、茜奈はそれを受け入れるつもりはないらしかった。
それは、一見すると駄々をこねる子供のようで。
しかしその意見を容認してしまう自分も、洸の中には確かにいた。

「ねえ、洸。あなたはどう思うの？」

もう一度、茜奈ははっきりといった。
まだあなたの答えを聞いていない、と洸を催促する。

（…どう思う、か）

それに応えることを、洸はずっと躊躇してきた。
菫がなんであるかを疑問に思った時も、先ほど茜奈に問われた時も。
自分の中に浮かんだ可能性を口にすることが怖かったから。

「…俺は」

口にしたら、壊れてしまいそうだったから。
ぎりぎりで積み上げてきた、菫との微かな絆の線を。

「俺は、魔法も異世界も信じるよ。」

でも、今ははっきりと言おう。
そう洸は思った。

「本気なの？」
「本気も何も、俺には信じるしかない。」

例え信じなくても、洸は戦うことができるだろう。
だが、魔法はイメージが全て。
そこにほんの少しでも疑念があったなら、それだけで精度が弱まってしまうかもしれない。

「それに、俺は菫に操られていると思ったことはない。」
「でも…！！」

身を乗り出した茜奈を、洸は視線で制した。
彼女がそれを信じられないのは理解できた。
自分の意見に同意して欲しいことも。
でも、それと洸が思うことは別だ。

「俺は、菫を信じてる。」

はっきりと、洸は告げた。
例え騙されていたのだとしても。
導かれていたのだとしても。
彼女とともに戦い、生き抜くことを洸は選んだのだ。

「だから、菫が目覚めるまで、俺は咲も菫も茜奈も、守るつもりだよ。」

再び、静寂が2人を包む。
茜奈は驚きと、洸は不思議な落ち着きとともに、その静寂に身を任せた。

そうして、しばらくの間静寂が部屋を漂った後

「…なるほどね。よくわかったわ。」

大きく息をつくと、彼女は言った。
「だから戦う手段の付加装備（アーティファクト）を探していた、と。」
「…何故ばれた！！」
洸は立ち上がると押し入れの方に目をやった。
僅かに空いた隙間から、押しこんだはずのものが溢れているのが見えた。
慌てて、洸はそれらを押し入れの中にしっかりと押しこんだ。
「…ははは っ」
そんな洸を見て、茜奈は笑った。
それはとても穏やかな笑顔に、洸は見えた。
「ともかく、よくわかったわ。何かはっきりとした証拠でも見つけない限り、この会話は終わりそうもないのね。」
「…まあ、そうだろうな。」
今はまだ、得られた情報は少なすぎる。
菫が人なのか機械なのか。
魔法は現実なのか映像なのか。
真実はわからないし、わからなくてもいい。
洸はそう思った。
「ねえ、洸。あたしも手伝おうか？アーティファクト探し。」
ふと、茜奈が呟いた。

「本当か？」

驚いて、洸は振り返る。

洸を見て、茜奈はほほ笑む。

「どうせ他の場所も一人で探す気だったんでしょう？わざわざ私たちを寝かしつけたのもそれが理由ね。」

「…すいません。」

「別に怒ってなんかないわよ。」

気まずそうな洸に、茜奈はからからと笑う。

（…こんな娘だったっけ？）

ふと疑問に思う洸であったが、これが彼女本来の性格なのかもしれない。

どちらにせよ、これで洸の問題は解決まで一歩前進したことになる。茜奈がいれば、外での探索もずっと楽になるだろうから、アーティファクト捜索も効率良くなるだろう。

「…ありがとう、黒織。」

そう言って、洸は頭を下げた。

「な、別にいいわよ。私だって、咲たちの助けになりたいもん。」

今度は茜奈が立ちあがり、慌てるように周囲を見渡した。

「しっかし随分古臭い家よね、ここも。このテレビだって、いつの

時代よ。」
「ああ、本当だよな。」
先程見た分厚い箱型のテレビを指して、茜奈は言った。
「…ん？」
茜奈の言葉に、洸は動きを止めた。
今では珍しいテレビ。
一昔前の、古いテレビ。
（…古い？……ふるい…）
それを見た時の感情が、洸の中で突如爆発した。
「それだ！！」
「え！？な、何！？」
突然の声に、茜奈が飛び上がる。
それに構わず、洸は茜奈へと一気に迫った。
「時代だよ、時代！！」
茜奈を指差してそう告げると、洸は彼女を見た。
「なあ、黒織。」
「何！？」
「この世界ができたのって…いつだ？」
「え？」

樹山の神隠し。
天香はそれを１年前から始まったと告げた。
そして洸たちの連れてこられた世界。
ここでは、まるで町をそのまま保存したように、樹山町に瓜二つな場所が広がっている。
だが、この家に置かれている様々な物はとても古く、１年前に『保存』されたとは思えないのだ。

少なくとも、１０年は昔に使われていたであろう物。
それらが、なぜ洸たちのいるｓｅｖｅｎｔｈには存在しているのか。

「…ふうん。確かに、不思議ね。」

洸の話に、茜奈は頷く。

「でも、それは単にその時期を模して造られただけじゃないの？」
「わざわざ昔の町をか？江戸時代とか明治時代とかそう言った大きな括りでの再現ならわかるけど、ほんの十年位前の町をどうやって再現するんだよ。学校や家の位置だって変わってはいないだろ？」
「…それもそうね。」

口元に指をあて、茜奈は首を傾げる。
人の記憶は曖昧だ。
ましてや町単位での過去の再現など、どれほど技術が進んだところで不可能に等しいのではないだろうか。
それこそ、魔法でも使わない限り。

「でも、魔法を使ったとしても、なんでわざわざ１０年前の町を再現する必要があるんだろう。」

自分の言葉を確かめるように、茜奈は呟いた。
「過去を再現したんじゃない。」
「は？」
洸の言葉に、茜奈はますます首を傾げる。
「再現してないって言うなら、始めに作られた時が十年前で、それがそのまま…って、あ。」
「つまり、そう言うことだ。」
応えて、洸は笑った。
そう。
過去の複製は難しくても、今の複製ならば可能かもしれない。
それが、ただ１０年前なだけで。
「この世界はあの声の連中が作り出したって言ってたよな。茜奈の案にしろ魔法にしろ、世界なんて簡単に作れるもんじゃないだろ。」
洸たちの住む現実世界と異世界の挟間に作られたというこの世界。
そんなものをいちいち壊して新しく作り直すなど、手間にしかならないはずだ。
「つまり、新しく作らないで、維持しているだけってこと？」
「そう言うこと。」
この世界が作られたのは１０年以上前で、それ以降ずっとこの状態のまま放置されてきた。
だからこそここにあるものは古く、奇妙に映ったのだ。

「ふーん…。」

呟きながら、茜奈は再び壁に背を預けた。
それは、茜奈の考えからしても重要な事柄であった。

否、むしろ彼女の考えを肯定する材料になるのではないだろうか。
茜奈の考えを証明する最も簡単なことは、外へ出ることだ。
この町が大きな箱の中に作られた物なら、箱の壁へと向かった突き進めばいい。
無論、茜奈はそれを試したことがある。
結果、壁は確かにあった。
透明な壁が町の境界線にはあり、そこから先に進むことを阻んでいたのだ。
その壁は、牙扇でも壊すことはできなかった。

もしこの世界が現実世界のどこかに作られた箱庭ならば、それらを管理、維持するための様々な装置があるに違いない。
そして、それらは茜奈たちが気づかないような場所に隠されているに違いない。

「…ねえ、少し調べてみない？」
「調べる？」
「そう。もしここが１０年前くらいの樹山町を保存した物なら、当時の情報が残ってるわけでしょ？」
「ああ。」
「ここがその時に作られたのなら、何かわかるんじゃない？」
「例えば？」
「ここがどうやって作られたのか、とか。」

壊れた時計は、自身が壊れた時間を永遠に記録し続ける。

過去を再現されたこの箱庭ならば、その再現した当時の記憶を残していることになる。
つまり、それを調べ上げていけば、やがて辻褄が合わない部分が現れる。
過去という隠れ蓑では覆いきれない、技術の尾っぽが。
「…今さら、そんな情報残しているか？」
茜奈の話を聞いて、しかし洸は否定的だ。
彼が魔法を信じているから、というわけでもなく、それは単純な疑問だろう。
「それはわからないけど、どうせ暇でしょう？アーティファクト探しついでに調べるなら、時間も無駄にならないでしょう。」
「…そうだな。少し、調べてみるか。ｓｅｖｅｎｔｈができた当時のことを。」
しかし、その茜奈の案には洸も賛成であった。
もしも本当にここが箱庭ならば。
脱出できるかもしれない。
わざわざ殺し合いなどしなくても、簡単に。
「決まりね。」
「ああ。」
そう言って、２人は握手を交わした。
生き残るために。
帰るために。
今までの殺し合いとは異なる戦いが、ここｓｅｖｅｎｔｈで幕を開

けた。

第五十八話

次の日、洸と茜奈は新拠点の探索を始めた。
咲にばれないよう部屋を調べるのは中々に骨が折れた。
だが、その努力に見合うだけの情報を得ることができた。

「２０年前、か…。」

家の居間で見つけた新聞を手に、茜奈がつぶやいた。
そこに書かれていた日付は、洸達のいた時代から２０も前のものが書かれていた。

「思ったよりもかなり古かったわね、この世界。」
「だな。」

もしそれを信じるならば、この世界は２０年近く前に創られたことになる。
洸たちが生まれるよりもずっと前に、この世界は存在していたのだ。
それは、この戦いがそれほど昔から続けられていたかもしれないという仮定もはらんでいる。
そう考えると、洸達は背筋が凍るのを感じた。

「…どうする？」
「どうするって？」
「これで、この世界が２０年前にできたことがわかった。…それで、私たちはどうするのかってこと。」

自分を抱えるようにして、茜奈がつぶやいた。
対する洸は、自分を落ち着かせるように息を吐き出した。

「調べるんだろ？この当時、この町で何が起きていたのかを。」

もしこの世界がそのときに作られたなら、何か痕跡が残っているはずなのだ。
町をひとつ作り出す。
それだけのことをして、かけらも痕跡を残さなかったはずがないのだから。

「この町で起こった事柄。それを調べ上げていけば、俺たちは違和感にたどり着く。」

そしてそこには、この世界を維持するための重大な何かが隠されている。
それを見つけてしまえば、この世界から脱出することも可能なのではないか。

それが、茜奈の案。
茜奈は洸の言葉に頷く。

「やることは単純明快。私たちは、片っ端からその違和感を調べていけばいい。…それくらい、私だってわかってるわよ。」
「じゃあ、何だ。」
「問題は、その情報をどこから手に入れるかってこと。」

そう言うと、茜奈は持っていた新聞紙を洸へと放った。

「この家を調べてわかったけれど、民家って言うのは、案外たいした情報を持っていないのよね。まだパソコンも携帯も発達していないし…まあ、あったとしてもインターネットが使えないだろうから意味ないしね。本だってあるのは小説やら雑誌やら…いわゆる『事件』を載せているものなんて新聞くらいのもの。」

確かに、茜奈の言う通りだろう。
洸もまた、この家を探索していく中でそれを実感していた。

「こんなんでどうやって情報を探せばいいの？」
「…そんなこと言われてもなあ。」
「何よ、少しはやる気を出しなさいよ。」

受け取った新聞を、洸は眺める。
全国紙ではなく、この地域限定で配られている地域紙。
そこに書かれているのはどこの店が新しくできたとか、地方の政治がどうかとかそんなものばかり。
それも樹山町に限ってみれば、ほとんど情報がない。

「…それは、つまりさ。もっと情報が集まっている場所へ行こうって事だろ？」

新聞紙を横において、洸は言った。

「そんな場所、俺が知ってるのはひとつだけだ。」
「…それは？」
「図書館。」

中央地区にある、町唯一の図書館。
洸と浩太が神隠しについて調べた思い出の場所でもある。

「なるほど。」
納得したように、茜奈は手を打った。
しかし、今洸達は図書館に行くことができない。
図書館があるのは中央区。
そして、中央区にはあの男、赤梁陽がいる。
赤の炎にまみれた男の姿を、洸は思い出す。
もう一度会えば、あの男は必ず決着をつけに来るだろう。
そうなってしまえば、菫のいない洸に、勝ち目などないのだ。
「…そうね。」
洸の言葉に、菫は意外にも頷いた。
「素直なんだな。」
洸はてっきり、自分の魔法を使えば大丈夫と茜奈が言い出すと思っていたのだが。
「洸、私を何だと思ってるのよ。私はそんなに我儘でも自意識過剰でもないわ。…私だって、あんな化け物の近くを丸腰で通るなんてことしたくないもの。」
「…なるほど。」
（化け物、か）
そういえば、茜奈は洸と陽の戦いを見て、洸たちに狙いを定めたらしい。

そのときに、彼女は陽のことを見ていたのだそうだ。
彼女もまた陽に対してその言葉を浮かべたことを、洸は安堵していた。
自分ではなく、陽のことを化け物といってくれるのだから。

「…そういえば、茶織は？」

ふと思い出して、洸は言った。
朝早くからこの家の探索をしていたから気がつかなかったが、時刻はもう昼過ぎだ。
もうとっくに起きているころだろう。

「上でアーティファクトの練習してるわよ。」

そういって、茜奈は上を指差した。
熱中していたから気づかなかったが、よく聞けば軽い破裂音がいくつか聞こえてきていた。

もしかして、ずっと訓練していたのだろうか。
咲は、ずっと守られる自分を苦痛に思っていた。

だが今は、彼女が洸たちの最高戦力。
今度は自分が洸たちを守る。
咲はそう思っているに違いない。

だが、それでは駄目なのだ。
洸は、咲を守ると決めた。
彼女をこれ以上戦わせないためにも、早くアーティファクトを見つけなければならない。

「…ともかく、俺たちが今できることはこの近くの探索だけだ。黒織の魔導器だって万全じゃないんだ。無理はさせられない。」
そして、もしも戦わずにここから抜け出せる道があるのなら、それを見つけたい。
一刻も早く。

「わかった。…咲には、ばれないようにしないとね。」
「ああ。」

そう、洸は頷いて、

「…何を？」

咲が首を傾げて訪ねた。

「……。」
「……。」
「……何を？」

「うわあああああ！？」

驚いた茜奈が飛び上がった。
洸もまた、驚き、後ろに下がろうとして踵をソファにぶつけてしまった。

「さ、茶織…！？」
「あんた、上で特訓してたんじゃ…！？」
「ああ、あれ、録音だよ。」

にっこりと笑って、咲は言った。
その笑顔がなんだか怖くて、洸と茜奈は一気に驚きの熱から冷めた。
「…それで、２人とも何の話をしてたのかな？」
笑顔のまま、咲は続ける。
その中に静かな怒気があるのを、洸たちは悟った。
彼女は洸たちの企みに気が付いていたのだ。
また自分を守ろうとする２人に、そして守られようとしている自分に、怒っていた。
茜奈が、洸を見てくる。
どうしようか、と。
咲もまた、洸を見ていた。
２人の視線を受けて、洸は大きく息をついた。
また、この展開。
ただ、洸も少しは学習していた。
こうなったら、咲はなかなか諦めてはくれないことに。
（仕方ない、か）
もう一度、大きくため息をついた。
それは、どちらかといえば諦めに近いのかもしれないが。
このまま咲に飛び出されても困る。
知られてしまったのなら、今度は自分の手の届く範囲におかなけれ

ばならない。
そう、決めつけて。
洸は、茜奈と気がついたこの世界のことについて話し始めた。

＊＊＊

早いもので、この意味不明な戦いが始まってからと2日という時間が流れた。
否、体感した時間を言えば、もうすでに4日ほどの時間がこの世界に来てから流れているといっていい。

4日。
4日だ。

人間、それほどの時間を生きることに何の疑問も持つことなどないだろう。
たかが4日。
時間に直してもたったの96時間。
この程度の時間、売り払ってかわりに金を貰いたいくらいだと常々思ってきた。

だが。
だが、だ。

私は、それをこんな形で実現させるつもりなど毛頭なかったのだ。

この異変の始まりは、会社帰りの帰り道だ。
私は何者かが悪戯に掘ったのだろう落とし穴にはまってしまった。

その穴はとても深く、まるで深淵にでもつながっているような暗闇が広がっていた。
長い時間、私は落ち続けた。

あまりにも長すぎて、いつしか私はそれが自分の見ている幻覚だと思い始めていた。
どうやら今日は飲みすぎたらしい。
早く家に帰らなければ、と。

気がついたとき、私は道の真ん中で眠っていた。

よく見ればそこは私が落とし穴に落ちたであろう場所で、そこには当然、落とし穴など存在してはいなかった。
それもそうだ。
あんな長く深い落とし穴が存在するはずもないんだ。

やっぱり飲みすぎたらしい。
早く家に帰って眠らなければ。

そう思って、私は家に向かおうとした。

そのときだった。

『あれ』が現れたのは。

ずしゃり。

奇妙な音が聞こえた。
何だ？

そう思って振り向くが、そこには何もなかった。
気のせいだろうか。
…いや、おそらく酔いによる幻聴だろう。
幻聴まで聞こえるとは、いよいよ酔いが回ってきたようだ。
ははは、と笑い飛ばして、私はふらふらの足を進ませた。
…あれ？
ふと、そう思って足を止める。
足は確かにがくがくで、体はふらふらだ。
でも、私は今日、酒なんて飲んだか？
ずしゃり。
また、奇妙な音が聞こえた。
これも、幻聴か？
酒なんて一滴も飲んでいないのに？
ずしゃり。
音は、だんだんと大きくなっているように聞こえる。
でも、これが幻聴じゃなきゃなんだって言うんだ。
そうだ。

これが幻聴じゃなきゃ、あの落とし穴だって幻覚じゃなくなってしまうじゃないか。
あんなに深い穴があるわけがない。
それに、ならば穴が残っているはずだ。

そうだ、そうだ。
こんなことが現実なはずがないんだ。

…ほら、もう音も聞こえない。
やはり、あれは幻覚だったらしい。
もしかしたら疲れているのかもしれない。
最近働きづめだったからな。
明日は久しぶりに有給を使ってもいいかもしれないな。

いろいろなものを笑いで飛ばして、私は歩き出した。
そのとき、私は自分が鞄を持っていないことに気がついた。

あれ、鞄がない。
まずいな、あれには仕事の資料が入っているんだが。

どこかで落としたのだろう。
…落とした？どこに？

もし自分が鞄を落としたとするならば、自分が今歩いてきた道以外に他ならない。
なぜなら、自分は鞄を持っていたからだ。…落とし穴に落ちるまでは。

あれには重要な書類が入っている。
早く、取りに行かねばならないのに。

なのに、体は動かない。

…ああ、本当は気づいているよ。

さっきから耳元で聞こえるこの荒い息遣いを！！

だって、信じられるか？

ただいつものように会社から帰っていただけなのに。

それが何で、あんな化け物に追いかけられなけりゃならいんだ！！

それからは、散々だった。

毎日のようにあの化け物に追われ、私は町を逃げ惑った。

幸いだったのは、私の家の中に1日分の食料があったこと。

これだけあれば、数日間は生き残ることができる。

誰もいない、安物のアパートに私は始めて感謝をした。

だが、この世界に来てから2日目。

状況は一変した。

なんだ、あの光は！！

ふざけたことを抜かしやがって！！

殺し合い！？

記憶を消すだ！？

何を言っているのかさっぱりわからない。

だが、ここから帰るためには、誰かを殺さなければならないということはわかった。

私、いや、俺にはあの空とか言う化け物と戦うことなんてできないからだ。

いくら成人の男といっても、あんな化け物に勝てるはずがない。
だから、俺は誰かを殺さなければならなかった。
武器ならいくらでもあった。
包丁やナイフ、バッドにゴルフクラブ。
後は、誰かを見つけて殺すだけ。

誰かを殺すことにためらいなどなかった。
自分が生きるために人を殺さなければならないなら、誰だって殺すだろう。
しかもそれを許されているんだ。
私は手にした刃物に心躍らせていた。

それから、2日。
俺は、どこかの道に座っていた。

呆然として空を眺める。
いつまでたっても変わらない空。

結局、誰も見つけることはできなかった。
なぜだ。
ここでは殺し合いをしているんじゃないのか？
なぜ、誰もいないんだ。

食料はとっくに尽きていた。
水はそれよりも早くなくなっていたから、仕方がなく自分の尿を飲み続けた。

いつの間にか体から便所のようなにおいがして、それもすぐに気にならなくなった。

だが、そのにおいに群がるように、あの怪物たちが集まるようになった。

ろくに食べてもいない体で、逃げ切れるはずもない。
体は血だらけ。
正直、何で今生きているのかもわからない。

まあ、だが、もう死ぬだろう。
それは、もう、別にどうでもいい。

頼む。
頼むから、誰かに会いたい。

ここでは殺し合いをしているんだろう？
別に、死んでもいい。

俺の命なんて、喜んでやろう。
だから、だから。
頼むから、人に殺されたい。

あの化け物は、俺を見て、うまそうな肉を見るように口を開くんだ。

俺は、あんな奴に食われたくない。
人に、殺されたいんだ。

殺してくれ。
殺してくれ。
殺してくれ！！

そして、頼むから。

覚えていてくれ…。

…ああ、もう、うるさいな。
どうせもう死ぬんだ、最後くらいこの声を止めてくれ！！

ここにきたときからずっと聞こえる変な声。
どうせ俺を誘うための罠なんだろう？

そうやってわめいているうちに、意識はだんだんと遠くなって。
そして、あの幻聴が聞こえてきたんだ。

ずしゃり。

…あ、ああ…

やめろよ、やめてくれよ。
くるなよ！！
何でお前がくるんだ。
どうしてお前なんだよ！！

いいじゃないか、最後くらい。
俺はお前らの要求通りにしただろう！？

いやだ、いやだいやだいやだいやだあああああああああああああああああああ

＊＊＊

ｓｅｖｅｎｔｈにあるどこかの道。
一体の空が、何かを貪っていた。
ばりばりとした異音をひびかせながら、空は口を真っ赤に染めて、
無我夢中で食べ続ける。
その背中が、突然ぼこりと膨れ上がった。

第五十九話

それから、洸たちは拠点周辺の探索を始めた。
今度は咲も入れた3人で、彼らは拠点の周辺にある住宅を調べに調べ、漁りに漁った。
そうして、ｓｅｖｅｎｔｈの3日目は過ぎ、戦いは4日目に入った。
怒涛の嵐ともいえた2日間と比べれば夢のような穏やかな1日間の大捜索。
その結果、洸たち3人は

「…見つからないわね。」
「見つからないねー。」
「見つからないな。」

結局、何も見つけることはできなかった。

「どこが悪かったのかな。」
「私たちに問題は無いでしょ？ただこの辺りに無かったってだけ。」
拠点2階のベッドに腰掛けて、3人は朝食のおにぎりを食べていた。
ｓｅｖｅｎｔｈで配給されるこの食事は、何が出てくるかがわからない所が不便である。
「そうなのかな。私が探した時は、直ぐに見つかったんだけどなあ。」
現れた鮭のおにぎりを食べながら、咲が呟いた。

「情報の方も、あれからは何も見つからなかったし。…手詰まりかなー。」

うな垂れるようにそう言うと、茜奈はベッド倒れ込んだ。
隣に座っていた洸が、呆れるように呟く。

「手詰まりたって、まだまだ調べ始めたばっかりだろ？」
「でも、この辺りの家はあらかた調べたじゃない。この入りくんだ路地から出たら、空やプレイヤーに遭遇する確立が一気に上がる。空ならまだしも、プレイヤーに出会っちゃったら、確実に殺されるのよ？」
「…まあ、確かに。」

茜奈の魔法は、移動時には役立つのだが、一つの場所で長時間捜索をするとなると、色々な不具合が出てきてしまう。
まず、長時間稼働が不可能なこと。
姿隠しの魔法は1・2時間程しか持たず、そのたびに拠点に入って休憩を行わなければならなかった。
加えて、移動速度の問題がある。
今回は3人で行動したため、狭い範囲に3人がくっつく様にして移動しなければならなかった。
そんな状況では、満足に歩くことも難しく、移動だけでかなりの時間を取られてしまう。
そして最後に、捜索時の問題。
いくら隠れて移動することができても、捜索時まで3人密集して探すわけにもいかない。
そうなれば、姿隠しは解かなければならなくなり、結果彼らは無防備のまま捜索をしなければならなかった。

「肝心の図書館は遠いし、誰が縄張りにしてるかさえわからないんだから、このまま行くことはただの自殺よ、自殺。」
ため息とともにそう言うと、茜奈はベッドの上をごろごろと転がった。
「元気だね、茜奈ちゃん。」
「そりゃ、たっぷり眠ったもの。本当、一昨日までとは大違い。」
「…そうだな。」
ほんの2日前まで、茜奈は互いを狙う敵であった。
それが、今や自身の隣で寝転がっているのだ。
（おかしな光景だよな、本当）
小さく微笑むと、洸は残っていたおにぎりを口に放り込んだ。
「…後は、もう少ししっかりとこの辺りを調べること位かな。」
「そうね。とりあえず今日はそれを済ませましょ。」
洸の言葉に茜奈が頷く。
だが、2人の会話を聞いていた咲が、ふと呟いた。
「…ねえ、2人は図書館に行きたいんでしょ？」
「ああ。そこなら、何か情報でもあるかもって思ってな。」
咲の言葉に洸が頷く。
「じゃあ、学校は駄目なの？」
「「学校？」」

2人の声が揃った。
茜奈が飛び起き、咲をみた。
「…どういうこと？」
「ほら、学校の図書館。」
指を立てて、咲が続ける。
その言葉にしばらく呆けていた2人だが、やがて、洸がはっとしたように口を開いた。
「でも、情報なんてあるか？学校の図書館なんて、あっても小説とかだろ？」
「ううん。樹山中の図書館って、確か新聞もあったはずだよ？ほら、今まで出た記事をおっきな本にまとめたやつあるでしょ？あれが置いてあったの、私みたことあるもん。」
「…そういえば、俺図書室って利用したこと無かったな。」
「そういえば、私も。」
学校の図書室。
確か、校舎の端の方にあったはずだ、と洸は虚ろな記憶を呼び起こした。
中学の頃の記憶は、洸は殆ど残っていない。
常に居るべき場所、通るべき場所が決まっていた洸にとって、学校の大半は未知なものであったから。
「私、図書委員だったんだよ。」
ふふん、と胸を張るようにして、咲が言った。
…ひょっとして、自慢しているのだろうか。

「だから、本の場所とか、何があるのかとか、分かると思うよ！！」
ねえ、私役に立ってる？
咲の目が、そう告げていた。
「…どうする？」
洸が、茜奈を横目で見た。
「…行ってみる？樹山中。あそこならまだ誰かが来てるってことは無いだろうし。」
「周りのプレイヤーがうろついてたりはしないのか？」
茜奈が倒れた今、彼女の拠点であった西地区は空白のはず。
そこを、他のプレイヤーが狙わないとも思えない。
「大丈夫よ。今の西地区にいるプレイヤーは、私だけだから。忘れたの？私とこいつの魔法。」
そういって、茜奈は紫陽花を取り出した。
「こいつを手にしてから、私は自分の周辺にいるプレイヤーを探ったの。とりあえずは近くから始めて、北地区、中央地区、南地区との境界付近までね。まず、西地区と中央地区の境界。その直ぐ西に樹山中があって、そこが私の縄張りになる。そこから直ぐ東に行った所に、一人のプレイヤーが居たわ。」
「…？他のプレイヤーに、会ってたのか？」
てっきり、茜奈が最初に遭遇したプレイヤーは、洸だと思っていた。

だからこそ、彼女は洸を狙ったのだと。
だが、それはどうやら違ったらしい。

「そいつは何か白っぽい服を着てて、右手に長い鎖を巻いていた。おそらく、それがそいつの魔導器だったのね。…まだそいつは私に気がついていなかったみたいだったから、私は、そいつを最初のターゲットにすることを決めたの。…でも、そいつは直ぐに殺された。あいつによって。だから、私はあいつを、赤梁陽を狙うことにしたのよ。」
「赤梁、陽…。」
「そしたら、あいつと戦う洸をみて…それ以降は、もういいわよね。」

両腕を広げ、茜奈はそこで話を終えた。

（…なるほどな）

これで、陽のレベルが突然上がっていた理由が分かった。
まさか、洸との戦いの間に他のプレイヤーを殺していたとは。
おそらくは、洸が咲にこの世界のことを説明している間だろう。

「とにかく、樹山中の直ぐ東に居た白いやつは既に死んでる。他にその周辺にはプレイヤーが居なかったから、もうあそこは安全なはずよ。」

既に、殺し合いは始まっている。
洸が2人を相手に生き残れたのは、幸運といえるだろう。
まあ、その間に3回は死んでいるのだけれど。

（…って、違う違う）

今は陽のことについて考えている場合ではない。
思考を切り替えて、洸は口を開く。

「なら、北地区はどうだ？南は俺も通ったから安全なことはわかる。中央地区は今の話でわかった。なら、北地区には誰も居なかったのか？」
「…北地区、ね。」

だが、茜奈の表情は暗かった。
これまでとは違うその表情の変化に、洸も咲も首をかしげた。

「どういうこと？茜奈ちゃん。」
「北は…誰も居なかった。」
「誰も…？」

プレイヤーが居なかった、という意味なのだろうか。
だが、彼女の言葉はどこか引っかかる。

「というよりは、何も無かった。って言った方がいいかな。」
「何も無い？そんな訳、ないだろう。」
「本当に、何も無かったの。人も、空も、木も、建物も。少なくとも私がビルの上に立ってみた景色には、何も無かったわ。」

樹山町、北地区。
樹山の北にそびえる頭山（かしらやま）の裾野から平野にかけてを、そう区分している。
そのため、地区の大半は森に覆われた山であり、人は殆ど住んでいなかった。

だが、それでもそこには山があり、森がある。
山岳部でない場所には人だって住んでいるし、何も無いというのはありえない筈なのだが。

「私にだって、分からないわよ。」

紫陽花とともに茜奈が北地区との境界上に立ったとき、正直目を疑った。
そこには、ただの野原が広がっているのみだったのだ。
人が住んでいた形跡などまるで無く、無数に存在するはずの木々さえなかった。

それを異常と言わずして、何と言えばいいのか。

「いくら２０年前って言っても、木さえ生えてないって言うのはおかしいでしょう！？」

洸の知る北地区の景色。
深い緑に包まれた、遥か高く聳える土の塊。
その下に広がる緑は鮮やかで、朝日を浴びて輝くその風景は、とても鮮明に洸の記憶に残っている。

木がどれだけの時間で成長できるのかを洸は知らないが、洸の生まれたほんの少し前に、その景色が無かったというのは信じられなかった。

「流石に紫陽花もおかしいって感じたらしくて、それ以降は北地区に行ってない。」

そう呟いて、茜奈は再び倒れこんだ。

「…木も、って言うのは変だね。」
彼女の言葉を繰り返すように、咲が呟いた。
「戦いで壊されちゃったってことなのかな。」
「…一地区の森を一掃するほどの戦いなんて、想像もしたくないけどね。あり得るなら、赤梁かしら。」
炎の魔導器を操る彼ならば、一晩で森を一掃することも、あるいは可能かもしれない。
「でも、あいつは俺と戦っていた。それに、燃えてるならはっきりと分かるはずだろ？」
「…確かに。私も、白い奴と戦っているのを見てるし、あり得ない。」
首を振り、茜奈はそう告げた。
「じゃあ、何でなんだろうね？」
「他のプレイヤーによるもの…とも考えにくいよな。」
「どうして？」
首を傾げる咲。
「俺らはまだ他のプレイヤーの魔法を知らないけど、たった一日で森を消すことなんて…」
「1日とは限らないんじゃない？」
「え？」

驚く洸に、咲は自身を指差した。
「ほら、私って9日前にここに来たでしょ？それからやったっていうならできるんじゃない？」
「…なるほど。」
「確かにね。」

ｓｅｖｅｎｔｈが開かれてから、１０日近くが経過している。
この世界にやってきてから直ぐにそれを行えば、確かに可能かもしれない。
だが。

「でも、そんなことをするメリットが無い、よね？」
「そうなんだよな。」

一地区の森が消失。
その事実があったことはまあいいだろう。
だが、なぜそんなことが起きたのか。
結局、議論はそこに行き着いた。

「森を消失させたって、北地区のプレイヤーにとっては隠れ蓑がなくなるだけだろ？他のプレイヤーがやるにしても、相手が居たのなら満足に実行できなかったはずだ。ｓｅｖｅｎｔｈが始まる前だったら、魔法も満足に使えなかったはずだからな。」
「そうね。それだったら元から無かったって考える方がよっぽどましよね。…って、あー！！！！」

突如叫ぶと、茜奈はベッドから飛び降りた。
突然のことに2人は驚き、茜奈を見た。

「どうしたの、茜奈ちゃん。」
「そうよ、これが異変じゃない！！」
「…あ。」

茜奈の言葉に、洸が呟いた。
確かに、洸たちが探しているのは洸たちの知る世界とこの世界との差異だ。
木や建造物が残らず消えていることは、明らかな変化ではないか。

「ねえ、今北地区には何がある？」
「えっと、マンションがあったはずだよね。」

慌てて口を開く茜奈に、咲が首を傾げる。
洸の母、恵那が入院している緑川病院の北に、北地区は広がっている。
そこには開発によって新たに樹山にやってきた外からの住人たちが住む、マンションや団地が広がっていたはずだ。
事実、そこに住んでいるという同級生も居たはずだ。

森の話ばかりしていて忘れていたが、これもまた消えているという事実も受け止めなければならない。

「ふっふっふっふ……来たわよ来たわよ！！」

こみ上げてくる笑いを抑えきれずに、茜奈が叫んだ。
彼女は勢いよく振り返ると、洸と咲を見た。

「行きましょう、北地区！！」
「いや、いきなり行くって言ってもな…。」

先ほど、探索時間の話をしたばかりではないか。
しかも北地区は南地区からかなり遠い位置にある。

「西地区を通れば大丈夫！！」

そう言うと、茜奈は洸の間近まで近づいた。

「これは、チャンスなのよ？もしそこにこの世界の核となる何かがあるなら、私たちは帰れるかもしれない。」
「それは、そうだが。」
「無理は承知よ。下手をしたら、森を数日で消失させるような化け物が居るかもしれない。…でも、私は可能性にかけてみたいの。」
「……。」

茜奈の言うことは、理解できる。
今の洸たちで、この世界を生き残ることは難しい。
便りであった付加装備も、付近では見つからなかったのだ。

このまま少ない食料を減らしていくよりか、賭けに出ることは魅力的な考えに思えた。

「どうするの、白崎君？」

咲が洸を見る。
勿論、危険はある。
だが、今更危険を恐れるほど、洸の常識は残ってはいなかった。

「プレイヤーも空も居ないってのが気になるけど…行くか！！北地区。」

ぱん、と膝を叩くと、洸は言った。

「うん！！」

「そうこなくちゃ！！…ただ。」

「ただ？」

首を傾げる洸に、茜奈は窓の外を見た。

「この雨が、止んだらね。」

「だねー。」

「だな。」

ｓｅｖｅｎｔｈが始まって４日目。

誰も居ない世界の中は今、雨が降りしきっていた。

＊＊＊

異変の始まりは、今朝。

洸は、咲に起こされた。

「白崎君、ねえ、白崎君！！」

「……うん？」

突然に体を揺すられて、洸は目が覚めた。

そこには、少し驚いた咲の表情があった。

「茶織か？どうしたんだ？」

見れば、咲の体は震えていた。
何かあったのだろうか。
飛び起きた洸に、咲は階段の方を指差した。

「何か、変なのが出てる。」
「変なの？」
「とにかく来て！！」

まだ寝ぼけた洸は、咲に連れられ階段を上っていった。
拠点２階、魔方陣の部屋。
そこに、不思議な文字が浮かんでいた。

『警告』

その２文字に続き、他の文字群が浮かび上がってきた。

『これより１０時間、戦闘行動により破壊された町の修復を行います。強力な魔力放射が行われますので、拠点から出る場合は注意してください。』

「…何だこれ。」

その文章を全て読み終えた洸が、呟いた。

「何なんだろうね、これ。」

対する咲も首を傾げる。
ｓｅｖｅｎｔｈが始まって初めての出来事に、洸も咲もまた困惑し

ていた。

「ちょ、ちょっと！！」

そんな2人の後ろから、茜奈が部屋に駆け込んできた。

「どうしたの、茜奈ちゃん。」

ぼんやりとしたままの咲の呟きに、茜奈が向こうを指差し

「外、雨降ってるわよ。」

そう告げた。

＊＊＊

暗く冷たい世界の中、真っ黒な雨が降っていた。
凍えるほどの冷気の中を通り抜けてきた雨はまるで氷のようで、無防備に晒された肌に突き刺さった。

だが、空を覆う雲は無い。
天には夜空に散りばめられた星星が漂っており、その合間から雨は漏れてきている。

それは、世界を覆う天蓋に穴でも開いたようで。
作り物の世界には丁度いい、と男はふと思った。

『――目標発見』

ふと、声が響いた。
僅かに高い、女性の声。
だが、その声はどこか機械的で、人間らしさと呼べるものは無かった。

「…目標、捕捉。」

ぼそりと、男が呟く。
雨に打たれながら、彼は眼下の光景を捉えた。

「…死体だけ、か。」

そこには、おそらくかつて人であったろうものが散乱していた。
…否、それを人と呼ぶのは間違いかもしれない。
残っているのは赤黒い断片のみ。

骨まで残さずとは、余程空腹だったらしい。
小さく息を吐くと、男はその残骸へと近づいた。

「…牡丹、探査を。」
『了解。』

男の声に、牡丹と呼ばれた声が短く反応する。
瞬間、赤い光が死骸のあった周辺に瞬いた。

『…探査完了。空3体の痕跡あり。』
「3体…随分多いな。」

呟くと、男は自身の耳元を抑えると、小さく言葉を続けた。

「――ああ、そうだ。どこへ行ったのかは分からない。だが、今はこの雨で動けないだろう。動きがあるとすれば、１０時間後。この雨が上がってからだ。」

誰と会話をしているのか。
言葉は途切れ途切れで、はっきりとつかめない。

「…了解した。」

そう呟くと、男は死骸を背に歩き出した。

「…荒れるな。」

その姿は、雨にまぎれて直ぐに闇へと溶けていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3082s/

なないろ

2012年1月4日09時52分発行